
ひと夏だけのシンデレラ

秋鹿 柚玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと夏だけのシンデレラ

【Nコード】

N1785U

【作者名】

秋鹿 柚玖

【あらすじ】

「ソバニイテ。キミガホシインダ」 そう甘く囁かれた瞬間、あたしの平凡な夏が変わった。爽やか完璧王子様とひと夏のロマンス？ やってきました、あたしの時代 …… なんてステキな運命、神様がくれる訳ないのよね。

ウマい話にはゼツタイ裏がある！ 理想の王子様が実はハラグロで野獣だとか、周りは変な人ばかりで絶対腹に一物抱えてるとかね。しかもおまけに…… あたし、狙われてる？

ってカンジの完璧王子様と純情女子高生のひと夏だけのラブ・コメ

デイ。現役のお嬢様はもちろん、かつて現役だったお嬢様にも楽しんでいただけたら嬉しいです

プロローグ（前書き）

これはパラレルワールドのお話ですので、この先、ん？と気になることがあっても生温かく見守っていただけたらと思います。

これから夏まっさかり！細かいことは気にせず、さらっと楽しんで下さい。

プロローグ

貧乏、暇なし。

昔の人はうまいこと考えたなって、最近つくづく思う。

世知辛い世間の機微を知ってるあたしが身をもって体感してるんだから、ホント間違えない！

それにしても……年齢17歳にして時間とお金のなさに悩んでるなんて……あたしって、ホント枯れてるな。

ああ、空から何か金銭的なもの降ってこないかな？

でもどんなに見上げてても、ひしめくビル谷間にある小さな空から落ちてくるのは浮かれた夏の陽気だけ。

カラッと晴れ渡ったヴィヴィットな青が目痛い。

……うん、分かってる。人生はそう甘くない。

もし札束が降ってきたなら、それは十中八九、真つ当なお金じゃない。

手にしたところで、ヤバゲな事件に巻き込まれるだけ。

でもさ、リアリストのあたしでもそんな夢物語を妄想しちゃうくらい、今生活に余裕がないんだよね。

五人姉弟の一番上。

それだけでも苦勞してそうでしょ？

それに付け加え、あたしの場合もつと深刻。

元々ハイスペックな貧乏一家なのに、お父さんは2年前に天国に永住。

その日から頑張ってたし達を育ててくれたお母さんも、とうとう体を壊してしまって現在入院中。

我ながらドラマみたいな設定だと思っ。

きつと土曜9時なら、あたしの前に巨額な支援金を持った素敵なアシナガおじさんがやってくるはず。

でも残念ながら我が家にやってくるのは、万年金欠で旅する無職の叔父さんだけ。

これが現実ね。日々は淡々としていて、地味に厳しい。

どんなに頑張ってもあたしじゃ、月9のヒロインにはなれない。

そんな中、あたし達姉弟五人は互いに助け合い、慎ましく生活している。

……なぐんで、そんな訳がない！

何度言っても我が家の窮状を理解しない下の馬鹿どもは、自分達の家が火の車状態なのに湯水のようにお金を貪る。

結果、一番上のあたしが朝から晩まで働きづめ。

オーバーワークで過労死したら、誰を訴えればいいのよ！

ああ、考えてたらホントにムカムカしてきた。

季節は煌めく夏だったのに、心トキメクことなんて一つもない。

他のクラスメイトは海やキャンプに行ったり、クラブ活動したり、ついでにそこでドッキンラブなんて芽生えさせちゃったりしてさ。

すっかりセブンティーンを満喫してるんだよ？

なのに、あたしときたら……。

最近ドッキリしたことなんて、一番下の妹がたこあしコードの大人に引っかけた瞬間、全ての家電がいつきに止まったことぐらい。

あの時は真剣に、ついに電気を止められたか！って呆然としてしまった。

『血の凍るような』って表現、身をもって体験した人なんて、そういないんじゃないかな？

でもあたしが求めているのは、そんなドツキリじゃないの！
欲しいのは、打ち上げ花火を待っている時のようなワクワクする
ようなトキメキ。

これから何があるんだろうってドキドキ待つあの感覚。
誰だって、こんなサンサンと降り注ぐ太陽を見たらさ、ちょっと
くらい浮かれてみたいなくとか、思っちゃうでしょ？

だって二度と来ない高2の夏だもんね。

長いようで短い夏休み。

あたしに与えられたミッションはバイトのみ。

友達と遊びに行く暇なんてまったくない。

仕方ないって割り切ってはいるんだよ。

この夏の稼ぎで我が家の秋からの生活が変わるんだから。

それに、別にバイト自体、嫌な訳じゃないしね。

ずっと椅子に座ってなきやいけない学校の授業よりも全然苦じゃ
ない。

でもさ、ふと立ち止まった時に、がむしゃらに頑張っている間は
見えていなかったことに気付いて、無性に自分が悲しくなるんだな。
あれだけ頑張ったはずなのに何も変わってない現状や、どれだけ
頑張っても変わらない現実を知ってね。

これじゃ、どんなに健気なマッチ売りの少女もやさぐれるっても
んでしょ。

ねえ、神様。

前途洋々の若者が、人生という長い道半ばにして挫折しかけてる
んだよ？

少年老いやすくなんとやらって言うじゃん。

あたしが老いる前に、ちょっとくらい幸運をくれてもバチ当たたら

ないと思うよ？神様。

そう、なんでもいいの。

夢を見せてくれるだけのマッチでも。

どんな些細なものでも、今のこのクサツた気持ちを変えてくれるなら、それは夢にまで見たアイテムだから。

道を見失いかけたあたしを導く灯になる。

そんな小さな欠片を空から落としてくれたら、きっと今までどおり直向きに頑張れるはずだから。

ねえ、お願い。神様……。

って……。

ひらり。

あたしの目の前に白色が躍り出た。

夏の日差しを受け、澄んだ夏空にそれは輝く。

プロローグ（後書き）

読んでいただいたとおり、女子高生の一人称で物語が進みます。
できる限り現役のころを思い出して、ふっわふわでキャッピキャッピ
な文章にしたいのですが、如何せん年齢が……。
おかしい部分がありましたら、どうぞ突っ込んでやってくださいな。

チャンスは空から降ってくる

あたし、なかざわちか中澤千佳。

名前と同じように頭の中も、運動神経も、ついでに見た目も平々凡々な高校2年生。非凡なのは生活環境だけ。

そんな悩める17歳（まあ、大半はお金があれば解決することな
んだけどね）。

…なんて自己紹介すると全国の中澤千佳さんに怒られそう。

ごめんさい。その中澤千佳さん！

でも、あたし、「千佳」って名前、かなり気に入ってるんですよ？
両親がくれたものの中で、最初で最高のプレゼント。

千に佳いって書く文字がいい。チカって響きもすごく好き。

それに……他の兄弟4人を見ると、あたしの名前だけは両親も
真面目に付けたなって思えるし。

あたしの弟妹達は、上から百佳ももか、十佳とつか、一佳いちか、零佳れいかって言うの。

ノリで付けたとしか思えないでしょ？

しかも一番下の零佳以外全員男。

男の子に百佳って、可哀想じゃないかな？まあ、本人は気にして
ないからいいけどさ。

そんな名前を子どもに付ける、勝手気ままな両親とやんちゃすぎ
て手に負えない弟妹たちに囲まれて育ったあたしは、生粋の苦勞人
あたしの気苦勞は日に日に増していくばかり。

なんか、いいことないかな？

バイト終わりに、自転車で家路につきながら眩い空を見上げた。

そんなセンチメンタルな、夏の日の午後のこと。

白いそれは日の光を眩く照り返し、宙を踊った。

パシッ！

小気味いい音を鳴らし、あたしはそれが何なのかも理解しないで掴みにかかる。

この瞬発力の素晴らしさ。見よ！タイムセールで鍛えた華麗なる必殺技を！

取りあえず、何か分からなくても手にして確保。吟味はそれからってね。

ついでに、生まれた時から今に至るまで貧乏に貧乏を極めたあたしは、拾った物は絶対に離さない。

あっ、他人のものは返すよ！泥棒さんには（まだ）なりたくないし（いずれそんな日が来たらどうしようか……）。

でも転んでもタダでは起きないのがあたし。無益も有益に変えてしまふ。拾ったからには、何かしら得るものを得る！

それが貧乏道！

ひらひら風に流される頼りないそれを自分の方に引き寄せる。

それが何かのチラシであることはすぐに見て取れた。

「なにになに？女の子が大好き！小物雑貨店オープン！可愛いグッズを品ぞろえ……アンティークからアジアンまで……。……デイズニールンド無料ご招待……応募チラシを持ってきて下さった方、皆様にチャンス……」

白い紙をじっと見つめ、チラシの中に書かれた文字を興味なさげに読み上げる。

な〜んだ……タイミングよく降ってきたから、本当に神様がくれ

た幸運かと思つたよ。

リアリストのあたしが信じてやるうかなって一瞬でも考えたのにさ。ちやほやの法則？つけ上がらせて突き落すなんて、性格悪いよ？神様。

別にさ、お金が欲しいなんて言っていないじゃん。

同じ紙でもいろいろあるでしょ？スーパーの安売りチラシとか、割引券とかさ。これが商品券だった日には、あたしは小躍りして、毎朝毎晩、貴方に祈りの踊りを捧げてたよ？

「なんだ…。おしゃれグッズなんてお呼びじゃないのよ」

今あたしに必要なのは、こじやれた見た目よりも確かな実用性。

普通の女の子なら食いつくだろうが、申し訳ない。ノットオブ眼中よ。

何故かな？チラシの中で鼻をくつつけ笑う、ミッキー、ミニーにそこはかかない怒りが込み上げる。

手の中のチラシをくしゃりと握り潰した。失望と共に見上げた小さな空は腹立たしいほどに爽快だ。

「くそ！せめて我が家の電話横のメモにしてやる！最近のチラシはどれも両面印刷でメモにもならないんだから！」

腹立たしげにそいつを持っていたカバンの中に押し込もうとしたが……ふと何か気がなった。取りあえず、記憶をプレイバック。白い紙が降ってきて、それは新規開店のお知らせで、商品券ではなくて、我が家のメモになる予定で……。

じりじりと照り返るアスファルトの上、ミンミンと耳をつんざく蝉の大合唱が聞こえてくる。

うだるような暑さに歩道を歩く人々があたしの横を足早に通り過ぎていく。

握った自転車のハンドルが太陽の光に鋭く輝く。額に浮かんだ汗が水滴となり、頬を滑っていった。

それでも魅入られるように、チラシを見つめて立ち尽くすあたし。手にしたくしゃくしゃのチラシを見つめ、何にひっかかりを覚えたのか考え込む。

じんわりと汗をかいた手の内ではなっていくチラシで文字が踊った。

『デイズニールランド無料ご招待……』

さらっと見落とした文字が急にその存在の大きさを主張しだした。

「なるほど、なるほど。これがこの店のオープンイベントの主役なのね」

デイズニールランド無料ご招待。

無料……。

……。

なんたること！貧乏道を極めたこのあたしが、この文字を見落とされていたなんて。

タダより安いものはない。

蒸しかえるような暑さが一気に引いていく。ドキンドキンと心臓は高鳴る。

待て待て、あたし。皆様にチャンスっていうことは、たぶんクジ的なかななのよ。

もしかしたら、『一定金額ご購入いただいたお客様の中から抽選
みたいな条件があるのかも。』

それじゃ参加資格はない。たとえ百円でも無駄なものにさく気は
ない。

だから、生まれ心臓！無駄に期待してもいい結果なんてないのよ。
甘い言葉に期待しても、蓋をあければ……ってよくある話じゃな
い。

そうよ、世の中はそんなに甘くない。これは客の購買意欲を上昇
させるのが目的なのよ。

「そうよ、貧乏人が一気に大逆転するなんてありえないのよ。身の
丈にあった幸せでいいのよ。デイズニールランドなんて、そんなハイ
ソな夢の国……」

そう自分に言い聞かせつつも、チラシから目が離せない。
だって、仕方ないじゃない。あたしだって女の子だもん。

そこは誰もが憧れる夢の王国なんだよ？想像ばかりが広がる、未
だかつて踏み込んだことのない未知の領域。

一応ね、小さなころに一度行ったことがあるのよ。でも悲しいか
ナ。小さすぎてあんまり覚えてない。

「そ、そういえば零佳がずっと行きたがってた。それにこの夏は
何処にも連れて行ってないし、長い夏休みの一日くらい、家族皆で
ばあつと遊んでもバチは当たらないよね？」

考えれば考えるほどに心臓が痛いくらいに胸の内でも暴れる。

浅はかと思われても、やっぱり甘い夢に酔いたい。

じつくりとチラシを上下していた視線が、下の方に小さく書かれ
た言葉に止まる。

「上の方にシンデレラ城をバックにしたミッキーとミニーの写真が映っているチラシをご持参のお客様に限り、3時までに来店すれば必ずディズニールランドにご招待！」

その瞬間、あたしは走り出していた。

チラシの中で白亜の城を背にした2匹のネズミが鼻をくつつけてあたしを祝福している。

降り注ぐ太陽に汗が散った。ポニーテールがふんわりと空に弾む。スカートが揺れ、いたずらな風にめくれそうになっても足は止まらない。

目指すは、普段なら絶対に近寄らない若者の聖地。

ここから電車で7駅ほど。

もちろんあたしは愛車スズメチャリをかつ飛ばして走っていく。

自転車に乗った勇者さま(前書き)

レベルは17。

魔法は使えません。

得意技は逃げるコトです！

自転車に乗った勇者さま

一度も足を休めることなど出来ない。だって時間との勝負だから。今まで奴とは接戦を繰り返してきたけど、今まで負けたことはない。

時間の壁は足と気合で幾らでも乗り越えることができる。
今日もまた、あたしの勝ちね！

なんて、ふざけている場合じゃないかも。

絶対にペダルから足を離すかって躍起になってたのに……。

目の前には思わず足を止めてしまふ光景が広がっていた。
近道のつもりで抜けようとしたビルの隙間。そこで繰り広げられているのは、よくテレビで見えるシチュエーション。

狭く薄暗い路地の真ん中あたりで、B系ファッションの2人組が、深緑色の帽子を深く被り、同じような色の長いサマーコートを羽織った、サンタク羅斯みたいな髭の人を取り囲んでいた。

サンタさんを壁に押し付けるようにB系の一人が前に迫る。

なんと、夢を配る冬の代名詞をカツアゲ？

でも脅されてるのはサンタさん。オヤジ狩りならぬじじい狩りだ。揺れる年金制度や後期高齢者保険で困惑を極めている（と思われる）シルバー世代になんてことを。

あたしは悔しいような、悲しいようなそんな怒りを感じた。

こら、B系！あたし達の生きる今は誰のお陰で成り立ってると思ってるんだ。

昭和の時代に頑張った人がいるから今があるんだぞ。

人生経験値レベルの格が違う人に、何噛みついてるんだ！

レベル20やそこらで、レベル60以上に楯突こうなんて。

恥を知りなさい！って思わず心の中で憤慨しちゃったけど、でも彼らを止めに入るにはあたしだけじゃ心もとない。

どうしよう。路地の端で一人たたらを踏んだ。

今まで走り続けた所為か、それとも無茶な選択を迫られている所為か。

あたしの心臓は限界を超えて鼓動を打つ。

こんなにも蒸し暑いのに、体の芯が冷えていく。

自転車にまたがったまま、どうすることもできずにただ3人を見つめる。

誰か助けを呼びに行くべきかな。

う、うん。そうだね。それが一番……。

そう自分に言い聞かせつつ、つきつけられた選択の時に別の道を見出したその時。

若者の一人がそのサンタさんの肩を強く押した。

よろけてビルの壁にぶつかるサンタさん。一歩前に出て、さらに迫るB系。

その瞬間、心臓が弾けた。

その時のあたしがどうなっていたのか。それは自分でも分からない。

客観的に把握しようにも、ポンって記憶が飛んじやったみたいにホワイトアウトしている。

ただ分かるのは、自転車を全速力で漕いでいたってことぐらい。

路地を駆け、そのまま3人達の輪に突入する。

突然のチャリの乱入に驚く3人に構わず、あたしは素早くサンタさんの手を引いた。

「早く乗って!!」

「……!!」

驚くサンタさんは言葉なく、動揺したように佇んでいる。

確かに自分を助けに割っていったのが豪快に息切れし、面白いほど強張った顔の女の子だったら目を剥くよね。

しかも有無を言わさない口調で声をかけた、ときたまんだ。

これが愛らしい女の子で、南ちゃん口調で『おじいさん、助けに来たよ。そして君達、カツアゲはダメだぞ』なんて言ったら、サンタさんは素直に納得して、感謝してくれたかな。

B系だって、思わず野球に転向しちゃうかもしれない。

その時はドラッグのマネージメントを読んで、あたしがマネージャーになりましょう！

なんて実際はこんな顔だけだね。南ちゃんならぬジャリンコ千佳ちゃんだ。

きつと腰を抜かしちゃうほど怖かったと思う。

でもそんな苦情は受け付けないぞ。今のあたしには上手に切り返す余裕すらないのだ。

サンタさんは何か言いたそうに口を開きかけたが、それを制してあたしは叫んだ。

「早く！後に乗って！」

呆気にとられた2人のB系よりも素早く反応したサンタさんが自転車の荷台に飛び乗った。

準備はOK？それじゃ出発シンコ〜！……なんて、そんなこと言ってる余裕なんてない！

サンタさんの体重を車体に感じた瞬間、あたしは足に全力を注いだ。

まるでロケットスターターのように、重力に逆らって自転車が急加速した。

ちよつと大袈裟な表現？でもね、今は必死すぎて一秒がこんなにも長く感じられる。

「おい、待て！」

どこか間の抜けた怒鳴り声が背中に突き刺さる。思わずビクリと体を震わせた。

待てと言われて誰が待つか！待てと言われれば、こう返すのが常套句でしょ？あたしと一緒にボキャブラリーが少ないぞ。B系！「YO！チエケラ！」ぐらい言いなさいよ！

まあ、言われても絶対注目なんかしてやらないけどね！

やっとB系の一人が口を開いた時、あたし達を乗せた自転車はピルの谷間を抜け、明るい夏の空の下に躍り出ていた。

大通りに出てさらに加速を強める。
車輪が何かにひっかかり、後ろに乗ったサンタさんが大きく跳ねた。

このままじゃサンタさんを振り落としてしまいかもしれない。

「おじいさん、しっかりつかまって！」

怒鳴るような声に従って、サンタさんがぎゅっとあたしの腰に抱きつく。

年の割にがっしりした腕がきつく腰に掴まってくる。

サンタさん、意外にいい体してるんですね。って変態のおじさんみたいなこと考えちゃった。

こんな緊迫した状況なのに、頭は意外と余裕のよう。

でも体は別。少しでも早く、少しでも遠くへ行こうと必死だ。

どれだけ前に乗り出しても彼らとの距離感は変わらない。

今は、ただただ前へ前へと走るのみ。気持ちばかりが焦って、ペ

ダルを漕ぐ足が空回りをする。

Bダッシュ！

ホントは、二人乗りはしちやダメなんだよね。

分かってますよ、お巡りさん。

でも今だけは見逃してね。……って、やっぱり見逃さないで！できれば助けて下さい！

けれど走り去る風景の中には白黒の車もおまわりさんの青い制服も見えない。

まったく！どうでもいい時はパトカーのスピーカーを使って、恥ずかしいくらい大声で注意してくるのにさ！

く〜！でもないものは仕方ないよね。

今は2人だけでこの危機を乗り越えねば。

あたしは助けを求めることを諦め、自転車を漕ぐことに全力を注いだ。

B系達の追手を振り切るために、曲がり角でスピンを聞かせて急転回をかける。

ちょうど向こうから歩いていたおばさんが急に現れたあたし達に驚いて、足に急ブレーキをかけた。

目をまん丸にして、あたし達を見つめている。

ごめんね、おばさん。

今は謝る余裕もないの。

あつという間に後方の景色と一体化したおばさんに心の中で謝る。瑞々しい緑が眩く輝く街路樹を何本も後ろに見送り、まるで突風のように街を駆け抜けた。

肌を打つ風は涼やかで心地いいけど、痺れるように痛い。

それにあたしの足はそろそろ限界。

このまま風を感じていたいけど、そうするとあたしの意識まで風で飛んじやいそう。

前に見えてきた広い車道には、あたし以上に風を感じたい人が高

速で車を走らせている。

横を流れる景色と同じくらい、個々の色がマールブルに混じり合っ
て流れていく。

取りあえず、奴らは追っつけてきてないみたいだし、あの車道を渡っ
て反対側で自転車を止めよう。

そして一番に喉の渴きを潤そう。

ちよつと贅沢して、自販機で買っちゃうぞ。

水滴のついた、ひんやりした缶を片手に、もう一方はもちろん腰
に当てて、ちよつとこめかみに痺れるような痛みを感じながら一気
に飲み干す。

そして缶を口から離れた瞬間に思わず漏れてしまったため息の爽快
さといったら。

想像しただけで、喉が物欲しげにつばを飲んだ。

いつもはどんなに喉が渴いても家まで我慢するんだけどね。

けど今日は特別！だって十分逃げたもの。

ロープレの勇者だって、ここまで頑張ってお姫様を奪還しないん
じゃないかな？

さあ、頑張れ！千佳！

輝く素敵アイテムは目の前よ！

限界を迎え、ふくらはぎの筋がきゅっと縮んだ。

そんな頑張る足に更に鞭を打つ。

ちよつど青に変わった信号を確認し、あたしはラストスパートに
力の限りを注ぐ。

渡りきったら、ジュースよ！

って、あれ？

信号に躍り出た瞬間。

一際大きく唸ったエンジン音に、弾かれたように交差点の向こう
に目を向けた。

「えっ？」

信号待ちをして行儀よく並ぶ車列がぼんやり霞んで見える。
その中一際くつきりと視界に浮かぶ黒い塊。

あれは何？

疑問が口から零れる前にはもう、それは取り返しのつかないところまで来ていた。

あれって、もしかしくなくても全力でこっちに来てる？

それが猛スピードで駆けてくる車だと分かった時には、あたしは本能的に自転車の急ブレーキを踏んでいた。

擦れる金属が甲高い声で悲鳴上げて、スピードに乗った自転車は止まらない。

車輪は懸命にその回転を止めたのに、車体は慣性の法則に従って前に進む。

サドルから体が浮き上がる。

ああ、もうあたしじゃ、制御しきれないよ。

体がぐらりと揺れ、夏の眩い青空が視界いっぱい広がった時には、自転車から放り出されていた。

白と黒が均等に並んだ路上にスライドするように転がる。

滑るアスファルトがまるで鉄板のように熱くて、擦れた箇所が火がつきそう。

熱は頭の芯にまで伝わると、なんとも言えないヒリヒリ感に変わった。

地味に泣きそうな痛みが全身に広がる。

脳が痛みを感じるまでの間なんて、ゼロ・コンマの世界。

でもそんな短い瞬間でも確かに時は流れる。

けしてあたしを待ってくれない。

咄嗟に腕について顔を上げた時には、霞む風景の中を突き抜けてきた黒色の車がもうそこまで来ていた。

車の進行方向にいるのは尻もちをついた状態のまま、帽子の上から頭をさすっているサントさん。

ぼんやりと車の方に視線を漂わせている。
こう言う時二人乗りは後に乗っている方がバランスを崩しやすい。
前が見えなくて踏ん張れない分反応が遅れるのだ。

「おじいさん！」

早く助けなきゃ！

何かを考える時間なんてない。

ただサンタさんと車の影が同時に見えた瞬間、あたしは無意識に
地面を蹴っていた。

後数メートル。

もう目と鼻の先まで車は来ている。

エンジンの音がやけに大きく、そして急加速したように回転数を
あげて耳に響く。

それ以外は何も聞こえない。叫んでいるあたしの声さも。

切り取られた空間はひどく鮮やかで、まるで8ミリフィルムのよ
うに細切れに流れる。

神さま、一生のお願いだから！！

このまま行くとあたし、はねられちゃうのかな？

そしたらディズニールランド無料ご招待にはどう頑張っても間に合わないかな？

救急車で途中に寄ってもらうことって可能かな？

やっぱり無理かな？ダメ元で一回お願いしてみようかな？

でもこのまま死んじゃったら、もう二度とディズニールランドに行けないな。

む、無念だわ。こうなったら、葬送曲としてエレクトリカル・パレードの曲を流してもらおう！それでもって天国からお父さんが輝く馬車で迎えに来てくれるの！

……なんて、こんな必死な場面なのに頭ではどうでもいいことばかり考えてる。

イジワルな神様があたしを試しているのかな。

目の前に甘いお菓子をちらつかせながら、反対の手であたしを追いこもつと背中を押す。

あたしがどんな選択をするか、そんなに知りたい？

なら、癪だけど神様の思い通りに祈るわ。

ディズニールランドはもういいです。

だから、今この瞬間、あたしに力をください。

サンタさんを守るような、そんな奇跡の力を。

お願い、神様！

飛びつくようにサンタさん突き飛ばし、あたしは宙を舞った。

一瞬時が止まったのかと思った。

まるで空に浮いているかのように、感覚が鈍い。

緩やかに流れるあたしの時間の、その足先を掠めるように剛速な衝撃が駆け抜ける。

触れあっただけの靴が片方、衝撃に巻き込まれて高い空へと飛ばされていく。

何も分らない。

痛いのか、無感覚なのか。

落ちているのか、上昇しているのか。

冷たいのか、熱いのか、それさえも。

聞こえるのは風の廻る音。

視界にあるのは、目を見張るほどに鮮やかな光を受けた世界。

ゆっくりと流れる時間の魔法が不意に途切れた瞬間、あたしは真つ逆さまにサンタさんの体の上に落ちた。

まるで体当たりをするかのような勢いだったけど、サンタさんはしつかりとあたしをキャッチしてくれた。

固い地面を想像していたあたしはサンタさんの柔らかさに思わずほっとしてしまった。

夏の暑さじゃない、サンタさんの温かさはずっと止めていた息が、強張った体から抜け出る力と共に出ていった。

あんなにも大きかったエンジン音はすでに遠くに響くのみ。

すでに影も形もない。

嵐はあつという間に去っていった。

よかった。あたし、助かったんだ。

そう思っただけ瞬間、ひんやりした汗が全身から噴き出した。体が今さらながら震えてくる。

後一步遅かったら、あの空を飛んでいたのは靴だけじゃなくてあたし自身だった。

そう思うとひんやりした手でぎゅっと心臓を掴まれたような恐ろしさに気付いてしまって、とてもじゃないけど笑えない。

喘ぎそうになる声を懸命に抑え、あたしは震える体を抱き締めた。

失った右の足が妙に頼りなく感じる。

「よ、よかった……」

呆然として、指を動かすのも難しい。

震えて思うように動いてくれない。

九死に一生スペシャルで取り上げられても、遜色ない経験したんだもの。当然だよな。

はあはあと肩で息をし、助かった安心感とじんじんと響き渡る擦りキズに思わず泣けてきた。

震える手で、潤んだ目をこする。

そんなあたしの背をそつと優しく撫でる大きな手の感触に、もっと涙が零れそうになった。

顔を上げると、深緑色の帽子の下で力強い輝く瞳と目が合った。

幾歳、あたしの何倍も年を重ねてきたとは思えないほど爛々とした活力に満ちている。

流石、サンタさんだ、なんて感心してる場合じゃない。

サンタさんの腕に抱かれたままであることに気付き、慌てて立ち上がる。

いたいけな老人の上にもいつまでも乗っているなんて。高齢者虐待だよな！

「すみません。重かったですよね？」

焦ってしまって、かなり拳動不審だ。

まだもつれる足でふらつきながら、サンタさんの前に立った。

「おじいさん！とりあえず歩道に行きましょう！」

帽子で顔が見えないが、ぼかんと開けられた口からサンタさんの

気持ち伝わってくる。

もしかして立ち上がれない？

でもこのまま車道にいるのも問題だ。

仕方ないなつとあたしは、立ち上がりサンタさんの脇に手をかける。

「ちょっとすいません」

一応一言断って、おじいさんを横抱きにしようと腰に手を回す。セールやバーゲンで鍛えたあたしの腕力と脚力を舐めないでね。自分よりも背の高いおじいさんでも、なんてことはない。

いつも下の妹を抱えているから、おんぶにだっこは朝飯前だ。流石に肩には担げないけど。

お姫様だっことも論外ね。あたしはするよりされたい方です。

む……意外に胴周りもがっちりしているな。

細いと思っていたサンタさんの意外性に思わず焦ってしまった。手が回るかな？

でもここで引き下がる中澤家のおねえちゃんじゃないぞ。

「せい！」

なんとも乙女らしかならぬ掛け声とともにサンタさんを両手で吊るすように引き上げる。

とりあえず歩道までダッシュだ。

火事場の馬鹿力って言うのかな？

手が千切れそうなほど痛いけど、でもそんなことに構っていられない。

勢いに任せ歩道まで駆ける。

自転車は勢いあまって歩道近くで無残に倒れていた。

取りあえず自転車の側まで行こう。
力の限界に思わずサンタさんを手放してしまいそう。
腕の付け根が剥ぎとれそうに軋む。
限界のその前に、歩道に一步踏み入れた。
そのままそつと歩道の上にサンタさんを下ろす。

「お、おじい…大丈夫…？」

今のあたし、残念なくらい日本語話せてないな。
でも痛いほどに乾燥した喉から漏れるのは激しい息切れの音のみ。
気道が切れそうなほど痛くて、肺に浸みこんだ空気が滲みる。
やっと落ち着ける場所に来て、あたしはそのままその場に座り込んでしまった。

ホントにもう限界だわ。

もう一步も動きたくない。
力が抜けてぐったりしたりしたあたしの頭にほんと大きな手が置かれた。
その体温に惹かれてゆっくりと顔を上げると、サンタさんの視線とぶつかった。

今気付いたけど、小さなあたしを映し出すその瞳は、吸い込まれそうなほどに澄んだ蒼。

射抜くように鋭い眼差しに心臓が掴まれたように強張った。

深く揺らめく静かな炎が燃え尽きたあたしに火をつける。

マッチの灯のように微かに、でも高鳴る鼓動と共にその勢いは増すばかり。

なんでこんなにも吸い込まれそうになるんだろう。

イン・ザ・ブルー

「おじいさん！怪我はありませんか？」

あたしは選手宣誓のように大声で叫ぶと、立ちあがった。
燃えそうになる心の端っこを必死で消火活動に当たる。

サンタさんから視線を反らし、空を見上げる。変わらず眩い日差しに思わず目を細める。

そのまま車が走り去った方向を睨んだ。

「あんな乱暴な運転するなんて信じられない！！しかもそのまま通り過ぎていくなんて！人としてサイテーだわ！」

感情のままに叫ぶと、ダイブすっきりした。

心の火傷もぼやですんだらしい。

吐きだされたものと一緒に燃えカスも飛んでいく。

すっきり夏空になったあたしの心に微かに残るのは、か細い綿雲だけ。

積乱雲になれない切れ端。

それすらも遠くに追いやるように、あたしは更に声を張り上げた。

「おじいさん、大丈夫ですか？病院行きます？」

しかしサンタさんは何も答えない。

どこか痛いのかな？

見たところ、所々服が破れているが、どこかを痛がっている様子はない。

それとも折れているのを懸命に耐えているとか？

この歳で骨折したら、後の生活にかなり響くはず。

骨折をしてから体が弱って、歩けなくなる人が多いと聞いたことがある。

放っておいたら、トンデモないことになるかも！

それはダメよ！一回の我慢で、一生を棒に振ってしまつう。

あたしは慌てて、サンタさんの肩を掴んで説得を試みた。

「我慢はダメですよ！痛い時は痛いって言わないと！早く病院に行かないと！」

もうデイズニールランドの文字はあたしの中になかった。

病院に行く。

これがあたしに課せられた最重要ミッション。

端から縁がなかったのだ。

仕方ないよ、千佳。きれいさっぱり諦めよう。

それよりも助かった命を喜ぶ方がずっと素敵なことですよ。

せっかく普段は意地悪ばかりの神様が起こしてくれた奇跡だもん。

五体満足って、本当に恵まれたことだよ。

それに何かを失ったまま行く夢の国が楽しい訳ない。

だからさ、心臓。

そんな非難めいた鼓動を鳴らすのはやめにしよう。

それともこれは別の危機に対する警鐘なのかな？

いやいや、そんなこと、ない。ない。

馬鹿なことで無駄にドキドキしないで！

あたしは自分の心臓に苦言を呈してから、サンタさんの側に腰を下ろした。

立膝をつくように片足を立て、サンタさんに背を向けた。

おんぶだったら、ちょっとぐらい遠くても運んで行けるかも。

「乗って下さい！病院に行きましょう！」

自信満々におじいさんを振り向く。

今のあたし、きつとふつきれた、いい顔してると思う。

サンタさんはさつきと変わらない恰好で呆然としている。

「それとも、動くのしんどいですか？」

あたしの言葉に僅かにサンタさんはとまどったが、すぐにゆっくりと腰を上げた。

腰を屈めたまま、あたしの背に乘ろうとサンタさんの手が伸ばされる。

サンタさんの大きな手があたしの首元にかかった。

「サンキュ、レディ」

くぐもったような甘い声が耳元で聞こえた。

その瞬間、視界が青く染まった。

鼓動が弾む。

サンサンと輝くヴィヴィットカラーが空の青だと気付いた時には、もう抗えない。

深い青の海に落ちたように呼吸さえままならない。

後ろに引き倒され、思わず尻もちをついた。

衝撃に心がきゅっと萎縮してしまう。

これは何？

今、あたしを抱き締めている大きな手は誰のもの？

驚きすぎて、体が自由を失っている。

体の奥が小刻みに震え出す。

もう逃げられない。

何故だろう。直感がそう告げる。
聞こえるはずのない錠の落ちる音がした。

微女と野獣

これはどういうこと？

頭は真っ白。でも視界は真っ青にキラメク夏空。

混乱しているけど、あたしの耳はけして聞き間違ったりしない。

あたしの肌は触れ合うものを間違っただけ伝えたりしない。

なら、何が間違いだっただろう。

始めからあたしの後ろにいたのは、髭のサンタさんじゃなかったってこと？

自分の浅はかさを確信した途端、縮みあがった心が爆発した。

ドキンドキンと弾む鼓動に指先から体温が奪われていく。

でも心臓だけは痛いほどに熱い。

「アーユーOK？」

OKな訳ない！

何なの、その力強さ。

その輝く瞳。

その甘い声。

囁かれるのはけして老人の声なんかじゃない。

若者の、明るく澄んだ声。

こんな声でラブソングとか歌われた日には、女の子は誰でもメロメロだ。

なんていうか、透き通ってるだよ、声が。

それに加え大人の男の人らしい低みと甘さが含まれてる。

その声がかすれるように囁くから、その甘さに蕩けそうになる。

聞いていて心地よい声。

でも……。

「……フフ……クク……アハッ…アッハハハハ……」

……。

その声が、今は全然甘さを感じさせないほどに大爆笑している。

「イッツクール！エキサイティング！」

あたしを後ろから抱き締めたまま、そいつ（二度とサンタとは呼ばない！）はあたしの心などお構いなしに笑い出した。

しかもイングリッシュで馬鹿にしゃがって。

あんまり英語は得意じゃないけど、それぐらいは聞き取れるぞ！
くそ。すっごく腹立つ。

全然状況が読めないけどさ、そんなに馬鹿笑いしなくてもよくない？
しかもあたしそっちのけで笑い続けるなんて！

「ちよつと、あなた！」

さっきまでの緊張感も、震える心も、ついでに清らかな神様への感謝もどこかに吹っ飛んでしまった。

腕を振り払うように、心地よい拘束から逃げ出すと、老人の恰好をした不届き者の側に仁王立ちした。

あたしの憤怒の表情はかなり恐ろしいと定評がある。

奈良の仁王像にも負けないぞ。

運慶、快慶がなんだ。

これを最終兵器にあたしは中澤家に君臨しているのだから。

振り払われたまま、歩道に座り込んだそいつを思いっきり見下ろす。

「老人みたいな恰好して、何がしたいのよ！そりゃちゃんと確認しなかったあたしも悪いけど、でもその服に髭は反則でしょ！この暑い時に紛らわしい恰好して！サンタは冬だけにしてよ！」

まずい。

突っ込むポイントが若干ずれた気がする。

いや、そんなこと気にしてる場合じゃない。

この不審者に自分の愚かさを分からせてやらなきゃ。

びしっ指を突きつけ、これでもかってほど、目を怒らせる。

そんなあたしを見返すのは、夏の日差しを受け蒼く煌めく瞳。

キラキラと情熱的に燃える炎があたしの平常心に火をつける。

その存在感の大きさに揺らいでしまいそうになる。

頭が白くなつて、心臓の鼓動ばかりが大きく鼓膜に響く。

目の前の不届き者は核心に触れるようで、さらに核心からあたしを遠ざけるように髭の下で不敵に嘲笑う。

伸ばしたあたしの指にそっと触れると、そいつは体勢を立て直した。

さっきあたしがしていたみたいに、身を屈めて歩道に片膝をつく。まるで物語の騎士のように颯爽として、悔しいほどキマっている。そいつは意味ありげに目を細めると、物語のようにゆっくりと身を屈ませた。

そして、あたしの手へと顔を近づける。

その姿はまるで忠誠のキスをする騎士のよう。

な、なんで？

その先はお姫様だけが許される領域でしょ？

美女の特権でしょ？

冗談でも微女にしちゃダメ！

予測不能なことばかりで、もうあたしのキャパでは対応できない。どうしていいか分からなくて、泣きそうになる。

でもそれ以上に体の体温が急上昇して、顔がほてって、何も考え

られない。

手を引き抜こうと力をいれるけど、でも優しく掴まれたその束縛に抗いきれない。

後少し。

不屈きな騎士の唇があたしの手の甲を標的に捕えた。

帽子の下の柔らかな髪の毛が撫でるように甲に触れて、こそばゆい。

けれど、心はそれ以上にもぞもぞして落ち着かない。

「ダー！」

叫ぼうとした。でも『メ』の文字がでない。だつて。

触れそうになった彼の口がかじっているのは、ささくれ立ったあたしの人差し指。

甘く歯を立て、生温かな舌がそつと指の腹を撫でる。

ぞくぞくと体の奥底が身震いした。

窺うように見上げる意地悪な瞳がどこか艶めかしくて、耽美だ。

これじゃ騎士の忠誠なんかじゃなくて、悪魔の誘惑だわ。

これ以上見つめられたら、あたしの心はもつと逃げられなくなる。

そう直感した時には、もう感情は制御を失っていた。

「……いや〜！！何で噛むのよ！」

取りあえず、退避よ！タイヒ！

自分の身を守るため必死に手を振り切った。

瞬間的に距離をとる。

まるで駄々っ子のように両手を振りまわして喚いた。

「もう！訳わかんない！何がしたいのよ！ちゃんと行ってよ！日本

語で!！」

そう。言語の指定は大切だと思う。

パニックな頭の中でこれだけは指定しておかねばと考えた。

だって英語でまくしたてられたら、あたしの頭はもっとおかしくなっちゃう。

ファンタジア（前書き）

言わずと知れたディズニーの名作から拝借いたしました。

ファンタジア

じっと警戒して睨むあたし前で、そいつはゆっくりと立ち上がると被っていた帽子をおもむろに脱ぎだした。

深緑の覆いから解放された髪を無造作にかきあげ、そいつは色っぽく目を細める。

現れたのは真夏の太陽にも負けないほどの輝き。

プラチナブロンドって言うのかな。

煌めく金髪が爽やかな夏空に揺れる。

まるで絹糸のように繊細で、天から降り注ぐ光のよう。

それは、悪い魔女の魔法が解けた瞬間のように劇的だった。

鮮やかに、目まぐるしく変わりゆく。

あまりにも圧倒的で目が離せない。

そいつは長いコートを脱ぎ去り、冬の世界から一気に夏の世界に躍り出る。

ゆっくりと顔に付いていた長い髭を取り去ると、そいつは意味ありげにあたしを見つめる。

何？こんなことってありえる？

サンタさんどころか、これじゃまるで……。

口を半開きにして、彼の魔法を見つめるしかできない。

帽子も、服も脱ぎ去り、ただの毛の塊になった髭を片手に持って弄んでいるのは麗しの金髪蒼眼の青年。

日本じゃ滅多にお目にかかれない薄い色素が、まったく別の世界の人だと告げる。

日の下で白く照り輝く肌は瑞々しく、細みの長身に白いシャツがよく似合う。

掘りの深い顔は端整で、すつと通った鷲鼻と切れ長の目がお互いのよさを引き立てている。

まるで草原を駆け抜ける風のような爽やかさで、真夏の空のように煌めいてる。

澁刺としたエネルギーギッシユな姿が見る者を圧倒する。

こんな人、ホントに実在するのかな？

それともこれは夏の暑さが見せる幻想？

自分で自分の見ているものが信じられないよ。

だってこんなにも格好よくて、穏やかで、誠実で、頼りがいがあるって、ついでに知的で……これでもかかってぐらいに大和撫子の理想を詰め込んだような王子様。

でも、瞳の奥には飲みこまれそうほどの熱い情熱が燃えている。

それは王子というにはあまりにも野性的で、触れれば火傷しそうなほどに危険な炎。

思わず怒りも忘れて、目の前の人に吸い込まれそうになった。

こんな人は初めてだ。

どうして目が離せないのかな。

ただぼけつと見つめるしかできないあたしの前で、そいつは変わらず爽やかな笑みを浮かべている。

その形のよい薄い唇が動いた。

「オモシロイカオ」

「はあ？」

「モットミタイナ。イロンナキミヲ、ネ？」

思わず見惚れてしまう極上の笑みとともに、ウインクなどかまし

てくる。

アハン？プリーズ、ワンモア？

今あなた様が話されているのはイングリッシュ？

それとも、あたしがまったく知らない国の言葉かしら？

でも知ってる単語がそこはかとなし悪意に包まれて聞こえてきたんですが……。

「ちょ、ちよっと！面白いつて何！」

警戒心もふっ飛ばし、そいつに噛みつくように食ってかかろうとした。

その時！

『リチャード殿下！！』

悲壮なおじさんの叫び声が聞こえた。

普段はきつと落ち着いた、存在感のある洪めの声だと思う。

でも今はうるたえて、妙に滑稽に聞こえる。

弾かれたように、声のした方を後ろを振り返った。

その瞬間、目の端に入り込んだそれに思わずフリーズしてしまう。

「な、なに？」

黒だ！

黒い波が押し寄せてくる。

状況が読めなくてフリーズしているあたしの方に向って、地鳴りと共に土煙りを蹴って駆け寄ってくる数十人の黒いスーツ姿の男の人。

日本人と外国人が半分づつくらい。

みんな揃いもそろって黒色のスーツにサングラスって、映画の見

すぎだよ。

これは何事！

呆気にとられて、近付いてくる黒づくめに目を奪われる。流石にこの状況を見捨てず、この男を怒鳴りつけるほどあたしは度胸がない。

ちゃんと空気が読める小市民だもんね。

『インペリアル・ハynes・リチャード』だか何だか知らないけど、何でこんなことになってるの？

それってこの不審なガイジンさんの名前かしら？

読めない展開にポカンと立ち竦んでしまう。

これは何かの撮影なのでしょうか。

それとも夏の暑さが見せる幻想？

思わず目をパチクリとしばいた。

だが次に瞼を上げた時には、視界を埋め尽くす黒一色。

単純な思考の自分が憎らしくなる。

「ねえ、なにになになにこの状況！」

素っ頓狂な声ってこんな感じかな。

こんな状態じゃ誰だってそんな声になると思う。

だって十数人の黒づくめスーツだよ？

しかもみんな強張った顔で押し寄せてくるんだよ？

ある意味ホラーじゃない？

ただ、誰一人あたしを見てはないんだけどね。

黒づくめの視線の先にいるのは麗しの不届き者。

黒づくめの一人、日本人らしいその人が不可解な状況を解く答えをくれた。

「大丈夫ですか？シーリエント王国第二王子リチャード殿下！」

丁寧な説明口調をありがとうございます。

ああ、そうでございますか。

本物の王子様でございましたか。

見た感じ、もう王子以外の何者でもないもんね。

そうか、王子様が……。

しかも本物の……。

……ああ、ジーザス。

魅入られて、人魚姫

「お、お、王子って、本当に……？」

信じられない。

どうして王子なる存在がこんな所にいるの？

それよりもシーリエント王国ってどこだ？

ヨーロッパにそんな国があったような気がするが、地図を見せられても国旗を見せられても、はたまた国歌を歌われても絶対に分からない。

だって地理は苦手なんだもん。

根からの地図の読めない女ですいません。

初めて聞く国名も気になるが、それよりもあたしの心を掴んで離さないのは目の前の王子様。

物語なんかではよくいるのに、でも現実では絶滅危惧種だ。

初めて見た本物を穴があくほど見つける。

その視線に気づいたのか、王子様は理想の王子様然と顔をほころばした。

「ハハツ。ファニーフェイス！」

屈託なく笑う口からは白い歯が見える。

そのちよつとだけ覗く鋭い八重歯が知的な彼を幼く見せた。ドキンッと鼓動が揺れる。

ちよつと！馬鹿にされているのに、何をほだされているのよ、あたし。

これはただ王子様って存在に興味があるだけで、断じて見惚れる訳じゃないんだからね。

全力で自分の気持ちを否定するように叫び声を上げた。

「馬鹿！何を言ってるのよー！！」

でも、もう自分の声が聞こえない。

一気に黒づくめスーツが王子に襲い掛かり、あたしも巻き添えだ。押し寄せる黒い波にのまれ、もう流されるように踊るしかない。

「お怪我は？」

『何があつたのですか？』

「何時の間に外に出られたのです？」

いろんな言語が何かをまくしたてる。

ちよ、ちよつと落ち着こうよ。

そんな全員で取ってかからなくても、王子は逃げないよ。

もしかなくても、逃げてきて今に至るの？

ああ、黒い渦に溺れそうになる。

もみくちやにされるあたしにはもう王子の姿は見えない。

混沌だ。暑い夏の日、一番熱い時間に何が悲しくて、大規模おしくらまんじゅう。ぎゅうぎゅう押されて、逃げられない。

いつになったらこの茶番のような捕縛劇はラストを迎えるの？

「そこまでだ！」

一際鋭く冷やかな声が吠えた。

低く地を這うような重低音に体が震える。

事態を収束に向かわせるに相応しい堂々とした声に、荒れに荒れていた黒波が割れた。

一気に熱が引く。

黒い波は去り、あたしはその真ん中に、まるで浜辺に打ち上げられた漂流物のように無残な姿で残された。

やっと解放され、糸が切れた操り人形のようにその場に崩れるように座り込む。

誰だろう？

はつきり聞こえたのは日本語だった。

知ってる言語ってだけで、こんなにも安心できるなんて。

ぼんやりと声のした方に顔を向けると、黒づくめの間に割っているダークグレーのスーツの男がいた。

まるで狩人のような眼差しの男。

何が気に入らないのかと思うほど眉に皺を寄せ、その下にある切れそうなほど鋭い瞳でこつちを睨んでいる。

少し乱れた黒髪がほつれてかかる顔はすっきりと整って見える。

でも、その冷やかなで、大人の男の人らしい危険な魅力が近寄ることをためらわせる。

日本人ばなれした長身を細みのスーツで包み、たくましい胸元でだらしなく結んだ細いネクタイを揺らしていた。

年齢は、うちの叔父さんくらいかな。

30歳を少し過ぎたくらい。

でもうちのダメな叔父さんと一線を引くのはきつく結ばれた口元、冷酷無比な彼の空気に、その場のうわついた空気が一気に凍りつく。

けだるげに一度あたしに目を向けると、その狩人はまるであたしになんか興味なしとばかりに無視して、黒づくめ達を見渡した。

『いつまでここにいる。王子様を見つけたなら、早く車に乗せろ。』

……事情聴取はそれからだ』

最後の一言はきつと王子に向けて言ったんじゃないかな。
何を言ってるのか聞き取れなかったけど、でも細められた切れ長の瞳が王子を蔑むように向けられていた。

『御苦労だね、ミスタ・ユキムラ』

『そう思うなら何故勝手に出歩くんですか？しかも一般人を巻き込んで。半狂乱になってるシーリエント王国の連中の相手をするほうの身にもなって下さい』

にこにここと笑う王子に対して狩人は、心底迷惑そうにため息をついて首を振った。

口調は丁寧だけど、でも、口先だけ敬意を表しているように見える。

彼の底が深すぎて見えない。

王子は苦笑するように肩を竦め、そして側にいるお供らしい黒づくめに促されるように狩人に背を向けた。

ゆっくりと歩く王子の側で小柄で童顔の男の人が何かを喚いている。

彼も王子様の護衛なのかな？

一人浮いたように、黒スーツが似合っていない。

薄茶の髪は若干坊っちゃん刈りで、今にも泣きそうな大きな瞳は遠い南の島の海のように碧く澄んでいる。

王子様の従者ってやつかな？

従者っていうよりもペットって感じ。

きゃんきゃん吠える小さな、ポメラニアンを一瞬想像してしまった。

きつと名前はペスだ。

ペスが金切り声で吠える。

「どこに行っていたんですか！もう心臓が止まるかと思いましたよー！」

「分かってるよ。もうどこにも行かないから、そんな顔をしないでくれ」

「しかし、殿下。この来日で2回目ですよ！何を考えてるんです！！」

車道に止められた黒く輝く高級車の方に足を向けながら、王子は付き人の苦言に笑顔で答える。

遠ざかる、夏。そして…

遠ざかっていく爽やかな夏の香りの王子様。

寄せては返す波のように、あまりにもあっさりと事態は終焉を迎えた。

ぬか喜びしたチラシに始まり、じじい狩りのB系の2人組、懸命の逃走劇。

そして最後はダイブで車からサンタさんを救出。

と見せかけ、実はサンタはおじいさんならぬおっじ様だった、なんて。

こんなことある？

まるでドラマだね。お伽噺よりも現実の方が奇なるものね。

でもこれはありきたりな現実。

だから、ドラマチックな展開の後に残されるのは、日常のざわめきと物語の余韻だけ。

ちれじれに別れゆく黒づくめの男の人たちはそれぞれの日常に戻り、全てはあたしの下から離れていく。

夏の日差しに火照った体が、夕方になるにつれ徐々に熱が引いていくように。

あたしを振りまわした劇的な世界は、あっさりとあたしを切り離して遠ざかっていく。

巻き込むだけ巻き込んで、ホントに自分勝手。

離れていく眩い世界をあたしはただ見つめるしかできない。

王子はまるで何事もなかったとばかりに優雅に微笑み、車の後部座席に乗り込もうと身を屈めた。

狩人は少し離れた場所から王子が逃げ出さないようにじっとその背を見つめている。

これで王子様の逃走劇はお終い。

一人残されたあたしは物語の脇役にもなれない、モブ。

明日になれば王子の記憶からあたしの顔は消えてるかもね。

まあ、高校生くらいの女の子と自転車を二人乗りしたな、ぐらいは覚えていてくれるはずよね。

一応、からまれていたのを助けてあげたんだから、感謝ぐらいはしてもらわないと！

あたしだって、家に帰って事の顛末を家族に伝え、バイト先の人に伝え、2学期になって友人に話せばもう使い古したネタとして心の奥に仕舞いこんでしまう。

そして時々シーリエントという国名を聞くたびに、嗚呼こんなこともあったなって思いだすんだろうな。

仕方ないけど、そんなものでしょう。

お互いの長い人生のたつた一瞬、ミクロ単位の出来事なんだもん。それでも重ならない運命が触れ合っただけでも奇跡。

だからさ、この強張ったままに動かない顔をなんとかしなきゃ。

いきなりのことに、表情がまとまらなくて困ってしまう。

せつかくの王子様との最後の瞬間なのに。

いろいろあったけど、全部許して、笑顔で見送ってあげよう。

自分に魔法をかけるように言い聞かせ、視線を上げた。

その視線に気づいたように王子が振り向く。

目があった瞬間、情けないあたしの顔を見つめ、訳知り顔で意地

悪げに目を細める。

ズルイ。

そんな顔されたらもつと別れがなくなっちゃうじゃない。

心の中を読まれたようで、悔しくて思わず視線を逸らしてしまう。

そんな視線の片隅で、乗ろうと屈めた背をピンっと伸ばす王子が見えた。

な、なんだろう？何か思い出したのかな？

ぼけつと座りこんだままのあたしの視線の先で、王子はくるりと車に背を向けて、つかつかとこちらに歩いてくる。

忘れものかな？ってそんな訳ないか。

どうしたの？知らない国の王子様。

もう物語の世界に帰る時間でしょ？

物語の幕は下りたのよ？

ポカンとするあたしなどお構いなし。

長い足が優雅に、そして一気にあたし達の距離を縮めた。

「な、なに？」

困ったように眉を寄せ、あたしは上目使いに蒼の瞳を見返した。

でも意地悪な王子様はあたしに答えなんて教えてくれない。

爽やかな笑顔を浮かべたままあたしの側にしゃがむと、甘い声で囁く。

「コノママ、オワカレナンテ、サセテアゲナイ」

え……？今、なんて言ったの？

甘い声に全身の血が逆流する。

「殿下！何を」

ペスの叫びが遠くで聞こえた。

でも、従者の言葉など聞く耳持たず。

ワガママ王子は道に落ちていた名もなき花を摘むように、さり気なくあたしに触れた。

「ちょ、ちょっとー！」

抵抗する間なんてない。

肩と膝に回された腕が一気にあたしを持ち上げた。

痛いほど暴れる心臓の音以外何も分からない。

視界が揺れ、一気に視線が高くなった。

やっと気付いた時には力強い腕の中に包まれていた。

薄いシャツ越しに、香る香水の大人びた色気と感じる自分のもの
じゃない体温に血液が蒸発しそうなほど激しく体を駆け巡る。

白いページのその先

大きな腕が守るようにあたしを側に引き寄せた。

「サア、イコウカ」

乱れた髪越しに彼の唇があたしの耳に触れる。

それだけでも燃えそうなほど耳が熱を帯びるのに。

そんな柔らかな声でぞつとするほど甘く囁くなんて。

このままじゃ、あたしの0に近い経験値が限界を振りきっちゃうじゃない。

ねえ、これはどういう状態？

も、もしやお姫様だっこされているの？あたし。

突然のことすぎて、自分のことが自分じゃ分からない。

まさか、憧れのシチュエーションを本物の王子にされているなんて。

そんな恐れ多いことありえる？

いや、そんなことよりも下ろして！

体重がやばい。

あたしは雲のように軽いお姫様でもりんご3個分の子猫ちゃんでもないのよ！

きっと王子様の腕じゃ支えきれない。

格好つけて無理したら、筋肉痛でお箸が持てなくなるよ？

もしかしたら肉離れ必須かも？

後から感謝料を払えって言われても、我が家の経済力では到底無理だわ。

思考を別の方に向け、必死に目の前の現実から遠ざかろうとする。

でも、あたしを軽く抱きかかえる王子の顔は先ほどと変わらず胡散臭いほど爽やか。

目を回しそうなほどパニックなあたしを更に追い込もうと顔を近づける。

「ソウソウ……アンナ、ハゲシイダツコ、バアヤニモサレタコトナイ」

「！」

蕩けそうな甘い声に、刺激的な香りに、力強い腕に、鼓動が飛びあがった。

でも、今は叫ぶ余裕なんてない。

恥ずかしすぎて、声もでない。

それにしても激しいだつこつてなんだ？

それは、小脇抱えて横断歩道をダツシュしたことを言っているの？

困惑するあたしを余所に、王子はさっきのコトを思い出したのか、

喉を鳴らして笑いを始めた。

くう。すつごく馬鹿にされている気がする。

なによ！それ！

父さんにもぶたれたことないの的アムロ・レイ発言ですか。

しかもロイヤル感を出すために、ばあやときたよ。

うちの妹を見習いな！

うちの零佳はいつもああやって小脇に抱えられて、あたしに幼稚

園までダツシュされているんだ。

それでもたつた一度も文句を言ったことがない。

なんて心の中で叫ぶけど、でも感情がうまく口から出てこない。

抵抗するように両手で王子を押しつけようとするけど、でもそんな簡単に解放してくれない。

「ちよ、ちよっと！」

慌てて声を張り上げたあたしは助けを求めるように視線を漂わせた。

周りにいる人たちは一様に驚愕の表情で固まり、王子の奇行を見つめている。

ペスなんて車の横でこの世の終わりつてぐらいに目をむいている。その中、僅かに目を見開らいた狩人と目が合った。

流石の彼にもこの展開は読めなかったらしい。

しかし誰よりも彼の頭は回転が速い。

面倒臭そうにため息をつき、王子があたしを車に押し込む前に鋭い声を上げた。

『王子。それをどうするつもりです？』

呼び止められた王子はピタリと足を止めると、王族らしく威風堂々と振り向いた。

冷酷な狩人をまっすぐに見つめる蒼い瞳が深く煌めき、狩人の底の知れない黒の瞳と絡み合う。

ただそれは僅かの間。

すぐに王子は穏やかに頬笑みを浮かべる。

『何か問題でも？彼女は私を助けて怪我をした。その治療を行うのに何か不都合が？』

『だがその少女はそれを分かっていない。彼女の意思を無視して連れ去るのを日本では誘拐というんですよ』

『なるほど。ミスタ・ユキムラ、貴方はとても仕事熱心な方だ。S・Pの仕事外であることにも気を回すなんて、流石は日本国の警察官』

ですね。では、貴方の口から伝えてくれますか？私はまったく日本語が話せない。彼女に治療のために一時シーリエント王国の大使館まで来て下さい、と』

「ちよつと、ちよつと、何訳わかんない会話をしているのよ。ケアって何？治療？こんな擦り傷、舐めれば治るわ！そんなことよりも早く下ろしてよ！こんな衆人環視の中、お姫様だっこされてるなんて、恥ずかしい！」

二人の会話に割り込むように喚き声をあげる。

だってあたしが居た堪れなさすぎでしょ？

これが綺麗な女の子なら絵になる光景だけど、あたしじゃ目も当てられない。

でも王子は完璧な微笑みを崩さず、狩人は深いため息と共に小さく被りを振るばかり。

誰もあたしに答えを与えてくれない。

『治療なら日本警察に任せて下さい。舐めれば治るそうですから。貴方が手ずから運んでいくこともないでしょう？』

『そうはいかない。私は彼女のS・Sのような行動のお陰で車にひかれずにすんだ。……それにせっかく日本に来たんだから、同世代の者ともざつくばらんに会話をしたいのです。彼女は実につつだけだ。私の為に彼女に力を貸してもらいたい。貴方ではダメなんだ。ミスタ・ポリスマン』

アンダースタン？そう言って小首を傾げ、狩人の出方を待つ王子はまるで人を翻弄させる悪魔のよう。

さすがの狩人も悪魔を狩ったことなんてないはず。

「アイ・シーって言うしかないか……。その！暴れるな。その方は一応他国の王族の方だ。お前を下手にはしないとっている。だから安心して車に乗り込め」

あれ？王子はそんなこと言ってたの？

何言ってるか分かんなかったけど、それはだいたいぶ意識してませんか？
思わず不審な目でじとっと見つめると、狩人はさっさとあたし達に背を向けた。

「ちょ、ちよつと……」

狩人を追うように王子の腕から体を乗り出した。

けど……。

くりんと車の方に向き直った王子はそのままあたしを車の後部座席に押し込んだ。

自分も素早く座ると、前に控えている運転手にウインクをした。

「レッツゴー！」

いやいや、何爽やかに笑ってるの！

あたしはまだOKした訳じゃないんだからね！

でも抵抗してももう逃れられない。

王子の言葉に車は静かに走り出した。

ガラス越しに去りゆく歩道を見つめ、あたしは叫ぶ。

「ちよつと！あたしの自転車……！！」

遠ざかっていく日常に自転車を残したまま、あたしは別の世界へとさらわれていく。

さっきはあんなにもあっさりと現実に戻しておいて、またすぐに

物語の世界に連れ去ろうとする。

現実が小説よりもずっと魅力的で、それでいてなんて薄情なんだ
ろう。

15時のシンデレラ

わたしの主張を聞くことなく出発した車はすぐに目的地に着いた。そこは洋館と称するにはいささか味気ないが、それでも日本のものとは一線を引いた異国の雰囲気を纏った佇まいの建物だった。

背の高い柵は建物を守るように四方に張り巡らされ、歩道に面した部分は大きな観音開きの門になっている。

その門と建物の間にある僅かな空間には色とりどりの草花が植えられている。

瑞々しい緑の葉に浮かぶように咲いているのはバラかな。

建物と相まって、ただ咲いているだけの姿が毅然として見える。

なんか貴婦人って感じ。

ああ〜ベルサイユの白きバラ。

なんて、お母さんが大好きな宝塚歌劇団の曲を無意識に口づさんでみたり。

白でよかったかな？赤だっけ？それよりも咲いているのはそのどちらでもない黄色なんだけどね。

なんてふざけてる場合じゃない。

音もなく建物の前に停まった車のドアを誰かが素早く開けてくれる。

なんとというビップ待遇。

車から降りたあたしの目の前に手が差し出される。手を置いた方がいいのかな。

でも助けなんて必要ないんだけどな。ただせっかく気を利かせてくれているのに、無視するのも気が引ける。

開けられたドアの前で躊躇していると後ろから王子の柔らかな声がした。

「彼女は手をすりむいて、君の優しさを嬉しく思うが握り返せずにどうしようかと悩んでいるんだ。せつかくの出迎えを台無しにして悪いね」

王子の言葉に納得したのか、その人は大きく頷き卒なく後ろに下がった。

彼の背の向こうに見えるのは、シーリエント王国大使館。

思わずその建物を眺めて、感嘆を洩らした。

大使館なんて、すっかり意識して見たことない。しかもあたしは今からこの中に入れてもらえるらしい。

これにはさつきまでお怒りだったあたしの心もほだされていく。だって、普通の女子高生は大使館なんて行くことないんだよ？

洋館だって滅多に入ることない。憧れのシンデレラ城はさつきチラシで見たくらい。

そんなところに足を踏み入れる訳で、これには素直に王子に感謝してもいいかな、なんて現金に思ってみたり。

『そんなに物珍しい？』

建物の上から下まで、順繰りに見ていたあたしの後ろから、身を屈めた王子が優しく囁いた。

さつきまでのたぶらかすような甘い声じゃない。普通の理想の王子様。

急に態度を変えられたら、どっちを信じていいのか困るじゃない。それに何で英語なの？さつきまでカタコト日本語だったじゃない。

「アイ！キャント！スピーク！イングリッシュ！」

あたしは勢いよく後ろを振り向いた。

王子の鼻先に指をつきつけると、なけなしの英語力を駆使してやった。ふんつと鼻を鳴らすように素早く車から飛び降りる。そのあたしの背で微かに揺れるような王子の笑い声が聞こえた。

『そんな全力で英語話せないって、英語で言わなくても……』

やっぱり上手に言いまかせられない。あたしばかりが翻弄される。

あたしは王子の側近達に促され、ペスにこれでもかって睨まれながら、大使館の建物へと足を向ける。

門の内側には芝生が広がっており、柵の側には満開のバラの花が幾つも咲き誇っている。

門から伸びる白い石畳をゆっくりと進む。

所々に配置された白亜の彫刻と鮮やかな花々に心ならずもわくわくしてくる。

ここが日本だっことを忘れてしまいそうなる清らかな空気は緑から放たれるマイナスイオンのせいかな。

雰囲気に飲まれて、目的を忘れそうになる。

いけない、いけない。浮かれている場合じゃないんだった。

あたしは王子に騙されて、その結果ここにいるんだから。

玄関を抜けたその先は吹き抜けのホールになっていた。

落ち着いた木製の床にベージュの壁紙。

窓から差し込む日差しは柔らかく、まるで西洋のお城の中にいるような気になる。

外見の質素さとは打って変わって、中はとても瀟洒に見えた。

飾りたてている訳じゃないけど、そつと配置されたものがとても趣よく見える。

ここがお城ではないと気付かされるのは、入って正面に受け付け

のような台が設けられていることぐらい。

後は、窓際に置かれた棚もその側に置かれた応接セットのソファや机なども、全て建物の雰囲気合ったアンティークなものだった。見たところ、この大使館は階建てみたい。

受付の右横には床と同じ色の木製の階段があり、玄関ホールが吹き抜けになっていて2階を見上げることができる。

王子はペスや他の黒づくめの男の人たちと慌ただしく奥に引つ込んでしまった。

灰かぶりのささやかな夢（前書き）

なんだか急に夏がきたような空です！この物語もこんなむっとする暑い日々が舞台です！

灰かぶりのささやかな夢

ここにはシーリエント王国の関係者だけしかいないみたい。
さつき王子に『ポリスマン』と呼ばれていた狩人はここにはいない。
い。

きっと大使館は日本国にあってもその法律の届かない特別な領域
なんだろうな。

一人残されたあたしは応接セットソファに座って、大使館に常駐
しているメイドさんのおばさんに擦り傷を治療してもらった。

ふくよかな体型のおばさんは、人好きのする笑顔が印象的な日本
人だ。

お母さんよりもずっと年上かな。

おば様っていうよりも、おばちゃんっていう種族だと思う。

メイドさんというときバ系を想像しちゃうけど、このおばさん
は雰囲気的にやり手の家政婦さん。

上手に大勢のメイドを扱うメイド長さんって感じ。

あたしが日本人のおばさんが異国の大使館で勤めていることに驚
いている側で、誰かからあたしの話を聞いたメイド長さんも驚いた
顔をしていた。

「あなた、すごいわね！見かけによらず根性あるのね」「

まるで女同士の秘密話をするかのようにな、身を寄せるとメイド長
さんはにやにやと笑いかけてきた。

見かけによらずって、どういうことだろう。

まあ、女の子らしからぬことばかりしたけどさ。

きつと大人の女性なら知恵を働かして、もっと卒なく王子を助け
たのかも。

でもあれがあたしの精一杯。

人魚姫のように格好よく助けるなんてできない。

「なんとかいうか、男女逆転ね！あなたが男だったら、お姫様を助けるナイトよ」

あはははは。そう言う風に認識されちゃってるんだ。

キラキラ輝くメイド長さんの瞳を見てると居た堪れないな。

現実はそのような素敵な話じゃないんだけど、でもメイド長さんの期待を裏切らないように曖昧に微笑んだ。

「あたしも初めて見たけど、この国の王子様ってホント男前よね。目の保養。ここで仕事しててよかった！」

まるで韓流アイドルに熱を上げるおばさんたちのように鼻息が荒くなる。

まあ、確かに見た目の良さは認めるけどさ、でも中身がね……。

「あなたもラッキーね。王子様とお知り合いになって」

いいもんか。

あたしはぶすりとして、口を膨らました。

王子と知り合った所為で、あたしの自転車は傷だらけ（でもまだ乗るけどね）で、あたしもボロボロだ。

しかも……。

「あたしのデイズニーランド……」

さつきまで忘れていたそのフレーズを思い出したのは、やっぱり素敵なお城に来てしまったから。

神様にまで諦めます宣言をしたのに、まだ心の片隅で意地汚く食

いついてしまう。

もう午後3時を回ったかな？

今から駆けつけてもご招待には間に合わないか。

がっくりと肩を落とすあたしにメイド長さんは不思議そうに首を傾げる。

「はあ？デイズニー？今日行く予定だったの？」

「違います。今日の3時までに行けば無料招待だったの。お店の開店記念イベントで……」

「ああ、なるほどね。まあ、デイズニーランドも素敵だけど、そんなに落ちこまなくても夢の国は逃げないわよ。それよりも生王子に会う方がもっと価値のあることよ？」

生王子って……。

確かに直接お目にかかりましたが、一国の王子を捕まえてその表現はどうだろう。

「一度行けなかったぐらいなによ。またの機会にカレシと行きなさいな」

ねっと微笑むメイド長さんに応えようとしたけど、でも表情がうまく動かないな。

やっと落ち着いて冷静になったら、胸にぼっかりと穴が開いていることに気が付いてしまった。

「次の機会なんていつ来るかな？」

ちよっとだけ胸が痛い。

だって喜ぶ弟妹の顔をリアルに想像していたから。その笑顔を裏切ったようで、それが辛い。

ディズニールランドに行けるって知れば、妹の零佳はどれだけ喜んだかな。

三男の一佳だってまだ10歳で、ディズニールランドが取り上げられると興奮してTVにかじりつく。

十佳はどうかな？

年の割に落ち着いてて冷めた子だけど、でも心の中では一度は行きたいって思ってるかもしれない。

百佳は、一回行ったことあるもんね。

うんとちっちゃな時、まだ十佳が生まれる前に両親とあたしと4人で。

小さすぎて覚えていないかな？

あたしだって同じようなものだけだね。

でも、お母さんに手を引かれて夢の世界の門をくぐった時の高揚感は今でも覚えている。

お父さんの肩に乗って、今か今かとパレードを待ってる時に側にいた人のシャツの模様ははつきり頭に残っている。

もっと素敵な記憶はたくさんあるはずなんだけど、自分の脳に検索をかけるとこれしかでてこないの。

こういう自分の記憶が恨めしいわ。

でも、きつと楽しすぎて記憶が飛んじやったんだと思う。

それとも次に行く時にもう一度初めての感覚を味わいたくて心の奥底に封印しちゃったのかも。

次がいつ来るとも分からないのに、あたしの馬鹿。

もう二度と家族全員である夢の国には行けないのに。

お父さんとの数少ない思い出なのに……。

でもあのワクワク感は決して忘れないわ。

だからきつと、あの楽しい夢の記憶を皆で共有できるはず。

一緒に行けなくても同じ空間を楽しめば、一緒に行った気分になれるかも。

そうすれば病室で窓ばかり見ているお母さんも零佳たちの話を一緒に楽しめる。

お父さんの代わりに、今度はあたしが零佳を肩車してあげるわ。

そしたら零佳はあの日のあたしの気持ちがよく分かるはず。

これはあたしのささやかな夢なんだけどね。

虫のいい話かな。

哀れな身の上(前書き)

今更なのですが……「」は日本語、『』は英語、「」はシーリ
エント語となっております。

哀れな身の上

「うち、とっても貧乏なんです。なので中々デイズニールランドなんて行く機会なくて……」

メイド長さんに話しかける、というよりも自分の中に溢れる感情を整理する作業だ。

メイド長さんは何も言わず、あたしの言葉に耳を傾けていた。

「うちは五人姉弟で、あたしの下に四人も小さいのがいて。あつ、小さいって言っても身長だけはあたしを抜いていくんですよね。高一の弟なんていつの間にか175センチ近く伸びちゃって。うちは貧乏なのに、遠慮なく食べてスクスク育って、ホントこっちの苦労も考えろって話ですよ」

話しだすと止まらない。

目頭が熱くなって、段々語気が強くなる。

「二番目なんて中学で野球部なんて入って、年がら年中泥だらけ。洗濯する方の身になれって言うんですよ！あれが一番水道代食うんだから！三番目はこれまた調子乗りで、すぐに服はやぶってくるし。一番下は、まだ5歳で、目に入れてもいたくないくらい可愛くて……」

あの子たちの顔を思い浮かべるとやるせないな。

馬鹿で考えなしばかりだけど、でも根はいい子なの。

遠慮して、遊びに行きたいなんて一度も口に出さない。

ああ、もう。自分の感情が抑えきれなくて、情けなくなってくる。

「うち、お父さんはもういないし、お母さんは入院中だし、皆に色々苦労させているから……だから、あのチラシを見た瞬間に、今年の夏こそは何か楽しいイベントに連れて行ってあげたいって思って……ただ拾っただけなのに……期待ばかりが膨らんでしまっ……」

元からあたしのものじゃない。

それが自分の手から他に移っただけなのに。

浅はかにも『もしかしたら』って思っちゃうからダメなんだよね。本当に世の中うまくいかない。

でも、仕方ないって割り切らないと次には進めない。

引きずられるな！気持ち！！

そう自分を叱咤して、両頬をパンと両手で叩いた。

あたしの奇行にメイド長さんが目をむく。

「ど、どうしたの？」

「なんでもありません。ちょっと気持ちを落ち着かせただけ」

ちょっとやり過ぎたかな。

奥歯までじんじんして涙が滲む。

でもそんなことおくびにも出さないように喉の奥に飲みこんで、笑ってみせた。

頬は痛いけど、もう顔は強張ったりしない。

「若いのにエライのね」

メイド長さん、ありがとう。

話を聞いてくれたのがあなたでよかった。

相手が王子だったら、きつとあのタカコト日本語で馬鹿にするわ。そしたら腹立たしさのあまり、胸に渦巻く感情のままに王子の頬

に熱い拳を振るっていたかも。

それでは外交問題になってしまう。

心の中で王子を殴って満足したあたしは、ソファの上で大きく伸びをした。

「でも、なかなか大使館なんて入れないから、メイドさんの言うとおり、ある意味ラッキーだったかな？それにしてもこんな素敵なところで働いているなんてメイドさんが羨ましい！コーコーサーって、全然割のいい仕事ないんだもん。あたしなんてさあ……」

『よかった！なら話は早いな』

え……？

今答えたのはメイド長さんじゃないよね？

だって、それは一度聞いたら忘れられない、あの甘美で、心をくすぐる声。

恐る恐る後ろを振り返った。

そこにいたのは爽やかな風を纏った理想の王子様。

相変わらず百人中九十九人は騙される極上のアルカイツクスマイルを麗しい顔に湛えている。

百人のあと一人はどこに行ったかつて？

もちろんここにいるわ。

九十九人は騙せても、あたしだけは騙されないわよ！

あなたが天使の被りものを被った小悪魔だってことを！

あたしの刺すような視線を軽くないなし、王子は颯爽と近付いてくる。

ただ歩いてくるだけなのに、何？その存在感。

全てにおいて卒がないと言うか、キマっているというか。

王子の登場に落ち着いた色合いの玄関ホールが、花が咲き誇ったかのように一気に華やいだ。

着替えてきたのか、白いシャツの上に涼しげな紺色のジャケットを羽織っている。

これがまた淡い金髪とよく合っていて、彼のよさを更に引き立てる。

メイド長さんは黄色い声を超えて悲鳴に近い声を上げ、興奮気味にあたしの背中を叩いてくる。

「噂をすれば、ね！殿下よ！」

いたたつ。

落ち着いて下さい。

叩かなくても、あたしにだって見えてますから。

だって相手は、今のところ、あたしの最大の敵なんだから（デイズニールランドを奪った罪は重いのだ）！

くそ！まだあたしに用事か？

しかし臨戦態勢に入ったあたしなど目もくれず、王子は腰を折ってメイド長さんに向かって流麗な挨拶をする。

使用人にも優しいなんて、出来た王子様ですこと。

でもその優しさのひと欠片くらい、あたしにくれてもいいんじゃない？

ぶすつとそっぽを向いたあたしなど気を止めず、王子はにこにことメイド長さんに話しかける。

『失礼。初めてお目にかかります、ミセス。ご存じでしょうか、リチャード・アルバートと申します。……いきなりですが、英語は堪能ですか？』

『まあ、ご丁寧に。もちろん話せますわ。この大使館ではシーリエント語と英語の両方話せる者しか勤めおりませんもの』

『それでは良かった。あなたのような優秀なスタッフがこの大使館を支えてくれているのですね』

何を楽しげに話してるのな？

一人置いてきぼりで、疎外感をヒシヒシと感じてしまう。

あたしが英語のひと欠片でも聞き取ればこうまで思わないんだろうけど。

どうしていいか分からず、ソファに座ったまま彼らのやり取りをぼんやり見つめていた。

彼は何をしに来たのだろう。

またあの取り巻きの側を離れたら、大騒ぎになるんじゃない？

ちよつと外に出ただけであんな騒ぎになるんだもの。

やっぱり、あたしの知ってる世界とはまったく違う。

もしかしたら、お別れを言いに来たのかな。

早く解放されたいはずなのに、その時が来たと思うと急に気持ちがやさぐれる。

こんなにも王子に腹を立てているのに、王子のコトを考えるとドキが止まらない。

胸の中がぐちゃぐちゃで、自分のことが分かんない。

招待状は唐突に…

いつまでもお城にはいられない。

そろそろ終わりを告げる鐘が鳴る頃。

魔法が解けた貧乏人は帰ってご飯の準備をしなきゃ。

思わぬ時間のロスをしてしまったが、フクヤ（激安スーパー）のタイムセールはまだやってるかな。

……多分やってないだろうな。

もう、今日はもう余った野菜を炒めるだけでいいや。

昨日の残りもあるし、買わなくてもなんとかやっていけそう。

二人の会話をバックミュージックに、ぼんやりと今晚のおかずを考える。

『私はこのヴァカンスの間、日本の方と触れ合う機会を設けたいと思っていたのです。しかし滞在時間があまり短くて、時間がとれそうにない。だから考えたのです。側で私の生活をサポートし、かつ現代日本の現状を話してくれる同世代の人がいればいいのにと。そして私は今日彼女に出会いました。彼女は私を何者とも知らず命を呈して守ろうとしてくれた。そんな心根が真つ直ぐで純情な人だからこそ、一緒にいれば普通は気付けない日本の素晴らしい一場面が見える気がします。だから彼女に伝えて下さい。……』と』

二人きりで会話していたはずの王子が急にあたしを見下ろして、口の端を上げた。

何？その、何かたくらんですって顔。

思わず腰を上げた瞬間、メイド長さんがすごい勢いであたしの肩を揺さぶった。

「ど、どうしたんですか！」

目が白黒する。

でもそれ以上にメイド長さんは目をキラキラさせている。

何かが彼女の心に火をつけたらしい。

「ねえ、あなた！すごいわよ！王子が来日中、あなたのことを雇いたいって！惚れたらしいわ、あなたの雄姿に！」

え？雄姿？メイド長さん、それは一旦自分フィルターに通して訳してません？

王子はきつとそんなこと言わないぞ？たぶん。

「よかったわね！これでデイズニールランドに行けるじゃない！」

何だか訳が分からないあたしを置いてきぼりにして、メイド長さんは大興奮だ。

あたしをそっちのりで、一人キヤーキヤー言っている。

ポカンとメイド長さんを見つめるが、もう遠い世界に旅立っていて返答は返ってこない。

仕方なく、メイド長さんの言葉尻から懸命に情報収集に当たった結果……。

「え……何？雇うって…あたしを？」

口に出して自分で絶句してしまった。

どこをどうしたらそんなことになるのだろう。

これは答えを導き誤ったかな？

そうだよな。何で王子がこんな平凡微女を雇うの？

彼の側には素敵なセレブガールがいっぱいいるはずでしょ？

「そうよ！あなたを、王子が、旅行中のサポートとして雇いたいんだって！や〜ん！ロマンティックな展開！」

メイド長さんは恍惚の表情で胸の前で指を組んでいる。

ニヤニヤと笑う王子と、乙女のように頬を紅潮されるメイド長さんを交互に見ながら、あたしは裏返った声で叫んだ。

「ロマンって……簡単に言わないでよ！」

どこをどうしたら、そんな話になるの？

王子がなんでこんな平々凡々なあたしを雇いたいわけ？

そ、それにあたしにだって、それなりの予定があるのよ。

毎日バイトの掛けもちをして、家に帰れば主婦業だってしなきゃいけない。

ただでさえ高校生という身分のせいで時給が安くて、どんなにあくせく働いても雀の涙なのに。

たった数日の為に他のバイトの予定を変えるなどできない。

とてもじゃないけど、王子様のお世話なんてする余裕はない。

確かに王子様とお近づきになれるなんて、そうないことだよ。

これこそ人に自慢できる夏の思い出かもね。

でも、今は思い出よりもお金なのよ。

そう。何事もお金は大事よ。

物より思い出！なんて、お金がないとまず言えないもの。

自分にそう言い聞かせると、胸を反らしてきっぱりと言い切った。

「そんなボランティアみたいなことに割いてる時間はないわ。安い時給で思い出づくりのバイトなんて御断り！」

王子様相手に失礼すぎるかな？

でも始めから、こんな調子だったし、今さら態度を変えるなんて

できない。

側でメイド長さんが驚いたように目を見開いている。

信じられないとばかりの非難の眼差しが突き刺さって痛い。

あたしだってもつたいないことをしてるなっと思っけど、でもお金には代えられないでしょ？

それに、こんなにも人の心を乱す王子の側にいたら身が持たないよ。

本当はお金なんかよりもこっちの方が本音かな？

イジワル王子に弄ばれて、あたしはずっと落ち着かない。

それなのに、王子は今だっって変わらず余裕の笑みだ。

目が合うと、どうしてかな？

心臓がこれでもかかって早鐘を打つ。

頬が赤くなるのを気付かれないように必死に取り繕っても誤魔化しきれない。

どうか、これ以上あたしの余裕のなさを露呈させないで。

夢は夢のままです。

そう、うたた寝の間に見る短い夢のように物足りなく終わる方が素敵でしょ？

だから、これ以上あたしに期待されるようなことを言わないで。

目覚めてショックを受けるのはあたしなのよ。

なのに……。

この王子様は優しげに見えて、どこまでも性格が悪い。

胡散臭いほど爽やかな笑みを浮かべ、さり気なく格好いい仕草で髪をかき分けると、さらりと爆弾を投下した。

『時給は君の言い値でいいよ』

ザ・アスキング・プライス……。

今、そうおっしやっただの？

あたし、英語はよく分からないけど、でも、自分が得をしそうな言葉には敏感なのよ。

本能的に惹かれるの。

最高潮に高鳴る鼓動が答えを確信している。

耳に響いた甘い声が頭の中で反響した。

目を見開いて呆然とするあたしの前で王子はさらににこやかな笑みを湛えている。

「あ、あすきんぐ、ぶらいす……」

「言い値って意味よ」

メイド長さんがさりげなく和訳してくれた。

……言い値って。

ええ！アスキング・プライスって、ジャパニーズ・プリーズにしたら『言い値』になるの！

言い値ってあなた！

時給はお気に召すままってことでしょ？

ハラゲロ王子の甘い罠

いい、いいいいいいいい、言い値？」

あたしの叫び声が大使館中に響いた。

腰を抜かして、思わずそのままのポーズでソファに倒れ込んでしまった。

もう一度口の中で呟く。

びっくりしすぎて、もう声にならない。

世の中、そんな素敵で甘い仕事ってありえるの？

どうしよう、これってやっぱり甘くて、裏がある話？

呆然とするあたしの方に王子が身を屈めてくる。

あたしの上に覆いかぶさり、逃げられないように両腕であたしを捕える。

そつと顔を寄せて、王子があたしだけにささやく。

「プリーズ。ネエ、キミガホシインダ」

惑わすような声が耳朶をくすぐる。

やめて。そんなことされたら、素直に答えられない。

激しく高鳴る胸にのぼせてしまつて、うまく声がでない。

まるで縁日の金魚。

水面に向けて、口をパクパクさせるばかり。

「ソバニイテ」

そつとあたしの手先を優しく掴むと、王子は何かを懇願するかのよう爪の先に口付けた。

柔らかい感触に、爪の先から足の先まで電流が貫いた。

痺れて動けなくなる甘い衝撃に、頬が火照る。

王子はそのままゆっくりと顔を上げ、物言いたげに熱のこもった目で見つめてくる。

僅かに寄せた眉の下の瞳がどこか色っぽく、そして吸い込まれそうなほどに輝いている。

だから、それは反則だつてば！

そんなことばかりするから、あたしは突き放すしかできないのよ。

生まれながらのお姫様なら頬を染めて、まあと感嘆を洩らす場面ね。

真っ白な鳩に口づけして、あの方に伝えてとか言っちゃわよ。

でも生まれながらに貧乏な一般ピーポーにそんな余裕はない。

灰色の鳩にさえ寄ってこない。

真っ赤になつて自分を取り繕うのに必死で、もうそれどころじゃないもん。

これ以上、あたしの恥ずかしいところばかり見ないでほしいのに、優しくて意地悪な王子はそれを許してくれない。

「チカ、オネガイ」

ああ。だから、そんな甘い声は反則だつてば。

そんな声で囁かれたら、もうあたしの頭は思考能力を失っちゃう。色々自分に言い聞かせてるのに。

心の中が傾いてしまう。

声に導かれるように、真っ暗な穴の中に落ちていく。

ダウン、ダウン、ダウン

行きつく先は世にも奇妙なワンダーランド？それともダンテが旅した煉獄かしら？

どっちに落ちても、もう後戻りはできない。

もしかしたら、落ちる前から心の奥では答えは出ていたのかも。自分を納得させるきっかけを探して、心の迷宮をさまよってる。蕩けそうな王子の視線から逃れるように、視線を背けた。

天「ダメされちゃダメよ！そんなおいしいバイトがある訳ないでしょ？」

悪「乗っちゃいなさいよ？マックでフルに働いても大したコトないんだし。王子なんでしょ？どうせだから、トンデモない額ふっかけちゃいなさいよ」

天使の千佳ちゃんが囁く側で、小悪魔千佳ちゃんが現金をちらつかせる。

…そうだよな。どうせだし、ふっかけちゃおっかな？

思わず小悪魔ちゃんになびいてしまうのは、貧乏人の浅ましさをえ。

確かにこのままの乗ってしまってもいいかな？

どうせたった数日のコトだし……それに……。

天「ダメよ！」

天使ちゃんは必死にあたしを是正しようと声を大きくする。

その側で小悪魔ちゃんが小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

悪「何よ？また利口ぶる訳？真面目な天使ちゃん？」

天「ふっかけるなんて！時給は常識の範囲にしとかないと、後で国際問題になつたら厄介よ！」

こら、天使！

迷ってるあたしよりも先に流されるんじゃない。

ああもつ、あたしの良心はこんなに打算的でいいのかな？
でも、一度傾いた天秤は元には戻らない。

我が家の貯金、支出、収入を足して、引いて、出た答えは……。

よし！

心の中で大きく頷くと、あたしはきつと顔を上げた。

触れあう手をそつと離し、興味深げにあたしを見つめている王子の視線から逃れるようにソファから立ち上がり、一步後ろに離れる。

たった数日。

されど高額。

閉ざされた夢の国への門が開こうとしている。

だから……。

「どんなことだってします。貴方が来日中、気持ちよく過ごせるように最善の努力をします」

がばりと頭を下げる。

足におでこがつくぐらいに深く。

だって、線引きは大事でしょ？

役割をはつきりさせとかなないと、勘違いしてショックを受けるのはあたしの方。

次に王子と目があつた瞬間、あたしはただのバイト。

お金の亡者だ！

自分自身に言い聞かせるとゆっくり息を吐き、そして一気に頭を上げた。

「とりあえず時給千五百円でどうでしょう？その他諸経費と深夜料金については別途お支払い下さい」

とっておきの営業スマイルを浮かべた。

ちなみにお値段0円！

バイトで培ったこの完璧な接客術をとくにご覧にいれようじゃないか。

もう絶対に王子に惑わされないんだから！

あたしは自分を奮い立たせるように、拳を握りしめた。

物語から抜け出てきた王子様の側にいれるだけでも驚きなのに、一緒にいる間に時給が発生するなんてこんなに素晴らしいことはないでしょ？

1日8時間働いて、1万2千円。2日で2万4千円。

何日働けるか知らないけど、このままいくと家族でディズニーストドどころか、ディズニースーまで行けてしまう。

メイドみたいに部屋の掃除とかすればいいのかな？

だったら得意分野じゃん。

どれだけ弟妹たちの面倒見てると思ってるの。なんて、ぼろいバイトなのかしら。

……なんて浅はかにも夢見たあたしが馬鹿でした。

そう、いい話には裏がある。

あれだけ再三自分に言い聞かせていたのに、この時ばかりはぽんと頭の片隅にまで飛んで行ってしまっていた。

甘い蜜に誘われた蝶々の側でカマキリがほくそ笑んでいることにこの時のあたしは気付いていなかった。

時給の計算などして浮かれるあたしをガバリと抱き締め、王子は嬉しげに声を上げる。

『ありがとう！君のおかげで楽しいヴァカンスになりそうだ！』

ぎゅぎゅぎゅ抱き締められ、恥ずかしいやら苦しいやら。

体の奥が痺れて動けない。

でも体はこれでもかってほどに上気して、もう溶けてなくなりそう。

だって見た目以上に引き締まった体が、けぶるような甘くて芳醇な香りが、そして香り以上に甘くて蕩けそうな声があたしを冷静にさせてくれない。

逆上せあがるあたしの耳たぶに、舐めるように唇を近付けて悪魔が囁いた。

『そうそう。君には今から四六時中、僕が帰国するまでの側にいてもらうから。なんでもしてくるんだろ？期待しているよ』

「え？」

え〜と、なんて言ったの？

あたしの聞き取り間違いじゃなきゃ、今『NOW』とおっしゃった？

ついでに『オール・ザ・タイム』とも聞こえたのですが……。

今この瞬間からバイト開始なの？

何の準備もできてないし、それに、ずっと一緒って……。
情けないほどに余裕のない顔で固まったまま、あたしは人形のように首だけを王子に向けた。

視線の先にいるのは、さっきまでの誠実で理想的な王子じゃない。イジワルで、人を翻弄されることに生きがいを得る悪魔が極上の甘くて悪い笑みを浮かべている。

そんなまさか、聞き間違えだよ、きつと。

そう自分に言い聞かせてみたけど……。

「な、なう？」

「イエス！オフコース！」

なんだ、その晴れやかな笑顔は！

誰も「ゲンキ、ハツラツ〜？」なんて聞いてないぞ！

ワガママ王子の傾向と対策

シーリエント王国　ヨーロッパの南、地中海に面した小国。面積は九州より若干大きいくらい。人口は九州の三分の一。領土の半分以上を海に囲まれた、地中海気候が特徴。

首都はメルトメリル。

公用語はシーリエント語。一部イタリア語が使われる地域がある。主な産業はオレンジ、レモンなどの農業と地中海における漁業。そして、国の北にあるステイア山脈から取れる鉱石。

ヨーロッパでも珍しいより強い権限を君主に持たせる、立憲君主制を取っている。

現在の君主は、ロバート・クロイスト国王。メルトメリルにあるマルガリート宮殿に家族と居住。

BY地理の教科書。

どんな小国でも教科書は把握してるんだから、すごいな。でも流石に王様の顔は載っていない。そこが一番気になるトコなのに。

あたしはそつと教科書を下ろし、すぐ横にある麗しい顔を盗み見た。

広い高級車の後部座席には、あたしと彼しかいない。淡いグレーの、クッションのよく利いた座席は心地よすぎて、なんだか落ち着かない。

それよりも落ち着かないのは彼の隣だから。

微妙に開いた空間が気まぐずくて、ずっと教科書を見つめていた。

そんなあたしの気持ちなんて、勝手気ままな王子様には分からないんだろうな。

凜とした涼やかな顔はずっと車窓に向けられている。
さらりとした柔らかな髪は綺麗にまとめられていて、本当に物語に出てくる王子様みたい。

流石に服装はきっちりしたスーツだけだね。
淡い金髪に涼しげな濃紺のスーツがキマっている。

『チカ！あれは何かな？みんな同じように丈の長いドレスを着てるよ？着物かな？民俗衣装？とっても綺麗だ』

甘い、蕩けそうなほどに甘い声で囁くように話す絵本の中の王子様。

ホント、どこから見ても完璧で嫌になる。

そんな今日本国中の大和撫子を熱くさせる彼こそ、シーリエント王国の第二王子であるリチャード・アルバート殿下、18歳。

16歳にして大学に飛び級進学するほどの頭脳の持ち主で、テニスでは世界ランクに一度ランクインしたことがあるほどの腕前で、気品ある堂々とした態度は他国にも一目置かれていて、しかも性格は心優しく、気立てがよくって、誰にでも気さくで……。

って……。なによ！このプロフィールは！

欲張りすぎでしょ！頭もよくて、運動もできて、ついでに性格もいいなんて。

絶対85パーセントは嘘よ！こんなミラクル設定ありえない。

まあ確かに見た目からして聡明そうだし、体つきも無駄なく引き締まっているのは認めるわよ。

物腰も優雅だし、卒ない洗練された所作は目を奪われるほど堂に
いってるし……。

それにあの笑顔。あの爽やかで屈託ない笑顔を向けられたら、誰でも心も溶かされちゃう。

否定したいのに、なんでだろう。

目の前にいるのは、集めた情報の断片が描いた完璧な王子像そのまま。

これじゃ認めてるみたいじゃない！なんか悔しい！くそ〜でもね、これだけは断言してやる！

性格の部分は、絶・対・嘘！

心優しい人間は、誘惑するように囁いたりしないもん！

気立てのいい人間が、どうして自分のための警護に迷惑かけるのよ！

誰にでも気さくって、気さくにカツアゲされてんじゃないわよ！
ぜったいおかしいでしょ！みんな、彼の上辺に騙されてるのよ！
本当はただのワガママ王子なのに。

でも流石は聡明な王子様。自分の腹の色も上手に隠す。

黒い悪意を心の奥底に隠してキラメク笑みを浮かべる彼は、誰から見ても完璧な理想の王子様。

ホント、呆れるくらい完璧だわ。

これじゃ国の内外、老若男女を問わずに人気があるのも頷けるわよ。

だって……本性を知っていてもまだ、その横顔に胸が高鳴る。

そんなウワサの彼が、今年の夏のヴァカンスに選んだのが東の小国日本。

知らなかったけど、彼の来日は結構大きく取り上げられていたみたい。

あたしはずっとバイトばかりして、ワイドショーを見る暇すらなかったのね。そう思うとちょっと悲しい。

何ゆえ素敵なヴァカンスに、ムシムシして一番過ごしくそうな

この時期のジャパンをお選びになったのかしら？そんなことは小市民なあたしには分からない。

ただあたしに分かるのは、この王子様の中身はけっして皆が思うような理想の王子様じゃないってことぐらい。

騙されちゃダメ。だって、今も。

『チカ？何を読んでいるの？』

あたしの視線に気づいてにこつと頬を緩ませる。素敵な爽やか王子スマイル。

そんな顔、ずるい。思わずつられちゃいそうになるじゃない。顔を見られないように、そつと教科書で顔を隠す。

「千佳さんが何を読んでいらっしやるのか、とお聞きです」

気を利かせて英訳してくれたのは、助手席に座るシーリエント王国駐日副大使のアルジャーノ・フェレスさん。

日本語を流暢に話すロマンスグレーのシブイおじ様。

あの、王子様捕り物劇の最初の一声はどうやら彼のものだったらしい。

見た目同様にその声も落ち着いていて、安心するというか、ずるんと心の中に入り込んでくる。

白髪混じりの薄茶の髪は若干後ろに後退しているけど、でもそれを綺麗に後ろに撫でつけていて、とても上品に見える。

思慮深そうな碧眼は優しげで、動物園のゾウさんみたいで可愛らしい。

そんな、映画に出てきそうなおじ様はいったいいくつなのかな？外人さんの年齢ってよく分からないな。

ただ日本のおじさんと違って、年を重ねてより格好よくなる気がするんだよね。

なんていうか、雰囲気的に執事。アルジャーノさんっていうよりもセバスチャンって感じ。

花束は貰うより、お仕える王子のために、ここぞという時にこつそり準備して何食わぬ顔で渡してあげる。

そんな影の役割が似合いそうな人だ。

「教科書です！って伝えて下さい！」

あたしはつつけんどんに答えた。本当は優しいセバさん（勝手に命名）にはちゃんと答えたいんだけどね。

きつと嫌な子だと思われてるかな。というよりも、一国の王子を掴まえてこの対応はまずいよね。

でも、ずっとこんな感じにしか話してないんだもん。今さら態度を変えられないというか……。

一応あたしも頑張って、それなりに丁寧に扱ってるんだよ。

でも王子がそれを邪魔する。

ちゃんと敬意を払ってるのに、あの、甘く切なくなる声があたしの善意を無にするの。小馬鹿にしたように英語で話しかけてきて、時折意味ありげにタカコト日本語で囁く。

なんなのよ。ホントは話せるの？それともただ知っていることを言ってみただけ？

でもあたしをピンポイントでうるたえさせるんだから、絶対狙って言ってるのよ！

も〜ホント意味分かんない！

「チカはなんで怒っているの？私はチカとたくさん話したいのに。君みたいなぶっ飛んだワンダフル・ガールはシーリエントにもそう

いないだろうな』

「千佳さんみたいなお優しく、気さくな女性はシーリエントにもそうはいないでしょう。ぜひ、多くのことを語りあいたいと思います」

さらつと王子の発言を訳してくれるセバさん。きつとかなり気を使って意識してくれてる。

だって、『ワンダフル』を「お優しく」て「気さく」とは訳さないでしょ？

「だから！その、人を小馬鹿にした態度を改めたら……って……今のなし！ちゃんとお話しますよ、なんだって」

ダメダメ！乗せられちゃ！平常心で営業スマイル。

いつもより余計に口角を上げてみる。でも……ああ、上手にできないよー！

セバさん、どうか上手にフォローして下さい。

お城まで何マイル？

この王子様は 5泊6日の予定で来日していて、本日は2日目になるらしい。

あたしに会う前にも一度ホテルを抜け出して、シーリエント王国の警護の人や日本警察の人を困らせたみたい。

そんな暇を持て余したワガママ王子の前に現れたのが、暇もお金もない貧乏なあたし。

彼は何故だかあたしをいたく気に入ったらしく、帰国する日まで雇いたいと言いだした。

それを聞いたシーリエント王国関係者は猛反対だ。

そりゃそうだよ。こんな何者か分からないのを王子の側にはおけないでしょう。

でもそこは面の皮が厚い腹黒王子。

誰もが惑わされる極上スマイルで、自分の従者を諭す。

「これも両国の文化をよりよく理解する上で必要なことだよ。これを機にシーリエントと日本国がもっと親交を深められればいい。そしてその相手は年齢を重ねられた学者先生よりも次代を担う若者の方がいい。彼女は実に打ってつけた」

なんて、もつともらしく話したとか話さなかったとか。

大義名分は立派だけども、でも彼の本音はきつと、来日したけど何も面白いがことないから、からかう相手欲しさってとこじゃないかな。

ホントに失礼な話だ。遊ぶ相手ならペスがいるでしょ、ペスが。

そんな状況に救いの手を差し伸べたのが、セバさん。

現在入院中の大使に代わり、彼は駐日シーリエント王国最高責任者となっているらしい。

「殿下がせっかく日本の方と触れ合いたいとおっしゃっているのに、それを止めるのはいかなものでしょう？今回は急なことですし、こちらのお嬢様の家庭の事情も考え合わせ、殿下のおっしゃる通り、数日のアルバイト契約を大使館が結びましょう」

その瞬間、シンデレラ城への道が開けた。

そんなこんなで、そこからが大忙し。

自転車（ちゃんと別の人が大使館まで運んでくれたの！これにはホント感謝！盗まれはしないかとドキドキしてたもん！）はメイド長さんに言っただ使館に置いてもらった。

それから車で一度家に帰り（何故か王子も付いてきた。そして小さな我が家を見て一言「オウ！ドールハウス！」）、

家族（家にいたのは下2人だけけど）に事の顛末を掻い摘んで（ほとんど掻い摘めていないかも……ただ「デイズニーツートのために、おねえちゃん、ちょっと泊まりの仕事をやるから！ちゃんと兄妹で助け合うのよ！閉じまり、火元はしっかりね！」って言うただけ。ちゃんと上の2人に伝わってるかな？）、

ホテルに泊まれる準備（仕事の間は王子と同じホテルに泊まるらしい）を急いでして（その時一緒に教科書も持って）、

そして今に至るのだ。

いきなり現れた外人に一佳は驚きすぎて、何も言えずにいた。零佳は王子様だと大喜び。

呆然とあたしの乗った車を見送るあの子たちの顔をバックミラー越しに見つめ、あたしは決意を新たにした。

こんな王子には負けてなるものか！今年の夏は絶対デイズニーツ

ゾートに行くぞ！

「こちらが東京タワーです」

夏の夕暮れに照らされた赤い鉄塔は、薄闇に染まるビル群の間で一際輝いて見える。

ガイドのお姉さんに案内され、王子様は感心したように赤い塔を見上げた。

『こうやって下から眺めると、また違った魅力を持つんですね』

そしてお姉さんの頬を真っ赤にさせるであろう、必殺爽やかプリンススマイルを向ける。

ホント、演技派だわ。さっきは車の中で、あんなにも東京タワーよりもアキハバラに行きたいと駄々をこねていたのに。

「何が気に入らないのよ。そんなこと言うとりりー・フランキーが怒るわよ！……いえ、怒りますわよ？」

「フーアーユー？リリー？アクトレス？」

「イツツ・オツサンよ！」

なんてやりとり（セバさんを挟んで）をしたその男は、今は理想の王子様然とここに立っている。

今は、彼のイレギュラーな行動の所為で押しに押ししていた本日の観光予定をハイペースで消化していつてるみたい。

王子様のヴァカンスも大変だ。好きな場所でゆっくりもできない。パック旅行以上のタイムスケジュールにあたしですら辟易してく

る。

これなら逃げ出したくなる気持ちもちよっと分かるかな。まあ、それを実行できる度胸はないけど。

トウキョウタワー

さつきは浅草で、今は東京タワー。

もう東京観光はお腹いっぱいだわ。

そして何よりすごいのは、そんな彼の後をずっと追っかけてくる女性群。

来日報道を受け、ファンクラブもどきまで出来てしまったらしい。大和撫子はホントに王子様にウエているのね。

女性陣の熱い視線を爽やかな笑顔で受け流し、王子は展望台へ上がるために彼女らに背を向けた。

その後をついていくあたしには、突き刺さるような彼女らの妬みの視線。何、あの子？という声がダイレクトに心に刺さる。

その気持ちはよく分かるよ。お嬢様方。あたしだって自分のポジションがよく分かんないからね。

でもさ、やめてよ。そんなにガン見するのは……。

そりゃ急に降ってわいたように現れましたよ。王子のすぐ側で、一緒に観光なんてしちゃってますよ。でもね、あなた達が思うようなイイモノじゃないの！

言い値ってというなんとも魅力的なアルバイト報酬に惹かれて仕方なく、ワガママ王子の相手をしてるだけ。

全てはデイズニーリゾート（もう決めた！両方制覇してやる！）のためなんだから。

それに！この男は貴女達が思うような理想の王子様じゃない！勝手に変装してホテルを抜け出しては、皆に迷惑かけてるの！笑顔の裏にはとんでもない腹黒が隠れてるの！そんでもって人を小馬鹿にして、からかってばかりなの〜！

……なんて叫べればすつきりするのに。
でも、あの爽やかスマイルの前では、誰もあたしの言葉なんて信じないんだろうな。

あたしは誰にも気付かれないように小さくため息をついた。
まさかね、あの時はこんなコトになるなんて思わなかったの。
まさか、一緒に観光して、一緒に行動して、ホテルまで一緒だなんて。

さすがに部屋は違うけど、でも、これってどうなの？
言い値のバイトに惹かれて簡単にOKしちゃったあたしもあたしだけどさ。

事態はあたしの想像よりも大分上をいつている。

だって、王子への注目度がハンパないのよ。

雑誌の記者やらTVの取材やらが大勢、ずっと王子のベストショットを狙って付いてきてる。

そして、それ以上に危険なのが目をギラギラさせているファンクラブ。
ラブ。

そこにいる全員が、王子の後ろをついて歩くあたしを見て、何だあれは？って顔を浮かべる。

ちよつと節操無いんじゃない？ってぐらい露骨な視線にあたしは身を竦ませた。

ハイエナみたいな記者の人達はそれこそスクープを掴んだって感じであたしに好奇の目を向けるし、排他的なファンクラブからは焼き殺さんとする鋭い眼差し光線。

ファンクラブからはこっちの耳に聞こえる大声で、何よ、あの子、私達の王子に近付くんじやないわよ的なバッシングがあがる。

記者からは面白そうだからとりあえず、「王子の恋人？」的に押さえとけ！みたいな打算の声飛び交う。

ちよつと！想像力が豊かすぎるよ！そんな大それたものじゃない

んです。あたしはただのバイトで、ただの脇役。毒にも薬にもなれない平々凡々な存在なの！

だからあたしになんて注目しないで、王子を見なさいよ！

こんなキラメク存在を前に豆電球ほどの明るさもないあたしに目を向けないで！

勝手気ままに面白おかしくパパられるなんてごめんよ！考えるだけで、ぞつとしちゃう。

と、とりあえずハンカチで顔でも隠しところかな？

スカートのポケットからハンカチを取り出してみる。被るには若

干……いや、かなり短い。

お洒落にマチコ巻きで顔を隠したかったのに、これじゃネズミ小僧にもなれない。

一応、頭に乗せところかな？目の部分ぐらいは隠れて見えるよね……。

って、なんで振り向くの！

頭に乗せたハンカチを引っ張って、泥棒さんよろしく鼻の頭で結ばうと苦心している、まさにその時、小さくこちらを振り向いた王子と目があつた。

ちよつと、タイミング良すぎでしょ？後ろに目でも付いてるんじゃないでしょうね！

なんでも完璧に出来るからって、シックスセンスまで発揮しないでよ。そこまできると逆に怖いわよ！

絶妙のタイミングで、拳動不審な現場を目撃され、思わず固まってしまった。

そんなあたしを見て、意味ありげに麗しい蒼の瞳が細められる。形のよい、薄い唇が声なく動く。

ダレモ、キミニ八キヨウミナイヨ……

そう動いて見えたのはあたしの気のせいかな？くそ〜！悪かったわね！自意識過剰でさ！

本当にムカつく。もうほっかむりなんてしないわよ！王子のくせにチエックが厳しいのよ。

そういうことは思っても口にしちゃダメなのよ！

こうなったら、とことん開きなおってやる。

もうあたしの方を見ていない王子の後ろをどしどしと靴の踵を鳴らして付いていく。

でも……そんな顔にさえドキッとしてしまうなんて。ああ、自分が嫌になってくる。

東京タワーに登るなんて、何年振りだろう。

小学校の遠足で行って以来かな。そう思うと、こんな状態でもわくわくしてきちゃうから、あたしって現金だ。

そう、展望台が黒づくめスーツばかりでも全然平気だぞ！だって入館料はシーリエント持ちだもん！

王子とあたしと、時々セバさん

エレベーターで一気に上った先は一番上の特別展望台。

ポンつと軽い音を立て、エレベーターのドアが開く。

視界に広がるのは眩い金色。ガラス越しに差し込む夕日に染まった展望室。

薄い闇に染まったビル群に沈みゆく、揺れて蕩けそうな大きな太陽。

「…うわあ〜」

思わず声を漏らしてしまったのはあたしだけ。

黒づくめの人たちは何事だと不審な視線を向け、ガイドのお姉さんは小さな子どもを見るように苦笑している。

うゝ恥ずかしい〜！でもね、こんな光景なかなか見れないでしょ？王子の観光に合わせて入場制限がされてるから、今ここにいるのはあたし達一行ぐらい。今この場所で、刻一刻と姿を変えるこの情景は見る事ができるのはあたし達だけ。そう思うとね、すごく贅沢な気持ちになるでしょ？

黒づくめのスーツの横をすり抜けて、あたしは展望台の手すりにかけよる。

眼下に見えるビル群が小さく、皆一様に金色に着飾って行儀よく並んでいる。あまりにも眩しすぎて心までこの黄金に染まってしまいたいそう。

『何か、知っている場所が見える？』

まるでこの夕陽のように優しく囁く声がした。

振り返ると、展望台と同じように金色に染まった王子が優しげな笑みを浮かべている。

さらっと優しげな笑み。

なによ。今は、さっきのイジワル王子じゃないの？人の視線があるところでは、理想の王子様でないといけないの？

『君の生まれ育った国を紹介してくれないかな？』

誰が聞いても誠実で好印象な声が、あたしの調子を狂わせる。

さっきまでは惑わせるような甘い声で、あたしを翻弄させていたのに。

今のあなたは、完璧な理想の王子様よ。今なら、それなりの対応をしてあげても……、いいかな？

「何が見えますか？とお聞きです」

横からセバさんがさりげなくサポートしてくれる。

「あそこに、都庁があります。あんなにも小さく。それに天気がよくかったら、富士山も見えるらしいですよ？」

視線を王子から壮大な黄金に向ける。目を凝らすように遠くを見つめた。

でもビル群がひしめく先は朱色と濃紺が混じり合って滲んでいて、日本の象徴はその壮麗な姿のシルエットさえ見せない。

「今は無理そう。きっと富士山も金色に染まっていて気付けない」

『残念だ。しかしそれ以上に君と一緒にこの美しい光景を見れた事

の方が、価値があるかな?』

屈託なく笑みを湛える口から紡がれる、歌うような声が心地いい。ビューティフル・シーンって言ったのかな? あたしもそう思う。音もなく、ただゆっくりと消えゆく『今日』を切なくも美しいと感じるのは、万国共通の感覚だよな。

「あたしもすごく綺麗だと思います。今この瞬間を王子に見てもらえてよかった。日本のいいところはいっぱいあるし、見てほしい景色もたくさんあるの。でも全部見きれないと思うから、これだけは覚えて帰ってほしいな。遠い東の小国にも、貴方の国にあるのと同じように見つめて美しいと思うものがある。そして、それと同じように美しいと感じる人が」

って、何を言ってるんだか。王子に対して上から目線って……。セバさん、今のなし。訳さないでっ!

『……を覚えていてほしいそうです』

って、思ってる側から、貴方は本当に馬鹿丁寧に訳してくれるんだから、さすが執事。

あたしは思わず赤面して、手すりに突っ伏してしまった。

できればもうちょっと上手に伝えてね。何も着飾ってないあたしの本音は言葉足らずで、すぐに迷子になってしまう。

でも、王子様は同世代の感覚で日本を案内してほしいと望んでいるんでしょ? 建前だけだよ。じゃあ、あたしも建前上は一応そう接しないよね。

一応これが日本の普通の女の子の意見だよ。

王子はそつとあたしの横に立つと、同じように手すりに手を置いた。仰ぎ見るようにガラスの向こうを見つめ、深い蒼の瞳を細める。

『平和な光景だ。本当に日本がうらやましい』

感傷に浸るようにその瞳が揺れたのは気のせい？

今は彼の燃えそうなほど煌めく瞳も金色に染まっていて、何を見つめているのか分からない。もしかしたら、遙か遠くシーリエントの地を見つめているかもしれない。

「シーリエントにも大きな展望台があるの……ですか？」

『……また見たいものだ。シーリエントの地に沈む太陽を……そして明けゆく黎明の空を』

そのかすれそうな呟きは、あたしに向けた言葉？

あまりにもさりげなくて、消えそうなほどにささやかで、セバさんの耳にも届かなかったみたい。

盗み見るように見上げた端正な顔は今まで見たどの顔よりも引き締まっていて、知らない世界の人の顔をしていた。

思わず顔を背けたのは心臓が痛いほど悲鳴をあげたから。

きつと王子の燃えるような瞳に染められて、あたしの頬は見せられないほど真っ赤になってる。目が潤んで、体が燃えるように熱いきつと沈みゆく太陽の所為ね。あんなにも眩くて、世界を小金色一色に染めてしまうんだもん。あたしの心を染めることなんて訳ない。

そう、これは太陽の色。だから、誰もあたしの心の色まで気付かない。

小さく息を吐いてから、あたしも同じように遠くに視線を向けた。

「そうですね。やっぱり日本の方が高いですか。そりゃ、そうですね。物作りにかけては日本には勝てないですよ。日本人は凝り性

だから。プラモデルとか大好きだし」

結局、あたしたちはきつと会話をしているようで、好き勝手に話していただけたんだろうな。

短い見学を終え、惜しむように特別展望台を後にした。

それにしてもこの王子様は本当に不可解。

2人の時はあんなにも小馬鹿にした顔をするのに、一瞬見せる凜とした表情はまるで違う世界に生きていると思わされるほどに強い意志に溢れている。

いろんな顔を持っているのね。イジワルで、ワガママで、甘くて、優しく、力強くて、そして遠い自国を慈しむ瞳を持つ。

まだあなたのことがあたしには分からない。

何故、あたしをバイトに選んだの？ちょうどそこにいて、都合がよかったから？そもそも、このバイトはあなたにとって本当に必要なの？

しんと静まり返ったエレベーターはあっという間に地上階に着いた。ゆっくりとドアが開き、黒の一団が狭い箱から吐き出されように広がっていく。

その一団の真ん中にいるのは麗しの王子様。王子様の横にガイドをしているお姉さんが並ぶと、とても様になって見える。

そう思うとつい歩みが遅くなった。黒の一団から抜け出すようにあたしは最後尾になる。

その遠い視線の先でガイドさんが何かに躓いた。

『危ない。大丈夫ですか？』

すかさず手を貸し、ガイドのお姉さんを支える王子にお姉さんは見る間に真っ赤になる。

『大変失礼しました。殿下にお気を使わせるなんて』

『とんでもない、美しい女性が困っているのに手を貸さずにいる男がいるでしょうか』

『まあ！』

にこつと微笑みあう二人に、また胸が痛くなる。まるで針で刺されたように鋭い痛みにも、ちょっとだけ泣きそうになった。

王子様は誰にも優しい。その心は誰であっても変わらぬに広く門戸を開いていて、平凡で貧乏な女の子にもあまねく優しさの欠片を与えてくれる。

ねえ、千佳。ちゃんと現実を見なきゃ。

王子は王子。あたしは……王子にとって、ただの通りすがり。

胸に疼くこのモヤモヤは、深入りする前にそっと見えない場所に隠してしまわなきゃ。

狩人VS赤ずきん

「おい、そのぼんやりした女！」

一団の最後尾を歩いていると不意に厳しい声が飛んできた。射抜くような重低音が傷心のあたしの心に突き刺さる。

この冷たい声！

不機嫌そうな声に負けず劣らず、無愛想に眉を寄せる顔が瞬時に頭に浮かんだ。数時間ほど前にちよつとだけ顔を合わせただけ。

なのに、こんなにも鮮明に記憶に残っているのはその圧倒的な存在感ゆえ。

背を向けていても、ひやりとさせられる研ぎ澄まされた刃のような鋭い眼差しにあたしは足を止めた。

狩人があたしに何の用なんだろう。

それよりあたしは、ぼんやりなんてしてないぞ。

「一応、中澤千佳って名前があるんですけど？」

振り向きざまに一睨みしてやる。

ちよつとさつき通り過ぎた柱に身を預けるように立っていた狩人があたしの言葉に片眉を寄せた。

一回りも違う子どもに噛みつくように睨まれたのは、彼にとって想定外だったらしい。

「名前なんてどうでもいい。お前は何故、王子と一緒に行動している？」

なに、それ！名前なんてどうでもいいですって！流石の千佳ちゃ

んもカチンくるぞ！

名前を聞かれれば、先にあなたが名乗りなさい！って返すのが常とう句だけど（その前にあたしは思わず名乗っちゃたけど……）、名前なんてどうでもいいと言われればなんて答えるのがセオリーなのかな？

でもどんな回答例があっても、答えてなんてやんない。会話のルールも守れない人に話すことなんてないでしょ？

同じ大人でもセバさんはしっかりあたしに目線を合わせて、そして子どもじゃなくてちゃんと一人の大人として扱ってくれた。

「名前も名乗らない、どこの誰か分からない人に答える義務はありません」

じゃ、失礼しますっ！と言い放つ。これ見よがしにふんつと鼻を鳴らし、くるりと狩人に背を向けた。

そして大きく一步踏み出す。だって、早く王子の元に戻らなきゃいけないんだもん。

狩人の相手なんてしてる暇はないのよ！
って思っているのに、次の一步が出ない。

ぐいつと後ろに引かれた。

驚いて反射的に首を後ろに向けると、狩人の漆黒の瞳と目があった。

体の芯までも凍てつかせる瞳には絶対零度の炎が揺らめいている。狩人の大きな手がまるで捕まえたものは二度と離すかとばかりに、鋭くあたしの肩に食い込む。

瞬間移動？なんてこと！ハンターだとばかり思っていたのに、まさかのモンスター！絶対人間の限界を超えてるよ！

「ひっ！」

喉から音にならない悲鳴が漏れた。

人とは思えない素早さと音一つ立てない身のこなしで、狩人はあつという間に柱から離れ、あたしの後ろに立っている。側に立たれると、その存在感に腰が引けてしまう。

「お前、俺が警察だと知ってて、それ言ってるだろ？」

「知らない。名乗ってもらってないもん」

負けてなるものとあたしはそっぽを向いた。

本当は震えそうなほどこの狩人が怖いんだけど、でもこのまま狩人の思い通りに震えているなんてシヤクでしょ？

あたしは赤ずきんちゃんじゃない。だから狩人だって、優しく助け出したりしないもん。

ううん、それにこの人は狩人じゃない。きっと深い森の主、鋭い牙を持つ狼。

目を逸らしたら、いつかんの終わり。助走もなく喉元に食らいつく。

だから、真っ向から立ち向かわなきゃ。

じっと見つめあっていると、瞳が揺らいでしまいそうになる。

王子以上にこの狩人が何を考えているのか分からない。その深淵の闇のような瞳にはあたしの姿さえ映っていない。

どれぐらい睨みあっていたかな。本当はきつとまたたきをするよりもみじかな、一瞬の一瞬。

次の瞬間、視線を逸らしたのは狩人の方だった。面倒臭そうにため息をつく。

そして、スーツの内ポケットから黒色の手帳を出して見せた。

開かれた手帳の真ん中で金色の桜のマークが輝いている。

そのマークとは反対の方にぶつちよう顔した制服姿の狩人の写真

があり、名前が書かれている。

「幸村 美貴」

ゆきむら みき、さんか。見かけによらず、可愛い名前だ。

あたしの幼馴染にもみきちゃんがいる。字は違うんだけどね。そう思うと勝手に親近感を抱いてしまう。

「警視庁警備課の幸村だ。シリーズント王国リチャード殿下の来日に際し、日本側の警備を任されている者だ。」

「へ〜警察手帳なんて初めて見る！すごいな〜」

ドラマではよく見るけど、まさか自分に向けられてこの手帳が開かれる日がくるとは。ちょっと感動。

やっぱり無線に向かって「事件は会議室で起きてるんじゃない！とか言うのかな？」

「やっぱりシヨカツとホンブは折り合いが悪いんですか？」

思わず興奮に任せ、どうでもいいことを聞いてしまった。しかもさっきまで睨みあっていた相手に。

あまりにもズレたことを言った所為か、狩人改め幸村さんは不審な者を見るかのようにさらに眉の皺を険しくした。

「ドラマの見過ぎだ。俺は犯罪捜査を行う刑事ではない。警備事案に従事する警備課の者だ。いわゆるセキュリティー・ポリス」

「ああ、織田裕司じゃなくて、岡田クンの方ね」

我が家は電気代の節約の為、一定時間しかTVを付けない。時間

を越えれば電源OFF。もちろんコンセントからプラグ脱。

だからドラマをちゃんと見たことはないんだけど、一時期TVをつけるにあの映画のCMばかりしてたから、よく覚えている。

あのCMが流れると、ちよつとでも映画を見ている気になるのか、一佳達が喜んでいたし。あたしも何度も激しいアクションシーンを見て、S・Pとはなんと危険なお仕事なんだと感心したものだ。

「じゃ、じゃあ拳銃とか持って、爆発する車を飛んだり、壁を走ったりするの?」

「なんだ?ハリウッド映画か?」

あれ?現実のS・Pはドラマまで把握してないの?気にならないのかな?自分達がどう描かれているのか。

あたしが馬鹿みたいに事ばかり聞くからか、幸村さんはため息をついた。

そして不意に表情を改めると、噛みつかんばかりの勢いであたしの視線まで距離を縮めた。

至近距離にある凍てついた切っ先のような瞳に心臓が止まりそうになる。

あたしの心を見透かして、さらに突き抜けていく視線にあたしは射すくめられて動けない。

「それより、質問に答えろ」

「……」

「じくりと喉がなる。

「お前は、何故王子と……」

「班長!!」

凍える重低音に被さるように、一際大きな高い声が響いた。

いぬのマーチ

「ああ？」

不機嫌そうに幸村さんが声の方に顔を向ける。

幸村さんの視線がずれ、あたしは魔法が解けたようにほっと肩を撫で下ろした。

なんだろう？と、幸村さんと同じように声のした方に顔を向けた。出入口の方から黒色スーツに身を包んだ、童顔で小柄な男の人が駆けてくる。

あれ？ペス？思わず目をこすって確認してしまった。

駆けてくるのは、黒髪黒瞳で、似合わない黒色スーツに身を包んだ20代前半の男性。

これはペスじゃない。だって、ペスはポメラニアンだもん。

あの、尻尾をこれでもかって振って走ってくるのはシバ犬、いや、マメシバだ。

くりくりしたドングリ眼が愛らしい。あの円らかな瞳でじっと見つめられると、これでもかってほど撫でくり回したくなる。

なんて年上の人を掴まえて、失礼かな？

さすがマメシバ。あつという間にあたしと幸村さんの側まで駆けてくると、息が切れているなど構わずに叫び出した。

「班長！何やってるんスカ！こんなところで女子高生に手を出そうなんて！一応、警察官ですよ！とりあえず職務中ツスよ！なんてうらやましい！！」

「煩い。吠えるな」

何の断りもなく、マメシバの頭に拳骨をお見舞いした幸村さんの目が若干怖かった。

どうやらマメシバ君は空気を読むのが苦手な現代っ子みたい。

「一応警察官で悪かったな。それよりも手を出してるってなんだ？俺がこんなガキに欲情しているって言いたいのか？」

ガキ！欲情！その言葉に思わずカツとなった。顔がこれでもかと赤くなる。

「ガキで悪かったわね！それよりも、よ、欲情なんて言い方しないですよ！なんか嫌！え」と、あっ！ハ、ハレンチって言うのよ！こういうの！インランよ！ロシユツキヨウ！」

きっと鋭く幸村さんを睨んで、思いつく限りの非難の声を上げた。なんていうか、これは女の子の矜持だ。幸村さんがあたしに手を出していた訳じゃないことは、あたしが一番知っている。

でも、だからってその言い方はないんじゃない？

「まだ何も出してねえよ」

「これから出す気なんスカ！」

「何が出てくるの？」

馬鹿にしたようにため息をついた幸村さんにマメシバ君とあたしが食いつく。

「露出狂の意味も分からんガキは知らんでいい！」

「きゃん！」

ばしつとマメシバ君の頭を叩いた幸村さんは苛立たしげに舌を鳴らし、マメシバ君の頭を叩く。

「ボキャブラリーのないガキの相手をする時間はない。まともな日本語が話せてから、出直せ」

心底馬鹿にした声と冷たい目線。その冷静な突っ込みが更にあたしの余裕をなくさせる。

そんな冷めた目で見なくてもいいじゃん。とりあえず知ってる言葉を言っただけなのに。

これじゃあたし一人が可哀想！なけなしのプライドで泣きそうになりながら噛みつく。

「ガキじゃないもん！もう17歳だもん！現役ピチピチの女子高生よ！」

「ピチピチって自分で言うか？」

「そのピチピチに手を出そうとしてた人が何を言ってるンスカ！さつきキスしようとおんなに顔をくつつけてたじゃないスカ！」

「キ、キ、キスって！しないわよ！そんなこと！こんな冷血管と！」

「あははっ〜言ってる〜。こんなドライアイスみたいな人とキスしたら、唇が凍傷しそ……ぎゃ！」

軽い笑い声を上げたマメシバ君が急に白眼をむいた。

もちろん、小柄な彼に後ろから覆いかぶさった幸村さんが関節技を掛けたから。抵抗する間もなく、マメシバ君は幸村さんに噛みつかれ身動きがとれない。その鮮やかな手腕に、マメシバ君の苦痛などそっちのけで拍手を送りたくなる。

まるで人体の不思議。

複雑に重なった二人の体にあたしは感心してしまった。横に傾いだマメシバ君が大きな瞳に涙を浮かべて、悲痛な声を上げている。

「は、は、班長！ギブギブ！すみません！もう二度と無駄口は聞きません。職務に真つ当に従事します！」

「お前は何度それを俺に誓って、何度破った？」

「今回はマジっす！マジでちゃんとするッス！だ〜か〜ら〜」

面白いからもう少し見ていたが、そうするとマメシバ君が再起不能になっちゃう気がして、思わず助け船を出してしまった。

「もう、その辺でいいんじゃないかな？反省してるみたいだよ？」

「……………」

「も、もっと…………アピールして…………じゃ、じゃないと…………この人本気でオレをくびり殺す…………」

いや、そういうこと言うから締められるんだよ？息も絶え絶えなマメシバ君に心の中でそつと突っ込む。

でもあたしの助言のお陰か、それとも馬鹿らしくなったのか、幸村さんはマメシバ君を解放した。

「ひゃく殺されるかと思った。ありがとう！現役女子高生！やく現役っていい響きだな」

首を擦りながら、マメシバ君がへらつと軽い笑みを浮かべたが、もう幸村さんは相手にしない。

ただ一言。

「本庁に帰ってから覚えてろよ」

真夏の空気すらも凍り付かす重低音にぞつと身震いしてしまう。

「馬鹿な横やりが入ったが、とりあえず中澤千佳、質問に答える。早くしないと王子様の一行が次の予定に移ってしまうだろ？」

小さくため息。そして無表情な瞳をあたしに向ける。

「あ、あたしは……」

声を上ずらせた、その時。

迷子のドロシー

『彼女は私のバイトです』

朗とした声が広いエントランスホールに響いた。

外から差し込む夕日が彼の姿を細長い影として床に描いていた。

逆光で顔は見えない。まるで眩いスポットライトを一身に浴びているみたい。

彼から見ればあたしのいる場所は暗い、冷やかな森の中。

その森に差し込んだ一縷の光。

ダークグリーンの世界から一転、陽光溢れる麗らかな森に姿を変えらる。

出入口から差し込む光はまるで黄金の石畳みたい。

その中を颯爽と歩いてくると、物語の主役はさも当たり前前の顔であたしの側に立った。

白馬の王子様が、漆黒の獣のような狩人と相對する。絡み合った視線が静かに弾け、火花を散らした。

それも僅かの間。

王子はあたしの肩にぼんと手を置いたかと思うと、ぐいっと自分の方に引き寄せる。よろけて、思わず王子の胸に寄りかかってしまった。

「わあ！」

驚くあたしに構わず、王子は肩を抱いたまま。頬に王子の胸が当たる。

うわ〜！ち、近過ぎるよ〜。

触れられた肩も、触れている頬も火がついてるんじゃないかってほどに熱い。どくどくと波打つ心臓が急加速を始める。

いきなりのことに動揺して、予想外の王子の行動に戸惑って、どうしていいかも考えられない。

知らない男の人とこんなにも密着するなんて、初めて。近過ぎて王子の心臓の音まで聞こえるかもしれない。

でも制御を失ったあたしの鼓動は爆発寸前で、うるさいくらい鼓膜に響いてる。

どうしよう！あまりにも近過ぎて、心の声まで漏れだしちゃう。

そんなあたしに構わず、王子はあたしの肩を抱いたまま、完璧な優美な笑みを幸村さんに向ける。

『彼女には私の来日中、側にいてもらおうと思っています。コンパニオンという形だね。シヨート・サーヴィスですね。私の警備に当たって下さる貴方がたにもちゃんと報告しておくべきでしたね』

『シヨート・サーヴィスだと？』

幸村さんが唸るように眉を寄せた。でも王子様の表情は変わらない。

誰もが騙される爽やかプリンススマイル全開であたしを見下ろす。そして幸村さんの言葉に答えず、そっとあたしの背に手を回した。

『さあ、行こうか。チカ。皆が待っているよ』

優しく触れられた部分が熱を帯び、一気に体全体に伝わっていく。どうしてこんなにも心臓の音が体中に大きく響くのかな？

でもそんなこと誰にも聞けない。ただ赤く染まった頬を気付かれないように俯いて、王子の卒のないエスコートに従うだけ。

王子に誘われて暗い森に背を向けると、あたしは出口を目指し黄金の石畳を歩く。

後ろにいる気高い野獣と口の軽い小イヌに挨拶をする間もない。一度盗み見るように振り返ると、幸村さんはじつとこちらを睨んでた。その瞳はあまりにも深く、何を考えているのかまったく分からない。

「何をたくらんでいるんだ？あのしたたかな王子様は」

ぼつりと吐き出された重低音は薄暗いエントランスホールに霧散し、森を抜け出したあたしの元までは届かなかった。

王子について、外に出ようと出入口に足を掛けた。

出口扉のガラス越しに、焦った顔の黒づくめ達がこっちに駆けてくるのが見えた。

この抜け目ない王子はまたさらっと警護の隙間を潜りぬけてきたらしい。

ホントにダメな王子様。お付きの人の白髪が増えちゃうよ？

でも王子様直々に迎えに来てくれて、すごく嬉しかった。低い幸村さんの声を打ち消すように王子の涼やかな声が聞こえた瞬間、これでもかって心臓が弾んだ。

でも、これは内緒。

気付かなかったことにしておかなきゃね。そうじゃないと、悪い夢に苛まれちゃう。

ちゃんと自分の役割をわきまえないと。あたしは脇役のメイド。

彼は主人公の王子様。

どう足掻いても物語のシナリオは変わらない。だから、この扉を出たら普通に澄ましてなきゃ。

王子の側でひっそりと控えているただのメイドでいなきゃ。

ねえ、神様。これぐらいささやかな願いは許してくれるよね？
それともあたしの願い事リミットはあの事故の瞬間に全て振り切れちゃった？

でも信じているから。このリアリストをその気にさせるんだから、
神様、大したもんだよ。

もしこの森を抜けた先に緑に輝く王国があるなら、あたしは一番
に願うわ。あたしの心をブリキにして下さいって。

さあ、森の出口はすぐそこ。

あたしは森を抜け出した瞬間から、ブリキのハートしかないロボッ
トよ。生の心臓は深い森の中に置いていこう。

そんな馬鹿なことを考えながら、一歩外に踏み出た、その時。

ワルイ魔法

「ネエ、ナニヲハナシテタノ？」

全身の産毛がざわりと震えた。

ずるい。そんなに顔を寄せて、後ろから囁くなんて反則よ。

なんでこのタイミングで、日本語で話しかけてくるの？

弾かれたように顔を上げると優しく揺れる蒼の瞳と目があった。何で？と念を押すように、王子は首を傾げる。

「べ、別に大したことじゃない……」

何と問われると答えにくいな。話したことって言えば、刑事ドラマの話とS・Pについてくらいじゃないかな？

後は幸村さんとマメシバ君のコントみたいだったし。

「それよりも早く行かなきゃ、また怒られるよ？王子様」

王子の視線から抜け出すようにあたしは一步前が出る。

まだ諦めきれないのか、何かを問いたげな視線が背中に絡みつく。その逃れ難い視線を避けるようにあたしは早足になった。

でも……強く腕を引かれ、体が後ろに傾く。

まるで魔法の蔦に絡まれたように体が動かない。反射的に目だけが束縛の元を確かめるように動く。

あたしの瞳が捉えたのは、燃えるような蒼い情熱。

頬が触れそうな距離にある凜とした眼差しが真っ直ぐこっちを見ている。

自己暗示という名の魔法をかけた、ハガネの心臓がその封印を破るように弾けた。

「チカ、君には王子なんて呼ばれたくない」

掴まれた腕があまりにも力強く、それ以上に流暢に聞こえた彼の声があまりにも甘美で、あたしは魔法がかかったように目が離せない。

この魔法は何よりも強力。

さっきも同じように魔法をかけられたけど、獣のような幸村さんとはまた違う。力づくじゃなくて、さりげなく柔くあたしの体の自由を奪う。

「プリーズ、コール・ミー・アル。OK？チカ」

そんな切なげに瞳を細めないで。

そんなことされたら、もうあなた以外見えなくなるでしょ？

今だって、近付いてくる黒づくめの人の足音があんなにも遠くに聞こえて、心臓の鼓動ばかり鼓膜に響く。

「殿下、どうされましたか？」

駆けてきたペスが息を切らして話しかけてくる。
掴まれた腕の力が抜けた。

「ちょっと、彼女が転びそうに見えてね。思わず腕を掴んでしまった」
「チカ、驚かせたね。さあ、行こうか」

変わらずににこつと笑ったのは、完璧な理想の王子様。優しくて誠実な顔から、さっきまでの絡みつくよう甘さが一瞬の間に消え失せていた。

そのまま黒づくめに守られるように車まで行くと、少し困ったよ

うなセバさんが車の前で待っていた。

「千佳さんを迎えに行くなら、私が向かいましたのに。それにどこに行くにもちゃんとお供を付けると先ほどお約束頂いたはずですよ？」

「すまないね。副大使。僅かな距離だったからさ」

はにかむように王子は笑うと穏やかな執事の言葉をさらりとかわし、車に乗り込む。

王子は執事に怒られているのかな？何を話しているか分からないけど、そんな雰囲気だ。

流石に怒っていても穏やかなセバさんは、幸村さんのような関節技をかけたりはしない。

ちよつと、見てみたいけど。

なんて不埒な想像をして、さっきの記憶の上書きを試みてみるけど、どうやらあたしの心は一筋縄ではいかないらしい。

勝手に心のメモリに名前をつけて保存してしまう。何で自分の心さえ思い通りにいかないの？

心はまだ、深い茨の森の中（前書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます！日々のおんびり、
ちみちみと更新していくつもりなので、これからも気が向いた時に
覗いてみて下さいな

心はまだ、深い茨の森の中

その日の日程はこれで終わりだったらしい。

後は車でホテルに向かうだけ。ホテルに急ぎよあたし専用の部屋を用意してくれたんだって。

なんだか悪いな。別にホテルなんて取ってくれなくても、自宅から通うのにな。

なんて思いつつもホテルに泊まれるってだけで、ちょっとゼータクな気分。

我が家が一番なのは分かっているけど、でも別の何処かに泊まるって思うだけで胸が弾むんだよね。

ごめんね〜可愛い弟たちよ。おねえちゃんもホントはあなた達だけを家に置いておくなんて嫌なんだけどね。

でもこれもバイトの一部だし、仕方ないのよ。朝食はバイキングかな？

もう！わくわくしちゃうー！

……って思いたいのにな、何故こんなにも車の中が重苦しいのですよ
うか？

さきほどまでの騒々しさとはうって違って、車内は居づらいほどに静まり返っている。

王子様はお疲れなのか、ずっと窓を見つめたままであたしの方を見ようともしない。

仕方なくあたしも同じように窓の外を見つめていた。

夕闇に沈んだ街には眩いライトが灯り、車は光の洪水の中を突き抜けていく。聞こえるのは風を切って駆ける音と静かにうなるエンジンの音、ただそれだけ。

こんなに静かだと未だ治まらない動悸が王子の耳に届いてしまうかもしれない。

どうか今だけは静かにして。

王子のことを考えないように、頭を違う方へと向けるのに。でも、さつき以上に開いた後部座席の微妙な空間が更にあたしを追い込む。光が反射して、見つめる窓に王子の横顔が映った。

闇に浮かぶ王子の顔はおぼろげで、何を考えているのかさっぱり分からない。

ねえ、さつき言った言葉は本当？それとも、あたしの聞き間違いだったのかな？

すごく流暢な言葉に思わず聞こえない振りしちゃった。

アルって王子のあだ名なのかな？本当にアルって呼んでもいいの？

でも今は声をかけることもためらわれて……。

「千佳さん」

「へえ？」

急に名前を呼ばれて、焦ってしまった。思わず不拔けた声を上げてしまった自分が憎い。

優しい、心にするんと沁みる声に弾かれるように顔を上げると、バックミラー越しにセバさんと目があった。

優しい瞳が細く和む。

「お疲れと思いますが、ホテルに到着すれば私どもと最上階に来ていただけますか？明日の日程やこれからのことも含めて、色々説明したいのです。最上階に殿下はご宿泊されていて、その一角に私どもシーリエント関係者の事務室が設置されています」

「も、もちろんです！うかがわせてもらいます！」

心と一緒に声が弾んだ。

最上階の王子様のお部屋ってことは、いわゆるスイート・ルーム？そんなセレブリティな場所にあたしが足を踏み入れてもいいのかな？

この先どんなことがあっても、スイートなお部屋に絶対に足を踏み入れることなんてない！

うわ〜ドキドキしちゃう！

「すごいな〜ホテルの最上階なんて、響きだけでもうロマンティック〜！」

「千佳さんは何にでも感嘆されるのですね」

小さな子を慈しむようにセバさんは頬を緩めて、申し訳程度に笑い声を洩らした。

「す、すいません。子どもっぽくて……」

「いやいや、謝ることはありません。その瑞々しい感覚は誰にも真似はできません。私のように歳を重ねればなおさら。大切にすべきことですよ」

にこつと穏やかな表情を浮かべるセバさんの声は本当に優しい。ちゃんとあたしを認めてくれてるように心に響く。

ちよつと恥ずかしくて、それでいてはにかんでしまうほど嬉しい。

「殿下が出会われたのが千佳さんでよかった。素敵な偶然に感謝しなければ」

素敵な偶然。そんな風に表現してくれるセバさんの感覚の方がずっと素敵だと思つ。

ホテルに着き、噛みつきそうなペス（どうやら敵と見做されたらしい）から自分の部屋の鍵を受け取ったあたしは、自分の部屋に向かう前にまず王子様一行と共に最上階に向かった。

さっきまでセンチメンタルはどこ吹く風。今は想像ばかりが膨らむスイート・ルームに胸が弾むばかり。

エレベーターは一気に上昇する。

着いた先は、まるで絵本の中に迷い込んだかのような絢爛豪華な空間。

落ち着いた淡いモスグリーンの壁紙の中に絡まるように描かれる金糸の蔦。

柔らかな光を放つ照明はまるで蝋燭を乗せた燭台のように、等間隔に置かれている。磨かれ、曇り一つない金の縁どりがどこまでも廊下の壁に続いている。

その中をさも当たり前に歩むセバさんが本物の執事にしか見えな
い。

上品なスーツ姿が毛長の絨毯を音もなく歩くと、重厚な扉に手を掛けた。

その向こうに廊下以上に飾り立てられた空間が広がっていると
思
うと、思わず手を握り、身を前に乗り出してしまふ。

そんなあたしを牽制するようにペスが睨んでくる。まったく飼
い
主至上主義のわんちゃんには困ったものね。

あたしは、王子のことなんて考えてないのにさ。

だって考えても無駄だもん。自分が苦しくなるだけでしょ？

側にいる王子を僅かに見上げ、自分の気持ちから目を逸らすよ
う
に視線を外した。

そう、王子よりも今はスイート・ルームだ。夢の世界がゆっくり
と
扉を開ける。

ドキんと心臓が高鳴る。

千佳INワンダーシリーズント(前書き)

ここから登場人物が一気に増えます。文章がごちゃっとして読みにくいと感じた方、ただのにぎやかしなのでさらっと読み流して下さい!!!

千佳INワンダーシーリエント

「も〜なんでこうなるの〜。殿下はどこに行ったのよ！ミスタ・グレン！笑ってないで、何か言いなさい！」

開け放たれた扉から漏れたのは、甲高い女性の泣き叫ぶ声だった。な、なんだ？輝くゴージャスな部屋を想像していたあたしは思わず、その歩みを止めた。

セバさんにより開け放たれたドアの向こうに広がるのは我が家の何倍も広く、そして何千倍も高級感に包まれたリビングルームだった。

オレンジの優しい明かりを灯したシャンデリアがさり気なく吊り下げられた広大な部屋には、何人も腰掛けられる大きさのソファのセットが置かれ、奥にはグラランドピアノやバーカウンターまである始末。

それでも部屋がせせこましく感じないのは空間を上手に使った采配の妙ってやつなのかな。

普段のあたしなら、心の底から驚嘆の声を上げて、部屋中を駆け回っている。ってというか、今も駆け廻りたくてうずうずしているんだけどね。

でも、部屋の真ん中にいる男女があたしの衝動に待ったをかける。何故だか緊迫した雰囲気や部屋を中心にいる彼らを包んでいる。う〜気になって、素直に感動に浸れないよ！

「だから、気長に待とうよ。放っておいてもお腹を空かせればそのうち帰ってくるよ。サーシャ？」

「「気安くサーシャなんて呼ばないで！私はここの責任者なんですよ！ミスタ・グレン。私のことは、キャプテン・コーウィツシュと呼びなさい！ねえ、ミスタ・パーカー？」」

「「イエス。キャプテン」」

「「いや、君がここのリーダーなのは認めるけど、キャプテンはいんじゃない？何？船長きどり？」」

「「お黙りなさい！ミスタ・グレン！貴方なんてクビよ！」」

「「クビって、また物騒なことを。というよりも俺とサーシャは管轄が違うでしょ？君、外務省。俺、王宮護衛官」」

「「そんなコト、関係ないわ！コーウィツシュ家の威信かけて、貴方をクビにしてやる！貴方のその顔が気に入らないのよ！」」

入ってきたあたし達のことになどまったく構わず、広いリビングルームの真ん中に立ち言い争いを広げているのは、ヒステリックな声で怒鳴り泣き叫ぶ美女と、まるで笑っているかのような細目に縁なし眼鏡をかけた男性、そして何がそんなに嫌なのかと思うほどに憤怒の表情を浮かべる敵つい体軀の男性だった。

その側ではそんな争いなどまるで気にせず、一人の青年が椅子に座って眠りこんでいる。

「「顔が気に入らないってワガママだな、サーシャは。これが俺のノーマルなんだけどな。……そんなことよりもキャプテン・サーシャ。王子様のご帰還だよ？」」

「「だから！サーシャって呼ばないで！って……殿下？」」

食ってかかる美女を上手にいなして、眼鏡の男性があたしたちの方を振り返った。つられる様に美女が視線を上げる。

どうやら彼はあたし達のことには気付いてたみたい。

一応敬愛すべき王子を無視し続けて放置するなんて、彼はどうやらその胡散臭い笑顔通りに一筋縄じゃない人なのね。

男の言葉に美女が慌てて、表情を改めて王子の側に駆け寄る。まだ涙の浮かんだ美しい碧眼が何か言いたそうに、困惑に揺れた。

「無事のおかえりでようございました。それよりも、殿下！今までどこにいらっしやいましたの？」

「どこについて、スケジュールどおりに観光していたけど？」

僅かに非難が混じった珠のような美女の声に王子は麗しい笑みで答える。

モデルのような長身の美女が理想の王子を体現した彼の側に並ぶと、一層華々しく輝いて見える。

まるで神話の世界？絵描きの人がこの場面を見れば、あまりの神々しさに泣いて狂喜乱舞するんじゃないかな。

生まれながらに持っている気品のなせる技なのか、泣き叫んでも彼女の崇高な存在感はかけりさえ見せない。

黒のノーマルなスーツに身を包み、軽くウエーブのかかった金髪を簡素にまとめただけに、まるで女王陛下のように雅で威厳に満ちていた。涙に潤んだ瞳すら彼女の魅力をさらに輝かせる。

「スケジュール通り？でも殿下は……」

何を話しているか分からないけれど、女王にとって王子の存在はイレギュラーだったみたい。呆然と立ち竦み、動揺したように視線

をさまよわせた。

その瞳が縋るようにセバさんに向けられ、セバさんは小さくため息を吐くと女王の言葉に丁寧に応える。

「殿下を無事保護し、そのままスケジュール通りに観光を続ける
ところどころに連絡をいれましたよ？コーウィツシュ外務官」

「連絡？私は知らないわ！」

息を飲むと女王は厳しい眼差しを側にいる眼鏡の男に向けた。

「そりゃそうだね。俺が報告してないから」

眼鏡は、細い瞳をさらに細めてさらっと爆弾を投下した。

とまどいのアリス

「「なんですって!」「」

眼鏡の人の言葉に女王が激昂した。

「「どういうことです?ミスタ・グレン!貴方は私が殿下のことを心配している横で無事を知りながら、ニタニタ笑っていたというのはですか?もゝ貴方なんてクビよ!絶対にクビにしてやるわ!」「」

「「だから、これが素なんだって」「」

「「なんとということ!ミスタ・パーカー!貴方も知っていて私を嘲笑っていたのですか?顔は怒っているというのに!信じられない!貴方もまとめてクビにしてやるわ!」「」

「「いや、別にコリンは怒ってる訳じゃないよ。元々そういう顔なんだって!」「」

細い目を更に細め、ニタニタと眼鏡の男が笑う。

その横で更に表情を険しくした男性が何かを言いたげに口を動かしたが、それよりも先に凜とした声が部屋に響いた。

「「コーウィツシュ外務官、心配をかけてすまないね。グレン警備担当もパーカー秘書官も迷惑を掛けた。私はこのとおり無事に観光を終えた。君達には迷惑をかけたが、私はそれに見合う出会いをしたよ」「」

言い合う二人の間に割っているように一歩進みでた王子は爽やか

な笑みを浮かべた。

聞き心地のよい声はそれほど大きくもないのに、部屋全体が一気に引き締まる。

流石王子様ね。部屋に流れる空気をあつという間に自分の色に染めてしまう。

寝こけていた青年がその声に反応して、ガバリと身を起こした。でも、あまりにも慌て過ぎて、勢いあまって椅子から滑り落ちてる。青年は椅子で頭をぶつけたのか、とろんとした眠そうな目で自分の頭をさすっていたけど、王子の姿を目に留めて慌てて立ち上がった。そして格好付けて、ビシツと後ろ手を組んでかしまっている。しかも寝てませんよ〜って感じな素知らぬ顔で。

あはは！徹底的瞬間を見た！って感じ。あたし的にクリティカルヒット！ハプニング大賞とかで取り上げられてもいいんじゃないかな。外人サンってトコがミソだよな。

一部始終を見て思わず吹き出しそうになっちゃった。けど……その場の空気がそれを許してくれない。

この場にいる人たちは、その日の報告をしているのか、それとも王子の逃走を非難しているのか、言いようもない緊張感に包まれていて、誰一人彼のことには気付いていないみたい。

一体どんな展開になってるのかな。一人話の展開についていけない。

だから仕方なく、あたしは部屋の一番隅で物珍しげに広い室内のあちこちに視線を漂わせていた。

彼らが交わす言葉が、一人取り残されたあたしの横を風の音のように流れていく。

囁くようなシーリエント語は英語に似ているようで、やはりどこか違う。吐息のような音が多いせいか、絹織物のように繊細に耳朶に残る。

完全に浮いてるな〜あたし。アウェイ感マンサイ。

理解も聞き取りもできない言語が飛び交っている空間なんて日本

にあつて日本じゃない！

「殿下、それはそこにいる少女のことですか？」

王子の言葉にニタニタ笑いの眼鏡があたしの方に目を向けた。

な、なんだろう？

思わず目が合つて、あたしはきよろきよろと見渡しているのを咎められたようなバツの悪い気になった。

まるで細い三日月のように口の端を上げて目を細める彼は、アリスの物語に出てくるニタニタ笑いの猫みたいだ。アリスを助けるわけでもなく、思わせぶりに話しかけて姿を消すチエシヤ猫。

周りをまったく無視しているように見せて、彼は全てに感覚を張り巡らせているらしい。

面白いおもちゃを見つけたとばかりに、眼鏡の奥に隠れた細い瞳が好奇に輝いた。

何？その企んでますって顔。

思わず一步後ろに下がる。でも王子の甘い声があたしを舞台から下ろしてくれない。

「可愛いレディだろ？彼女に出会った瞬間から私は彼女に夢中さ。彼女はまさに私の理想だよ」

理想の王子様が極上に甘くて眩しい笑みをあたしに向けた。その眩さにつられて思わずあたしはへらりと頬を歪ませた。

あたしのこと、紹介してくれてるのかな？ってことは、自己紹介するべきだよ。つたない英語しか使えないけどさ。

ちよつとでも歩み寄る態度は大事だよ。努力は評価されるべきだよ。結果よりも頑張った過程に意味があるんだもん！

それに何かあればセバさんが卒ないフォローをくれるし。

よし、そうと決まれば、レッツ異文化コミュニケーション！」

はづどうゆうどう」「だっけ、それとも」「ないすとうみーとゆうー」で始めるんだっけ？

なんて悠長なこと考えていたあたしの思考を寸断するように、割れんばかりの叫び声が部屋中にこだました。

「」「どういことですか！それは！」「」

つんざくような声っていうのは、まさにこのこと。

鼓膜が破れそうなほどの衝撃に、頭がくらくらする。

ついさっきまで自分が何を考えていたのかさえ分からなくなる。

その場にいた者全員が呆然と声のした方に目を向けた。その視線の交錯する中心にいるのは、今にも泣き出しそうな顔をした女王陛下。
下。

大きく形の良い瞳をこれでもかと思開き、あたしを凝視している。くしゃくしゃになってもまだ麗しい表情にはこれでもかというほどの念が籠っていて、背中には陽炎のようなオーラが見える。

これってどういこと？もしかしなくても女王はお怒りだよね？

まるで塗り残った白いバラを見つけたハートのクイーンだ。

トランプの兵士のように恐れをなして、あたしはただただ女王陛下を見つめた。

やっぱり「はづどうゆうどう」「じゃいけなかったのかな？って、あたしはまだ一言も話してないよ？

グラン・ルージュ（前書き）

何故フランス語かというところ……ただ語感がいいだけです。この小説は適当に気に入ったフレーズを題名にしているので、内容とは一切関係ありません！問題ありデスね…

グラン・ルージュ

「サーシャ、声が大きい。お嬢ちゃんがビックリしてるじゃないか」

「お黙りなさい。ミスタ・グレン。私のことはキャプテン・コーウィッシュと呼びなさい！さもないとクビにするわよ！」

ぼつりと呟いたチエシャ猫の声を遮り、女王様が高圧的な態度であたしに歩み寄る。

「殿下！どういうことですか？私はまったく報告を受けていません。この日本人は何のつもりでお連れになったの？」

早口で何事かをまくしたてる女王の気迫に足が竦んでしまう。やっぱり美人は怒ると美しすぎて怖い。

「まったく油断も隙もない日本人ですわ！ヤマトナデシコなどといって、慎ましさを売りにしているかと思えば、こんな大胆に殿下に近付くなんて！」

え？大和撫子？女王が何を怒っているのか、あたしにはさっぱりだよ。

この理不尽さは、さながらワンダーランドに君臨する赤の女王。実質的にこの空間を支配するのは王子じゃなくて、このヒステリックで癪癪持ちの麗しい女王様。放っておいたら、そのうちフラミンゴでクリケットをさせられるかもしれない。

もう訳が分からない事ばかり。

あたしはいつ、彼女の心の逆鱗に触れちゃったのかな。ちゃんと

歩み寄ろうとしていたのに。

うっん……どうしていいか分からないけど、とりあえず笑ってみよう。

これがコミュニケーションの第一歩。スマイルは世界共通のあいさつだよな？

三、二、一、はい！のタイミングでむりやり笑みを浮かべてみる。うわ〜自分でも顔が引きつってるのが分かるよ。

絶対いびつで、不審な顔してる。こんな笑顔でコミュニケーションなんて取れるはずないよね。

やっぱり、そんなことで彼女の足が止まる訳がなかった。

どんなに広い室内でも彼女の長い足に掛かれればあつという間。

一気に距離を縮め、あたしを追い込もうとする。その美しくも恐ろしい顔から目が離せない。

「ミス・コーウィツシュ。彼女をいじめないでください。いきなり知らない言語で攻め立てられ、可哀想に、こんなに怯えて」

柔らかで心地よい声が頭の上から降ってきたと思つた瞬間、視界から女王が消えた。

あれ？どういうこと？

戸惑う間に視界を染めた濃紺が、王子のスーツの色だと気付いた時には、その中に力強くも優しく抱き締められていた。

温かな体温と芳しい香りに包まれて、体が痺れたように動けない。驚いたように見上げた視線の先で淡い金髪が揺れた。

いつの間にあたしの側にいたのだろう。王子がまるで女王からあたしを守るように抱き締め、女王と対峙している。

「しかし、殿下……」

王子に諫められ、流石のハートのクイーンも憤怒の表情に困惑を浮かべ、歩みを止めた。

「彼女は私の来日中、私に日本文化などを教えてくれることになっている。短い来日中、少しでも日本のことを知るためにフェレス副大使が取り計らってくれた」

「フェレス副大使が？」

女王は小さく息を飲んだ。そのタイミングを逃さず、絶妙な間でセバさんが一歩前が出る。

「そういうことです。コーウィツシュ外務官。彼女は中澤千佳さん。これより数日を私どもと一緒に過ごして下さいます。彼女とは大使館がアルバイト契約を結びましたので、コーウィツシュ外務官のお手を煩わせることはありません」

「アルバイト契約……」

女王は困惑を隠せないらしく、動揺した瞳でセバさんを見つめていた。

セバさんは常と変わらずに穏やかに微笑んでいる。

彼の瞳には人の心を落ち着ける効果があるのかな。セバさんと女王の視線が交錯したのも束の間、怒りに満ちた女王の瞳が揺れた。

「さつきも話したように、出会った瞬間から彼女から目が離せないくてね。次は何をしかしてくれらるんだろうと思うとワクワクするよ。彼女がいれば、つまらない観光も楽しくなる。もう勝手に抜け出たりはしないさ」

あたしを解放すると、王子はセバさんの後押しをするかのように女王の方に一步步み出た。その誰もがほだされそうになる笑顔は女王にも効果的みたい。

女王は更に表情を強張らせ、一步後ろに身を引いた。

すごいよ、王子。あの女王陛下を後退させるんだから。

でもさ、今、絶対あたしの悪口言ったでしょ？聞きとれなくても雰囲気で分かるんだからね！

でも僅かに体に染み込む王子の体温があたしを本調子してくれない。

声がうわずって、喉から先に出ない。しかたなく声にならない不満を王子の背にぶつけた。

でも王子は気付いていて素知らぬ振りをしているのか、ちらりとあたしを横目に見るだけ。

すぐに女王に視線を戻した。

「「そういうことだから、よろしくね」「」

「「ははっ、これはこれは。ご旅行が更に波乱に満ちてきますね。

……サーシャの癩癩が俺らに向けられないように気をつけないとな、コリン？」「」

チエシヤ猫が愉快そうに、側に佇む憤怒の大男を仰ぎ見る。

がっしりした体躯に厳つい顔、そしてまるで不動明王のような表情をしている寡黙な彼は、更に険しく眉をつり上げた。

金髪、碧眼の不動明王というのもシユールだな……なんてどうでもいいことを考えてる場合じゃない。

やばい！この厳つい人、女王以上にお怒りみたい。

え〜？あたし、何か悪いことしたかな？もしかして彼は女王陛下を守るハートのジャックなの？

だから女王を怒らしたあたしが許せないのね。

「私どもよりアントニオとユーインの方が心配だ」

ぼそつと聞き取れないほどの小さな声をため息と共に吐き出すと、彼は刺すような視線をさつきまで寝こけていた青年に向けた。

青年は壁に身を預け、またうつらうつらと居眠りをしている。

すごいな。この騒動を前にしてもまだ寝ていられるなんて。まるでキ印のお茶会で、ポットの中で寝ていたヤマネみたい。

しかし、彼の安眠は続かない。

「ミスタ・ダグラス！貴方は何を呑気に寝ているのですか！この非常時に！」

「……へえ？非常時？大丈夫ですよ。キャプテン・コーウィツシユ。異常なしです」

激しく女王の叱責が飛び、名前を呼ばれた青年はびくりと身を竦ませた。そして慌てて、眠気まなこのままに敬礼して見せる。

少したれ目な緑かかった茶色の瞳はまだ眠りから覚めないのか、半分も開いていない。

「異常、大ありでしょうが！このうつけ者！居眠りばかりして！それに貴方もですよ！ミスタ・クライブ！貴方はずっと殿下の側についていたというのに、何ですか！この体たらくは！」

「す、すみません！レディ・アレクサンドラ！」

噛みつかんばかりの視線を向けられ、王子の側に控えていたペスが飛びあがらんばかりに萎縮した。

そして脱兎のごとく駆けだすと女王の側でわあわあと叫んでいる。

ペス……。犬だと思っていたけど、実は時間に追われた白ウサギなんだね。

「まあまあ、コーウィツシユ外務官。それくらいに……」

感情の制御がきかない女王を取りなすように、穏やかに口を挟んだセバさんの役割はなんだろう。

きつと優しくして、女王様の尻に惹かれているハートのキングかな。もちろん、物語どおり、女王陛下はキングの声に耳を傾けない。

「フェレス副大使！これは私達の問題ですわ！口を挟まないでください！」

涙に濡れた瞳でキツと睨まれると流石のセバさんも二の句が告げられないようだ。

何がどうなっているのか分からない。

この果てのないレースに幕を引けるのは、王子ただ一人だけ。でもその王子はまるで物語を楽しむ読者のように、傍観者を決め込んでいる。

広い部屋は女王を中心に、目まぐるしく変化していく。

穏やかに諭そうとするキングに、女王を怒った顔で心配げに見ているハートのジャック。

その横でニタニタ笑っているチェシヤ猫は時々白うさぎをいじめていて、壁際にはヤマナがまた寝ている。

他の黒づくめはまるで女王に翻弄されるトランプの兵士達だ。皆、女王に圧倒され、戦々恐々としている。

「も〜！！みんなクビよ！クビにしてやるわ！」

ついに癩癩玉が爆発した。トランプが乱れ飛ぶ。

世にも奇妙なシリーズント

ハートのクイーンはアレクサンドラ・キャサリン・コーウィツシユさんというらしい。

こんなに若いのに彼女は外務省の高官で、この旅行の責任者なんだって。

綺麗で賢いって、ホント、天は二物を与えるのね。神様は美人に弱い。

あたしには些細なものでも与えることを渋るくせにさ。同じ女として差を見せつけられ、何だかやるせなくなるな。

サーシャっていうのはアレクサンドラのだ名みたい。チエシヤ猫はからかうように彼女をそう呼ぶけど、彼女はあまり気に入っていない。

あたしはちゃんとアレクサンドラさんと呼ぼう。彼女、怒りだすと手がつけられないし。

さっきの騒動はやっと王子が彼女を止めに入り一段落した。叫び疲れたアレクサンドラさんはぜえぜえと息を切らしていた。

そんな彼女に「アーユーオーライ？」って、眩い笑顔で聞く王子は本当に性格が悪いと思う。

聞くぐらいならもっと早く止めてあげようよ。

それよりも性格が悪いのはチエシヤ猫。彼はさっさと安全圏に移動して、事の成り行きをニヤニヤと見ているだけ。

けして止めには入らない。アレクサンドラさんをからかいつつ、上手に回避していた。

なんか本物の猫みたい。

そんな勝手気ままなチエシヤ猫の名前はダリル・グレンさん。王宮護衛官という職業なんだって。

この旅行のシーリエント側の警備担当。
警備担当というには、少し頼りなく見えるのは側にいる憤怒の大男の所為だと思っ。

ダリルさんは王子と同じくらいの長身だけど、ちよつと細すぎる。警備担当で大丈夫？って思わず心配になるくらい。

でもきつと彼には華麗に危機を避ける奥の手があるんだろうな。絶対にそうだと思う。

迎え撃つ前に避ける！格好悪いけど、でも確実な警備だよな。

同じ警備でも全てを無に帰そうとする幸村さんとは正反対。深く重い日本の警備担当とあつさり軽いシーリエントの警備担当が相見える日は来るのかな？

そして警備担当でない警備担当風の騎士は王室事務局の役人で、主に渉外など雑務を担当しているらしい。

王室の秘書官なんだって。
がっしりと立派な体躯をしていて、騎士っていうよりもラガーマンって感じ。秘書みたいな繊細な役職よりもずっと警備の方がずっと向いてそうなんだけどな。

でもこんな顔で交渉に当たる方が、事がスムーズに進むのかもね。相手が勝手に怯えてしまつて、彼の言うことに頷くしかないのかも。そう思つと適職な気がする。

そんな彼の名前はコリン・パーカー。
コリンちゃんね。今にもジャンケンを始めそう。顔とは正反対になんだか愛らしい。

幸村さんといい、コリンちゃんといい、なんでそんなに見た目と名前にギャップがあるのかな？

まあ、うちものっぽでガサツな男に百佳なんて名前が付いている

けどね。

ヤマネ君はユーイン・ダグラス。一応王子の護衛官。

同じく護衛官らしいペスは、実はアントニオ・クライブという格好いい名前なんだって。

アントニオってあなた、イノキの爪の垢でも飲ませてもらった方がいいよ。これじゃイノキどころか、ただのウサギ。護衛官なのに闘魂もあつたものじゃない。

さらりと彼らを紹介（セバさん訳）してくれた王子はにこりと微笑んで、次はあたしの紹介を彼らにした。

「彼女はナカザワ・チカ。東京の片隅の、小さくて狭い家に姉弟五人で身を寄せ合つて生活している、普通の、平凡なハイスクールの学生なんだ。彼女はまるで白馬に乗った勇者のように自転車に乗って困っていた私を救いだしてくれた。初めてだったよ。あんなに激しい運転は」

ねつと笑いかけてくるけどさ、王子様……。そこはかたないイジワルが隠しきれないよ？

聞きとれないと思つて馬鹿にしてるでしょ？

カドリーユ（前書き）

カドリーユ……男女が順々に相手を変えていくダンスだそうデス。
もちろん今回の題名もなんとなくつけました。題名はイメージです
ので、実際の言葉の意味とは一切関係ありません！

カドリーユ

悲しいかな。この異様な空間で、あたしはただにこにここと微笑むしかできない。

不思議なシーリエント達は、興味深々とばかりにそれぞれ言い表せない表情であたしを凝視してくるんだもの。

不審な者を見るアレクサンドラさんの刺すような視線。

ダリルさんの何かを見透かすようなニタニタ笑い。

コリンちゃんの険しい表情（でもどうやらこれが素顔らしい）。

ペスは相変わらずに敵を威嚇するかのように睨んでくるし、ヤマネ君はまた寝ている（こら！あたしに興味なしか！）。

「何故この子なのです？探せばもつと素晴らしい人物がいましたのに。殿下に何かあればすぐにでも首を切ってやりますわ！」

きつと眼をつり上げて、アレクサンドラさんがあたしを睨んだ。

も〜怖いよ。っていうか、なんて言ってるか分からないから返事もできない。うかつにYESって言うとなんか起きるか。

どうしていいか戸惑うあたしの横でダリルさんがぼそつと一言。

「鼻息が荒いよ、サーシャ」

「お黙りなさい！ミスタ・グレン！貴方という人はからかってばかり！クビにしてやる！」

アレクサンドラさんは勢いよくダリルさんのネクタイを掴むと、これでもかと引っ張った。

「痛！これじゃホントに首がちょん切れる！」

ネクタイを掴んだまま、横暴な女王陛下は宣下を下す。

「シーリエント王国の為に、ここで露と消えなさい！」

「何、訳の分からないことを……」

ぎゅっとネクタイを締められ、流石のチエシヤ猫もニタニタとは笑っていられないらしい。細い目を苦しげに細めている。

「キャプテン・コーウィツシュ。これぐらいに……」

見かねたコリンちゃんが止めに入るが、アレクサンドラさんがきつと厳しい視線を向けるとピタリと動きを止めた。

コリンちゃんは見た目以上に穏やかな人みたい。

こんな顔して趣味は園芸と献血。好きな言葉は世界平和。人類皆兄弟です。みたいな心優しい一面が垣間見れた気がした。絶対に自分の育てた花に名前をつけてそう。

「止めないで！ミスタ・パーカー！ここでこのバカ猫を葬り去ることがゆくゆくのシーリエント王国の為になるのです！それよりも誰ですか！こんな男を警備担当にしたのは！」

「……」

「お、おい、コリン！今、心の中で確かについて思っただろ？」

シーリエント風吉本新喜劇を見ている気分になるのは、あたしだけじゃないはず。

何言ってるか分かんないけど、でもやり取りがコントなんだもん。現にあたしの側では王子が顔を背けて、笑うのを我慢している。

あたしに対してはあんなにも大笑いをしていたのに、今は必死に理想の王子顔で取り繕っている。

ちよつと、どういうこと？家臣の前では真面目なイイ王子様でないきゃいけないの？

でも、勝手に抜け出したりしている時点で、ダメダメ王子のレッテルは貼られているよ？

「それぐらいでやめにしましょうか。コーウィツシュ外務官。千佳さんも驚いていますし。殿下の御前ですよ？」

静かで穏やかな声がコントに割っていると、皆がぴたりと動きを止めた。

声と同じように穏やかなセバさんが困り顔で三人を見つめている。優しい目。だけど、有無を言わさない強さがそこにはあった。

「私としたことが……」

アレクサンドラさんは弾かれたように身を引いて、強く握っていたダリルさんのネクタイから手を離れた。

いきなり離されたものだから、ダリルさんは勢いあまって前につんのめる。その細い体をコリンちゃんが素早く支えた。

「うえーホントに殺されるかと思った」

喉を擦りながらダリルさんは体勢を立て直す。

まるで顔を舐める猫みたいに手で額に浮いた冷や汗を拭く。そして、心配げに自分を見つめる大男に大丈夫だと言いたげに手で合図を送った。

ゆっくりとコリンちゃんは頷き、ダリルさんの側を離れる。

コリンちゃんの大きな体の分スペースが開いて、あたしとダリルさんを遮るものがなくなってしまった。

彼の細い目と目が合う。まるで心の底までも見透かすような視線に、ドキリと心臓が戸惑ってしまう。

どうしよう。まだ彼の口が何一つうまくつかめなくて、はぐらかされているようでどうしていいか分からない。

このメンバーの中で一番苦手。

そんなあたしの心を知ってか知らずか。ダリルさんはもっと目を細め、軽く舌を出して見せた。

やれやれ。飛んだ目にあつたよ。

そう言いたげに肩を竦める。

でも彼の視線はすぐにあたしから離れ、敬愛する女王の方へと向けられる。そしてまたからかうような軽口で女王を怒らせている。

えっと……。もしかして、あたしのを助けてくれたのかな？

彼のお陰でアレクサンドラさんの怒りの矛先が変わったし。

それにさっきまで猫らしくしなやかにアレクサンドラさんの手をかわしていたのに。なんで今回だけネクタイを掴まれてしまったの？

これは偶然？それとも意図的に？

でも、そんなまさかね。彼があたしを助ける理由なんてない。

きっと彼は騒動を楽しむのが好きだけ。そしてそれ以上にアレクサンドラさんをからかうのが好きなんだ。

これはきつと彼らにとって些細な日常の光景。あたしがいなくても変わらない姿。

ぼんやりと遠い異国の日常に思いを馳せていると、セバさんがそと横に寄ってきて、申し訳なさそうな柔らかい笑みを浮かべた。

「驚かれたでしょう？千佳さん。でも悪く思わないでいただきたい。

彼女たちはとても優秀な役人なんですよ」

「いいえ。なんだか楽しげ人たちですね」

「そう思っていただけで幸いです。さあ、もうすぐ夕食の時間。千佳さんも一緒にどうぞ」

にこっと笑うセバさんはまるで最高級の執事様。

恭しく胸に手を当て、更なる夢の世界へとエスコートする。

ピー・アワ・ゲスト (前書き)

ディズニーの美女と野獣から 劇団四季でもディズニーでも、この
シーンがすごく好きデス！

ビー・アワ・ゲスト

「こちらが本日の前菜。海の幸のカクテルでございます。まるで海の中を優雅に泳ぐ魚を閉じ込めたかのような、そんな煌めく一品に仕上がっております」

そう言つて上品に差し出されたのは、薄いガラス皿の上に上品に盛られた海の幸。

小エビにタコに、白身魚。小さな彼が天上のシャンデリアの光に受け、眩く輝くジュレの海を楽しげに泳いでいる。

所どころに配されたサイコロ大の四角は、ヨーグルトとオレンジなのだとか。まるで海の底にある貝殻みたいで愛らしい。

彼らを包む水槽の外は白い大きな大陸。そこにはプチトマトやキヤビアが申し訳程度に控えていて、その間を細いオレンジソースの線が縦横無尽に走る。

「どうぞ、目でも口でも楽しんでください」

黒の燕尾服のような制服を着たホールスタッフの人は卒なく口上を述べた。

すごい！こんな場所でこんな豪華な食事につけるなんて。きっとあたしの人生、最初で最後かも！

本当に食べちゃっていいの？後で返せって言われても絶対に返さないよ？

セバさんに案内されたのはまるで別世界のようなキラメク空間。

輝く銀食器に、揺れる燭台。流れる音楽はすごく優雅で、飾られた花々はどこまでも華麗で……。

目もくらむほど豪華な世界。

さしずめあたしはマリー・アントワネット？あたしは今、ベルサイユの女王！

なぐんて……うん。ごめんなさい。冷静になります。

ちよつと浮かれちゃっただけです。

でも、つい浮足立っちゃうあたしの気持ちも分かると思うんだよね？

王子の部屋もすごく素敵だったけど。でもこんな夢のような場所でご飯を食べてもいって言われるとワクワクがうずき出しちゃうのは仕方ないことでしょ？

気持ちまで部屋に合わせて、キラメイちゃう！

そんなうわついたあたしの横には、優雅な所作の王子が何気ない態度で座っている。

わあ、バックにあるはずのない星が見えるよ……。花まで振りまっちゃって、流星は本物の王子様。

生まれながらにして、ロイヤルな人はやっぱり違う。輝き方が半端ないわ。

冗談でもマリーアントワネットなんて言っすいません。あたしなんてロザリー……いえ、もうおしんとかで十分です。

流れる上品な空気に当たり前な顔で馴染んでいる彼はやっぱり住む世界が違う人。

側にいるはずなのに、こんなにも遠くに感じる。

この距離感、きつとベルサイユ宮殿を端から端まで移動してもまだ足りない。

同じように気取ってなきゃって思うんだけど、あたしの口は締めた側からだらしなく開く。

ホント、上品さの欠片もないな。あたし……。

でもね、こんなにも輝いている世界を全部見ないでいるなんてできない。あたしにとっては置物一つが物珍しく、全てにおいて感嘆

の嵐だ。

いっばい頭に焼き付けておこうと必死に目を開く。

いくら取り繕っても貧乏人は貧乏人だもんね。

三つ子の魂百までって言うけど、三つにして「おまけしてださい」が言えたあたしはきつと干まで生きても貧乏人。

だから、決めた！もう背伸びして気取ったりしない。やっぱり身の丈にあったスタイルが一番だよ！

こうなったらとことん、おのぼりさん全開でいくぞ！

ああ。ゴージャスで有意義な時間になりそう……。

……なんて、そううまくはいかない。

さあ、前菜を食しましょうとテーブルの上に目を向け、あたしは驚愕の事実思い当たった。

テーブルに伸ばした手がピタリと止まる。

……あたし、おフランス料理のテーブルマナーなんて知らないや。

なんちゃってレディの奮闘

と、とりあえず、冷静になろう。

混乱する頭を冷やすように、あたしは掲げたグラスに口をつけた。もちろん中身はソフトドリンクね。ホールスタッフさんお勧めのこだわりフルーツトマトのジュースだ。

市販のトマトジュースはなんだか塩味がして苦手んだけど、フルーツトマトとか、こだわりと言われるとどうしても飲みたくなる。

確かにお勧めするだけはある上品な甘さは後味すつきり。これなら何杯でもいけてしまいそう。

でも悲しいかな。今は心からそのおいしさを堪能できない。

だって、今あたしの全脳細胞はテーブルマナーなるものの検索に没頭しててこ舞い。

どんなにフル回転させても、ニアヒットすらしない。

フレンチってやっぱり、お洒落で、贅沢で、そして……高度なテーブルマナーが要求されるのよね？

どうしよう。いつも中澤家の食卓はルール無用のサバイバルバトルなのに。

テーブルマナー的なものを求められても困るよ。

ここは恥を忍んでお箸をお願いしようか。う……でもこの上品な空間がそんな発言を許してくれなさそうだし……。

空気が読めるのも、こういう時困りものね。

でもさ、張りつめた上品な空気を破るなんて、とてもじゃないけどできない。

あたしって、ホントに小市民だわ。

仕方ない。ここは作戦「ここ見てワンワン」ね。素知らぬ振りです。周りの様子を窺い、それとなく状況を見極める。そして完璧にコピ

ーよ！

円卓を囲むように、王子の横にあたとセバさん。セバさんの隣はアレクサンドラさんで、あたしの隣はコリンちゃん。

そして王子の正面、アレクサンドラさんとコリンちゃんの間にはダリルさんが座っている。

どうやらペスや居眠りヤマネ君は壁の当たりで控えているだけで、一緒に夕食は取らないらしい。って、ヤマネ君、壁にたつた瞬間から居眠りって、君の度胸に拍手だよ。

あたしはそれとなく横目で周りを窺った。

セバさんは器用にナイフとフォークでシーフードと緑の野菜を取り分けて口に運んでいる。その無駄のない、上品な所作に思わず拍手を送りたくなる。

これはあまりにレベルが高くて、流石のあたしもマネできない。断念して、そつと横のコリンちゃんを見た。コリンちゃんはフォークだけで、器用に全てを食べている。

どんな細かなお野菜も、差しにくそうなヨーグルトも彼にかかればあら不思議。見る間に武骨な顔にある、意外と小さなお口に消えていく。

くくこれもあたしにはハイレベルね。

他は……とりあえず王子の様子も窺っておくかな？

まあ、期待はしないけど。だって王子だもんね。

これで食べ方が下手だと、どんなお姫様も百年の恋から冷めてしまっ。

きつと眠れる森の美女だって、キスされてもそのまま寝た振りを続けるんじゃないかな？

まあ、あたしはきつと心の底からホツとして、初めて王子と仲良くなつてやつてもいいかなつて思うけれども。硬い動きで取りあえず小エビをフォークで刺した。それを口に持つていきながら、隣の王子をそれとなく窺う。

あ……小エビがおいしいな……つて……。

お口の中で弾む瑞々しい小エビの弾力に思わず舌鼓を打った。が、見つめた先が気になり、全然味わえない。

ちよ、ちよつと、王子様！何が気に入らないの？

あたしは口にフォークを突っ込んだまま、さりげなくどころか、これでもかつてほど王子の手元をガン見した。

だって、王子は綺麗なガラスの皿をフォークでぐちゃぐちゃにかき混ぜてるだけで、一つも食べようとしない。

海の幸が嫌いなのかな？ 呆然とするあたしにセバさんが困り顔で一言。

「殿下はごつやら偏食のようで……」

ああ、偏食家さんなのか。つて、何一つ口に運ばないつて、どれだけ偏つてるの！

これだから甘やかされて育った坊やは困るのよ。このお皿一品、いくらすると思つているの？

しかもぐちゃぐちゃかき混ぜるつて、料理を作つた人に失礼だわ。

「へ……え」

あたしは喉のすぐそこまで出かけた声を必死にとどめて、なんとかそれだけ答えた。

「おいしいのに、もったいない」

誰に言うでもなくポツリと呟くとあたしは、自分の前に置かれた料理に視線を移した。

だって王子の方を見ていたら、いつか堪忍袋の緒が切れて王子を締め上げちゃう。

も〜！王子なんてムシムシ！と、とりあえず口に運べばいいんだよ。プスリとヨーグルトのキューブにフォークを刺して、なんとか口に放り込む。

料理と格闘することに専念した。

食卓の幸福論（前書き）

王子のことがよく分からない……そんな作者です

食卓の幸福論

正直、こんなにもおいしくない晩御飯は初めて。

食べている物は、きつと人生至上一番贅沢なものだと思う。

でもね、想像してみてください。

壁際からじつとあたしを睨んでいるペス。

正面からは、あたしを値踏みしているアレクサンドラさんのじつとした眼差し。しかもあたしが料理を取り損ねる度に、これでもかのため息をつき一言。

「「なつてないわ。日本では食事のマナーもろくに習わないのね」」

何言ってるか分かんないけど、絶対あたしのことけなしてるんだわ。

その横では、ダリルさんがあたしとアレクサンドラさんの会話なきやり取りを見て、にやにやと笑っている。

そして極めつけは王子。

前菜から幾つめの皿が並べられても、一向に手をつけずにいる。隣でぐちゃぐちゃかき混ぜられる料理にイライラが止まらない。

どんなに豪華で、どんなに高級で、どんなに美味しい料理でもさ、こんな環境で食べておいしいはずがないでしょ？

料理と一緒に食べる人が重要なんだなって、すっごく実感した。あの騒がしい我が家の食卓が懐かしい。

今頃、あの子たちは何を食べてるのかな？一応、軽く料理を作ってきたけど……………。

って、頑張って現実を見ないように、見ないようにと思いを明後

日に向けているのに、このバカ王子！

『チカ〜。ジュースおいしい？飲んでもいい？』

心をくすぐる甘い声が聞こえたかと思ったとたん、王子があたしのグラスを勝手に取った。

グラスに口をつけたかと思うと見る間に赤い液体がなくなる。

「ああ！」

『あ！けっこう飲み心地すっきりだね』

にこつと極上の笑顔。

思わず上げた非難の音が、その眩さの前に力をなくす。

そつとグラスを口から離し、軽く口の端を拭う王子の仕草は、妙に艶やかで、ドギマギしてしまう。

王子が口にするだけで、ただのトマトジュースが芳醇なワインのように見える。

まるで美女の血を滴らせるドラキュラみたい。あたしとトマトジュースのコラボじゃ、やぶ蚊ぐらいにしかないのに……。

ポカンと見惚れてしまったあたしに構わず、王子はホールスタツフを振り返る。

『彼女に同じものを』

王子の言葉に素早く、黒の燕尾服がとっておきのトマトジュースを持って現れる。

とくとくと注がれる赤い液体と同じくらい、きつとあたしの顔も真っ赤。

そんなあたしの顔をのぞき込んで、王子が上目使いに見つめてく

る。

『チカって、本当においしそうに食べるよね。なんか食べたちゃいたいぐらい可愛い』

柔らかく目を細め、あたしのお皿で休憩中のフォークを手にして、あたしのお皿の真ん中にお肉をプスリと刺す。

『はい！』

蕩けそうなほど甘い笑顔で、当り前のようにあたしの口にお肉を運んでくる。

ちよ、ちよっと待って！何？そのはい、あぐんって感じのフォーク使い。

「ちよっと！自分で食べれるよ！」

断るように身を引くが、王子が一向に手を引つ込めない。

あたしが口にするのを今か今かと待ち構えている。

これ、どういうこと？そんなにあたし、食べるのが下手だった？イジワル王子がからかうのも忘れて、思わずフォークしようと思っくらしいにダメダメだったの？

これでも結構頑張ってたのに！

ちよっと泣きそうだ。でも王子は輝かしい笑顔のまま、じっとあたしを見ている。

何よ！その楽しそうな顔は！

さつきまでつまらなさそうに、料理をかき混ぜてたのに。

これはフォロー？それとも趣向を変えた新たなイジワル？

『もっと間近でチカの食べる顔が見たい』

「見てられないほど、へタならそう言ってよ！そんなフォロー、逆に心苦しいよ！」

いつもからかってばかりなのに、ふいに優しくされたら困るよ。あたしは断るように顔を横に振った。

いらないの意思表示。でも、王子は断固手を引っ込めない。

『チカ、早くしないと冷めちゃうよ？』

「も〜！料理食べるだけでもいっぱいはいなのに、上手にあげるんを受け取る自信ないよ！」

『チカが食べないなら、僕が食べちゃうよ』

意味ありげにフォークを揺らし、あたしの出方を窺う王子。

そんな姿もなんだか格好いいなんて、許せない。

もうこれは、絶対に食べてやらないんだから！

「なんで自分は食べないのに、あたしの食事に構うのよ！」

『遠慮しないで、はい』

ねつとばかりに小首を傾げる王子が急に幼く見える。

それ、ずるいよ。格好いいくせに、甘えたポーズなんて取って。

そんなの抗えないじゃない。

心とは裏腹に、あたしの口はおいしそうな香りに惹かれるように王子の持つフォークへと向かう。

もう少し。そっと唇とお肉が触れ合う。

ガマンできないっ！

『やっぱり、あげない！』

ぱくつとお口で捕まえたはずのお肉の味がしない。

それどころかあの香ばしい香さえも遠ざかっている。

あれ？なんだか空気みたいな感触がするよ？

『騙された！』

豆鉄砲を食らった鳩のように目をしばたくあたしの横で王子が楽しそうな声を上げた。

その手に握られたフォークの先にはさっきあたしが食したはずのお肉が……。

……くそ。やっぱりこの王子は、とてつもなくイジワルだわ。

こんな簡単なトリックにひっかかるあたしもあたしだけどさ。

でも、優しくすると見せかけて、なんでさらっと掌を返すようなことするかな。

「王子、千佳さんが困っていますので、それくらいに……」

うるたえるあたしに代わって、セバさんが困った顔で王子に何かしら声をかけている。

うつ……流石セバさん。

一流の執事はフォローのタイミングも心得ている。

「だってつまらないんだ。せつかく日本に来たのに、ありきたりな料理ばかり。楽しいのはチ力をからかうことぐらい」

「殿下、お気持ちは分かりますが、しかし一国の王族としてその態度はいかがでしょう？お嫌いなものでも何食わぬ顔で口にするのがマナーなのでは？」

「せつかくの息抜きだつてのに、お小言は十分だよ。外では卒なく振る舞っているだろ？それ以上に何を望むんだい？副大使」

「しかし……」

セバさんの言葉に王子はこれでもかため息をつく、あたしのフォークで自分の皿を叩く。

「一気に食事を取る気がなくなつたよ」

投げるようにフォークを更に置くと、王子はいらないとばかりに自分の目の前の料理を奥へと押しやった。

え？ちよつと、それはないんじゃない？

確かに王子、あなたは格好いいわ。誰もが心惹かれる笑顔だよ。

あたしも正直、何度トキメイタか分かんない。

でもね、どんなものであれ、心をこめて作った人がいるのに。それなのに、その態度。

作った人をないがしろにしてる以外の何ものでもない。ずっと視界に入らないように気をつけていたのに……。

視線の先で、そんなことされたら、今までの我慢が、あつという間に吹き飛んでしまう。

「ちよつと！あなた、何様のつもりよ！もちろん王子様とか答えな

いでよね！食べ物粗末にして、何が王子よ！あつたまきた！」

勢いよく立ちあがると、弾みで椅子が倒れた。あたしはびしっと王子を指さす。

「世の中にね、食べたくても食べられない人がたくさんいるのよ！それなのに、あなたはちよつと贅沢できる立場だからって！それをカサに着て、せっかくの食事を無駄にするなんて許せない！どんなに気に入らなくても出されたものは笑顔で食べる。これは世界共通の常識でしょ？」

ついに堰を切ったあたしの怒りは留まるところを知らない。

急に声を荒げたあたしに驚いたように王子が目を見開く。その横で同じようにセバさんが目を瞬いている。

「そんなモツタイナイことしてたら、ワンガリ・マータイさんがやっつて来るぞ！」

『ワンガリ・マータイ……。それってケニアの環境大臣？』

呆氣にとられた王子がポツリと呟いた。

でも、そんな英語、絶賛お怒り中の千佳ちゃんの耳には届かない。王子が押しやった料理の皿を掴むと高々と掲げて、宣言する。

「食べないんなら、あたしが全部食べてあげるわ！」

『え？』

「千佳さん？」

円卓についた人だけじゃない、部屋の全ての視線があたしの持つお皿に注がれる。

側でかしくまって控えていたホールスタッフを振り返った。お皿を持つ手とは反対の手を差し出し、叫ぶ。

「すみません！お箸をお願いします！」

乙女のポリシー（前書き）

セーラーMoonというアニメのエンディングから拝借しました。内容はうる覚えなのに、なんで昔見たアニメソングって耳について離れないんでしょうね？

乙女のポリシー

もうお腹一杯で動けない。でも取りあえず……。

「食べきった〜!」

あたしはフォークを天井に向けて、勝利のポーズを取った。
シャンデリアの光を受けて、銀食器がきらりと光る。

おおっと場がどよめいた。

同じテーブルについている人はもちろん、壁に控えているペス達
やホールスタッフの人達までも皆が皆、異様なものを見るかのよう
に目を見張っている。

中には拍手を送ってくれる人も。

いやいや、皆さん、そんなに見つめられても困るよ。なんて言
うか、人として当たり前のことをしただけ。あたし自身、そんな立
派なことしてるつもりないのよ。

なんて心の中で謙遜しつつも、ちょっと気分のいいあたし。

なんていうか、してやったりって感じ。

宣言通り王子の分と自分の分の両方を食べきったあたしに、その
場にいた人はみんな、目を丸くして驚いていた。

あのアレクサンドラさんでさえ、あたしを非難するのを忘れて、
カラになった皿を見つめていた。

どんなもんだい!

って、女の子としてアピールする部分が違うのは分かっているんだ
けどね。

でもちよっとでも意趣返しになったなら、頑張った甲斐があるっ

てもんでしょ？

どうだ？王子。これでちょっとは、あたしに対する態度を改めて……。

ってあれ？王子様？

カタンつと椅子を鳴らすと、王子は無言で立ち上がった。

『先に部屋に戻るよ』

つまらなさそうな顔でぽつりと呟くと、あたしに背を向ける。

「え？」

そんな王子に、さっきまで寝ていたはずのヤマネ君が音もなく壁を離れる。そつと卒なく付き従う。

いつも寝てるのに、彼は意外に出来る男なのかも？

だってペスはワントンポ遅れて、ついていくタイミングを失ってうるたえている。

うん。それでこそペスだ。期待を裏切らないウサギっぷり。

「殿下、お待ちください！」

慌てて立ち上がったアレクサンドラさんが、王子の背を追った。

テーブルを離れる際に、その美しい瞳でこちらをきつと睨んでいく。

「なんて品がないのかしら。同じ女として呆れてしまっわ」

わくなんて冷やかな眼差しなんでしょう。

絶対にあたしをけなしたんだよね。せっかくのやりきった感が台

無し！

何か言い返そうかと思ったけど、もうお腹が限界で、頭が回らない。

はち切れそうなお腹で、何かを叫ぼうとしたけど、その前に三人はさらっと食事の場を去ってしまった。

彼らが去った後に残されたのは、行き場のないあたしの怒りとしてらけた微妙な空気。

うわ、何？この居づらい空気。

頑張ったはずのあたしが、若干イタイ子みたいに思われる？

これは素早く撤退しないと。ここにいると、更に墓穴をほりそう。

「すみません、先に部屋に帰ります」

あたしは素早く立ち上がり、セバさんに頭を下げた。

「え？ええ、もう今日の予定もありませんし、千佳さんはゆっくり休んでさって結構ですよ。それよりも、体調は大丈夫ですか？」

虚を突かれたように、王子の去った方からあたしのほうに視線を移したセバさんが心配げに眉を寄せた。

「だ、大丈夫です！きつとすぐ消化できると思うし……迷惑かけてすみません」

本当にセバさんは優しいな。

そんな穏やかな瞳で見つめられるともっと自分が居た堪れなくなる。

「いいえ、殿下が大変失礼を。私どもも当り前のことをご注意差し上げることができなく恥ずかしく思っております。千佳さんの行動

に殿下も思つことがあるでしょう。シーリエントの代表としてお礼申し上げますよ」

「そ、そんな……大げさですよ！」

「いえいえ。食に対する敬意。これは大事なことですよ。ご両親は大切に心をこめて千佳さんをお育てになつたのですね。教育とは、形式ではなく内面であると気付かされました」

席を立つと、セバさんはかしこまるようにそつと胸の内に手を持つていく。

そんな態度を取られたら、あたしの方が困るよ。

あたしはただ腹がたっただけだし、それに食い意地はつてるだけ。そんな風に敬意を払われるとどうしていいか分かんない。

最上級の褒め言葉が気恥しくて、あたしは慌てて誤魔化すように手を振った。

「ありがとございます。そんな風に言ってもらつて、すごく嬉しい！」

「お礼を言うのは私どもですよ。ああ、それでは部屋まで案内を……」

「え？大丈夫ですよ！そんなこと！」

気づかわしげに部屋の中に視線を漂わせたセバさんを慌てて制した。セバさんは穏やかに微笑む。

「貴女はご両親から大切にお預かりしているお嬢様です。これぐらいは甘んじて受け止めて下さい」

うわ〜セバさん。あなたはやっぱり執事だよ。

あたし、生きてきて今までお嬢ちゃんと呼ばれたことはあっても、お嬢様なんて呼ばれたことなんてない。

そんなお嬢様扱いされると、体の奥が恥ずかしさでむずむずしちやう。

それにあたしのお父さんがこの世にいないことも知っているのに、両親から預かっているって言うってくれる。そんなあなたがホントに好きだな。

『クライブ君、千佳さんをお部屋まで案内して差し上げなさい』

優しいが有無を言わせない響きのセバさんにペスは一瞬嫌そうに眉を寄せたが、壁を離れ部屋を出た。

『君、早く行くよ!』

苛立たしげな声に導かれ、あたしは白うさぎについて不条理な世界に別れを告げた。

センチメンタル・パレードックス

ホント腹立つ。

ペスの背を睨むように見つめ、後ろをついて歩く。

その間、あたしのムカムカ力は止まらなかつた。

これは食べ物を消化できずにいるムカムカなのか、それとも割り切れない感情を昇華できないムカムカなのかは分からない。

でも、これだけは決めた。

このバイトが終わったら、もう二度とシーリエント王国なんかとは関わらない。

セバさん以外はホント、ありえないほどむかつくんだもん。ペスに、アレクサンドラさんもちろん。

極め付けは王子ね。

からかって、馬鹿にいいして、自分の思い通りにならないとそつぱを向く。

これってどうなの？人としてホントありえない。

こんな人が国の代表である王子でいいの？

あたしの中のシーリエント・ダウは大暴落。

メイド・イン・シーリエントは絶対に買わないんだから！

うちの弟妹たちが、この人と結婚するといつてシーリエント人を連れて来ても、ずええつたいに認めてやらない！

ノーモア・シーリエント！シーリエントは買わない、売らない、持ち込ませない！

これが今後の中澤家のルールよ！

やっと自分の部屋で落ち着ける。

ペスに案内されたのは3階の一番端の部屋だった。

ホテルの裏手になるらしく、最上階のような素晴らしい見晴しは期待できない。

それでも流石は高級ホテルだ。一番グレードの低い部屋でもこの広さ。

「すつごい！」

ペスがいなくなった瞬間、あたしは間抜けな感嘆を洩らした。

だって、こんなステキ空間に一人で寝ていいんだよ？冷暖房完備なんだよ？

うちでは薄い布団の上にタオルケットをかけて、時々窓から吹き込む熱気を含んだ夜風に寝返りを打つばかり。

うちに比べれば、ここは天国だ。

落ち着いたアイボリーと黒を基調にした部屋はスタイリッシュで、部屋の真ん中には一人用とは思えないほど大きなベッドが置いてある。

ベッドの反対側には鏡台と机があり、机に置かれたランプが落ちていた明かりを落としていた。

こうなつてくると、あたしの好奇心はうずうずとつずき出す。

正直、今すぐベッドに転がりたいほどにお腹が重い。でもこのまま何もしないなんてもつたないでしょ？

探検だとばかりに、手当たり次第、扉を開ける。

扉を入ってすぐの左の引き戸はクローゼット。反対にある黒い扉はバスルームらしい。

お風呂はヨーロッパスタイルで、トイレと一緒に。

生粋の日本人であるあたしは、広々としたトイレって落ち着かないな。

自分が用を足している姿が大きな鏡で見えちゃうんだよ？

バスルームはこれでもかって広々している。

白いバスタブには銀のジャグジーなんかついて、高級感が垂れ流

しだ。しかも足を伸ばしてもまだあまりある広さ。
そんなバスタブの反対にある洗面台には大きな鏡がある。

「わ〜お風呂から出た瞬間の自分が見えるってかなり恥ずかしくない？これはいただけじゃないよ」

なんて勝手気ままな感想を漏らしたあたしの視線が洗面台の上に置かれた物を捕えた。

「これって勝手に貰って行ってもいいのよね！」

ファンシーな色のアメニティグッズを手にとると、思わず感動に打ち震えてしまった。

「ホテルって最高〜！」

弾みだす心でスキップを踏むとあたしはバスルームから出た。

もうさっきまでの腹立たしさも心の痛みも、ついでに苦しいまでの満腹感もどこかに吹き飛んでしまっている。

そうよ。王子よりも目先のアメニティよ。

窓際には絶対に座り心地がいいであろう、もふもふのソファが2脚、黒のお洒落なテーブルを挟んで向き合っている。

一度ベットの上で飛び跳ねたあたしはそのままの勢いでソファに乗っかり、軽く跳ねる。

気持ちまで飛んでいきそうなほどに柔らかくて、嬉しくなってきた。嬉しくなってきた。

きつとセバさんが見れば、困ったように眉を寄せてあたしを咎めたかな？

どんなに魅力的なお嬢様扱いも、解き放たれた素直な欲望には敵

わない。

子供みたいだけど、ベットがあつたら跳ねる。それが大きなベットだと尚更跳ねまくる。

こればかりは抗えない欲なのです。

視線をあげたあたしが次のターゲットに捕らえたのは、上品な光沢のあるカーテンの向こう。

弾むようにカーテンを開け放った。窓を開ければ小さなベランダに出れる。

あたしの部屋が一番左端にあつて、その左の壁伝いに非常階段がある。

なるほど有事の際はここから脱出ね！

「ちゃんと非常時を意識してるなんて、あたしってなんて賢いの！」

なんて自分を褒めてみる。

そんなあたしの髪を生暖かな夜風が冷静になれよとばかりに揺らしていく。

なんだが一人はしやぎまくった自分が馬鹿らしく思えてきた。

「はは………なんだか疲れちゃったな」

あたしはがくりと肩を落とし、窓を閉めた。

ミルクの魔法使い

ベッドの側には、先に運ばれていたあたしのポストンバッグがある。

お風呂でも入ろうと、そこから自分の荷物を引っ張り出した。

「これ、どうしよかな？」

ポストンバッグの底に入れていた、お弁当袋を取り出し、あたしは恨めしげに見上げた。

まさかご飯まで一緒に食べさせてもらえらと思わなくて、一度家に帰った時に、あり合せを詰めてきたのだ。

「もう食べる気がしないよ。もったいない」

お弁当袋を掲げ、あたしは深いため息をついた。

「どうしよかな？朝ごはんにしちゃう？」

いっばいっばいのお腹を抱えて、恨めしげにお弁当袋を見つめる。

その時、服のポケットに入れていた携帯電話が鳴った。

サムデイ・マイ・プリンス・ウィル・カム

愛らしい音楽に慌てて携帯電話を開いてみる。ディスプレイで点滅する文字に、あたしの心が躍った。

「あー！実希ちゃん！」

通話のボタンを押すと、馴染みのかん高い声が聞こえた。

「千佳ちゃん！聞いたよ。王子様と一緒にいるんだって？」

興奮気味の幼馴染。でも今は、その声が心の底から落ち着く。

声を聞くだけで、実希ちゃんがどんな顔をしているのかも分かっ
てしまう。

きつとあの、ふくよかな顔でミルクみたいに優しく微笑んでる。

さすが実希ちゃん。高校になって学校が離れても、生活リズムが
違っても、あたしのピンチを察知してくれるのね。

「実希ちゃん、情報が早いね。そうなの、今日は色々あって……」

いろんな事がありすぎて疲れきった心が、その鎧を脱ぎ棄てる。
本当はいつもお金がかかるから携帯電話で長電話なんてしない。
でも今日はいつまでも実希ちゃんと話していたかった。

無条件であたしを受けれてくれるマリア様のような実希ちゃんの
声に触れて、なんだか泣いてしまいそう。

ただ相槌を打ってるだけなのに、頑張ったねって言ってくれてる
みたい。

あたしは堰を切ったように、今日あったことを全て実希ちゃんに
話した。

白い紙が降ってきたことから始まり、王子を助け、王子のバイト
になったこと。初めて足を踏み入れた大使館の話に、大使館のメイ
ドさんに怪我を治してもらったこと。

聞いたこともないシーリエントが教科書に載っていること。その
シーリエント人の役人はみんな個性的で不可解なこと。

もちろん幸村さんに警察手帳を見せられたことも。

「あのね」という度に、実希ちゃんは先を促すように「うんう

ん」って答えてくれる。

一通り、話し終わると実希ちゃんは感慨深げに息を吐いた。

「ほんと、千佳ちゃんはとんでもない運の持ち主よね。前々から思ってたけどさ」

「それ、どういう意味？」

ちよつと非難まじりに唇を尖らせると、電話の向こうで実希ちゃんがごろごろと笑い声をたてた。

「それよりも！幸村さんとマメシバのカップリングが素敵ね！側で直に見れる千佳ちゃんがうらやましいわ！」

「え？王子じゃなくて、そこ？」

さらつと話を変えられたけど、まさかの着眼点に聞き返してしま

う。何故ここで幸村さんとマメシバがでてるの？そこはさらつとした小話で、重要なのは王子とあたしのバイトのことで……。

「警察つてだけでもポイント高いのに、S・Pっていう特殊な環境がいいわ！冷静沈着なドールマンと愛らしいマメシバ！これぞ萌えよ！千佳ちゃん！」

え？萌え？まさかの回答に、携帯電話を落としそうになった。

「も、もしもし、実希ちゃん？」

「話を聞いたただけなのに、想像が膨らむわ！もうついちゃいそう！」
きゃはーって、あなた。あたしそっちのけで、盛り上がらないでよ。

そう、実希ちゃんはいわゆる腐女子なの。男の人同士の恋がいいんだってさ。

あたしには理解できないけど、まあ、実希ちゃんが楽しそうで本当に良かった。

でも何で、幸村さんとマメシバなのかな？

「千佳ちゃん、バイトはいつまであるの？きつと王子が来日中はずっと一緒に行動するんだろうな。いいな、千佳ちゃん」

「王子と一緒にいたいなの？」

まさか実希ちゃんも王子ファンクラブ？

「うっん、ユッキー&豆のこと」

なんだ、そのあだ名は。そして王子は興味なしなんだ。それもそれですごいな。

TVや雑誌でしか見たことないからかな？実物はトンでもなくすごくて、きつと実希ちゃんも心奪われちゃうかも。

「えっとな」

あたしは聞かされている王子の日程を実希ちゃんに教えようと、日程の書かれたメモを捜した。

その時……ドンドンドンドンドン！

激しくドアを叩く音がした。

部屋全体に震動が走る。

な、なんだ？こんな時間に何事？

携帯電話を握ったまま、あたしはポカんとドアを見つめた。

ずっと続くノックの音は、必死で何か火急の用事なのは明らかだ。ついドアに釘付けになったあたしを氣遣うように、電話の向こうで実希ちゃんが声をかけてきた。

「千佳ちゃん？どうしたの？」

「誰か来たみたい」

「きゃはー！もしかして、王子様？」

実希ちゃんが興奮するよつに声を上げる。

「違う違う。きっとペスとかセバさんだと思う。ちよつと出てくるよ」

「そう。じゃあ、また続きは今度聞かせて」

「うん、りょくかい！いっぱいネタを見つげとく。おやすみ、実希ちゃん」

「あ、最後にこれだけ。千佳ちゃんは千佳ちゃんらしくいれればいいんだよ。色々大変なことあると思うけど、でも大切なのは千佳ちゃんがどう思うかだから」

おやすみ、そう言って実希ちゃんは電話を切った。

本当に実希ちゃんはずごいな。こつもさらつとあたしに素敵な魔

法をかけてくれる。

さっきまでささくれ立っていたあたしの心がじんわり温かくなる。

「ありがとう、明日も頑張れるよ」

もう繋がっていない携帯電話にそう呟くと、あたしは素早くドアの方へと向かった。

「はいはい！どちら様？」

ゆっくりとドアを引いた瞬間　　。

赤い旋風

『殿下はここにいるの?』

バンッと勢いよくドアを開け叫んだのは、まさかのアレクサンドラさん。

あまりの勢いのよさに、ドアに巻き込まれそうになる。というか、鼻の頭がぶつかったんだけど……。

「な、な、な……」

ビククリしすぎて、声がでない。

ぴりりと沁みる鼻の頭を撫でながら、あたしは呆然と目の前に立ちただかった美女を見つめた。

何故だか怒りに満ちた顔。厳しくつりあがっていても、美しさを損なわない濡れた瞳。

その全てがあたしに向けられている。

『貴女……殿下を匿ってないでしょうね?』

「何かあったの?なんでアレクサンドラさん?」

『いい訳は結構よ!殿下を出しなさい』

まくしたてられる英語がさっぱりで答えに窮してしまつ。

でもさ、なんでこんなに頭ごなしに怒ってくるのかな?意味が分からなくて、さすがのあたしも力チンとくる。

日本に来たんだから、郷に入りては郷に従え。

基本は日本語でしょ?なんで英語を世界共通語だと思つのよ!

今にも掴みかかりそうなアレクサンドラさんに負けじとあたしは通路の真ん中に立ちはだかった。

正面から美しい瞳を見返すと胸を逸らした。

「何を伝えたいか知らないけど、一応自効努力してみなさいよ！辞書片手にカタコト日本語とかさ！王子だっていけすかないけど、でもカタコト日本……」

「まあ！私に楯突くの？」

「「こらこら、サーシャ。決めつけはよくないよ」「」

火花を散らす日本VSシーリエントの女同士のガチンコバトルに水を差したのは、呑気なダリルさんの声だった。

『お嬢ちゃん、殿下が部屋から行方不明になったんだけど、君の部屋に来てない？』

細い目をさらに細めてダリルがあたしを見る。

「え、えっと……」

「「ほら、答えに窮しているわ。殿下はここにいるのよ。殿下はきつと自分が逃げ出す隙をつくるために彼女を雇ったのよ」「」

「「それは穿った見方だよ。サーシャ」「」

「「だっから、サーシャなんて呼ばないで！」「」

アレクサンドラさんは噛みつかんばかりに、ダリルさんに食ってかかる。

ダリルさんは上手に距離を取りつつ、楽しげに目を細めた。

「君はホントになんでも必死だな。可愛い」

「かつ！可愛いですって！！馬鹿にするのも、大概にしなさい！さ、さもないと……」

「さもないと？」

からかうように小首を傾げたダリルさんは、自分の思い通りに翻弄するアレクサンドラさんをご満悦の表情。

見る間に余裕がなくなっていくアレクサンドラさんはやっきになつて、ダリルさんのネクタイを掴もうと手を伸ばした。

しかしアレクサンドラさんがネクタイに触れる前にダリルさんがその手を掴む。驚いたように目を見開くアレクサンドラさん。

ぴつと動きを止めた彼女が口を開くよりも早く、ダリルさんはそつとその白魚のような手の先に口付けた。

眼鏡の奥で細められた目が試すように彼女の反応を窺っている。

「さもないと、どうなるのかな？クイーン・サーシャ？」

そのやり取りがなんだか色っぽくて、あたしはさっきまでの腹立たしさを忘れて、ドキドキしながら見守っていた。

うわ〜海外ドラマみたい。セックスアンドシティ？それともビバリーヒルズ青春白書？

「な！何をするの！離しなさい！不届き者！！」

激しく手を払ったアレクサンドラさんの顔は若干赤かった。

確かに爪にキスはダメだね。まあ、どこにキスされてもダメなものはダメなんだけどね。

二人がどんな関係か知らないけど、他人ならなおさら。

いくらキスがあいさつな西洋の人だって、このタイミングでそれをされたら戸惑うと思うわ。

勝手にアレクサンドラさんの気持ちに共感して、うんうんと頷いていると、怒りの矛先があたしに向いた。

『貴女、殿下はどこにいるの？隠してもいいことはありませんよ！』

わあ！だから、噛みつくようにまくし立てるはやめてってば。

「ちよつと、何聞いているか分かんないけど、ゆっくり、簡単に言っ
てよ！えつと……イージー&スローリー。そんでもってワンモアプ
リーズ！OK？」

『だから……簡単って言われても……。じゃあ、王子、どこ？』

ウェアー・イズ・プリンス？って、言ったの？

まさかまたまた王子様は脱走を図ったの？

あんなに素敵な部屋があるのに、何が気に入らないんだろう。

「え〜！またいなくなったの？アレクサンドアさん、王子と一緒に
部屋に帰ったんじゃないの？」

非難の声を上げるとアレクサンドラさんがむすつと顔をしかめた。
バツが悪いのか、あたしからそつと視線を外す。

『何よ、その顔。ええ、確かに私、先ほどまで殿下と一緒にいまし

たけど、でも、殿下が一人になりたいって言うから……」

「サーシャ、それは言い訳」

乾いた笑みでダリルさんが突っ込むと、凶星でも指されたのかアレクサンドラさんはやっきになって叫んだ。

『そんなことはどうでもいいのです！貴方は知っているの？殿下の行方を！YES？それともNO？』

そんなに叫ばなくても聞こえてるよ！聞こえてるけど、聞きとれないだけ。

きつと王子の行方を聞いているのよね？必死に王子を探すアレクサンドラさんに申し訳ないけど、でも、実際知らないから仕方ない。

あたしはこれでもかってほど顔を横に振ってみた。

「えっと、アイ・ドント・ノー！」

「知らないってさ」

「いいえ、知らない振りをするように殿下に言われているのかも……」

「サーシャの気持ちも分かるけど、彼女の部屋に隠れるくらいならきつともう外に逃げ出しているよ」

「何、分かった顔してるのよ！大体こつも毎回逃げ出されて貴方は何も思わないの！貴方の警備指揮がよくないから、編み目を潜りぬけられるんですよ？」

今度こそ、アレクサンドラさんはダリルさんのネクタイを掴み、
これでもかとぐいぐい締めあげた。

「もくなんでこうなるの！国ではあんなにも出来た人だったのに
！変わりすぎよ！」

「りよ、りよこうだから、は、はっちやけてるのかも……」

「おだまり！」

ぱつとネクタイを離すと、アレクサンドラさんはぱりと髪を揺
らして、あたしに背を向けた。

「こうなったら東京中をくまなく探してやるわ！今すぐに検問を
敷きなさい！ミスタ・グレン！」

高いヒールをかつかつと鳴らし、足早に離れていく。その後ろ姿
は毅然としていて、腹立たしいはずなのに、格好いいと思っ
てしま
う。

呆然と去りゆくアレクサンドラさんを見送るあたしを見下ろし、
ダリルさんが困ったように目を細めた。

『邪魔したね、可愛いお嬢ちゃん。ゆっくりとお休み……』

ダリルさんは締められたネクタイを緩めながら、やれやれと首を
振った。そして麗しい女王の背を追うように足を向ける。

悠々とした足取りで離れていくダリルさんの小さな呟きが、ため
息と共にあたしの耳に届く。

「俺が本気なら、何者も通しはしないさ。……そう、陳腐な茶番

は行わせない」「

その擦れるような言葉が不穩に聞こえたのはあたしの気のせい？
理解できない言語が不意に意味を帯びたような気がしたのは、い
つも軽い調子の彼の言葉が沈んで滲むように聞こえたから？でも、
意味を問うこともできない。

ただその小さくなっていく背を見つめるだけ。

ほらね

王子はまたまた行方知らず。

さて、あたしはどうしようか。このまま、お部屋でゆっくりしちゃう？

それとも王子を捜しに行く？

……いやいや、別に捜してほしいなんて言われてないし……。

もうバイトも時間外だし。明日に備えて早く寝なきゃね……。

なんて自分に言い訳を試みたり。

でも後ろ髪が引かれて、何故だかドアが閉められない。

だって困っているのを知っていて、自分だけくつろぐなんてちょっと気が引けるんだもん。

根っからの小市民なんだよね。

いいと言われても落ち着かないというか……。気になって仕方ないというか……。

「ああもう！ ゆっくりなんてできないよ！」

あたしはドアの前でぐるりと方向転換をした。

右手に携帯電話、左手には何故だかずっと握ったままのお弁当袋。ボタンとドアが閉まる音が遠くに聞こえる。

その時にはもう、思うままに駆けだしていた。左右に揺れるポニテールの誘う方へと足を向ける。

直感って言うのかな？

あたしは一つ確信していることがあった。

きつと王子はまだホテルにいる。きつとどこかに身を隠して楽し

んでいるんだ。

王子は人をからかうのが好きで、人を小馬鹿にばかりしてるけど、でもけして傷つけることはしない。

一緒にいてこれだけは分かった。からかっていても、どこか気遣ってる気がする。

だから、あえて人が休む時間に遠くに行ったりはしないと思うんだよね。

じゃあ、どこに隠れてるかって？きつとね……。

あたしは最上階の王子の部屋まで行ってみた。

しんつと静まり返ったフロア。

誰もいないのかな？

みんな外に王子様を捜しに行ったみたい。

可哀想に。トランプの兵士達は女王に王子にと振り回されて、落ち着く間もないのね。

それにしても誰も留守番してないなんて、ちよつと不用心だよね。まあ一応、エレベーターで最上階に行くには専用のパスを入れないうシステムになってるんだけどね。知らない人がやすやすとは入り込んでこれないようになってる。

セバさんが何かあつた時に教えてくれた暗証番号がこんなに早く役に立つとは……。

そつとドアを開けて、辺りを窺うように部屋に入る。

まるで泥棒さんみたいね。でも招かれざる客のような気がして、堂々と入れない。

僅かに開いたドアの隙間から入ると、後ろ手でパタンとドアを閉めた。

相変わらず入るのがためらわれるほどに豪華な空間。

見惚れそうになる気持ちを振り切り、そのまま部屋を突っ切るとあたしは広いバルコニーに出た。

優に10畳はあるかな？そのバルコニーからは100万ドルの夜景が見渡せる。

夜の闇に輝くとりどりのネオンは目を奪われるほどに美しい。

普段の喧騒は夜に沈み、泡沫の夢だけが真つ暗な闇に煌々とキラめく。

神様から見た地球はこんな光景なのかな。

日常を離れたこの幻想を見ていたいな。このまま、優しく流れる夜風に吹かれて……。

朝が来るまで、ずっと……って、いけない。

ここに来た目的を忘れるところだった。

ふらふらとバルコニーの白い手すりの方へと近付いていこうとする自分の足に待ったをかけた。

確かに綺麗な光景だけど、でも、あたしの目的はこれじゃないでしょー！

目の前の光景に惹かれる浅はかな自分を追い払うように、激しく頬をはたいた。

「そう！王子よ！」

その衝動に抗うとあたしは夜景に背を向けた。

ぐいっと顔を上げた先にあるのはホテルの屋上。

でもここからだとならの方は見えないようになってる。

バルコニーの半分を覆うのは、ふんわりドーム型の屋根。まっ四角な建物なのに、このホテルは最上階だけ西洋のお城のようになってる。

「そこにいるんでしょー！」

屋上に向かって大声を上げた。
でも応えるのは、緩やかに流れる夜風だけ。しんっと静まり返り、
下界の騒がしさも届いてこない。

「何よ。しらはつくれるつもり？」

屋上からは、物音ひとつしない。
だけど、あたしは確信した。王子の隠れた場所を。

悪いわね。あたしは隠れん坊の鬼が得意なの。
うちのちびちゃん達はあたしに怒られると思うとすぐにどこかに
姿を隠す。

こんな所にまで……って場所にも平気で隠れる。
その中で一番多いのは、高いところ。木の上や押し入れの上の部
分なんて基本中の基本。

一佳なんてよく屋根に上って屋根伝いに隣の家へ逃げ出す。
自分の目線より高くなるからか、絶対に気付かれないって思うみ
たい。

それとも高い場所が本能的に好きなのかな。
よく言うもんね。馬鹿と煙は高い場所に上りたがるって。

あたしは手すりに登ろうと、一歩足をかける。
途端、下から突き上げる風にスカートがめくれた。
思わず下を見てしまって、あたしの足がピタリと止まる。
眼下に広がるのは、夜の海に輝くネオンの星々。
もしこのまま真つ逆さまに落ちたら、夜の海で楽しく泳げるかな
？ネオンでキラキラしたイルカと追いかけてこよ！

なぐんで。思わず背筋が凍りそうな高さに見実逃避を試みたり。きつとこのまま落ちたら、本当にお星様になっちゃうね。

「うん。無理だ」

あたしはすっぱりと諦めた。

人間、諦めが肝心よ。オレはやるぜ！みたいな少年マンガ的無茶な勇氣、全然湧いてこないもん。

誰だって、この高さに立って上に登れるなんて自信生まれてこないよ。

こんなコト、思いついて即実行できるのは、長身で何でも卒なくこなせる王子様ぐらいよね。一般ピープルにはとても無理。

あたしはぱつと手すりから足を離すと素早くバルコニーを後にした。

部屋を出て、すぐに見つけた非常口のドアを開けると、あたしは足早に鉄の階段を上った。

屋上の出入口の鍵を開け、バンとドアを開け放つ。

ほらね。

あたしは隠れん坊の鬼が得意なの。

ゲーム・セット

やっぱり、ここにいた。

あたしはほつと息をついた。

ドアの向こうに広がる屋上は視界を遮るもの一つなくて、どこか寂しげ。

張り巡らされた安全柵と端に置かれた貯水タンク。それ以外何もなくて、豪華なスイート・ルームを見た後はとても殺風景に思えてしまう。

何もない空間をゆったりと生温かな夜風が流れていく。

薄暗い屋上は、外からの明かりを受けて、僅かに物の形が分かる程度。

でも、そこにいるのが誰かすぐに分かった。

視線の先にあるのは、長身を曲げて安全柵に肘をつき、遠くを見つめる影。

出会ってまだ一日。でも一目で分かる。その姿形を見間違えるはずない。

すらっとした長身。さらっとしていて、耳にかかる程度の長さの髪。ほっそりしてるのに意外としつかりした体。

その全てがあたしに答えを与える。

ゆっくりと足を進める。

近付くにつれ、形がはつきりとしていく。

はだけた白いシャツに、紺地のズボン。ネオンを受け輝く髪は夜風に揺れて、まるで生まれたばかりの星のように儚げ。

深い情熱を宿した瞳が、夜を映して妖しく煌めいた。

でもその瞳はずっと深い夜の海に向けられたまま。
手を伸ばせば触れられる所まで来てもまだ、王子はこちらを振り
向きもしない。

ちよつと、シカト？あたしのこと、気付いてるでしょ？

気付いてるくせに気付かないふりしてるなんて、ホントに性格悪
いな。

小さくため息をついて、あたしはそつと王子の肩に手を触れた。

これでチェックメイトよ、王子様。鬼ごっこはもう終わり。

「見つけた。王子様は隠れん坊が下手なのね」

横に並ぶようにして、あたしも安全柵に手をついた。

眼下に広がる夜景は、さつき王子の部屋で見た光景よりも鮮やかに見える。にじむようなネオンの輝きが、より煌々と目に焼きつく。きつとここは、隣にいる人の姿さえぼやけて見えない闇の中だからね。

だからより鮮明に、光輝いて見えるのよ。けして、隣にいるのが王子だからじゃない。

「アレクサンドラさん達が必死に捜してたよ。もう、戻ろう」

「…」

無視ですか。

絡んでくる時はうざいぐらい絡んでくるのに、自分に都合が悪そうな時は無視ときたもんだ。

せつかく捜しにきてあげたのに、その態度はないんじゃない。

あたしは気分を害されて、ぶすりと頬を膨らました。

「ホント何が気に入らないのよ。あんなにあなたを包む環境はキラキラしてるのにさ」

「……」

「ワガママだし、人を振りまわしてばかりだし、そんなんじゃロクな大人にならないぞ！」

ホントに！この国には誰か王子のお目付け役みたいないないの？

ぼつと出のバイトにこんなこと言わせちゃダメだよ。

一佳達を怒るように、あたしはメツと王子に人差し指を向けた。

「王子様だからって、なんでも許されるなんて思わないことね。あたしは、あなたのコトただの同世代としか思っていないから。王子だからって甘やかしてなんてやんない」

王子はきつと聞き取れないよね。

王子は難しい日本語はできなんだから。

だからいつもカタコトなんですよ？それとも聞きとれない振りをしてるだけ？

もう聞き取れようが聞き取れまいが、どっちでもいい。

今まで溜まりに溜まった分、好き勝手言わせていただきます！

「その年になって勝手に抜け出して迷惑かけるって、どうなの？ありえないでしょ？しかもあんな変装までして！そもそもね、日本に詳しくないなら、何かガイドブック的なもの持ち歩きなさいよ！

そして正規の観光ルート歩きなさい！なんで路地裏にいるのよ。なんで真昼間からあんな人たちに絡まれてるのよ！普通にしたらあんな時間にあんな場所で絡まれる訳ないでしょ？」

「……………」

「だいたいね、あなたの行動、絶対おかしいよ！いい？シーリエントの常識を世界の常識と思わないことね！普通、初対面の人の指は噛まないし、お姫様だつこで連れ去ったりもしない。度の過ぎたワガママは注意されるべきだし、出された食事をかき混ぜるなんて非常識の最たるものよ！かき混ぜるなんて、あなた！納豆じゃあるまいし、ねぶり箸と同じぐらいに食事のマナー違反よ！これが中澤さん家の食卓なら間違いなくイエローカードよ！後一枚で食事お預けよ！」

「……………」

「もう、ホントに訳わかんない！あなたが何を望んで選んだのか全然見えてこない！どうしていいのか困るじゃない！バイトはまだ続くんだから！」

これでもかって力を込めて叫んでやった。

もうここまできたら、ヤケよ！ヤケよ！

もやもやは心の中のため込んでたら、くさつちゃうもん。生モノと一緒に足が早いんだから、放っておいたらあたしの心までカビてきちゃう。

ただでさえ、あたしの心のキャパは小さいんだから。叫んで発散させる以外思いつかない。

格好いい大人の女性なら、こんな時どうやって対処するのかな？

物語の素敵なお姫様なら？

卒なく王子を手玉に取る？

素敵な笑顔でトリコにしちゃう？

それとも饒舌で王子をやり込めるの？

心に余裕があればそんな風にできるのかな？

でも逆立ちしたって余裕になんて生まれてこない。それに、どんな魔法を使ってもきつと性格までは変えられない。

回りくどいコトは性格的にNGなのよね。

まっすぐ、本音で勝負。あたしの持っている切り札はこれしかない。

「取り繕ってないで本性を現しなさいよ！」

じつとネオンを見つめる王子の瞳はまったく揺るがない。

横で雑音がしてるな程度にすつきりすっぱりあたしの言葉を無視してくれる。

くそ〜！

なによ！なんでこんな状況なのに、格好いいのよ。

あたしはこんなにも余裕ないのに……。

涼やかな横顔をうらめしげに見つめる。

ちらりとも動かない瞳が僅かに細まった。それ以外は何も変わらず。

心地よい夜風が王子の柔らかな髪を優しく撫でていく。

何よ。勝手に話しかけてくるかと思えば、興味がない時は顔も向けないなんて！

何か言ってやりたいけど、言いたいことをぶちまけて、今は息切れ状態。もう心の中で地団駄を踏むしかない。

ねえ！夕方、あなたに向けたあたしの本音を返してよ。

あの時は一応、一国の代表である王子に尊敬の念を抱いていたのよ？

だってあの引き締まった顔で見つめていたのは遠いシーリエントの地だったと思うから。

でも、いくらヴァカンスだからって、そのシーリエントの代表がワガママ放題ってどうなの？

シーリエントで通っても、この日本、いえ、この中澤千佳の前では通用しないわよ！

ノー・モア・シーリエント！あなたなんて認めてやんない！

「……ここまで来るなんてね」「

「へ？」

今のは英語？それともシーリエント語？

ぼつりと闇に消えた呟きを聞き返すように、あたしは王子の顔を覗き込んだ。

闇に染まった顔はどこか寂しげで、いつも完璧さを失っている。

あたしの横にいるのは、敬遠しちゃう理想の王子じゃない。

どこにでもいる同世代の男の子。

体ばかり大きくなって、心がその大きさに、世界の広さに戸惑ってる思春期真っただ中って感じ。

反発する以外に自分のアイデンティティを守る術を知らない、そんなティーンエイジ。

急に目線の高さが近くなった気がした。むすっとした表情はどこかバツが悪そうに見える。

蒼い瞳が夜空を泳いだ。

そのタイミングを逃さず、ずいっと身を乗り出す。

「何？何か文句あるの？」

「ベツ！……」

別について、あなたは沢尻エリカか！

なによ！ちゃんと聞き取れてるんじゃない！

「何よ！ちゃんと日本語分かるなら、なんで英語で話しかけるのよ！あたし、学校じゃ英語は五段階評価で2なんだからね！それでも全力で頑張ってるのに！」

「なんだって、いいだろ？君のバイトの時間は終わったんだ。僕に構わないでくれ。一国の王子にもオフの時間は許されるだろ？」

な、な、な……何よ！その流暢な日本語は！

生粋の日本人が聞いても遜色ない発音のよさは何？

「ちよ、ちよっと！日本語完璧なんじゃない！なんで今までイジワルしてたのよ」

「別に……こっちの事情」

王子はふてくされたように、顔を背ける。

「別に別について、そうは問屋が卸さないわよ！今日半日のあたしのドキドキを返しなさいよ！苦手な英会話にどれだけ悪戦苦闘したと思ってるの！」

あたしは王子の胸元をつかむと、ぐいっと自分の方に引っ張った。これって、王族に対する不敬罪かな？

でもここは日本。それでもって、王子様にはけして似合わない殺風景な場所。

こんな場所で王権を主張されても困る。それに……今、あたしと対峙してるのは、どこの国の王子様じゃない。

ワガママで、イジワルで、ホントはとっても不器用な男の子。

「ちゃんとあたしの眼を見て話さない！」

シンジラレナイ！！

王子にとって、それは思いもしないコトだったのか。
シャツの襟を掴まれ、バランス崩した王子の体がこらえきれず、
あたしの前に躍り出る。

驚いた蒼い瞳が余裕なく揺れた。
いい気味！王子だからって、その身分に甘えないことね。
あなたの意表をつけた？なら、してやったりね。

「大和撫子、なめないでよね！あたしはあなたを王子だからって特別扱いしない！覚悟しなさい！あたしをバイトに雇ったこと、後悔させてあげるわ！」

こんなにも真っ暗なのに、真近にある瞳は吸い込まれそうなほどに澄んでいる。思わず見惚れそうになる輝き。

でもね、負けてられない。これは日本女子として通しておかないといけない筋でしょ？

王子様ってだけで、特別視するなんて思わないことね。

乙女の評価はドン小西並みに辛口なのよ！顔だけよければいいってもんじゃない！

これでもかかって目をつり上げた。

あたしを見返すのは、大きく見開かれた瞳。

どこまでも澄んだ情熱が戸惑うように揺れた。でもすぐに余裕を取り戻して、夜空を浮かべた深い蒼が妖しく光る。

ニヤリと意地悪く瞳を細めると、王子はずいっと前に乗り出した。

「上等。どこまで強がれるかな？」

彼の襟を掴んだあたしの手を素早く掴み返すと、乱暴に引き離す。

「っー」

捻るように振りあげられ、あっという間に形勢逆転。

今度は王子がしてやったりと口の端をあげる。思いもしない彼の行動にびくりと身が竦んだ。

だって、こんなにもギラギラした顔は知らない。

怖い…本能がそう感じる。

最終警戒態勢を取れと、心臓が警鐘を鳴らす。緊張に体の先から血の気が引いていく。

でも、飲みこまれたように目が離せない。蠱惑的な瞳が私を捕えて離さない。

息を飲んだまま固まったあたしの顔にその瞳が満足げに細まる。そして更に追い込む。本性を曝け出した王子は、もう止まらない。

ちゅつと軽い音が闇に響いた。

「な……」

掴んだあたしの手の内側に口を寄せ、愛撫するように吸い上げる。口を離れた瞬間、まるであたしの反応を窺うように濡れた瞳が向けられる。

その艶やかな色気に酔ってしまいそう。全身を駆け巡る甘い痺れに戸惑って、声もできない。

これ、どういうこと？今、何をしたの？

これって、反則じゃない！

なんで態度を口で示そうとするのよ！

恐怖に早まる鼓動が別の衝撃に飛び跳ねた。一気に体温が上昇して、頭が茹だつてしまいそう。

だから！それは世界の非常識だって言ったでしょ！
シーリエントじゃ、何処でも誰でも何所にも簡単に口付けちゃうわけ？

ダリルさんといい、あなたといい。そういうのは、本当に大切な人だけにしなさいよ！

「そういうスキンシップはいらなのよ！あたしはただ……」

「ただ？」

まるで試すような瞳がネオンを受けて妖しく輝く。

そつと瞳を閉じると、また手首にキス。

しっかりと手首を掴まれていて、それ以上に痺れそうなほどに甘い王子の声があたしを離してくれない。

あたしが動揺するたびに、キスする場所が体の中心へと近付いていく。

「ちょ、ちょっと！なんで簡単にキスするのよ！そういうには簡単にしちゃいけないのよ！」

「君が誘うから、だろ？」

「誘ってないもん！誘ってないもん！誘ってないもん！」

「誘ってるだろ？潤んだ瞳で見つめて……」

「違うわよー！じ、自意識過剰よー！」

「君は僕のバイトなんだろう？じゃあ、時間外のご奉仕もありだろう？」
艶やかに濡れた瞳が、あたしの余裕を簡単にふっ飛ばしてしまう。
ぐいっと乱暴に手を引かれ、安全柵の方へと押し倒された。

ガシャンと音を立て、背中が細い安全柵にぶつかり、上半身が外側へと乗り出す。

突き上げる風が髪を巻き上げた。

背中に当たる柵が妙に冷やかさで、ぞくりと震える。

あと一步踏み出したら、下に落ちちゃうかもしれない。強張った背を冷や汗が流れていく。

でも今は目先のことばかり気になって、下を見る余裕もない。

だってあたしの目の先にいるのは、甘くてキケンな野獣。

王子から野獣へと華麗なる変身を遂げた彼は、血に飢えた獰猛な獣のよう。

食らいつくかのようにあたしの上に覆いかぶさると、ぐいっと体を寄せてくる。

触れあったところが熱を帯びたように疼く。生温かな夜風に、王子の甘い香りがむせ返る。

止める言葉も聞かず、王子の口づけはあたしの心臓に近付いていく。

爆発して、蒸発してしまいそう。沸点に達したあたしの体を更に燃やすように王子が耳元で甘く囁いた。

「このまま、僕に抱かれてみる？」

だ……抱かれる？

それって、ダッコのことじゃないよね？もっとディープなこと言

ってるのよね？

なんで日本人じゃないあなたがそんな微妙なニュアンスを知ってるのよ！

王子の芳しい香りがすぐ側でする。

二の腕を飛ばして首筋に移動した王子の顔が、柔らかな皮膚に食らいつくようにキスをする。

軽いキスじゃない。まるで跡を残すようなキツイ口付け。

ちゅっと吸い上げる音が暗闇にいやらしく響いた。

思わず体の芯がビクリと震える。

王子の柔らかな髪が鎖骨をくすぐる。

ちゅっと待って！そ、そんなこと！

その先は愛し合った人にしか許されない領域でしょ！

なに、さらっと不法侵入してくるのよ！王子のくせにルール違反だわ。

「ばか！王子はそんなコト言っちゃいけないのよ！」

もう限界！こんなの、あたしのキャパをとっくに振り切れてるよ！

「なんでクビにチュウするのよ！そ、そういうことは愛し合った可愛いお姫様としなさいよ！王子様はそんなこと、誰かれ構わずしちやいけないのよ！」

駄々っ子のように両手を振りまわして、ついでに頭突きまで食らわせみる。

ガッン！

「っー」

目から星が飛び出そうなほどの衝撃。思わず立ちくらみを起こし
そうなほど、激しい震動にあたしは自分の行動をすぐさま後悔した。
でも、思惑どおり。

まともにあたしの頭とごつつんこした王子が反射的にからだを逸
らした。

その隙について、死に物狂いで王子の束縛から逃げ出す。簡単に
外れた束縛を振り切ると、その手の届かない場所まで後ずさった。

もう！ 訳わかんなくてどうしていいか分かんないよ。

なんで急にキスしだすのよ！ なんで抱くとか、そんな話になって
んのよ！

でも、今は冷静に答えを導き出すことなんてできない。

この王子様は数式なんかよりもずっと複雑。

？ の2乗や、比例反比例なんかじゃ理解出来っこない。王子の心
を図る公式なんて分からない。

でも取りあえず、あたしは首筋を押さえて叫んだ。

だって、叫ばずにはいられない。このまま黙っていたら王子の蕩
けそうな甘さに飲まれそうになっちゃう。

「あなたなんて王子じゃないわ！ ベルサイユのばらを読んで、出直
してきなさい！」

シンデレラナイト

……しまった！

思わず叫んじゃったけど、これじゃ負け犬の遠吠えにもなっていない。

でもね、あたしの中の王子のイメージっていうとベルばらなんだもん。

ヒラヒラな服着て、瞳に星を浮かべて、ついでに花を振りまいてさ。誰だって王子のイメージってこんな感じでしょ？

だから思わず口にてちゃったの。って、自分に言い訳してみたり。どんなに自己正当化を凶っても居た堪れない恥ずかしさは消えない。

更に顔が真っ赤になる。

「今のはなし！ちょっと表現を間違っただけ。えっと……なにかいい例はあるかな？デイズニーとか？でもデイズニーってお姫様のイメージが強くて、王子が格好いいイメージないな」

もごもごと言いつめたことを口の中で呟く。

「ベルサイユのばら？小説か何か？その中に何かがあるっていうんだ？」

もう、ホントに性格悪いな。今のなしって言ったでしょ？

さっきまで盛大に無視し続けてくれたのに、人がそつとしてほしいところを蒸し返してきて……。

まあ、初めて聞くフレーズが気になったのかな？日本人でも知らない人は知らないし。

「少女漫画よ。フランス革命とかマリーアントワネットとかオスカルとか出てくるの」

「ふうん、その漫画に学べと」

「そ、そうよ。アンドレやフェルゼンは運命の相手以外には目もくれないのよ！そんな不埒なことはしないの！」

びじつと王子に指を突きつける。

今回は嘸まれないように注意しなきゃ。だってこの王子様はあたしの想像の斜め上どころか180度違つところをピンポイントで攻めてくるんだもん。

じつと睨んで、相手の出方を窺つ。

けど、今の王子は無表情のまま立ち尽くしているだけ。その頭の中では何を考えているの？

「……王子も人間だよ」

そう言った王子の眼は冷めていて、どこかこの世の全てを蔑んでいるよう。

くつと自嘲気味に喉を鳴らした王子は、乱暴に安全柵に背を預けると余裕なさげに髪をかき分けた。

「誰だって漫画の中みたいに平面的には生きれない」

全てをあざけるような冷たい瞳は、どこか愁いを帯びていて……。初めて見る顔に体が凍りつく。こんな近寄りがたい顔は知らない。

「……王子？」

寄りかかったまま後ろを振り向き、また夜の海を見つめる。
ネオンの陰になった麗しい顔がとても寂しげで、あたしは何も言えなかった。

「王子って呼ぶなって言っただろ？」

あの時と同じ。やっぱり聞き間違えじゃなかったのね。

王子はちゃんと日本語を理解して、その上で知らない振りをしてたんだ。

なんでそんな回りくどいことするのかな？

王子って呼んじゃいけないなら、どうやってあなたに呼びかけたらしいの？

リチャード殿下？それとも……。

「アル？」

怖ごわ、聞き返すように呟くと王子は小さくYESって呟いた。

「何でだろう？君の前では上手に振る舞えない。出会った瞬間から……」

自嘲気味に首を振るのは、ただ男の子。

気取った王子様の雰囲気はどこに行ったの？あの、恐ろしくも魅惑的な野獣の牙はどこに隠れているの？

あたしと一緒に自分の感情を制御できない、余裕ないティーンエイジの顔が困ったように眉を寄せた。

言い訳めいたように呟かれる言葉はあたしの知らない響きで夜に広がる。

「「全てにおいて余裕なんてない。ホントはこんなところ、君には見せたくなかったのに。でも君は僕の想像を超えたコトばかりするから、どうすればいいのか分からなくなる。僕の想像通りに動いてくれなくて、でもそれを期待する自分が心のどこかに居て……。そんな場合じゃないのに君がどんな反応をするのかつい気になってしまふ。もっというんな君を見たい」」

ちよつと情けない顔のアルが複雑な笑みを浮かべてこつちを見つめる。

「何言ってるか分かんないよ。ちゃんと日本語話せるなら日本語で言つてよ！もしかして言い訳してるの？そんなのはいらないの！いいこと！反省はサルでも出来るの。大切なのはこれからどうするかなのよ！簡単でしょ？ごめんなさい。もうしません。ほら、言つてごらん」

も〜王子様は謝り方も知らないの？そんな知らない言語で小難しく言われたって、あたしの心に響く訳ないでしょ？

なんだか小さい子どもに怒ってる気になってきた。

「あははっ！手厳しいな」

「あ、当り前のことを言ってるだけでしょ？」

なんだか恥ずかしくなって、ぷいっとそっぽを向いた。そんな風に真っ直ぐに見つめられるとどんな顔をすればいいのか分からなくなる。

アルは眉を寄せ、屈託ない笑い声を上げた。

「「こんなにもありのまま僕にぶつかってくる人初めてだよ。だか

ただ夜風が心地よくて

だから、そういうのはずるいんだってば。何もいえなくなるじゃない。

「アルはさ……」

あたしの無意識が何かを聞こうと口開いた。その時。

「ぐう……」

ん？それは返答？

思わない答えにあたしは目を見開いた。

いつも甘くて蕩けそうな声であたしを翻弄させるくせに、何よ、その間抜けな音は！

もしかしなくとも、これって……。

「え？もしかして、お腹すいてる？」

まさかそんなこと。

白馬に乗った王子様だよ？大和撫子の理想の塊だよ？

信じられないとばかりじっと見つめると、アルは恥ずかしそうに顔を背けた。

「何も食べてないんだよ。当たり前だろ？」

え？もしかしなくともホントに、お腹の音？

綺麗に盛られたお皿にあんなことして、何も食べなかったくせに。今頃、お腹すいたってあなた！

「ふふっ……あはは！」

笑っちゃ悪いかな？でも我慢できない。

「あはははっ……」

だって、お腹をすかした王子様って…。

王子なのに、お腹の虫がなるなんて……王子も人の子なんだね。

格好がつかなくて、ふてくされたようにソッポを向いたアルが急に身近に思えてしまう。

そりゃ、そうだよ。何も食べずにいたら、お腹の一つもなるよね。

「ワガママが報いたのね」

アルが恥ずかしげに視線を外した。

その表情が何だか可愛くて、さっきまであたしに迫っていた人と同じとは思えない。

そんな顔されると放っておけないじゃん。

あたしはふと自分の左手を見た。何故だかずっと持ったままのお弁当袋。

どんなことがあっても手放さないって、あたしもどれだけ食い意地はってるんだろ。

それをそつと顔の横まで掲げてみた。

「ここに一食分の夕ごはんがあります。別にあなたのことを思っ
て用意した訳じゃないのよ。一回家に帰った時に詰めてきたの。まさ
か夕食にあんな豪華なフランス料理が食べられるなんて思わなかつ
たから。でもあたしはお腹一杯だし、どうしようかって迷ってたと

「こだったの。だから……いる？」

「あり合せをつめただけの適当弁当。」

「こんなものを王子様に献上するなんて、おこがましいにもほどがあるわね。」

「でもあげられるものは他に何もなし……。」

「君が作ったの？」

「ずっと差し出したお弁当袋を見つめて、アルが驚いたように目を見開いた。」

「そ、そうよ。でも作ったっていつても、ホントに適当にしゃしゃって作ったから、きつとシエフ的にはこんなの作ったって言わないと思う。昨日のおかずのあまりも入ってるし。だから味の保証はないわよ。だから王子様の口に合わないと思うし、別に押しつけるつもりはないからいらなら……。」

「いる」

「あたしの手からお弁当袋を奪うように受け取ると、アルはその場に座り込んだ。」

「まるで遠足にきた小学生みたいに目を輝かせて、お弁当のふたを開けている。」

「そんなに期待されると本当に困るんだけど。食べた時の失望が大きくなるじゃない。」

「わあ！すごい。これ全部君が作ったの？」

「まあね」

心の底から感心しているアル。

シーリエントにはお弁当の習慣はないのかな？そうよね、外国のお弁当ってサンドイッチとかそんなお手軽系だもんね。お箸を持っていただきますは日本ぐらい。

ん？そつだ。お箸で食べなきゃいけないんだ。

「あつ！お箸で食べなきゃいけないんだけど、使い方……ってあれ？」

アルは卒なくお箸入れからちつちやなお箸を取り出して、上手に親指と人差し指の間に挟んでいる。

流れる所作で卵焼きを簡単に掴んで口に運んでいる。

さ、流石王子様。なんでもお出来になるのね。

「ん！おいし！」

嬉しそうに目を細めて味わってくれちゃって。

さつきまでの野獣が嘘のよう。まるで小動物みたいに愛らしい。

そんな顔で、褒められたらお世辞でも嬉しくなっちゃうじゃない。でも、天の邪鬼っ子な千佳ちゃんはそれを簡単に表に出せない。

褒められ慣れしてなくて、褒められるとどう反応すればいいか分からない。

だから……。

「食べながらしゃべるのは行儀悪いよ。それに口の中噛んじやうでしょ？ご飯は逃げないんだから、ゆっくり食べなさい」

も〜これじゃいつも百佳達に言ってるのと変わりないじゃん。一
国の王子を捕まえて、お子様扱いって。

あたしは何様だ。自分で言ってる居た堪れなくなる。

「うん」

そんなつんけんあたしの言葉に素直ないいお返事が返ってくる。も〜なんでそんなにこころ表情を変えるの？格好いい理想の子のくせに、そういうギャップで攻めないでよ。

お弁当に集中しているアルにはあたしの表情までは分からないよね。

火照った頬を夜風がそつと撫でていく。

この空間全てが心地よい。後少し、このままでいたいな。

素直な心がポツリと呟く。

一生懸命にお弁当を食べるアルの側で、手持無沙汰に、何も無い夜を見つめる。

後少し……。

だって、こんなにも夜風が気持ちよくて……。

本当にお腹がすいていたのか、見る間にお弁当が空になった。

「はあ、おいしかった」

一粒の米粒も残さず食べきるとアルは何かを窺うようにあたしに目を向けた。

「千佳、ごめんね」

心の底から申し訳無さそうな声。

何故このタイミングで謝るの？もしかして、あたしがこのお弁当を食べるためにずっと持ち歩いていたと思ったのかな？

大切な食料を断腸の思いで差し出したとでも？そんな食い意地はつた子だと思われるの？

「謝らないでよ！あたしも処理に困ってたんだから」

「あ…そうじゃなくて……」

アルは言葉が見つからなかったのか、複雑な表情で言いよどんだ。

「ああ、食事の締め言葉が分かんなかったの？」

「ごちそうさまの代わりに言ったみたのかな。簡単な言葉だけでも英語やシーリエント語には的確な訳がないのかもね。」

勝手にアルの心情を察して、うんうんと頷く。

「じゃなくて……」

「ん！大丈夫よ。知らないことは恥ずかしいことじゃないわ！」

知ったか顔で、皆まで言うなとばかりにアルの言葉にストップをかけた。

あたしは建前上、アルに日本文化を伝える役割だもんね。ここで本領発揮しとかないと、他では役にたたない。

使命感に燃えるあたしは、アルが何か言いたそうにしているのも気付かず、そっと両手を合わせてみせた。

「日本ではね、ごちやうって両手を合わせて食べられるコトに感謝して、ごちそうさまって言うの。どんなものでも食べられるってコトは有難いことなの。だからどんなものでもご馳走なのよ。ほら、やってみて。シーリエントじゃどうしているか分かんないけど、せつ

かく日本に来たんだし、レッツ異文化コミュニケーション！」

目で促すとアルは少し戸惑ったように眉を寄せた。

あれ？何か取り違ったかな？あたし、勝手に先走りすぎた？

困惑の蒼い瞳に、自分の思い違いに気付いて思わず赤面してしま
う。

「あ、あれ？ごちそうさまが分からないんじゃないの？」

も〜穴があつたら入りたい。なんでもつと思慮深くなれないのよ
。あたしの馬鹿。

そんなあたしを見つめる柔らかな瞳が、すぐに優しく微笑んだ。

「いや、知らなかったよ」

爽やかで、思わず心ときめく甘い笑顔。

でも今は完璧王子様の顔じゃなくて、ただの男の子の顔で笑って
る。

キュンって心臓が不整脈を起こした。

どうしよう？アルが微笑むたびに胸が引きつけ起こしてたら、あ
たしいつか死んじゃうかもしれない。

「ごちそうさまでした」

手を合わせるとアルがぺこりと頭を下げた。

もう、なんでそうピンポイントで可愛いことするのかね？

さっきまでは冷たい顔だったのに、コロコロと表情が変わるのね。
完璧な王子顔も、突き放すような野獣の顔も、どれも魅力的だけ
ど、近寄りがたい。

でもね、今のアルになら心を許せるって思ってしまう。

「よろしおあがり」

自然に顔がほころぶ。きつと初めて、心の底からの笑顔をアルに向けた。

そんな二人の間を優しく夜風が流れていく。

一日の終わりに(前書き)

アルはらぶえっち?というよりセクハラだなんて思いだした今日この頃。でもこれからもセクハラ全開で行きます(笑)

一日の終わりに

「そろそろ、部屋に帰ろう」

お弁当を袋に直して、あたしはアルを促した。

いつまでもアレクサンドラさん達に無意味な搜索をさせる訳にいかないし。

アルもそう思ったのか、ああと頷いて腰を上げる。

そして……。

「ちょ、ちょっと！なんで安全柵を越えてるのよ！」

屋上の出入口に向かって、一步踏み出したあたしは、反対方向に進んだアルの行動に度肝を抜かれた。

いやいや、そっから登って来たのは知ってるけど、帰りも同じコースにしなくてもさ……。

「こつちの方が早く部屋に帰れるよ。千佳もおいで」

そんな危なっかしい場所に立ってるのに、なんでそんな爽やかな笑顔でいれるのよ。

見てるこつちの顔はこんなにも引きつってるのに。

安全柵に自分のネクタイを巻きつけ、ロッククライミングさながら、アルはドーム型の屋根を器用に降りていく。

あたしは不安げに彼の行動を安全柵の内側で見守るしかできない。

「だ、大丈夫？」

あたしの心配をよそに、アルはまるでサルのような素早さで屋根

の縁まで降りる。

そして屋根の縁から部屋の中を覗き、こちらを手招きした。

「誰もいない」

そう言つが早いか、屋根の上から軽やかにジャンプする。

「ええええ！」

ドーム型の屋根の下でストーンと軽い着地音がした。

恐々と下を覗いたけど、でもアルの姿は見えない。

どうしよう……。元来た方から帰る？

それとも？

「へい！チカ！カモン！」

楽しげな声の下から聞こえてくる。

くそ……。さつきまで素直で可愛かったのに、なんで一步自分の部屋に足を踏み入れるとイジワル王子になっちゃうの？

でも、きつとね、足を踏み外してもアルは抱きとめてくれると思うんだ。

まるでウエンディを迎えにきたピーターパンみたいね。あたしに夢の世界に誘ってくれる。

おずおずと安全柵を越えると、あたしは括りつけられたネクタイに縋るようにゆっくりと屋根の縁まで降りる。

ドーム型の屋根は持つところもなく、降りるのはトンでもなく難しい。

なんとか、縁まで降りると、下のバルコニーではアルが大きく手を振っていた。

そしてが優しく微笑んで手を広げる。

その笑顔に心臓がこれがかってほどにドキドキする。

これって吊り橋効果だよな。危ない場所に立ったドキドキを勘違いしているだけ。

でも相手は強力な王子様。

この勘違いから目を覚ますのはどれだけ大変なんだろう。

でも……ドキンと心臓が大きく跳ねた。

その瞬間、あたしは屋上の縁を蹴りあげた。

怖くないよ。だって、あなたがいるんだもん。

大きな胸に飛び込むように落ちると、アルはそのままあたしをぎゅっと抱き締めた。

そして耳元でそっと囁く。

「よくできました」

なによ。その子ども扱いな言葉は。

思わずカツとなって、何か言い返そうと口を開いたけど、その前にアルがあたしを抱えているのは反対の手で、そっと自分の口に指をあてた。

「ビー・クワイエット」

何？静かにしてって？

言っとくけど、あたしは何も言ってないわよ？これから言おうとただけで……。

心の中でいっばい言い訳してみる。

複雑な顔でじとつとアルを見つめると、まるで何でも分かってますって感じに目を細めた。

そしてそつと、耳元に口を寄せる。

「今から僕らのコミュニケーションはイングリッシュだからね」

アルがあたしの耳元でまるで念を押すように、小声で囁く。

「OK？」

あたしの意味を確認するように、深い蒼の瞳があたしの顔を覗き込んでくる。

だから、ずるいんだってば。この体勢で、こんなに至近距離で、しかも有無を言わさない甘い声で囁くなんて。

アルの声はまるで麻薬。一度耳に触れると、もっとほしくなってしまう。

「お、おっけい……よ。もちろん。バイトだもん！全力で頑張るわよ！」

少しでもアルの顔から逃げるように顔を背けた。

これ以上、こんな近くで囁かれたら、中毒症状を起こしてしまう。もう顔も目も、全て真っ赤でどうしていいのか分からない。

「OK」

そう言うときアルは満足げに頷いて、ゆっくりと腰を下ろした。そして物語の王子様のように、片膝をついて、ゆっくりとあたしをバルコニーの上に下ろす。

壊れ物を扱うかのように繊細なアルの腕に、どんな顔をすればいいのか分からない。

アルは片膝をついたまま、あたしの両手を握った。

「サンキュ、チカ」

心の底から慈しむように顔をほころばしたアルが涼やかな声で甘く囁く。

ゆっくりと身を屈めるアルの口がそつとあたしの甲に触れた。

そんなことされたら困るよ。感謝は言葉だけで十分なのに、そんな行動で示されてもどんな顔をすればいいか、もっと分かんなくなる。

だってあたしはただのバイトで、ただの女子高生で、王子様から見ればただの端役なのに。

アルとっては当然の行為なのかな？誰にでも同じことをするの？そう思うと甘く疼く胸の奥がチクリと痛んだ。

ゆっくりと離れるアルの顔が、あたしを見上げる。

どうしよう。まだどんな顔をするか決めてないのに。

こんなまともらない表情、見られたくないのに。

「あの一！」

戸惑うように手を引こうとした瞬間。

「「これはどういう展開！」「」

女王陛下のかな切り声がこだました。

驚いて振り返ると、入口のドアの前でアレクサンドラさんが綺麗な顔が台無しになるくらい口をあぐりと開いている。

その後ろからダリルさんがひょいと顔を覗かせて、目を細めた。

「「おや？知らない間にプロポーズまでする仲になったの？」」

「「貴方はおだまり！話がややこしくなります！それよりも殿下！一体どちらにいらしたの！それにこの子！なんで彼女がここにいるのです？」」

「「ずんずんと肩で風を切り、部屋を渡つてくるとアレクサンドラさんがアルに詰め寄った。」

「「でも流石は完璧王子。さらっと爽やかプリンススマイルを浮かべると女王の毒気を抜いてしまう。」

「「どちらにつて、ずっとここにいたよ？実はね、スイーツケースの中に隠れていたんだ。君達がいつ見つけてくれるかと期待していたのに、部屋を出て行くからどうしようかと思つたよ。でも、彼女が僕を見つけてくれたんだ」」

「「ねつとあたしに微笑みかけてくるアル。あたしは曖昧に微笑み返した。」

「「この誠実そうな笑顔で、一体どんな言い訳をしているのやら。ホントにこの王子様は一筋縄じゃいかないな。」

「「「スイーツケースですつて！そんなはず……。いえ、そんなことよ、なんでまたそんな所に？」」

「「「まあ、ちょっとしたイタズラ心だよ」」

「「いぶかしるようにアレクサンドラさんが目を細めても完璧王子スマイルは崩れない。」

「「「まあ、無事ならそれでいいですけど……」」

無然としたアレクサンドラさんが、不承不承に口をすばめて、アルへの追及をやめた。

「どうやらこの勝負はアルの勝ちらしい。」

ホント、あなたの図太い神経に感心しちゃう。なんで腹に一物も二物も抱えて、平然と微笑んでられるのよ。関係ないあたしの方が冷や冷やしちゃったじゃない。

離れていくアレクサンドラさんの背に、思わずほっと息をついた。それと同時にアルがあたしに向かってニコリと微笑む。

『さあ、千佳はもう部屋に帰りなよ。夜ももう遅いし、付き合わせで悪かったね』

きっとこれはもう部屋に帰れって言ってるのよね。

OK! OK! これは何となく分かった。

「えっと、じゃあ失礼します。おやすみ……グッドナイト」

一応挨拶をして帰らないとね。

あたしは三人にぺこりと頭を下げ、そしてくるっと踵を回して、出口に向かった。

でも……ぐいっと腕を引かれて、体が後ろに傾く。

そのあたしの上に被さるようにアルが身を屈めてくる。

あまりにも一瞬の出来事。

すぐに元の体勢に戻ったアルは何事もなかったかのように、爽やかにスマイルを浮かべている。

「な、な、な……」

し、信じられない。

なんで、このタイミングで、こんなこと……触れられた頬に手を当てたまま、あたしは硬直した。

さっきのはやっぱりキスだよな？

頬に唇があたって、ちゅって音がして、甘い囁きが耳朶を濡らすように響いて……。

じんじんと熱を帯びる頬から体全体に熱が広がる。

『おやすみのキスを忘れてたから。お休み。いい夢を。千佳』

呆然と立ち竦むあたしに軽く手を振るアルは、さっきの行動などなかったかのように、屈託ない笑顔だ。

そんな普通にされたら、まるであたしがおかしいみたいじゃない。

「これだからキスをスキンシップの手段だと思ってる外国人は嫌なのよー！」

最悪の捨て台詞。でも脱兎のごとくスイートルームを後にしたあたしには、もう訂正に戻る余裕はなかった。

せつかく仲良くなったと思ったのに、このままフェードアウトして。

明日はどんな顔でアルに会えばいいの？

でも今はそんな先のことまで考えられない。目先のことにいっぱいいっぱい。

今はただ早く自分の陣地に戻って、この行き場のない感情をどうにかしたいと。

全力で部屋を後にしたあたしは、エレベーターに飛び乗った。

こんなにうるたえてばかりで、あたしが馬鹿みたい。

でもね、いきなりほっぺにちゅってされて、耳元で甘く囁かれた

ら誰だつてこうなると思う。

しかもピンポイントで言葉を間違ふ確信犯っぷり。

やっぱり彼は誠実で真面目な王子様じゃない。

抜け目ないハラグロ小悪魔だわ。

「ごちそうさま」

蕩けそうな声が頭の中をぐるぐると駆け巡る。

どれだけ時間が経っても、どれだけアルの側を離れても、体の火照りは冷めない。

ああ、どうしよう。このままじゃ、今夜は眠れない。

グッド・モーニング・コール？（前書き）

アルバイト2日目の始まり始まり。とりあえず、千佳ちゃんとアル王子の甘酸っぱい日々は後3泊4日続きます。最後のほうはちよつとアクションも交えて描けたらいいなと先のことなのに色々妄想してます。これからも変わらず読んでいただけたら嬉しいです。

グッド・モーニング・コール？

あたしはゆらゆらとした、淡い空間を漂っていた。
まるで浮いているかのように体が軽い。

ここはなんて心地いいの。
柔らかな明るさに目を細め、ただその空間に身を委ねて……。
ん？

何かが聞こえる？

だれ？あたしを呼んでるのは？

サムデイ・マイ・プリンス・ウィル・カム

愛らしいリズムが耳元で聞こえた。

柔らかいふとんの上で寝返りを打ち、薄眼を開けて音の元を探す。
窓から差し込む日差しは薄いカーテン越しでも眩しい。

サンサンと突き刺さる夏の陽光に思わず目を瞑ってしまう。
朝なのに、太陽はあんなにも空高く輝く。

「ん……」

ぼんやりとした頭じゃ何も考えられない。ただ音に引かれるように手を伸ばした。

「ケータイ……」

ぼつりと眩き、寝ぼけ眼で可愛いピンクの携帯電話を見つめる。

普段あまり活躍の場がない（イマドキ女子がこれでいいのかな？
まあ、貧女の分際で持てるだけマシ？な）携帯電話が、歌って光っ
て、これでもかって自己主張している。

えっとこれ、電話の着信音、だよな？

何かあたしに用事かな……用事……。

1パーセントも起動していない頭が何を導き出した。

7時からバイト

そうか、今日は7時からバイトか。

そろそろ起きないと……。

ん？ちよつと待つて！

太陽があんなにも高いなんて……今、何時？

「ああ！バイト！遅刻！！」

ディスプレイを確認する間もなく瞬時に起き上がり、ふとんの上
に正座をした。

本能がバイト先からの怒りの電話だと確信する。

眠気が一気に吹き飛んだ。

心臓がバツクバツクと不穏な鼓動を鳴らす。

もしかしなくとも寝坊しちゃった？

コレ、マジデヤバクナイ？

あたしがバイトの時間になっても来ないから、きつと店長辺りが
腹をたてて電話してきたんだ！

このままクビ？

それは困るよ！

今年の夏の予定が……我が家の家計が……。

中澤家大暴落の予感！

膨れ上がるエンゲル係数！

暗雲立ち込める預金通帳！

このままではリーマン・ショックならぬナカザワ・ショックね！
なんとかクビだけは阻止しなきゃ！

「す……」

がばりと頭を下げた。

「ちい！これ、どういことだよ！」

あり？

どういことって、どういこと？

開口一番、謝ろうとしたのに。

それよりも早く怒鳴ったのは携帯電話の向こう。

腰を直角に曲げたところで聞こえたのは、すっごく聞き覚えのある声。

これはバイトの先の店長じゃない。

この、最近また一段と低くなった馴染みの声は……。

「え？もも？」

想像とは違う声に出鼻をくじかれ、ぽかんと口を開ける。

恐る恐る問いかけると、さっきの倍の音量が返ってきた。

「何がももだよ！オレが聞いてんの！ちい、何してんだよ！泊まりの短期バイトだってメモ書きにあったけど、こんなこと聞いてないぞ！」

やっぱり百佳だ。

この頭ごなしに来る感じ、最近とみにお母さんに似てきたな。あまりの大声に思わず、携帯電話を耳から離してしまう。キーンって大声が頭を突き抜ける。

その大声のお陰で、もやもやしていた眠気が頭から吹っ飛んだ。そうだ。ここは自分の家じゃない。

ゆっくりと自分を囲む見慣れない部屋を見渡す。

シックでエレガントな黒とアイボリーの壁紙に、お嬢様仕様のふかふかベット。

そう、ここは家から遠く離れたお城のようなホテル。

そして今のバイトはマックじゃなくて、王子様の側仕え。

真っ白な頭の中に昨日の記憶が色鮮やかに溢れかえってくる。

そうだった。

昨日一日であたしの人生は激変したんだった。

あんな濃い出来事をまるごと忘れたなんて。

昨日の夜だって、絶対に眠りにつけないほど体が興奮してたのに。部屋に帰って、お風呂から上がって、ベットに腰掛けて、5秒でノックアウト。

何時の間に寝たのか、記憶さえない。

ホント、図太くできてるな、あたし。

でもでも、言い訳する訳じゃないけど、でもあんな劇的センサーシヨナルな体験、あたしみたいな一般ピープルには夢みたいなものだもん。

目が覚めれば朝霧のように霧散して、手元に残るのは朧がかった残像だけ。

今だって自分がここにるのが信じられない。

でも……。

「ごちそうさま」

昨夜のハイライトが鮮明に浮かび上がる。

甘くて、蕩けそうな声がまるで側にいるかのように耳朶に響いた。
爽やかで、でも危険な香りを漂わせた笑みが脳裏に映る。

中澤家の日常

ダメダメ！

これは爽やかな朝にお送り出来るものじゃないよ！

ディレクター！映像カット！カット！

目覚めからディープすぎるでしょ？

って、言ってる側からあたしの頭は！

「このまま、僕に抱かれてみる？」

そう耳元で囁いて、首筋にキスをしたアルの顔があたしを見つめる。

ぎゃ〜！あたしのバカバカ！

なんで一番の問題発言を、このタイミングでチョイスしちゃうのかな〜！

このまま妄想を暴走させてたら、放送自粛よ！

恥ずかしすぎて、死んじやいそう。

と、とりあえず早く頭から追い払わなきゃ。

平常心よ、ヘイジヨウシン！

そうじゃないと、心がもつと彼に侵食されちゃう。

ただでさえ、ギザギザリアス式海岸なのに！！

もう電話の向こうなんて、そっちのけ。

溢れだす煩惱の海に抗うように、ベッドの上でバタフライ。

今なら北島康介もビックリの世界新を樹立できそう！

心の中で言い表せない叫びをあげて暴れまくる。

けど、電話の相手はそんなあたしの心なんてお構いなし。

「ちい？聞いているのか？おい！」

「き、聞いているわよ？なに？朝早くから？」

電話の向こうの可愛い弟はかなりご立腹らしく、あたしの言葉も聞く耳もたず。

「何が短期バイトだよ！馬鹿なことしてんじゃないぞ！」

「はあ？馬鹿なこと？」

それは聞き捨てならないぞ。

いくら可愛い弟の言葉だからって、いくら寝起きで頭が本調子じゃないからって、それを聞き逃すほどなまっちゃやない。

「おねえちゃんに向かって馬鹿とは何よ！馬鹿とは！そんなコト言う子にはもうご飯作ってあげないわよ！それに！聞いてないですって？そりゃ直接には言っていないわよ。でも言う暇なかったからメモに書いておいたでしょ？それにちゃんといちとれいには伝えまし」

ももに負けず、大声で携帯電話に怒鳴り返した。

「何に、文句があるのよ！」

「デイズニールランドに行くために出稼ぎにいく……」

ぼそつと百佳が呟いた。

確かにそんな風に一言だけメモしていった気がする。

説明すると長くなりそうだし、うまく書く自信がなかったから、色んなところを端折ったんだよね。

でも昨日一日を要約すればこんな感じでしょ？

一応、一佳と零佳には直接説明したし（理解はしてなかったけど）。

百佳と十佳にはまた時間を見つけてちゃんと説明すればいいかなって思ってたんだけど……。

昨日は何も言ってたのになかったのに、なんで今朝になって急に怒り出してんだ？百佳は。

あたしはまだ朝日に慣れない目をこすりながら、首を傾げた。

普段あたしがどんなバイトをしようが、まったく興味も示さなかったのに。

何故、今回はこんなにも剣幕なのか。

「そうよ？結構な臨時収入が期待できそうなの。終われば皆でデイズニールランドよ？」

あたしはデイズニールランドの部分を誇らしげに強調して言った。

ついでにベットの上で胸を逸らしてみる。

どうだ！これで一生おねえちゃんの方に足を向けて寝れないだろ？

感謝したまえ、百佳君！

「だったら、これはなんなんだよ！」

バンつと机が何かを叩く音が電話の向こうでした。

何かを叩いて示したらしいが、如何せん電話で通じるのは音声のみ。

これ？これってなんだ？

あたしは大きく首を傾げるしかできない。

可愛くて、若干頭の弱い弟よ。

これはTV電話じゃないから、おねえちゃんにはあなたが何を指

し示してるかの検討もつかないよ。

「紺碧の海から来た王子に恋人発覚？顔を寄せ、堂々キス。お相手は普通の女子高生。まるで現代のシンデレラ・ストーリー」

あたしの疑問にさらっと答えを与えてくれたのは、百佳よりも一オクターブ高い、アルトの落ち着いた声。

「今朝のスポーツ新聞に載ってた。バイトだと思ってたのに。ねえさんも隅におけないね」

くすつと笑ったのは十佳。

中学生のくせに、時々あたしや百佳よりも大人びているように思えるのは、この声のせい？

電話の向こうが一気に騒がしくなる。

「こら！とーか！勝手に電話、取るんじゃないよー！」

「俺だつてねえさんと話したいもん。百佳ばかりずるい。ねえ、れい」

噛みつくような百佳をさらりとかわすと十佳は、はいつと言って、ピアノの一番高い音のように愛らしい声にバトンタッチした。

「あのね、あのね、ちいちゃん。れいね、おみやげにね、おっじさまキーホルダーがほしいの」

「王子さまキーホルダーって、なにそれ！そんなの売ってないよ。もつといいものねだらないと。相手は王子だぜ？なんでも望みホーダイー！」

「え〜じゃあ、いつちゃんはなにがほしいの？」

「え？欲しいもの……？そうだな……と、東京バナナ、とか？」

「とうきょうにすんでるのに？」

下二人は百佳の怒りなどまったく感じさせないほど普段どおりだ。しかもねだるものが、あまりにも他愛なくて泣きそうになる。

なんていたいけな子たち。

キーホルダーと東京バナナで納得してくれるなんて。

それに比べて、百佳はどんなものを買っていても、断固聞き入れないとばかりに声を固くする。

う〜んと頭を悩ます零佳から携帯電話を奪い取ると、またがなりだす。

「オレは認めないぞ！こんなバイト！何が恋人だ！恋人になればいくら貰えるって言われたんだよ！普段あんなにお金で自分は売るなって言ってるのに！エンコー反対！こんなバイト、ふ、不健全だぞ！」

「不健全って他に言い方なかったの？昭和のオヤジじゃん」

「うるせえ！とーか！」

「ももちゃんもとーかちゃんもケンカはめっよ！ちいちゃんがおこっちゃんよ！」

「ねえねえ、ねいちゃん。おねね、東京バナナとね、後ね、東京いちごも欲しい」

電話の向こうは収拾がつかなくなってきている。

みんな自分の言いたいことばかり。

きつとあたしとは電話ごしに話してること、分かってないんじゃないかな。

それは困る。

だって……。

「いい加減にしなさい！電話代がもつたいないでしょ！」

げんこつ4人分に値する大声を上げた。

うわさのハニー

まったく、こいつらは。

普段から、電話代を浮かせるために要件を要約して話すように言っているのに。

今の十数秒の間に、どれだけ電話代がいくと思ってんのよ！

「百佳！いきなり怒鳴ったって話分かる訳ないでしょ！十佳、説明するなら最後まで！それと一佳、ほしいものは一人一つ！最後に零佳！」

「なあに、ちいちゃん？」

ふんわりした可愛い声に、思わず頬が緩んで怒鳴り声が尻つぼみになる。

「お…王子様、キーホルダーは買ってあげられないけど……でもデイズニーランドと一緒に王子様と写真を撮ろうね」

「ホント？おひめさまもいつしょ？」

「もちろんよ。おねえちゃん、デイズニーランドの開門と同時に頑張って走るわ！一番にミッキー達のところに行ったら、みんなと一緒に写真を撮ろう」

デイズニーランドでは開門と同時に、キャラクター達が待機している真ん中の花壇に一番に行き着いた人に、キャラクター全員と一緒に写真をとるご褒美が用意されているのだ。

この瞬間、あたしは力の限り走ることを心に決めた。

なんだって可愛い零佳のためだ。
開門と同時に燃え尽きよつと悔いはない。

「わ〜い！」

「まったく！ねいちゃんはれいに甘いんだから」

やれやれとばかりに一佳がわざとらしくため息をつく。

「いち？何か文句ある？」

低い声ですごんでみると、ひつと一佳が息を飲む声があった。
そして慌てて、電話を誰かに託す音。

「ちょ、なんでオレに渡すんだよ！お前ら汚いぞ！ちいが怒ってるからって！」

「ももにいが電話したんじゃない」

「とーか、お前が説明しろよ！」

「ん〜無理。怒ってるねえさんの相手は、百佳しかできないでしょ？」

どこか状況を楽しんでる十佳がさらつと断る。

「くそ〜後で覚えとけよ」

「早く説明してよ！電話代がかさむでしょ？」

声を鋭くすると、それ以上は何も言えなくなっただけらしい。

百佳はふてくされたように呟いた。

どんなに距離が離れていてもパブロフの犬は、この声には逆らえないらしい。

それともベットのうえでむっつり腕組む仁王像が見えてるのかな？
余裕なさげにああもつと吐き出すと百佳は素直に話した。

「さっき、とーかが言った通りだよ。どういうことだよ？ただのバイトだとばかり思ってたのに、王子の恋人ってなんだよ？それがバイト？絶対ダメされるって！あんな完璧なイケメンがちいみいな、ちみっとしたの相手にする訳ないだろ？デート商法ってヤツだぞ！絶対ツボとか買わされるんだ！それか体売らされるのどっちかだ！」

……。

ちみっ？

デート商法？

ツボ購入？

黙って聞いてれば好き勝手言いやがって〜！

しかも絶対、意味分かってない。とりあえず知ってるから言ってみただけだ。絶対！

もう色々突っ込みどころがいっぱいだけど、一番はやっぱり……。

「恋人って、なんでそうなるのよ〜！」

マンマ・ミーア!! (前書き)

皆様ご存知のアバの名曲からチヨイス。作者はアバの曲もミュージカル『マンマ・ミーア』も大好きデス! あんな感じで、ワクワクドキドキする物語になればなあと思いつつ、これからも日々ちみちみ更新していきますので、よろしくお願いします!

マンマ・ミーア！！

「恋人つて、なんでそうなるのよ〜！」

さっきからさらっと言われ続けて、突っ込む間がなかったけど、それってどういうこと？

どこをどうすれば、そんな風になっちゃうわけ？

「な、何バカなこと言ってるのよ！あたしは、ヴァカンスのために来日したシーリエントの王子がもっと日本のことを知りたいって言うから、日本文化を同世代の目線で伝えるために側にいるのよ！純粹で真つ当なお仕事なのよ！えっと、コンパニオンとか言うのよ！」

慌てて否定に走る。

そうそう、純粹なお仕事だもん！

コンパニオンっていうと若干危ういお仕事に思えるけどね、でも相手は酔っぱらいじゃなくて、王子様。

ホントにホントの話相手をするだけのお仕事な訳ですよ！

まあどっちが絡んでうざいかと問われれば、アルの方がダントツなんだけどね。

酔っぱらいよりも、顔も声もついでに頭もいいからタチが悪いというか……。

だから！ツボなんて売られてないし、か、体を売ったりなんて断じてない！

「どこをどうしたら、そんなことになるのよ！」

「じゃあ、このキスシーンはどうなっているんだよ？」

疑わしげな声。

じとつと視線が電話越しに絡みつく。

「キスシーンですって？そ、そんなことあたしが聞きたいわよ！合
成よ！CGよ！あり得ない！」

そうよ！キスシーンなんて……。

思わず絶句してしまった。

心当たりがないと言えばウソになる。

だって出会った瞬間から、アルは初対面のあたしの指を噛むんだ
もん。

そして当たり前のように爪にキスをした。

手首にも、腕にも、首筋にも溢れるくらいキスされた。

でもあれはただの冗談で、アルはふざけてるつもりで……。
スキンシップのつもりだったのよ！

そ、そうよ！アルだけじゃなくて、ダリルさんもアレクサンドラさ
んに簡単にキスしてたし……きつとシーリエントでは初対面にギリ
ギリアウトなキスは常識で……。

もごもごと口の中で自分へのいい訳を探してみる。

急に黙りこんだあたしを不審に思ったのか、百佳がぶすつと声を
低くする。

「でもスポーツ新聞の一面にちいと王子が口を寄せてる写真が載っ
てるぞ」

「口ですって〜！そんな訳ないでしょ！」

渾身の絶叫が部屋を揺らす。

口にキスなんて！

もうそれはスキンシップじゃ片付けられないでしょ！
ホント、あり得ない！

どこをどうすればそうなるの？

た、確かにほっぺにちゅうはされたよ？

でもあれはお休みのキスで……。

口にキスはまだされてないもん！

って！……いやいや、まだっていつか、これからもそんなこと、

絶対ありえない！

真っ赤になつて、全力で否定する。

真実じゃなくても、アルとキスしたというニュースを弟妹が知つてるといふ事実に関顔から火が出そうなる。

混乱して、挙動不審だ。

熱い、熱すぎるわ！

今日も東京は朝から最高気温の記録を更新ね。

動揺を知られないように大声で百佳に噛みつく。

「だ、だいたい、なんでスポーツ新聞の見出しなんて知っているのよー！」

「ん？隣の吉田さんちからパクって来た」

「バレる前に返してきなさい！今すぐ！」

なに、あっけらかんと犯罪を自白してるのよ！

未成年だつて、罪は罪なのよ！

少年法は万能じゃないのよ！

「大丈夫。後で間違つてうちに届いてましたって言って返すから」

名案とばかりに明るいう佳の音がする。

その横では一佳が待ってましたとばかりに甲高い声を上げた。

「そうそう。バレそうになったら最終手段！ れいの色仕掛けで誤魔化す。あそこのおっさんは絶対ロリコンだからな！ れい、惱殺ポーズ！」

「ぼーず！」

「あたしのれいに訳わかんないこと教えんじやない！」

本当に、こいつらは……。

心配してんだか、心配かけたんだか分かんない。

好き勝手言いやがって。

姉の心、弟妹知らず。

せつかく夢のデイズニーに家族で行こうと奮闘してるのに……。

思わず携帯電話を握りしめる手が震える。

でも、そんなあたしの怒りなどまったく分からない弟妹達は勝手に気ままに話を変えていく。

「あんな、ちい。オレらのことを思ってバイトをしてくれんのは嬉しいけど、でも無理すんなよ。嫌なら嫌って言えばいいんだから。ってかやめるよ。王子の恋人なんてちいに合わない。だから……」

不器用で言葉足らずな声が、精一杯何かを伝えようとしている。その真つすくな優しさが、やさぐれて干からびた心を一瞬で瑞々しい泉に変えてしまう。

誰かの気持ちを押し量るなんて逆立ちしたって出来ない癖に。

このタイミングで、それはずるいんじゃない？

「そうそう、別に誰とキスしてもいいんだけどね。ねえさんだってお年頃だから。でも、我慢してるんなら話は別。どこぞの王子だつて関係ない。俺たちがねえさんを奪いに行く」

「ねいちゃん、おれ、嫌いなもの残さないから、だから、無理しないでよ！」

「はい！れいも、れいもがまんする」

もう。

さつきまで好き勝手言つてたくせに。

なんで、あたしの心にストレートに響くことを計算なしに言つてくれるのかな？

「頼りないか？でもちいが思うほど、オレらは子どもじゃないんだよ。新たなバイト、増やさなきゃいけないほど貧乏ならそう言えよ。なあ、ちい、一人で抱え込むなよ」

不意に大人びたこと言われたら、泣きそうになつちゃうじゃない。口で何を言つても、本当は心優しい子なんだよね。

そんな風に心配されてるなんて思わなかったよ。

ごめんね、やきもきさせちゃつて。

大丈夫。おねえちゃんは、無理も無茶もしてないのよ。

ただ、夢のような環境にドギマギしてるだけ。

受話器を握りしめ、そつと目を閉じてみる。

まぶたに浮かぶのは、誰よりも鮮明に思い浮かぶ大切な存在。

「ありがとう。でもやめたりしないわ。こんなオイシイバイト逃す訳にいかないもん。あと数日留守にするけど、その間、家のことは

頼んだわよ、もも。とーかもいちも、ももをちゃんとサポートすること！」

「ちいちゃん、れいは？れいは？」

「れいはいつも通り素直でいること。それでもって、怪しい人についてはいけない。危険なものには近付かない。拾い食いはしない。おねえちゃんとの約束は絶対に守る」

「うん！れい、ちゃんとできるよ！」

「いい子ね。ねえ、もも、何かあればすぐに連絡するのよ。それに困ったことがあれば、ママに連絡しなさいね。ちゃんと言っているからね！じゃあ、また連絡するから」

「お、おい、ちい。まだ話は終わってないぞ！キスは……」

百佳が何かを言いたそうにしたけど、ぶちつと電話を切ってやった。

この期に及んで、何故まだそこを突っ込んでくるのかな。

せっかく晴れ渡った青空のように清々しい気持ちだったのに。

違っつて言ってるのに、何故そんなにこだわる？

まったくこのスポーツ新聞だか知らないけど、どんなシーンを載せてくれやがったんだ。

ぶっつとため息をつき、待ち受け画面を見つめる。

「まったく、朝から騒がしいのよ」

わざとらしく、頬を膨らましてみるけど、すぐに顔がにやけてしまっ

憎まれ口はご愛敬よね？

緩んだ頬は隠しきれない喜びでいっぱいだ。

0。 ベットの横にあるサイドボードの時計が示すのは、A・M7:0

まさか家を離れてもいつもの騒がしさで目覚めるなんてね。

朝からどっと疲れたけど、でも元気をもらって気がする。

あたしはベットから降りると、大きく窓を開け放った。

窓の外は目も眩みそうなほどの青。

心の中まで透き通っていきそう。

カラッと晴れ上がった夏空を朝の涼風が駆け抜けていく。

目をつむって、大きく伸びをした。

限界まで上がったかかとをトンッと落とすと、パチツと目を開けた。

思いつきり口角を上げて、空高く輝く太陽に微笑みかける。

うん！今日も一日、頑張れる。

鏡の中のシンデレラ

晴れやかな気持ちで、あたしは階下のレストランに向かった。

なんと！朝ごはんはバイキング！

朝からお好きな物をお好きなだけ食べられるなんて、なんてゼータク！

スキップ寸前の浮きあがった足は、放っておいたらダンスでも踊り出しそうなほどに軽やか。

ルンタッタツと小さくステップを踏み、広々としたレストランに入った。

大きな窓から差し込む朝日を受けたレストランはその辺のファミレスと一線を引く上品な雰囲気。

爽やかで落ち着いた朝の香りが立ち込める。

レストランのテーブルは三分の一くらい埋まっていた。

みんな、ゆったりと朝の一時を満喫している。

そこを一人、ウェイターさんの案内を受け、テーブルにつく。

こんがりベーコンの香りがあたしのお腹を刺激する。

銀の大皿に盛られた料理の数々に目移りしちゃう。

パンは何種類も並べられ、その横ではジャムもバターも選びたい放題。

うわー！見てるだけでワクワクするよ。

一人だとか、そんなこと気にしてられない。

そんなこと考えて朝ごはんを逃したら、あたしは一生後悔する。

かくは一時の恥。食わぬは一生の損だ。

そう、据え膳食わぬは女子の恥って言うじゃん！……ちょっと違っただけかな？

よし、さっそく、レッツ・イーティング！

と、意気込んで席を立つたはいいものの……。

なにかな？この刺すような殺気は……。

不意に背中に寒気を感じ振りかえれば、爽やかな朝の気持ちをぶちこわす好奇の視線たち。

レストランで朝ごはんを食べているホテルの宿泊客がもれなく、あたしに注目している。

そんなに舐めるように見つめられると、せつかくのバイキングに伸ばす手も止まってしまふ。

まるであたしの一挙一動に、ここにいる全員が注目しているかのよう。

なんで？そんなに一人で朝ごはんは浮いて見えるの？

他人事なんだから、放っておいてよ。

女には一人になりたい時つてもものがあるのよ！

どんな心の中で叫んでも、シックス・センスのない皆さまには聞き取れないみたい。

隠すことなく堂々とあたしを観察中。

こ、こんなの耐えられない！

せつかくのバイキングなのに！

何を取ればいいのか、どうやってどれぐらい盛ればいいのか、皆さまの期待にこたえなければと、勝手に自分のハードルを上げる小市民なあたし。

考えるあまり、和洋両方用意された温かな料理が、まったく手に取れない。

も〜早く関心を別事に移して下さい！

何で皆さん、もれなくあたしに大注目なの？

何か、あたしの背についてます？

理由が分からず、されどこの状況で堂々もできない。

そんなあたしは仕方なくオレンジジュースだけを持って、案内さ

れた席についた。

くそ〜おいしそうな料理を目の前に手を出す勇気がない自分が憎い。

「あの子がニユースの？」

「もしかして、王子の恋人？」

「あれが堂々キス？」

ぼそつとした声が聞きとれるかの瀬戸際で聞こえてくる。

ニユース？

王子の恋人？

堂々キス？

ついさつき、同じようなことを聞いた気が……。

こだまでしょうか？いいえ、誰でも……じゃなくて、百佳だ。

百佳が吉田さんちからパクってきたスポーツ新聞の見出しだ。

もしかして、みんな百佳達のようにスポーツ新聞を読んだの？

一体どんなシーンが載っている訳？

この異様な、皆さま総前にならえの大注目は、件の記事の所為なの？

なるほど、なるほど。それならば、この突き刺さる好奇心にも納得いく。

でもね、納得はいくけど、当事者としてはぜったい納得できないよ！

ぐいっとオレンジジュースを飲みほすと、カンッと勢いよくテーブルの上にコップを置いた。

隠す気のない、あけすけない視線が痛い。

こんな針のムシロにずっと居続けるほど、あたしは頑丈にできてないよ。

忙しなく席を立つと、その場を後にする。

テーブルに残ったのはガラスのコップただ一つ。

まるで時間に追われるシンデレラみたいね。

でも、こんな場所に残すものなんて何も無い。

全てから逃げきろうと、自分の部屋まで全速力で駆けていく。

早く、この異常事態から脱しないと。

あたしは、皆さまの期待に応えられるような人間じゃないんです！

確かにあたしも他人事なら、どんな子が王子様の側にいるのかな

とか、どうやって出会ったのかなとかとか、それなりに妄想と

期待を織り交ぜにして、見つめちゃうと思う。

でもね、それとこれとは話が違うのよ！

だって、あたしはただのバイトなんです！もう一部の際もなく、

バイトなの！

アルの恋人なんかじゃ断じてないんだってば！

どうせみんな心の中で、な〜んだって思ってるんでしょ？

悪かったわね！

どうせ、想像に反してちみっとしてるわよ！

くそ〜！ちみって一体どんな形態を表わしてるんだ！

あのね、これだけは言っておきますけど、お姫様だと思って見るから落胆が激しいだけなんだから！

その色眼鏡を外して、素直な心で見てください！

あたしはいたって標準の日本女子の顔なんだからね！

可もなく不可もなし！

なのに、なによ？この周りのがっかり感！

ちよつと、みなさん、露骨すぎですよ！

とりあえず自分の顔を鏡で見ってから出直してきなさい！鏡が真実を教えてくれるわ！……なんて言えたらどれだけいいか。

なんだか自分が可哀想で、泣けてきた。

こんな顔、誰にも見られたくない。

のに……。

「待つて！」

不意にその腕が掴まれた。

ぐいつと力強く後ろに引かれて、驚きに肩を竦ませた。

ピエロとワルツ（前書き）

登場人物がいつぱいの本作。彼がサイゴの登場人物です。なんか不審なヤツがいるな」と思いながら、適当に読み流して下さい。悪いヤツではないんですが……

ピエロとワルツ

振り返った先にいたのは白のカッターシャツに黒のベストと黒のズボンを履いたホテルのベル・ボーイ。

長めの髪はお洒落に茶色に染められていて、顔はすっきりと整っている。

奥二重な大きな目が印象的な、大人の男の人。

引き締まった体にシックな服装がとてもキマっている。

あたしがこれでもかと思えて目を見張っているからか、ベル・ボーイは少し戸惑ったように目を見開いた。

でもその驚きの表情をすぐに改めて、屈託なく微笑む。

笑うと目尻にいつぱい皺が入って、一気に年齢が下回って見える。

二十代中ごろの大人の男の人が、急にちょっとだけ年上のお兄さんに見えた。

その人懐こい笑みにつられて、思わず引きつったように口の端をあげた。

「王子様のご執心って聞いたから、どんな美少女なのかと思ったら、とっても可愛い女の子だ。色々憶測が飛んでるけど、でも残念。これは確かに“話相手”だな」

「はい？」

楽しげなベル・ボーイの言っている意味が分からない。

憶測が飛んでいる？どこで？

目が点のあたしそっちのけ。

彼は喉を鳴らすように笑う。

「ククツ。いやいや、こっちの話だよ。失礼しました。お客様。し

かしこ安心くださいませ。ホテル従業員は内輪では色々噂話をしますが、けして外には出しません」

表情を改めてかしこまると、掴んでいた腕を離してベル・ボーイは慇懃に頭を下げた。

色々噂話？

外には出さない？

も、もしかして！あたしは息を飲む。

なんとなくベル・ボーイが言いたいことが分かった。

ホテル従業員の中でもあたしは王子の恋人みたいに思われてるのね！スポーツ新聞の見出しそのままに。

「内輪でしてるんじゃない！っていうか、あたしはただのバイトなんだからね！恋人なんてトンデモナイ！」

思わず噛みつくように叫ぶと、ベル・ボーイは冷静にいなす。

取り繕ったような営業用の微笑で、まあまあと両手を広げる。

「ですからご安心ください。結局現地妻でも何でもなかったと私が責任もって噂を流しておきますから」

「流すな！ってか、ゲンチツマって何？そこはかとなくエッチな響きですっごくいや！」

「クククッ！ごめんごめん。怒らないで。想像以上に純情な子だからびっくりしちゃって」

さっきまでの丁寧さの欠片もない、妙に馴れ馴れしい声で噴き出すよう笑う。

意味ありげにニマニマ笑っている彼が一気に胡散臭く見えてきた。

今風のとつぱい若者って感じ。

チャラくて軽薄で、でも突き放せないほどに人懐こい。まるでピエロみたい。

物語の幕間に現れ、話の核心から遠ざけると見せかけ、もっと深い世界に誘う。

彼の存在に物語が不安定にその姿を変える。

これは、関わらないに越したことはないわね。

十七年生きてきたあたしの経験がそう告げる。

だってこんな人種、あんまり関わったことないっていうか、関わると面倒というか……。

あたしは、一步後ろに身を引くと、不審感を顕わにした目を向けた。

「それで、ホテルの従業員さんがあたしに何の用ですか？わざわざからかいに来たの？」

腹だたしげに腕を組む。

「まさか。落とし物」

恭しく腰を折ると、ピエロが大層に差し出したのはピンクの携帯電話。

「あー！」

走り出した時に落としてしまったみたい。慌てて受け取り、ピエロの方を見上げた。

「なくしちゃ困るでしょ？現代っ子の必需品」

ねっと目を細める。ピエロの笑顔はふにやりと柔らかくて、口に中
ですぐにとけるアイスみたい。

さすがにこの親切を無駄にできるほど、あたしは意志が強くない。
関わらないと決めただけど、でも、お礼も言わず立ち去るなんてで
きない。

「あ、ありがとう……」

さっきまで突き放したようだった顔で無表情を装う。

下手に笑って、自分の気持ちを読まれるのもちよっと嫌だった。

「いえいえ、オレの仕事だし。それより、あんまり食べてなかった
けど、大丈夫？」

「え…なんで？」

「オレ、一応ベル・ボーイだけど、朝はレストランで給仕もやって
るからね。君が慌ただしくオレンジジュースだけ飲んで出ていくの
見てたから。まあ、気持ちは分かるよ。あんなに注目されたら、こ
飯も喉を通らないよね」

うんうんとしたり顔でピエロは頷く。

そんな風に給仕の人にも観察されていたのかと思うと、余裕のな
い自分がちっぽけでいたまれなくなる。

「別にジュースだけで、大丈夫なんで」

早くこの場を逃れたくて、彼にそっと背を向ける。

早く自分の部屋に帰りたい。
しかし、ピエロは簡単に解放してくれない。

「それは体によくない。朝ごはんは一日の資本だよ」

へらへらつと人懐こい笑みをそのままに、あたしを試すように首を傾げる。

「ねえ、誰にも注目されずに朝ごはんを食べられる場所、行く？」

まるであたしの心なんてお見通し。

そんな色を浮べた人懐こい顔が、何か言いたげに奥二重を細める。
このピエロはあたしの反応を窺って楽しんでるみたい。

「それ、どこ？」

その甘言に乗ってしまう自分が憎い。

でも仕方ないじゃん。

彼の言つとおり朝ごはんは一日の資本。

元気の源なのよ。

思わず息急ぎきつて、前に乗り出してしまった。

大きくて、意外に愛らしい瞳がしてやったりと輝く。

あたしが自分の思惑通り動いて満悦だといいたげなドヤ顔。

ピエロは柔らかな微笑みをもっと崩した。

その含み笑いにただの親切じゃないと気付いたけど、もう遅い。

「こつち」

なんのちゅうちよもなく、ピエロがあたしの手を握ると半ば強引に來た道を引き返す。

「ちよ、ちよっと!」

「誰も思いつかない場所へのご案内しますよ?お姫様」

歌うように言い放つと、ウインクなどがましてくる。

姫!

日本の国にもこんなこと、さらっと言えちゃう人がいたなんて! そういう齒が浮く感じは、異国の王子様の専売特許だとばかり思っていたのに。

驚きすぎて、目をむいてしまった。

でもピエロは王子と違って、その下心を上手に隠せない。

アルなら胡散臭いほどの誠実な笑みの一つでも浮かべ、恭しくエスコートするんじゃないかな?

王子になれないピエロはニマニマと何か思惑があると思わせる顔のまま、あたしを見つめる。

「穴場だぜ?」

からかうような声が軽薄で腹立たしい。

多少強引な感は否めないが、でも絶対女性の扱いに慣れてるって感じ。

「やっぱり、いいです!朝、時間ないし!」

「大丈夫。それに顔にお腹すいたって書いてある」

抵抗とするのに、簡単にかわされちゃう。

ああもう!どうにでもなれ!

これも朝ごはんのためよ。

本当にヤバい状況になったら、有形力の行使も辞さないわ！

バックヤードで朝食を（前書き）

何からもじってきたか、分かっても口に出さないでそっと心の中に仕舞って置いて下さいな。

うちの千佳ちゃんはおードリーみたいな可憐な乙女には逆立ちしたってなれません。ティファニーよりも目先の朝ご飯です。そんな子ですが、これからも温かい目で見えてやって下さい。

バックヤードで朝食を

「え？ここ？」

あたしは目玉が転げ落ちそうなほど目を見開いた。
落ちずに無事なのはきつと奇跡だわ。

「そう、穴場だろ？」

あたしの表情を満足げに見つめ、ピエロはにまりと口角を上げた。

「や、穴場って、ここってあたし入っていいの？」

「いいの。いいの。誰も気にしないよ」

ねっと屈託ない笑みを浮かべ、強引にあたしを椅子に座られる。
いやいや、しれっとしてるけど、何かあれば怒られるのは確実あ
たしでしょう？

絶対適当に返事してる！

辺りを窺うようにあたしは声を潜めた。
心なしか、隠れるように背を丸くする。

「後で、怒られても知らないよ？」

「心配ナツシング！」

軽くウインクなどして、この人はどれだけ神経が図太いんだろう。
まあ、彼がいつて言ったんだから、信じるしかない。

何かあれば、この調子のいいピエロに文句を言ってもらわないと。

にまっつと笑った。ピエロが白色の皿をあたしに差し出した。

「それでは、お姫様、勝手に頂いちゃってください」

さて、あたしはどこにいるのでしょうか？

画面が遠すぎて分からない？

ぢつは……ここ。

さっきいたレストランの裏側。

キッチンの側にある給仕の控室で、余った料理や形の崩れた料理など表に出せなかった料理の前に陣取ってます。

ピエロがあたしを誘ったのは、不穏な世界でも危ない密室でもなく、それなりに人が行き来するこの部屋。

従業員の皆さんも流石に一般客が入ってきて、ぎよっと目をむいたけど、そこは一流ホテルの従業員。

さらつと営業用の顔を取り繕い、ピエロに理由を問う。

口が上手なピエロの言葉に、ああ、成程とみんなが一様に納得し、あたしは今、ここで余り物を食べるに至っているのだ。

「味に変わりはないよ。ああ、もしあったかい料理が食べたいなら言っつてね？パンも焼いちゃう？それとも朝はご飯派？」

あたしの向かいに座り、大皿からオレンジをつまみ食いしながら、ピエロが人懐っこい笑みを浮かべる。

その言葉にさっきまで不審感しか抱いていなかったピエロが急にイイ人に見えた。

「作ってくれるの？」

「シェフがね」

にこつと満面の笑み。

「シェフかい！」

「当り前。素人が勝手にキッチンに入ったら殺される」

うそぶくように。ピエロは肩を竦めた。

「君なら、きっとシェフも気前よくなんでも作ってくれるよ？」

「それ、どういうこと？」

戸惑いに揺れる目を向けると、ピエロがあたしの顔を覗き込む。肘をついたまま、あたしに顔を寄せると薄茶色の瞳を和ました。意味ありげな笑みは、ほだされそうなほどに柔らかくてキマっている。

「昨夜のこと、ホテル中に広まってるよ」

え？昨夜のことって、もしかや屋上でこと？

誰もいないと思ってたのに、まさかのギャラリー！

衝撃の事実には愕然とするあたしに。ピエロは、満足げに頷く。

「王子様の食事も全部君が食べたんだって？その食べっぷりに給仕をしてた人も驚愕だったらしいよ」

あ、ああ…昨夜のことって、そっちの方が。

思わず冷や汗がいちゃった。

「どしたの？」

「な、なんでもない！で、でもそれとシェフに何の関係があるの？」

「好き嫌いなく、出された物を残さず食べきった君にホテルのシェフたちは大絶賛だ。王子は全然食事に手をつけなくて、シェフも頭にきてたからね」

なるほど。アルの偏食はヴァカンス1日目から始まったのね。偏食だって言う割には昨日はペロツとお弁当を食べたような……。分かんないけど、あれは第二次反抗期みたいなものじゃないかな？よく分かんないけど、誰しもナイフみたいに尖って誰かれ構わずに逆らってみたくなる時期がくるらしいし。

王子だって人の子だし、ありえるんじゃないかな？

まあ普段の完璧さとのあまりのギャップに騒然としそうなほどの“この支配からの卒業”だけ……。

とろけちゃうよ、ハニーボーイ（前書き）

なかなか問題の王子が出てこない問題作。主人公なはずなのに影の薄いアルに幸あれ！

でもこれからも時々放置プレイにしちゃいます（笑）

とろけちゃうよ、ハニーボーイ

「なんで、こんなに世話を焼いてくれるの？」

あらかた目の前のものをお腹に入れ、あたしは一息吐くと、目の前でくつろいでいるピエロに目を向けた。

今気付きましたが、あなた、あたしにかこつけて朝の仕事、さばってませんか？

「ん〜君が気になるから。かな？」

さらっと誤解を招きそうな問題発言。

しかもにこつとハニースマイルを寄せてくる。

目の周りにできた皺がより一層親しみを感じさせる。

アルとは違うふんわり甘い顔に思わず、ドキッとしてしまった。

なによ！なんでこのタイミングでそのセリフ？

絶対、狙って言ったでしょ？

「な、な、な……ふざけないでよ！」

でもそんな彼の思惑通りにうるたえるジュンジョーなあたし。

大人の余裕には逆立ちしたって敵わないもの。

思春期は尖って自分を守ることしかできない。

でも、防御に入る前に更なる爆弾を投下されてしまった。

「実は昨日、ホテルに入って来た君を見た瞬間から気になってた。もうずっと君のことが頭から離れなくて、どうしてやるうかと思ってた」

にが味と甘味が上手にブレンドされたテノールの声が、囁くようにうそぶく。

テール越しに体を寄せて、ついでに軽くおでこを人差し指で突つつかれる。

「なんで？」

どうしていいか分からなくて、つつかれたおでこに手を当てるだけで精いっぱい……。。

困惑に潤む瞳に、人の悪い軽薄な笑みが映る。

これでもかと口角を上げたドヤ顔が、してやったりとばかりにあたしを見返す。

「だって、ウワサの王子の側にいるんだぜ？どんな子が気になるだろ？しかも恋人？誰だって興味を持つさ」

ん？気になるって、そういう意味？

いやいや、別にあたし個人に興味を抱いてほしいとかじゃなくて、でも、ほら、そんな空気だったじゃん。

明らか口説いてる雰囲気だったでしょ？

なのに、最後で手の平を返すようなさらっと感。

甘い雰囲気を作り出して最後に一般論で落とすって、絶対狙ったんでしょ？

この計算しつくされた感じ、ぜったいに天然じゃない。

くそ〜！やっぱりこんな人、信じられない！

悔しげに睨みつけたけど、でも相手は変わらず興味深々と言った顔。

「別に、偶然です！偶然バイトになったの！あなたの期待に応えられるようなことはまったくありません！すいませんね！」

いいつと威嚇してみる。

これがせめてもの抵抗ね。

でもあんまりからかうと痛い目に合うわよ！

これでも一応、尖ったナイフ世代なんだから。うん、まあペーパーナイフに及ばないんだけど……。

「ククツ！ご免、ご免。君って、からかうと面白くて……。間違わないでね。今だって君が王子のバイトだから助けたんじゃない。ホントに君自身に興味があつたんだ」

にこつと愛らしい瞳が細まった。

思わず見惚れそうになる親しみの籠った頬笑み。

なんでそう狙ったようにあたしをうるたえさせることばかりするのよ？

腹が立つのに、ドギマギしてしまって、何も言えない自分が憎い。どうしていいか分からなくて、思わず引いてしまう。

でも、見るからに女慣れしたピエロはその距離を埋めるようにずいっと顔を寄せてきた。

「気になる女の子を助けなくなるのは、男の性だろ？」

な、なに、その言い方！

さも当たり前前に男を醸し出さないでよー！

経験値0のあたしに、その男くさはNGなんです！

しかもこんな至近距離で、変わらずに微笑まれたらどうしていいか分からない。

「な、何を言って……」

「日本語」

にっこりと蕩けそうな笑顔で、分かりきったことをさらっと言う。

「そんなこと分かってるわよ！もう、からかわないですよ！」

「あはは！ごめんね。でもホントだよ」

ククツと声をたたて、相好を崩すピエロ。

余裕なく感情のままに叫ぶと、ピエロは大げさに身を引いて、大げさに肩を竦めた。

なによ！そのアメリカン・ジエスチャーは！

すつごくムカつく〜！

「だから！そんなこと言うてからかって……」

抵抗するようにむきになってテーブルを叩いて、立ち上がった。

言われっぱなしのからかわれっぱなしなんて、癪だもん。

ちよつとは言い返してやらないと……ってええ？

乗り出したあたしの顔目がけて、ピエロが何のちゅうちよもなく手を伸ばしてきた。

叩かれる？

何であたしじゃなくて、あなたが先制パンチを加えようとしてくるのよ！

ぼ、暴力反対！

瞬時に目をぎゅつと瞑ったけど、頬に触れたのは激しい衝撃ではなく、こそばいような乾いた質感。

ん？人の肌つてこんなにも冷たくて、ぺそつとしてたかな？

「わ！なに、なに？」

「ねえ、こんな新聞記事読んだら真相を知りたくなるでしょ？」

目を開けると、視界を覆う黒い影。

その向こうからピエロの歌うような上機嫌な声がする。

あたしの意表をつけたのが嬉しいらしい。

「新聞って……」

驚いて体を引くと、目の前にあったのはポニーテールの後頭部。

平面にデカデカと描かれた後頭部の向こうにあるのは、一度見たら忘れられない壮絶な爽やかフェイス。

濡れるような色気を醸し出したその明眸皓齒がなんとも言えない絶妙なポジョニングで後頭部に隠されている。

あれ？

デジャブかな？

この感じ、見たことあるような……。

差し出されたそれがスポーツ新聞の一面記事だと気付くまで、かなりの時間を要してしまった。

側でニマニマと笑っているピエロなんて目に入らない。

呆然と、ただ後頭部とその後ろの美形を見つめる。

これって、もしかしなくともあたしとアル？

しかも構図が明らかかキスシーン！

ちよっと待ってよ！

なに、この物語のようなワンシーンは！

こんなのあたしの記憶にはないぞ！

そう、ないはずなのに……。

目の前の二人を包む金色があたしの深層心理に入り込む。
ドキンっと心臓が飛び跳ねた。
瞬間、記憶がフラッシュバックする。
蕩けそうな朱色の空。
側に立つ赤い鉄塔。
遠くに見える黒づくめ。
そして……。

「王子だなんて呼ばないでほしい」

まるで魔法の蔭に絡まれたように逃れられない。
思い出しただけで、心臓がバクバクする。
もう目の前のピエロなんて目じゃないくらい。

あたしが絶句して、固まってしまったからかな？

強張ったあたしの顔を覗くように、ピエロがニマニマ笑いを浮かべる。

「で、真相はいかに？」

「……い、いかにもなにも……これはたまたま顔を寄せた瞬間で、断じてキスなんかじゃない！ た、たまたま、こんなカンジになっちゃっただけよ！ 誰よ！ こんなデマ書いたの！」

ぱっと、ピエロの手からその記事を奪い取った。

こうでもしないと、この動揺がピエロにはれちゃう。

このまま心の中まで読まれたら、あたしはどうしたらいいの？

強引に手に入れたキスシーンをこれでもかかってほどぐちゃぐちゃに丸めてやる。

そうよ！こんなのは丸めて、丸めて、そして……。

「も〜シンジラレナイ！！ちゃんと写真はイメージですってデカデカと書いときなさいよ〜！」

渾身の力を込めて、遠く離れた壁にぶん投げる。

けっこう勢いよく飛んで行った新聞記事の塊は激しく壁にぶつかって跳ね返り、側のごみ箱に入った。

「おお〜おみごと〜！」

人の気も知らないで、このピエロはなにを呑気に拍手なんてしてるんだ！

ぜいぜいと肩で息をするあたしに、何か鬼気迫るものを感じたのか、ピエロはその手を止めた。

人懐っこい笑みが強張った。

恐る恐るあたしの顔を覗き込んだ。

「どしたの？」

「別に！とりあえず、ご馳走さまでした！あたしはこれで失礼します！〜！」

ふんつと鼻息荒く、ピエロに背を向けた。

とりあえず控え室を出るまでは堂々としていられたのは、なけなしのプライドのお陰。

でも頭の中は大パニック！

まさかあんな光景が日本全国津々浦々のお茶の間に届けられてるのかと思うと、もう恥ずかしくて、穴があったら住みつきたい！

あたしは逃げるようにその場を後にした。

イジワルウィケッド(前書き)

おはようございます！今日は朝から更新です。それにしても物語を書くって大変ですね！こころ書きたいって思っても、気がつくときゃラが明後日の方向に暴走します……

イジワルウィケッド

その後のあたしはというとずっとブルー。

出発時間にロビーに行くとき、今日も相変わらず爽やかな完璧王子が優雅な物腰であたしに手を振ってきた。

綺麗に梳かしたさらさらヘアをおもむろにかきあげ、魅惑の瞳をあたしに向ける。

本日の王子様は薄いグレーのベストに揃いのズボン。

首にはきつちりと紺色のネクタイをして、ベストの胸ポケットには揃いの色のハンカチなどをさりげなく差すという紳士ぶり。

キラツとキラめくシルバーのカフスとタイピンが彼の気品を三割増しにしている。

もちろん足先にもお洒落を忘れない。よく磨かれた靴は先のとんがった黒色の皮靴で決めている。

絶対一着何百万とかしちゃうのよ！それをそうとは感じさせずにさらっと着こなすなんて……ホント嫌味なぐらいいい男ね。

朝の記事を思い出して、思わず足を止めてしまつた。

どうしよう……アルは記事のことなんて知らないよね？

どんな顔をすればいいのか分かんないよ！

当事者はそんなつもりもないのに周りが皆そんな目で見ているかと思つと、うかつに近づけないというか……。

自分の思惑に足を取られ、進めなくなる。

でも優しくない王子様に待ったはない。

どんな顔をするかまだ検討もつかないあたしの側まで長い足でさらっとやってくる。

そしてお約束の蕩けそうなほど甘い笑顔を浮かべた。

うわ〜朝から何カラットの輝きを放つつもり？
しかも近い、近い！

その距離間は、もはやバイトと雇用者の枠をはみ出してるでしょ！
なんて、あたしの心の叫びが届く訳なく……。

『おはよう、チカ。昨日はよく眠れた？』

そつと囁かれるのは体の芯を熱くするような甘くて聞き心地よい
声。

しかも昨日よりもセクシーさに磨きがかかっている。

「ぴいっ！」

朝から濃すぎるその声に思わず腰砕け。

欠片しか残っていないかった余裕が全て吹き飛んでしまった。

真っ赤で挙動不審なあたし。

助けを求めるようにさまよった視線がとらえたのは、変わらず爽

やかで誠実な笑みの完璧王子。

目が合つとその蒼い目が慈しむように細まった。

も〜なんでそんなにピンポイントで、あたしの余裕をなくすこと
ばかりしちゃうかな？

でも、これだけは分かる！あなた、絶対狙ってたでしょ？

そうよ、絶対に分かってて声のトーンを変えてるのよ。そもそも
って、あえて蕩けるほど甘い表情を浮かべてるんだ！

そんなことされたら、もう絶対顔なんか見れないじゃない！

なんで朝からそんなにイジワルするわけ？

昨日、あたし、そんなにあなたに障ること言った？言っただけで……いや、言ったな。思いつくままにがつつり、溜まりに溜ま

ったものを吐き出した気がする。これでもかかってぐらいに言いたいこと言いまくって、ついでに覚悟しろだの、後悔しろだの……うん、まあ、それは置いておいて……。

でもだからって朝からこんなことする理由にならないじゃない！何よ？昨日も屋上でのやり取りはまやかしたの？

深まったはずの友情はどこにいったのよ！

うろたえてしまって、逃げるようにアルから視線を背けた。

でもこの似非白馬の王子がそれを許す訳がない。

『チ力？』

媚薬混じりの蕩ける声が吐息と共に耳朶に響く。

甘い悪魔がとびきり慈愛に満ちた麗しい笑みを浮かべると、何気ない仕草でそつとあたしの頬に手を当てた。

そして有無を言わずあたしの顔を上に向ける。

抵抗できずに上を向くと、涼しやかな蒼が意味ありげに輝く。

『あれ？朝の挨拶が聞こえないな？挨拶は世界の常識だと思っただけど？それとも、日本ではもつと顔を近付けて交わすものなのかな？』

甘い、蕩けそうな声にほだされそうになる。

意味が分からなくてもこんな人に人を翻弄させることができるなんて、ホントに魔法使いなんじゃないの？

しかも絶対に西の悪い魔女。ウエケツドだ！

あたし、英語なんてまったくできないし、リスニングなんて最た

るもの。

でも本能が訴えかけるの……絶対に不穏なこと言ってるって！
心地よい手の温度から急いで逃げると、あたしは大声をあげた。

「いやいや、おはよう！グッドモーニン！ボンジュール！？好！！
えっと、えっと………ついでに、ハヴァ・ナイス・デイ！これでどう
だ！」

警戒心をあらわに距離を取ると、アルを睨んだ。

こんだけ朝の挨拶を交わせば文句も言えないだろう！

そんなあたしをきよとんと見返すアル。そして次の瞬間に、完璧
王子が相好を崩した。

若干幼さを残す八重歯を零し、屈託なく笑い声をあげる。

『あははっ！そ、そんな全力で世界各国の言葉で挨拶しなくても……
…「おはよう」ぐらい僕でも分かるよ！君はホント朝から全力なん
だね』

「な、なんで笑うの！とりあえず伝わるように言っただけじゃない
！」

『しかも出会った瞬間に「よい一日を」って、君は僕と早く離れた
いのかな？』

クスツと口の端を歪めたかと思うとアルはぐいっとあたしとの距
離を縮めた。

「でも離してあげないよ？覚悟しててね」

耳元で囁かれたのは、甘い甘い流麗な日本語。

ついでに他の誰にも見えないようにぺろつと耳を舐めるといふ反則技付き！

も〜！これ、セクハラっていうんだぞ！

雇い主だからってなんでもしていいと思うな！

でも頭が沸騰して何も言えない。

覚悟なんてできないよ。これ以上はもう絶対に限界を振りきつちやう。

もうしどろもどろで、どろどろのぼろぼろ。

朝からあたしのヒットポイントは風前の灯。

誰か薬草持ってきて！いえ、ホテルでもう一泊させて！全快するから！

きつと今のあたし、この世の終わりみたいな顔であわあわしてると思う。

でも流石、誠実で実直で心優しく、ない王子様は格が違う。

何食わぬ顔であたしの側から顔を引くと誰もが見惚れる甘ったるい微笑を浮かべた。

そしてさも当たり前にあたしの手を取ると、さらっと口づけなどかましてくる。

『フフツ。今日も一日チカのお陰で楽しく過ごせそうだよ。さあ、行こうか？』

ちょ、ちょっと待って！何よ！この展開は！

なんで手を掴むの？なんで口を寄せたの？し、しかも何故恋人つなぎ！指を絡める必要性ある？

でも抵抗しようにもぎゅっと握られた手は簡単にあたしの心を離してくれない。

優しい拘束を振り払うこともできず、あたしは仕方なくアルに手

を引かれてその後ろに続いた。

繋がった部分が燃えるように熱くて、それ以上に頬が上気するのはきつと夏の暑さのせいよね？

きつと今日も東京は猛暑なのね。

涼しいホテルの中から見える外のアスファルトには陽炎が揺れる。

こんな日に食べるアイスは格別なのよね。って懸命に繋がれた手から思考を外そうとやっきになった。

なのに、そんなあたしの背に突き刺さる好奇の眼差しがあたしを現実に引き戻す。

今朝のレストランの倍に膨れた視線がまじまじとあたしとアルを見つめてくる。

この感じ、耐えられないよ！

あのね、全部アルの所為なんだからね！

あたしの余裕がなくなるものも、周りから大注目されちゃうのも！

あんなことをいとも簡単にしちゃうから、変な誤解を招くんだよ？

あのスポーツ新聞の記事を見ても同じこと出来る？

うわ。周りの視線が刺すように痛い。

だけどそんなものも目に入らないくらい、アルにドキドキしてしまっ。

絶対糖度（前書き）

絶対糖度ってなんだ（笑）？というツツコミは心の中だけで！
きつととてつもなく甘いんだと思います。

ただ甘さ セクハラになるのはなんでだろう？

絶対糖度

この日の王子様一行のご予定は、ということ…まず、この都内某所にある私立大学の見学。

さすが飛び級してゐる人は違うよね。

ヴァカンスに、わざわざ大学めぐりだつてさ。

それにしても……。

あたしは遠い目で車窓の向こうを見た。

あたし達を乗せた高級車の列は、徐々に大きくその存在を主張しだした由緒ある大学の校舎に向かつていく。

歴史的価値を感じさせるレトロで立派な校舎はただ佇んでいるだけなのに、圧倒されそうな雰囲気醸し出している。

うーん。あたしには永遠に縁のないところだな。

まとう空気が知的で、近寄りがたい感じがある。

でも今は……別の意味で近寄りにくい、一種異様な空気が渦巻いている。

あたしの見間違えじゃないよね。

今もがつつり視界に入つてゐるのに、見間違えも何もないんだけどね。

でも自分の目を疑いたくなる光景が目の前に広がっているんだもん。

あれってもしかしなくても……アイドルのコンサート会場でよく見る……。

「きゃー！！リチャード殿下！」

黄色い悲鳴が遠くから車のエンジン音に混じり、聞こえる。

やっぱり見間違えじゃない。

あの、人、人、人の鬱蒼とした森。

この炎天下にも関わらず、大学の門の前に出来た人だかりに戦慄した。

大学の門からずっと、道の両端には手にアルの顔が貼られたうちわやらハデハデな横断幕やらを掲げているファンクラブのお姉さん方が目をキラキラさせながら待ち構えている。

その数、もう千は下らない。

その側を車で走り抜ける途中、アルはわざわざ窓を開けて、にこっと爽やかスマイルで手を振ってみせる。

一斉にあがる黄色い嬌声。

「きゃ〜！リチャード殿下あ〜！」

「こつち向いて〜！王子〜！」

えっと、あたしの側にいるのは王子だっけ、それともアイドル？彼と彼女らの関係性、なんか間違ってますん？

普通、異国の王族の方にそんな大胆なアピールができるほど日本女子は積極的じゃないんだけどな。

お行儀よく並んで、国旗とか振って迎え入れるもんでしょ？

それが、何？このアイドルのドームコンサート並の熱気は！

集団心理による相乗効果？

アルの魅力と夏の暑さにおかされて、頭のネジが二本も三本も吹っ飛んだ彼女達のテンションは最高潮。

今にも車に飛びかからんばかり。

彼女達の前で警備に当たっているスーツ姿の警察官が必死に彼女達を押し留めている。

あわ〜普段から鍛えているはずの警察官を投げ飛ばさんばかりって、乙女の潜在能力は無限大なのね。

それともアルがどこからか醸し出す、トンでもないフェロモンの危険粒子の所為？

その黒山の人だかりの少し離れた場所で、今日も今日とて不機嫌そうな幸村さんのぶすつとした顔が見えた。

周りはアルの登場に一気に気温が上昇したのに、幸村さんだけは昨日と変わらず絶対零度の空気のまま。

その射抜く眼差しと一瞬、視線がぶつかる。

何か言いたそうに細められた瞳。

え？

心の中で問い返したけど、でも、車はすぐに彼らの脇を抜け、大学の門の中へ。

閉められた門の外ではまだまだポルテージの上がったお姉さま方の絶叫が響く。

車から降りると、アルは無造作に髪をかきあげ、彼女達を振り返る。

夏日を受け、さらに輝く金髪に、色つぼく細められた瞳。

こんな気障な仕草も何気なくこなしちゃうから、彼は完璧なんだと思う。

もちろんそんなアルに彼女達は力の限り感情をぶつ放す。

小さな子を慈しむように、くすつと微笑を洩らすとアルは彼女たちの期待に応えるように大きく手を振り、背を向けた。

その背に向けられる憧憬の眼差し。

真摯な瞳が恋い焦がれてやまない存在をずっと追い続ける。

これは報われることのない、一方通行な感情。

だから、わずかでも笑顔に向けてくれるだけで嬉しくなっちゃうんだよね。

その気持ち、あたしにも分かるよ。
だって、アルの頬笑みは心を一瞬で彼色に染めてしまうもの。
彼女たちの邪魔にならないように、あたしはそつとアルから離れて一団の後ろについた。
のに……。

『チカ！こつち！』

つて、満面の笑みであたしを振り返り、あるうことがここでも手を掴む。

『チカはちよつと抜けてるから、コケないように気をつけないとね』

ちよ、ちよつと、なんて言ったの？

何故、ここで見せつけるように手を握られなきゃいけないのよ。

「ちよ、ちよつと！」

この衆人環視の中、無下に手を払うこともできない。
ぎよつと目をむいてアルに訴えるけど、胡散臭い爽やかさしか返ってこない。

困って周りに目を向ければ、セバさんが申し訳なさそうに目礼してくる。

その側にいるヤマネ君は興味なさげにあくびをかみ殺している。
そして、アレクサンドラさんが今にも泣き出しそうな憤怒の表情と今にも嘔みつきそうなペスの視線。

いやいや、睨む方を間違ってますよ！

あたしはそつとしていてほしいのに、放っておいてくれないのはお宅の王子です！

それ以上に突き刺さるのは、門の向こうの大和撫子ズのエモいえぬオーラ。

言葉なき威圧があたしを圧迫する。

今、絶対彼女達の中で、あたしへの殺意が三割増しになったよ。

ちよつと、バカ王子！

あなたが国に帰った後、痛い目に会うのは絶対あたしじゃない！
どう責任とつてくれる訳！

叫び出したい衝動を懸命にこらえて、あたしはじとつとアルを睨む。

その視線に気づいたアルは小馬鹿にしたように、大げさに目をむいて見せた。

そして、そつとあたしの方へと顔を寄せる。

その顔にあるのは完璧王子じゃなくて、あたしの心を翻弄させる小悪魔。

「カクゴシロツテイッタノハキミダヨ？」

形のいい口が囁くように動く。

微かに混じる吐息とともに、甘い言葉が体に流れ込んだ。

「な！」

『クスッ！チカ、いつ見ても飽きないな。その百面相』

してやったりとばかりに満足げに微笑む顔はもう理想の仮面を被っている。

うゝ何よ。昨夜の仕返しのもり？

そんなに昨日あたしに言いたい放題言われたのが気に入らなかつたの？

このタイミングでそれを返してくるなんて、ホント性格悪い。
覚悟しろとは言ったけど、でも、こんなつもりじゃなくて……。
ああもう、頭が蕩けて何も考えられない。

愛の逃避行！？

この大学では最新の農業について講義を受ける予定なんだって。
最新の農業ってなんだ？

農業と聞くと、泥だけになりながら手作業で苗を植えてる光景が
一番に頭に浮かぶ。

嗚呼、日本の風景って感じ。我ながらすっごくベタな発想。
でもアルたちが話し合っているのは、そんなほのぼの風景じゃな
い。

バイオテクノロジーがどうの、有機肥料の研究がどうの、聞いた
こともない単語が飛び交っている。

こ、これが最新の農業？

白衣来て、フラスコ持って、パソコンと会話しているこれが農業
なの？

彼らが何を研究しているかなんて想像もつかないし、とっくにあ
たしの理解の範疇を超えている。

分かったことはどんな分野でもつきつめて行くと奥が深いんだな
ってことぐらい。

とりあえず、これから農業への考え方を改めよう。

『我が大学では特に水耕栽培に力をいれており……』

きっちり七三に分けられた頭の、神経質そうなおじさんが流暢な
英語で何かを説明している。

その側でアルは真剣な表情で話に耳を傾けている。

『なるほど。それはどこでも活用は可能なのでしょうか？例えばや
せ細った土しかない地域で大々的に行うことは？……このデータに

おける統計の信頼性は……』

きりつと澄ました顔にはいつもの甘さはない。

無意識なのか、薄い唇をそつと撫でるその仕草がどこか色っぽい。

あの口が甘く囁いて、あの唇が昨日あたしに触れたんだ。

そう思うと心臓が急激に沸騰してしまう。

ぼんつと急上昇した体温に頭がついていかない。

くらくらと立ちくらみがして、瞳が潤んでくる。

脳裏に浮かぶのは100万ドルの夜景を背にした、甘い牙を剥く夜の野獣。

アップで迫ってくる顔があたしの首筋に噛みついて……なんて、

ダメダメ！

もこの映像は放送禁止なのに！つい話についていけないで、ぼんやりとアルの仕草に見惚れて思考が勝手に歩き出していた。

これじゃ、あたしが変態さんじゃん。

アルはあんなにも余裕で顔色一つ変えずにいるのに、なんであたしだけこんなにもいっぱいいっぱいなの？

そう思うとなんだか悔しくて、息が詰まった。

ああ、ホントに目まいがしてきたよ。

アルの周りは本当に人口密度が高くて、人に酔ってしまえそう。

あたしはバレないように、そつと一団から抜け出すと壁にもたれかかった。

触れた壁は冷気を含んでいて、心地よい。

高まる鼓動が冷気に冷やされ、ゆっくりと落ち着きが戻ってくる。

ほつと息をついた。

うん、大丈夫。ちよつと人の熱気に飲まれちゃっただけよ。

アルのことで気持ち揺さぶられた訳じゃない。

あたしはちゃんと分かっている。

これは真夏の熱さが見せる幻想だって……。

『チカ？気分悪い？』

不意に額に冷たい手を当てられ、あたしはびくりと顔を上げた。上げた視線のすぐ側にあるのは、非の打ちどころがないほどに整ったアルの顔。

透き通ったガラス玉のような蒼の瞳がじつとあたしを見つめている。

大学のお偉い先生と真剣に会話してたくせに、なんで後ろにいるあたしのことをそんな敏感に感じ取るのよ！

やっぱり背中に目が付いているのよ。じゃなきゃおかしいじゃない！

ここまで敏感に察知されると逆に怖い。うるたえるあたしの気持ちなどおかまいなし。

アルはあたしの額に手を当て、真剣な表情で近寄ってくる。

『ちよつと熱いな。もしかして体調悪いの我慢してた？』

「な、なにか用？ちや、ちゃんと話を聞かないと先生に怒られるよ？」

『ダメ！逃げないで。ちゃんと診せて』

思わず一步後ろに身を引いたあたしの腕をアルは逃がすまいと握ってくる。

掴まれた瞬間、びくりと体が震えた。

掴まれたところが熱い。

余裕のないあたしをもつと翻弄させるかのように、アルがずいっ

と顔を寄せてきた。

心配げに細められた蒼の瞳の前にかかった、淡い金髪があたしの鼻に当たるくらいの至近距離。

もうやだ。なんでこんなにもピンポイントであたしの余裕をなくすことばかりしてくれちゃう訳？

『どこが調子悪いの？チカ、ちゃんと僕の目を見て』

「だから！顔が近いつてば！も〜コミュニケーションが英語って、超もどかしい！だから！ノープロブレム！アイム・ストロング！アイム・ポジティブ！」

なけなしの英会話を披露して、アルの束縛から逃げようとしたけど、生憎後ろは壁。

アルはさらにあたしを壁に追いやるように身を寄せて、真摯な瞳を向けてくる。

『いや、何の自己申告か分かんないけど、顔が真っ赤だよ。絶対無理してたでしょ？』

いつもの寸分の狂いもない完璧な表情が少し複雑に歪んだ。

ど、どうしたの？不特定多数の皆様方の前ではいつでも余裕の爽やかプリンススマイルでいなきやいけないんじゃないの？

泣きそうな目をアルに向けたけど、その表情の意図することは分からない。

「ア、アル？」

どうしていいか分からなくて、答えを求めるようにアルの顔を覗き込んだ、その瞬間。

有無を言わずにあたしを自分の方へと引き寄せると、アルはあたしの背中と足に手を回した。

あっという間もなく、あたしの体が宙に浮く。

ちよ、ちよっと！何をするつもり？

ま、まさかこれは昨日も体験したお姫様だつことか言う奴では？混乱して何も言えないあたしを余所に、アルは呆然と事の成り行きを見ていた大学の先生に憤ましかかな王子の顔を浮かべた。

『失礼。プロフェッサ。貴重な講義の途中ですが中座することをお許し下さい。彼女を休ませます』

「ちよ！アル？」

アルの手から逃げようと必死に身を捻じってみたけど、その動きは完璧王子の必殺技で完封されてしまった。

『ああ、チカ！無理に元気があるように見せかけないでいいんだ。僕にだけは甘えていいんだよ？』

甘い囁きと共に、ちゅっと軽い音をたてて頬にキスされた。

「びっ！」

逆上せあがって、体がフリーズしてしまう。

こうなったら、再起動をかけるまでアルの言いなりだ。

公開お姫様だつこの刑に処せられてるのに重いだ、恥ずかしいだと文句を言う気力も湧きあがってこない。

だって燃えあがった頬に更に火を注がれて、あたしはもう焼失寸前なんだもん。

村人Bの主張（前書き）

おはようございます！今回も今回とて、いつもと変わらないセクハラ風味ですが、見放さないで下さい！

ちよつとづつアルの秘密なんかも書いていけたらな〜って思ってます。読み進めていかれたらナルホド、セクハラじゃないのね！って思ってもらえる？かな？いや、79%はセクハラなんですけどね！

村人Bの主張

な、な、何してるのよ！

もれなくこの場の全員から注がれる言いようのない眼差しがダイレクトに突き刺さる。

周りにいる不思議なシーリエント達はもちろん。大学関係者達もこれでもかと思を見開き、なぐにぐと心の中で盛大に突っ込みを入れてるのが見て取れる。

その気持ちよく分かる！

日本人じゃ絶対ありえないでしょ！

お姫様だつこで頬にキスなんて！

ただのアルバイトにサービスしすぎなんですけど！

アル、朝から絶対おかしいでしょ！なんでこんなにも甘いよ。

絶対アルの方が熱に犯されておかしくなってる！

早く目を覚まして！あなたの目の前にいるのは可憐な姫君ではなく枯れ気味な村人Bよ！

そんなあたしの気持ちなんてお構いなし。

けして離れない拘束から懸命に逃れようと身を捻じってみただけ、気遣うように優しく抱かれているのに、意外にがつつり掴まれていて簡単に振り解けない。

そのままその場の全員の注目を一身に受け、あたしは呆然とアルに運ばれていくしかない。

なんでだろう。頭の中でドナドナの曲が流れる。

えっと……あたし、売られていくの？

アルは器用に片手であたしを支え、反対の手で教室の扉を開けた。その瞬間、怒涛のように流れ込んでくる女性たち。

今までぎゅうぎゅうにドアにへばりついていたのに、急に支えがなくなつて倒れてしまつたらしい。

折り重なつたまま、きゃーきゃーと悲鳴を上げる彼女達を見下ろして、アルはにこりと極上スマイルを浮かべる。

『失礼。お嬢様方。お怪我はありませんでしたか？今は貴女達にお貸しできる手がなくて残念です』

「リ、リチャード殿下よ！本物が話しかけてくる！」

折り重なつた一番上にいた茶髪にパーマのお姉さんが恍惚とした表情でうっとりとしてアルに見惚れている。

「ちよつと！早くどいてよ！私も殿下を生でじっくり見たいのに！」

「やだ〜こんなことなら化粧直してくるんだつた！」

綺麗に出来上がった人間ミルフィーユは各層から悲愴な叫びが聞こえてくる。

『お怪我がないならよかつた。少し先を急ぐので、僅かばかりでも避けてもらえますか？』

有無を言わさない極上スマイルでお姉さま方を翻弄するとアルは卒なく扉を通る。

扉の向こうにもこれでもかと人垣ができています。

うわ〜これつてもしかしてアルのファン？

黒山の人だかりで光る目、目、目。

キラキラと輝いた無数の視線が舐めるような視線を王子へと向けられている。

隙間を埋め尽くす女性の数に思わずぞつとしてしまった。
うわ〜ホント、どこに行ってもおモテになるのね、アルは。
きつとこの大学に通っている女子学生の皆さまよね？
もしかしたら、男子学生も一部混じってるかもしれないけどさ。
一目アルを見ようとするとその熱いパトスに感心を通り越して、あ
たしは恐怖を感じるよ。

『失礼。お嬢様方。通していただけますか？』

うず高く出来上がった人の群れにも臆することなく、アルは完璧な微笑を浮かべたまま、あたしを抱えてその人だけに一步足を進める。

ええ？この中に突入しちゃうの？それはあんまりにも無謀というか……。ある意味入水自殺だよ。

この波の飲まれたら一貫の終わり。

ぎゅうぎゅうにもまれて、解放された時にはきつとアル、一糸纏わぬ霞もない姿になってるんじゃないかな？

もちろんあたしはリンチ決定でしょう。

お姉さま方の視線があたしを射殺そうとしてて、本気で怖いんですけど！

でもアルは構わず、ずいずいと人だかりの方へと足を進める。

ちよつと！ストップ！ストップ！

さすがにこのまま真っ直ぐに突き進むのはかなり問題あり！

「ア、アル！」

あたしは、アルの足を止めようと縋りつくようにアルの肩に手を掛けた。

けど、あたしの心配は杞憂でしかなかった。

アルが一步踏み出した瞬間、海が割れた。

ざつと音がなり、人の波が割れる。

その間を悠々と歩く姿は毅然としていて、周りからはほつつと熱のこもった感嘆が漏れ聞こえる。

さ、さすが王子様。オーラが一般人とは違うのね。

劣情と純情（前書き）

本当はベタベタあまあまなハーレクイン風王道ラブコメケータイ小説を目指してました。なんだ、それは！とは突っ込まないで下さいね。とりあえずあま〜いのが書きたかつたんです！でも……どこで何が変わったんでしょうか？まずPCで書いてる時点で大前提が崩れてる？

それでも理想は高く、現実には斜め横に大暴走で書いていきたいと思うので、よろしくお願いします！

劣情と純情

アルに抱き抱えられたまま、あたしは控え室として用意された応接室……の近くにある多分ただの物置となつていている部屋に入った。

ここは研究室のある校舎から少し離れた場所にあるレトロな洋風建築。

なんでも大正時代に建てられ、重要文化財に指定されるほど貴重な校舎なのだとか。

よく磨かれた木の床や壁にノスタルジックな感傷を抱いてしまうのは、日本人の性かしら？

洋風なのどころか和が紛れこんでいて、その素朴なその佇まいに心が落ち着く。

シーリエントの大使館も素敵だけど、この和洋風な建物も捨てがたい……とか、そんなことを考えている場合じゃなくて！

こちらから。先方さんに断りもなく、勝手に入っちゃダメでしょ！注意しようとしたけど、それよりも早くアルにしつと口を塞がれ、

あたしの言葉は籠った空気となった。

あたしを抱えたまま、部屋の扉を開け、あまつさえあたしの口を塞ぐなんて……。

この王子様の手は何本あるんだ、ホントに。

素早く部屋の扉を閉めると、アルは外の様子を窺うように扉に耳を当てた。

彼の意図が読み取れず、ポカンと彼を見上げてみる。

「ア、アル？」

「大丈夫。誰も付いてきてない。皆あの人だけに埋もれてしまつて、なかなかここには辿りつかないだろう」

そう流暢な日本語で答えると、アルは理想の王子様の仮面を外した。

うつすらと埃の積もった板張りの床にゆっくりと下ろされる。

所せましと色んなものが置かれた狭い室内は、時間が止まったように褪せて見える。

きつと長い間、人の出入りがされていないんだろうな。

若干カビ臭くて、学校の音楽準備室とかと同じようなすえた香りがする。

「ねえ、アル……」

アルの行動の意味が知りたくて彼の裾を掴もうとしたけど、それよりも早くアルがあたしの手を掴んだ。

「風に当たれる場所に行こう」

有無を言わさない口調で、そのまま手を引かれて窓際まで連れていかれた。

ホントにこの王子様の行動は不可解だわ。

あたしの体の調子を心配するなら、連れてくるのは物置じゃなくてちゃんとクーラーのある応接室だと思う。

それがまさか、部屋を二つ通り越した先にある物置に連れ込まれるとは。

まったく。不用心ですよ、大学さん！

使わないならちゃんと鍵をかけておかないと！

何処から似非爽やか理想完璧王子が侵入してくるか分かんないよ！

心の中で大学関係者に声なき主張をしている間にも、アルは淡々と窓を開けようと古びた金属製の差し込み錠に手をかけていた。

今どき差し込み錠？

いつの時代だ？と突っ込みを入れなくなるほどのちゃちな施錠設

備は流石築80数年。

確かに、くすんで色のはげかけた木枠で囲まれたレトロな窓にはお似合いかもしれない。

窓の向こうにある小さな円形のバルコニーや、その周りを取り巻く手すりも歴史を感じさせるほどに色褪せている。

でも流石は重要文化財。古びても目を見張る凝った意匠が所々に配されていて、このまま埃を被らせておくのがもったいないくらい。その窓の差し込み錠を手にして、アルは軽く眉を寄せる。

「ここ、全然使われてないんだな。錆ついている」

ヤツと小さな掛け声と共に長い間封じられていた空間に時間が流れ込む。

アルによって開け放たれた掃き出し窓から涼しげな風が吹き込んできた。

そつとアルの淡い金髪を揺らし、涼風がそつとあたしの頬に触れた。

窓の向こうは晴れ渡った空と日の光を照り返す眩い緑。

ざあつと葉が鳴る音がとても心地よくて、まるで海原をかける涼風のように。

外がじりじりとした亜熱帯だということをつい忘れそうになる……んだけど、あたしの体温は外気とは比べ物にならないほどに上昇

していて、正直外の景色に意識を飛ばすこともできない。

だって、あたしの目と鼻の先にあるのは、吸い込まれそうなほど澄んだ蒼い瞳。

いつも卒なく微笑を浮かべる口が今は一文字に引き結ばれ、似非紳士の影もない。

アルの伝家の宝刀、爽やかプリンススマイル小悪魔風味もなりを潜め、ただただ真摯な瞳がじつとあたしを射抜くように向けられている。

窓際に置かれた古びた木製のテーブルの埃を払うと、アルは軽々とあたしを持ち上げてそこに座らせた。

アルは座ったあたしの肩に手を置き、目線が丁度合う高さまで腰を屈めてくる。

そしてずいっとあたしの方へと体を寄せて、あたしの顔を覗き込んできた。

ぐいつと寄せられた非の打ちどころのない端正な顔に思わず腰が引けてくる。

「ちよ、ちよっと!」

その視線から逃れようと身を捻じったけど、それよりも早くアルがあたしの頬を掴んで視線を逸らすことを許さない。

も〜ホントにこの王子様の思考回路がよく分かんない。

サービズ精神旺盛に密着してきたと思ったたら今度は無言で見つめてくるなんて、ホント何がしたいの!

しかも絶対昨日よりパーアップしてません?

昨日はなかった恋人つなぎっていう新技も繰り出し、周りに見せつけるかのような甘々なキョリ感!

なんでこうもスキンシップを求めてくるの!

日本にはそんなちやらい文化はないのよ!

慎みが日本の美德なのよ! って……うん。や、まあだからって自分が憤みぶかいお淑やかな乙女かと問われれば否と答えるしかないんだけどね。

でもね、でもこれはなしでしょ! 近い、近い! そして、何故そんな真剣な眼差しであたしを見つめてくる訳?

もうアルのことが分かんなくて、自分に余裕がなくて、もう泣きそう。

潤んだ瞳で抗議するようにアルを睨んだけど、でも彼は簡単にあたしを解放する気はないらしい。

大きくて、それでいて繊細なほど長細い骨ばった手があたしの両頬を掴んだまま離そうとしない。

いつになく真剣な眼差しに胸の奥が疼いた。

これは反則だよ。いつもの爽やかさはどこに置いてきたのよ！

「目が少し充血してるな……」

あたしの心の葛藤なんてさらっと無視して、アルは強張った声を出す。

しかも断りもなくあたしの瞼を上につ張ったり、目もとの皮を下に引いたりしている。

何よ！お医者さんごっこじゃないんだから、そこまで本格的に体調チェックしなくてもいいんじゃない。

なんでアルに変顔を披露しなきゃいけないわけ？

目の中まで覗くなんて、ホント無神経よ！

どんなに親しい人にだつて見せることないのに。

まあ、親しくないお医者さんになら見せる可能性はあるんだけど、でもね、アルはお医者さんじゃないし、あたしだつてどこも病んじやないもん。

「瞳孔は正常に反応しているし、全体に濁りもない」

「離してよー！」

アルの手を自分の顔から離そうと彼の腕を掴んだけど、意外にがっしりして筋の通った腕はビクともしない。

「どつどつ。ちょっとだけ我慢ね」

「こら！あたしは馬じゃないんだぞ！なんだ、この訳の分かんない扱いは！」

「次は口開いて」

「や！」

アルの言葉にあたしは素早く自分の口を塞いだ。
これ以上体の内側を覗かれてたまるか！

「ちくか？ワガママ言っでないで、素直に従うんだ」

鼻の先にある完璧な顔がむすりと眉を寄せた。

まるで聞き分けのない子ども怒っているかのような言い方。
これじゃホントにあたしがワガママな子みたいじゃん。

でも同意もなく、こんなことされたら誰だってあたしと同じこと
するでしょ？

「訳分かんない！ちゃんと理由を言いなさいよ」

「君の体調を心配してるんだ。分かったら手を除けて」

「いや！別にどこも悪くないし！」

手で口を押さえたまま、あたしは目をつりあがらせてこれでもかと
睨みつけて威嚇した。

でもそれぐらいで引き下がらないのが、この王子様。
小さくため息をつく、あたしの耳元に口を寄せた。

わざと声を低くして、甘く囁く。

「僕は優しくないから、素直に従っておくべきだぜ」

ザビースト（前書き）

アルの本領発揮デス！
間違った方向に！！

ザ ビースト

「なっ！」

何かを言い返したくて、でも逆上せあがった体では何も考えられなくて。

でも感情が言葉になる前に、それはただの音になって零れた。

口を塞いでいた両手をいとも簡単に解かれると、そのまま後ろに押し倒される。

机に頭がぶつかる瞬間、支えるように入ったアルの腕に守られて、痛みも感じないままにあたしは机の上に寝転ばされていた。

息をつく間もない出来事で、自分がどんな状態になっているのかも分からない。

はっと息をついた瞬間には、ギラギラと情熱を宿した瞳が目の前にあった。

これ、どういうこと？

あたしが寝転がってるのに、アルの顔が上にあるなんて……。これって上に乗っかられてるってこと？

いや、も、なんでこんなコトになる訳？

涙は滲んでくるし、背中に冷や汗は流れるし、もう穴という穴から液体が流れ出てる気がする。

絶賛混乱中のあたしを余所に、アルはあたしの両手を頭の上で一つにまとめて片手で押えこんで、もう一方の手を顎にかけていた。ぐいっと顎に引かれて、抵抗の間もなく口を開いてしまった。

「いい子だ。すぐに済む」

ちよつと！何がすぐに済む訳？

この状態にさしておいて、何がいい子よ！
叫びたい。

でも恥ずかしさが込み上げてきて何も言えない。

それ以上に、より距離を縮めてきたアルの顔に、先の展開を想像して体が強張った。

ゆっくりと近づく麗しい顔。

落ちて触れ合う淡い金髪とあたしの黒髪。

アルの口から洩れる吐息があたしの頬を刺激する。

甘くて、すつきりして、どこか色気の漂うアルの香りを吸い込んで、あたしはくらくらと香に酔ってしまった。

アルに当てられて、もう何も考えられない。

抵抗するのも忘れて、ただ茫然とアルの顔を見つめた。

ちよつと待つて。それ以上顔を寄せたら、その先は……。

「口腔内も異常は見受けられないな。念のために触診も……」

その何かを納得したらしいアルがゆっくりとあたしの上から体をのけた。

押さえつけられた手が解放される。

ん？異常はない？

それはよかった。健康であるにこしたことはないしねって、そうじゃなくて！

「ちよつとー！」

その先を勝手に想像して軽く期待していた自分が何だか居た堪れなくて、あたしは足をばたつかせた。

「どつしたの？」

机の上に乗ったまま、寝ころんだあたしを見下ろすようにしてアルが不思議そうに首を傾げている。

素早くアルの下になっていた足を引き抜くと、あたしは起き上がってテーブルの端に身を寄せた。

あのままの状況で、じつと見つめられたらホントにヤバかった。もう、色んな事が。

「どうしたのじゃないわよ！なんでここまでされなきゃいけないの？」

「君の体調が悪そうだったからだよ」

警戒するあたしの気持ちなどまるで知りませんと言いたげに目を細め、アルは机の下に降りた。

ちょ、ちよつと、何？そのあっけらかんとした答えは！

シーリエントでは気分の悪そうな人を見つけたらまず目の内側を見て、口の中を覗いて確認する訳？

ちよつとおかしいんじゃないの？そのお国柄！

「ちよつと人の多さに酔っただけよ！別に風邪を引いてる訳じゃないんだから、こんなことしなくても」

「本当にそれだけ？」

まだ理想の王子様の仮面をかぶり忘れてるアルは険しい目を直そうともしない。

少しだけ昨夜の野獣の顔を彷彿させる眼差しにドキンと胸が跳ねる。

なんであたしの言葉を信じないんだ？

疑り深い眼差しに晒されて、何でだろう。あたしの方が肩身の狭い思いをさせられる。

「ホ、ホントにそれだけ！全然大丈夫なの！」

「朝ごはんに変なもの食べたりしてない？朝はバイキングだよ？部屋からエントランスに来るまでに知らない人にお菓子をもらったりは？」

「するか！」

ちよつとこの王子様はどれだけあたしを子どもだと思ってるんだ！

「あのね！心配してくれるのはありがたいけど、でもあたしはその辺にある物を拾って食べるほど貧乏じゃないぞ！」

「いや、拾い食いを心配してる訳じゃないんだけど……」

ふつと笑いを洩らしたのは、完璧な王子様じゃなくて同世代の男の子。

「何もないならよかったよ。……」「君にまで何か仕掛けてきたのか思ってたね」「」

「え？何？」

「いや、何でもないよ」「」

誤魔化すように曖昧に微笑んだアルは、そのままストンと床に腰を下ろした。

「ま、思わぬ理由でエスケープ出来たから良かったかな」

煌めく蒼の瞳を濃い水色の空に向けて細めている。

ゆったりと流れる風に身を任せる猫のようで、ちょっとだけ可愛
いとか思ってしまった。

だからかな？警戒心いっぱいだったはずなのに、ちょっとだけア
ルの近くに行きたいなって思ってしまったのは。

おずおずと机の端からアルのいる方へと移動するとあたしは机の
縁に足を下ろした。

「エ、エスケープって、あなたが授業を受けたいって言ったんでし
よ？」

「建前だよ。誰がせつかくの休みにそんなことしたいもんか」

埃で汚れるのも気にせず、床に胡坐をかいたアルがあたしの方を
見上げてにやりと笑ってみせた。

どこか挑戦的な色合いが深い湖沼のような瞳に滲んで浮かぶ。

それは洗練された宮廷の王子というよりも、猛々しい野望を胸の
内に秘めた戦士みたい。

「本当はこんな都会じゃなくて、もっと見たこともないジャングル
とかに行きたかったんだ」

ジャ、ジャングル……。

それって、腰みの一つで、鳶を掴んで「あゝあゝ」とか言いな
がら、木々の間を行き来したいってこと？

それとも密林の奥底に眠る謎の遺跡を見たいとか？

「別にインディ・ジョーンズやターザンになりたい訳じゃないから。そこまでワイルドになれない」

妄想を膨らますあたしにアルがさらっと突っ込みを入れる。

うわ！痛い妄想が口からはみ出してしまったのか！

恥ずかしさを隠すように顔を背けて、意味なく前髪を撫でつける。でもアルはさして気にする様子もなく、目を細めてじっと風を感じている。

王子様の思考ってよく分かんないな。

やっぱり普段から至れり尽くせりな人生を歩んでると、何か途方もない冒険に出たくなるものなのかな？

ばあか(前書き)

作中千佳ちゃんは何度もアルが分からないと悩みます。

それ以上に作者は、この二人のやり取りに首を傾げたくありません。

ラブは？あまあまは？王道展開はいづこに……。

もっとベタな展開を目指し、本日もちみちみ物語を進めるつもりなので、あきずにお付き合い下さい！

ばあか

「何で日本に来たの？」

そう思うのは自然な流れだよな。

なのにアルは目を大きく見開いて、じっとあたしを見つめてくる。

「それは……僕に影響を与えた人が日本びいきだったから……かな？日本語も教えてくれたし。実際、EUの各国とは違う文化体系を持つ日本には前々から興味があったし、何よりも日本のモノづくりに対する探求心は目を見張るものもある。それに一番は日本におけるシーリエントの知名度を上げるきっかけになれば、ということかな？」

一瞬言葉に詰まったように見えただけ、アルはすぐに如才なく答えると完璧スマイルを浮かべてあたしを見上げた。理想の王子様が有無を言わさない笑みを口の端に湛えている。

ん？

ちよつとだけ、心に澱みを感じた。何かがおかしいような。

でもそれが何なのかその時のあたしには分からなかった。

「知らない土地に行つて、自分を知らない人達に交じつて、もつと知らない世界を覗いてみる。これが理想だけど、でも常に理想と現実はかけ離れるものだからね」

眉を寄せて複雑な笑みを浮かべたアルはなんて言っただらう。

英語？それともシーリエント語？

それすらも分からなくて、あたしは困ったように首を傾げた。

「ん？結局来たくなかったってこと？それじゃあたしのバイトの意味が分かんないじゃない。まあ、元から意味不明なポジションだけども。でもまあ、そう言わずにせっかく来たんだし日本を満喫して帰ったら？そんなに悪いところじゃないでしょ？日本も！」

まあ一日本人として、こう言うのは当たり前だよな。

他の国よりも全然平和だしさ。こじんまりしてるけど、ほのぼのしてて暮らしやすいし……。

なのにアルときたら……。

「まあ悪くないけどな。でも今のところ、そんなに良くもない。ビルが建ち並ぶ光景は別にシーリエントでも見れるし。アジアならチヤイナの方が興味ある」

なんて齒に衣着せない率直な感想を述べられた。

なんだと！

アジアの代表を掲げる日本国民の前で中国がよかったと？

確かに中国四千年の歴史には逆立ちしたって勝てないんだけどね、でも日本に来て中国がいいと言うんじゃない。

それなら始めから中国に行けばいいじゃないの！

取りあえず言われっぱなしも癪だし、素晴らしき日本文化を伝えようとなない知識をこれでもかと絞り出してみる。

「そりゃ自己主張とか苦手だし、せこいとこいっばいあるけど、でも本当は明るくて素直な国なんだよ。なんでも楽しんじゃうの。暑い夏も寒い冬もイベントを用意して、自分たちが面白そうと思ったらなんでもしちゃう。そんでもって自分達に合うようにリメイクしちゃうの。お得な国民性でしょ？ちよつと滞在しましたで、日本を語るなって感じ？ジャングルや中国がいいお子様には日本の魅力はまだ分かんないかな？」

あたしは上からアルを見下ろして、にまりと笑ってやった。いつも上から見下ろされてばかりで、この上から見下げる構図ってのは初めてで、大変気分がよろしい。

あたしは机の上で楽しげに足を組み上げて、これでもかと胸を反らして見せた。

そのあたしの勝ち誇ったようなドヤ顔が気に入らなかったのか、アルは文句のつけようのない秀麗な顔をむすつと歪めた。

「千佳、パンツ見えるよ」

「な！」

慌てて足を元に戻して、両手でスカート裾を押さえる。

「あれ？誘ってるんじゃないの？その短いスカート丈」

してやったりとばかりにほくそ笑むのは白馬の王子様じゃなくて、小悪魔が若干混じった野獣の顔。

下からあたしの方を覗き込むように、目を細めてくる。

「さ、誘う？そ、そんな訳ないでしょ！」

きつと睨みつけると更に面白がるようにアルの目に好奇の色が浮かぶ。

薄い唇の端が上を向き、そこから零れる声に艶が混じる。

「そこまで言うならちゃんと教えてもらわないとな。君の言う日本の良さを。短期間でもそれを伝えるのが君の仕事だろ？」

静かに床から立ち上がるとアルはずいっとあたしとの距離を縮めた。

「な、なに？」

「こういう異文化交流もありじゃないかな？お互いの体に聞いてみるんだ」

狭いテーブルの上でアルから逃げるように身を引いたら、その上に覆いかぶさるようにアルが身を寄せてくる。

甘さと透明感と、媚薬混じりの声が擦れるようにあたしの耳元に囁く。

「プリーズ……もつと詳しく、君の全てを……」

ぎゃ〜！これはホントダメ！

アルの熱い吐息が首筋にかかって、自信に満ちた蒼の瞳が蠱惑的な輝きを湛えてあたしを見つめている。

何が楽しいんだか、これでもかかってほどの満面の笑みを浮かべて、人を心の奥から酔わせるように囁く。

まるであたしの心を試すみたいにアルの瞳は色合いを変えていく。

「ふざけないで！暑苦しいのよ！」

アルの甘い笑顔の所為で吹っ飛んでしまった余裕の、僅かに残ったそれに縋りつくるとあたしはぐいっとアルの完璧に整った顔を押しつけた。

とりあえず逃げ出したくて力任せに押しやった所為で、アルの首がごきつとありえない音をたてた。

うわ！痛いそう！なんていうか人間の奏でられる音じゃないよね。

と、とりあえずに聞かなかつた振りをしよう。

うん、あたしは悪くない。悪いのは急に態度を変えて迫ってくるアルの方。

なんだってこの王子様は時々試すようにあたしをからかうのだから。

「そ、そんなにも必死になって逃げなくても、手なんか出さないよ」

いててつと呻くような声を上げながら、アルはあたしから身を離して自分の首をさすっている。

小奇麗に整った顔を痛みに歪め、眉をしかめている。

手なんか出さないですって！

じゃ、じゃあ首筋や腕にキスは手を出したことはない訳？
衆人環視の中恋人繋ぎをするとか、お姫様だっこするとか。

誘うような甘い声で囁いて、あまつさえ耳タブをかじるのも、全然手を出していないことになる訳？

お医者さんごっこよろしく、押し倒して目や口の中を覗くあれはなんだつたの？

いたいけな女子高生にこんなにも顔を寄せて口説いておいて、手を出してないのたまえちやうなんて！

むゝ！シーリエントはどんだけ緩いお国柄なんだ！

日本人として、絶対にありえないでしょ！

「に、日本ではね、恋人でない人とはそんなに顔を近付けて際どい会話なんてしないのよ！昨日も言ったでしょ！シーリエントを世界の常識だと思わないでよね！」

ガタンと激しく音をたてて、テーブルから降りるとあたしはアル

に向かってびしつと指を向けた。

「いい？あたしが日本文化を教えてあげるんだから、日本にいる間は訳分かんない自国の流儀は許さないわよ？郷に入りては郷に従え！あなたに影響を与えた何某さんも言ってたでしょ？謙虚で憤み深いのが日本の美徳なの！遊びでアルバイトに手を出すなんてあり得ない！」

泣きそうになるのを我慢して、あたしは言い放った。

その表情があまりにも必死すぎたせいかな？

ポカンとあたしの方を見ていたアルの頬が急に歪んだ。

「ふふつ。千佳はなんていうか、小気味いいよね。そんな返答が返ってくるなんてね……」「女の子って、甘く囁けばすぐに頬を染めて身をゆだねるものだと思ってたのに…君は違うんだね」「

「ん？今、あたしの聞きとれない言語であたしの悪口言ったでしょ？」

「とんでもない。褒めたんだよ」

くくつと喉を鳴らして、小馬鹿にしたように口の端を歪めるとアルはポンポンとあたしの頭を叩いた。

そしてあたしに背を向けて窓を閉めながら、アルは軽やかに何気なく言い放つ。

「そんなに警戒しなくても手は出さないよ。ただの短期アルバイトの君になんて」

え？

胸の奥を掴まれたような、ずっしりとした濁りに息が詰まりそうになった。

何かを言いたくて、でもその思いを言葉にできない。

差し込み錠を元の状態に戻してあたしの方を振りむいたのは、誰もが憧れる完璧王子様。

「あまりエスケープもしてられないな。さ、教室に帰ろう」

流麗な笑みを浮かべて、アルは扉の方へと足を向ける。

その背中がどこかあたしを拒絶しているようで、心臓が別の意味で痛んだ。

さっきのセリフにはどういう意図が隠れているの？

焦るあたしに対する優しさ？それとも二人の距離間に対する釘差し？

もしそうなら、なんであたしにその甘い視線を向けるの？

優しく手で触れて、心臓が壊れるほどにドキドキする言葉をくれるの？

もう、アルが分かんないよ。

寄せてきたと思ったら、簡単に掌を返して去っていく。

アルが何を考えているのか分かんない。あたしのことをどうしたいのかも全て。

アルの言葉に乗せられたら、あたしが馬鹿を見るだけだって分かっている。でもね、もうそうも言っつてられないかも。

頑張っつて見ない振りを続けてきたけど、もう限界。

アルはあっさりと身を引いていくのに、あたしの心はもう引き返せないところまで来てる。

全部アルの所為なんだからね。

アルがからかって雇用者とアルバイトの枠をはみ出してくるから、ダメって言うのに心が勝手にそれ以上を期待しちゃうんだよ？

颯爽と進む広い肩幅の背に、あたしはばあかっつと小さく呟いてみ

た。

まだ…名のない詩（前書き）

恋愛映画の名作『ある愛の詩』の原題は『ラブ・ストーリー』というそうです。ストーリーを詩と訳すイキな翻訳がお気に入りで、ちょこつと拝借いたしました。こういう名訳が大好きです。

さてさて、この映画の名言『愛とは後悔しないこと』のように二人は突っ走ってくれるのでしょうか？なんか後悔ばかりしてそうデスけど……。

まだ：名のない詩

「殿下！見つけた！！」

物置を出たところで、必死の表情のペスに出会った。

その後ろに苦り切った顔のセバさんとのんびりした表情のヤマネ君が続く。

どうやらアレクサンドラさんは今後の予定の調節や関係各所への連絡をいれているみたいで、その場にはいなかった。

きつと彼女がここにいたら、見る者を凍り付けさせるド迫力の泣き顔で迫ってきたと思う。

よかった。ペスとセバさんではどんなに変顔で怒っても、アレクサンドラさんには勝てまい。

「ああ、アントニオ。遅かったね」

興奮するペスにアルは極上の笑みで微笑みかけたけど、今回こそは殿下至上主義の護衛官には効かなかったみたい。

「遅いとはなんですか！貴方が勝手に行ってしまおうから！あの人がゴミを避けるのがどんなに大変だったか」

噛みつかんばかりのペスの服装が若干乱れている気がする。

「とりあえずこっちに来て下さい！！」

アルは両脇をペスとヤマネ君の二人に挟まれて、そのまま引きづっていかれる。

なんかシュールな光景だな。王子様の護衛が、極悪人の護送のよ

うに見える。

驚くあたしにセバさんが申し訳なさそうに頭を下げた。

「とりあえず応接室で落ち着きましょう」

「「なんで勝手にどこかへ行ってしまうんですか！とりあえず今は休憩時間ということで先生には30分ほど時間をもらってますけどね！今からはもう絶対にどこにも行かないでくださいね！ずっと側にいますから！！」」

アルは無理やり応接室のソファに座らされ、その両側からセバさんとペスに交互に小言をもらっている。

きゃんきゃんと吠えるペスにアルは若干面倒臭そうな笑顔で答えた。

「「ずっとは嫌だな。気持ち悪い」」

「「何を言ってるんですか！貴方が逃げるからこうなるんでしょう！」」

卒なくソファの側に立ったセバさんは、興奮状態のペスとは違い落ち着いた顔を困惑に曇らせた。

「「殿下。千佳さんが心配なのは分かりますが、少しは周りの目も気にしていただかないと。千佳さんは一般のお嬢さんなのですよ。過度の注目は千佳さんを追い詰める結果になります」」

「分かつてるよ。でも少しくらいなら問題ないだろ？注目なんて今だけだよ。僕が国に帰ればすぐに皆忘れるさ」

「しかし……」

「もし……僕が国に帰れないような不測の事態が起きれば、それこそ千佳よりもそっちに注目が行くだろうしね」

意味ありげに目を細めたアルにセバさんは少し息を飲んだように見えた。

「そのようなことを……。口を慎んでください、殿下。どこで誰が聞いているか……」

「誰が聞いているというのだ？千佳か？それとも？」

常の誠実さが嘘のよう。アルは人を試すような挑発的に目を輝かせた。

セバさんの心の奥底を図るかのようにじっと上目使いにセバさんを見あげる。

言葉が分からなくても分かる。彼らを取り巻く空気の不穏さを。

あたしはアル達から離れた場所に一人座って、彼らのやり取りをただ見つめるしかできない。

「何か、心当たりがおありなのですか？」

「まさか。ただの戯言だよ。気にしないでくれ」

そう言ってアルは窓の向こうに目を向けた。少しだけ寂しげな、シニカルな笑みを口元に湛えて。

蒼い瞳は静まり返った湖面のようで、でもその瞳が見つめる先に小波を感じるのは何故だろう。

アルの言葉にその場の会話が途切れた。

まだ何か言いたげなペスはじつとアルを見つめたままだけど、アルはその視線に答えようとしなない。

うわ。なんでこんなにも空気が悪いんだ？

アルは何を怒られていて、何を口答えしたんだろう？

空気の読める出来た千佳ちゃんでも読めない展開に、一人もんもんとするしかない。

空気を読みそこなって、間違ったテンションで口を開く事態だけは避けねば！

う。でも、このまま押し黙ってるってのも無理だわ。なんとか空気を変えないと……。

小心小市民気質な自分が嫌になってくるな。

あ。でもない、こ。でもない懸命に第一声を考えていると視線を感じた。

顔を上げると困惑気なセバさんと目が合う。

「あ、あの……」

何も考えていないのに、思わず上づつた声が零れ出た。

うわ！ やっちゃった！ 思わず見切り発車しちゃったよ。

だってだって！ 見つめられてると何か話さないといけないという強迫観念に迫られるというか……。もう、ぶっちゃけこっぴい空気が苦手なのよ！ 早く解放されたいの！

「すみません。殿下が無茶ばかり」

「え？ええつと、大丈夫です。気にしないでください」

何十年も年上の人にそんなに申し訳無さそうな顔をさせるのもどうかと思ひ、大げさに手を振ってみた。

「アル……殿下に風の通る場所に連れて行ってもらっただけです。あたしこそごめんなさい。ア…殿下の手を煩わして……」

「風の通るところですか？そう言えば千佳さん、体調は大丈夫ですか？この後もまだ講義は続きますが、その間は外でゆっくりされていてもいいですよ？」

にこつと柔らかな笑みを浮かべるセバさん。

ああ、やっぱりセバさんはいい人だ。

断りもなく抱き抱えて物置に押し込む人とは大違い。

像のように愛らしい目を柔和に細めるセバさんに、あたしは知らず知らず緊張させていた背中を抜いた。

セバさんの一言が凍りついた空気を優しく溶かしたんだろうな。

ほつと小さく息を吐く。

「いいんですか？じゃあ、あたしはここで待っておきます。聞いてても全然分かんないし……」

セバさんの優しい申し出に甘えることにしてみた。

ホントならバイトだからどんなに分かんなくても最後までアルの側にいないといけないと思う。

けどね、また何かのタイミングで顔を寄せられたら、崖っぷちギリギリにひっかかたあたしの心がアルに転がってしまうのは必至だもん。

だからアルと距離を取らないと。

それでもう一度自分の心に魔法をかけるの。

今度こそ絶対に解けない魔法を。

アルは王子。あたしはただの端役。

夏のキラメキと共に遠くに去って行く人に、何を期待できるというのだろうか。

あたしの手元に残るのは褪せた思い出と身を裂くほどに切ない想いだけ。

だから……。

「千佳さん？」

あたしが不意に言葉を切ったからか、セバさんが心配げにあたしの顔を覗き込んだ。

慌てて顔を上げて、これでもかと笑顔を作る。

「あつ。ちょっと考え事してました。大丈夫。何もありません」

「それならいいのですが……」

驚いたように目をしばたくセバさん越しにアルがいる。

でもその顔はずっと窓の向こうに向けられてて、あたしの方を見ようともしない。

遠くを見つめる横顔に込み上げてくるのは名前のない不安。

それが濁流のようにあたしの胸に押し寄せて、暴れまわる。

こんな胸の痛みは知らない。

初めて感じる、甘くて切ない痺れに居ても立ってもいられない。

あの蒼い瞳が求めるものはなんなんだろう。

それが知りたくてたまらないのに、それ以上に知るのが怖いなんて……あたし、変。

戦いのロンダは気まぐれに（前書き）

お盆になって、暑さもピークですね。

暑さの気晴らしにちよっとうちの子どもたちに目を留めていただけると嬉しいです。

戦いのコングは気まぐれに

「あの、あたし、トイレに行つてきます！」

このまま応接室にはいれなくて、あたしはセバさんの返事も聞かずに背をむけた。

足早に応接室を出ると、パタンとドアを閉めた。

そのドアに背を預け、あたしははあと息を吐いた。

ホントにアルが分かんない。

でもそれ以上にあたしの心が分かんないよ。

どうしちゃったんだろう？

これが世にいう夏バテかな？それとも昨日からの劇的な展開についていけないのかも？

きつとそうね。だってアルはコロコロ顔を変えるんだもん。

昨日の屋上ではあんなにも素直だったのに、周りに人がいると爽やか王子になったり、悪意のこもった小悪魔になったりする。

甘くて、体の芯が痺れるほどに甘過ぎて、彼の真意が分からない。その完璧な微笑みの下にどんな下心を隠しているの？

いくら考えても答えが出ないのは分かっている。

だから千佳、アルに惑わされちゃダメ。

頭がこの感情に名前を付ける前にそつと胸の奥にしまっけてしまわないと……。

とりあえずトイレに行こうかな。

顔を洗ったら、少しは気持ちも落ち着くかもしれない。

応接室の扉からそっと体を離す。

長い廊下は板張りで、今はあまりにも外が眩しくて薄暗く感じる。その所為かな？開け放たれた窓から僅かに吹き込む風が涼やかで心地いい。

トイレで用事を済ませ、さてどうしようか、とあたしはため息を吐いた。

正直あの部屋に戻るのは気が重いな。

まだ本調子じゃないんだよね。なんていうか心の方が。

でも他に行くとこないし……。

がつくりと肩を落としながら、のろのろと応接室の方に足を向ける。

「なんで、あの子なの？」

不意に聞こえた非難の声にあたしは足を止めた。

まるであたしに聞こえるように言い放たれたように思えて、引かれるように顔を上げる。

そこにいたのは、三人のお姉さま方。

茶髪のロングという揃い髪型に、涼しげなミニスカートに身を包んでいる。

完璧に施された化粧に自分とは一線を引く大人の魅力を感じて、ちよつとだけたじろいだ。

だってあんなに黒く縁取りされた目で睨まれるとき、迫力負けするというか……。

まあ、アレクサンドラさんの涙まじりの視線の方が比べ物にならないほど怖いんだけどね。

「超へーボンじゃん。どうせなんかの伝手で無理やり一緒にいるんでしょ？」

「え〜！うらやましい〜！伝手があれば、平凡でも王子様の側にいれるなんて。あれでいいならミウでも全然イケちゃう〜！」

「大丈夫よ。ミウの方が絶対カワイ〜から！」

「そうそう。制服で若さアピールが知らないけど、リチャード様に釣り合わないのよ」

トイレの近くにいた彼女達は聞えよがしに、声を潜めることなく話し続ける。

う〜ん。お姉さま方、そのやり方、すっごくベタですよ。どっかの昼ドラとか少女漫画でやりつくされた感があるな〜。

まさか自分がその悪意の矢面に立つことになるなんて思いもしなかった。

そうか、制服は若さアピールなのか……。

あたしは自分の身を包む見慣れた服装を見下ろした。

よくあるスタンダードな制服。

若干ダサいっちゃダサいんだけど、それが制服の良さというか、皆どっこいどっこいに見せてくれるから制服は万能なのよね。

王子様の側にもそれなりに見せてくれるしさ。

他にアルの側にいて差し支えない服、思いつかなかったんだもん。そう思ってたのチョイスなのに、まさかそんなところまで非難の対象になっちゃうなんて。

お姉さま方の心ない一言に一人いじけてみた。

大体たいして年の変わらないアルに若さを見せつけても、あんまり効果ないんじゃない？ こういうのはもつと年のいったおじさんとかが好きなんじゃないかな？ アルに迫るなら……それこそパリコレとかそんなのを気取って着こなさなきゃいけない気がする……って、いけない。いけない。どうでもいいことを真剣に考えてしまった。

なんとというか、怖いとかそういう感情はないんだけどね。

思うことはただ一つ。面倒臭いのその一言に尽きる訳で、あたしは対応に困って頭を掻いた。

彼女たちのいる方には応接室がある。

つまり彼女達の側を通らないと戻れない。そう、あたしは自分から望んで面倒事に向かっていけなくていけない状態なのだ。

どうしよう。わざわざあの人たちの前を通って、悪意に晒されるのも考えものよね。

セバさんが次の講義の間は休んでいていって言ってくれたし、急いで応接室に戻ることもないかな。

自分にそう言い聞かせるとあたしは踵を返して、お姉さま方に背を向けた。

すたすたと木製の床を滑るように進むと、廊下の先にあるバルコニーまで出る。

白い床に褪せた緑の手すりが涼しげなバルコニーは人が二人入ればもういっぱいという狭さだ。

そのバルコニー全体に大きな木の影が落ちて、外の灼熱が嘘のよううにひんやりしている。

あたしはバルコニーの手すりに手を置いて、ぼんやりと空を見つ

めた。

ざあつと大木の葉を揺らす風が澄んだ空を駆け抜ける。

この壮大な空を見ているとなんだか自分がちっぽけな存在に思えてくる。

悩んだ時は空を見たらいい。

昔、そう言っただけであたしの頭を撫でてくれたのはお父さんだった。それからずっとあたしは何かある度に空を見上げている。

頭を撫でてくれる人がいなくなった、その後も。まるでその優しい手を探すように……。

こうやって頭の中を空にして一度リセットして、もう一度自分に気合をいれて……。

「ちょっと！あなた、何無視してんのよ！」

頭をからっぽにして無防備な背中につんけんした声突き刺さった。

びつくりして、思わず身を竦ませた。

声に応えるように振りむくとそこにいたのは、さっきの三人のお姉さま方。

うわ！ここまで付いてきちゃうの？

ただ悪口を言われてるだけかと思ってたのに……。

まさかの直接対決？

助けて！！マイヒーロー（前書き）

お久しぶりです。毎日ちみちみをモットーにしてたのに、ぐだぐだです。今日も気が向いたら、ちらっと読んでいってやって下さい。

助けて！！マイヒーロー

せつかく一人の世界に浸って、心のリフレッシュを図ってたのにさ。

あなたが思うほど、アルの側にいるのは楽じゃないんだぞ。

刻一刻とヒットポイントが減っていくんだから！

だからあたしには、陰険なお姉さま方の相手をしてる間なんてないの！

「なんですか？」

せつかくの息抜きを邪魔されたあたしは、ぶすつとした表情を改めずに後ろを向いた。

一応年上だから口調は丁寧だけど、露骨に嫌そうな顔をしてやった。

別に愛想笑いの必要も感じないし、自分にいい感情を持ってない人にまで気を使うほどあたしもお人よしじゃないしね。

「ムカつく！何、その態度！」

「ちよつと殿下と一緒にいるからって、えらそぶってんじゃないわよ！」

うわ。このお姉さま方のフィルターを通すとそんな風に見えるんだ。

それでも結構気を使って、コソコソしてたのに。

あたしの健気な努力が一瞬で水の泡になった。

でも文句はあたしじゃなくて、アルに言ってよね。

あたしはひっそりとしているのに、舞台の中心にあたしを無理やり連れてきたのはアルなんだから。と、一応反論は心の中だけに留めてみる。

売られたケンカはどんなに大安売りでも買わない。つもりだけなんだけど、どうやら顔には出ちゃってみたい。

お姉さま方はあたしに詰め寄るようにバルコニーに足を踏み入れた。

わ〜ちよっとタンマ!

流石にこの狭さに4人はかなり厳しいかと……。

でも目が座っているお姉さま方には何も言っても聞きいれてもらえそうにない。

ずいっとお姉さま方の内の一人があたしに顔を寄せた。

「ねえ、ちよっと！なんであなたが王子と一緒に行動してるか知らないけど……」

「ちよ、ちよっと、落ち着いて……」

「おい、そこで何をしている?」

ぞつとするほどお腹に響く重低音が麗らかな夏空を一瞬で凍り付かせた。

「え?」

バルコニーでお姉さま方にぎゅうぎゅうにされながら、あたしは

声のした方に視線を向ける。

もちろん向ける前からそれが誰のものは分かっていた。

あたしの知っている中で、こんなにも人を震え上がらせる声を持っているのはただ一人。

「幸村さん……」

音もなく近寄って来ていた非情の狩人の姿にちよつとだけほつと息を吐いたけど、でも次の瞬間、幸村さんの険しい表情にひつと息を飲んだ。

ちよ、ちよつと、なんでそんな人一人殺ってきまました的な険悪な顔しているんですか！

特殊メークもなしにホラーだよ！恐ろしい！

一応、国民を守るケーサツカンだからさ、もつと爽やかで精悍な感じでお願いしますって…幸村さんには口が裂けてもいえないけどさ。

研ぎ澄まされたナイフを思わせる冷やかな黒が静かにお姉さま方に向けられる。

その視線に、三人はまるで喉元にナイフを押し当てられたかのようにひつと息を飲んだ。

どんな相手にだってその姿勢を変えない。誇り高い狩人は薄い唇を静かに開いた。

「この迎賓館は一般の生徒は立ち入り禁止になっているはずだが…」

じわりじわりと逃げ場を奪うような言葉にお姉さま方はうるたえて、言葉も出ない。

さっきまでイケイケドンドンだったのに。

幸村さんの一瞥だけで強気な狼はひ弱な羊に姿を変える。

お姉さま方は綺麗な顔を蒼白にして、顔を見合わせた。

一切の言い訳も聞き入れない幸村さんの強固な態度に、可哀想に……小刻みに体が震えている。

うん。その気持ち分かるよ。

この人に睨まれるだけで例え悪いこととしてなくても、生きててすいませんって謝りたくなっちゃうんだよね。

人が悪かったね、お姉さま方。

見つかったのが幸村さんじゃなくてマメシバ君の方だったら、きっと自分達の立場が弱くてもお姉さまの方が強気でいれたはずなのに。

なんか同情しちゃうな。

「答える。何故ここにいる？」

冷酷で底の見えない瞳がより険悪に細められる。

灼熱の夏が嘘のように遠い。

風のざわめきも蝉の鳴き声もシャットアウトした空間に異様な低気圧が垂れこめる。

さつきまで大きく見えていた三人が小さく見える。
だからかな？

思わず頭で考える前に行動に出ていたのは……。

「あの一！」

「なんだ？中澤千佳。今はお前に聞いていない」

鋭い視線があたしに向けられる。

この至近距離で睨まれると頭が真っ白になりそうだ。

あたしの発言に何かの活路を見出そうと、お姉さま方の続けるような視線をひしひしと感じつつ、口を挟んじやったから今さら引けないあたしはぐつと顔を上げた。

弱気になっちゃダメ。

幸村さんも何も取って食おうとはしないんだから！

「あの……この人たちを責めないでください。え〜と……あたしがワガママ言っただけに来てくれたんです。その〜トイレの場所が分からなくて！」

うん。我ながら素晴らしいしどろもどろの棒読みだわ。

しかも理由がちゃんし……。

だって何も考えてなかったんだもん。仕方ないじゃない！

気合をいれたはずの目が幸村さんの探るような視線を前に泳ぐ、泳ぐ。

幸村さんの凍りついたような端正な顔が不快に歪んだ。

彼が僅かに後ろを一瞥する。

彼の背中越しに見えるのは、ビククリするくらいに親切な大きさの女子トイレの看板だった。

まるであれが見えないとかあり得ないだろ、と無言で脅迫されている気がする。

ヤバい。嘘を吐いたのバレた？いや、バレない訳なんだけどね。

現職の本官を騙すにはあまりにも陳腐すぎた。

そう言えば昔、騙すならあり得ないくらいにぶっ飛んだ嘘を吐くとバレないって聞いたことある。

小さい嘘よりも壮大スペクタクルの方が人は信じてしまうんだとか。

よし。このスタンスで行こう。

「あの……あそこのトイレに入ったところで誰かの視線を感じて……。流石に誰かに見られたままで用を足す勇気がなくて……。別のトイレの場所を聞こうと外に出たところでお姉さん達に出会ったんです。そこでお姉さん達に話を聞いたらあそこは呪われたトイレだから、一度入ったら最後。お供えにヴィトンの鞆を渡さないと、一生トイレに行くと誰かに見つめられる呪いにかかってしまうんですって！」

あたしはこれでもかと眉に力を入れ、真剣な表情で幸村さんに詰め寄った。

あたしの顔があまりに強張っている所為か、険しい狩人の瞳が一瞬見開かれる。

この瞬間を逃してはならない。何故だかそう思ったあたしは畳みかけるように口を開いた。

「その名もトイレのマルキュー子さん。なんでも109辺りでブイ言わせたギャルの霊らしいんです。流石大学生ですよ。お供えがヴィトンなんて。うちの高校に出る子はジル・スチュアートとコーチだもん。値段が格段にアップしてる！」

ちなみにうちの学校に出るトイレのはな子さんの霊は高価なブランドじゃなくて、トイレットペーパーを欲しがります。

なんて健気な子なんだろう。脅かすんだからもうちょっといいものを強請ればいいのに。今度二枚重ねの香り付きをお供えしてあげよう。

あたしは更に顔全体に力を入れ、力説した。

幸村さんがポカンとしているこの間に逃げきってしまえ！

「そ、それで！あたし、今ヴィトンを買えるほどお金はないし、困

つていたら、このお姉さんが優しく声をかけてくれたんです！お古で良かったら低価で譲ってくれるって！今その商談中なんです。まさか一般の人の立ち入りを禁止しているなんて思わなくて……お姉さんたちには迷惑を掛けました。もう一人でなんとかしますから、ここから離れて下さい。呪いは辛いけど、でも見られるだけだし、夏休みが終わってから友達のリフトンをぺっちて来て供えますから大丈夫。お金持ちの子なんで、一個くらいなくなっても気がつかないはず……」

「たわ言はそれで仕舞いか？」

お姉さま方をバルコニーの外に出そうとその背を押すあたしに研ぎ澄まされた切っ先が向けられた。

「ひっ！」

その凶悪、邪悪な顔に冷や汗が吹き出す。

冷酷な幸村さんの背で冷え冷えとする青い焰が揺れている。

ぎゃ〜！やっぱりどんなにぶっ飛んだ嘘をついてもバレるものはバレるんじゃない！

誰よ！いい加減なこと言ったの！

それとももつとぶっ飛んだ嘘じゃなきゃいけなかったの！

トイレで宇宙人と地底人がお見合い中で、邪魔するのが悪かったからとか……。意外に似た者同士でお似合いだったけど、地底人の方があたしに興味を持ちだして、修羅場になったとか……。

でもそんなの咄嗟に思いつかないし！

元から険しい顔を更に険しくする幸村さんに、あたしは絶賛うるたえ中だ。

どうしよう……素直に謝るなら今のうち？ってか、こんな訳分らんこと言っておいて、すぐに嘘でしたとか、おいおい、お前は何がしたいんだよ的な白けた空気になることは必須だよな。

でも、それで幸村さんの関心があたしに向くなら、それはそれで……。

というよりも始めからアホくさい嘘なんかつかずにお姉さん達が幸村さんにごめんなさいをすれば話は早かったんじゃないかな？

そうよ！ぼさつとしてないで早く謝ればよかったのよ！

誰よ！先走って話を変な方に持って行ったのは！ってあたしか

！！

今さらながら自己嫌悪。

うっ……仕方ないじゃない。あの時はなんとかしなきゃって思っ
てしまったんだもん。

困惑する頭で浅はかな打算を打ち出してみるけど、その心内まで覗いてきそうな鋭い視線に思わず、思考が一旦停止してしまう。

誰か！このよく分かんない状況を打開して！

助けてよ！ア～ンパ～ンマ～ン！

その時……。

『チカ？』

食パンマン並みにカッコよい、澄んだ声が響いた。

運命の神様は気まぐれで薄情だから……（前書き）

だから、なんだ？って感じの題名ですね。なんていうか、だんだん
適当になってきました。

テキストという字は適して当たっていると書く訳ですが、こと作者の
作品にはことごとく当てはまりません。残念な現実です。もっとス
カッと爽快な題名をつけたいもんです。あつもちろん内容も！こん
な作品ですが、今日もよろしくお願いします。

運命の神様は気まぐれで薄情だから……

『チカ？どうしたの？そんなところで？』

その玲朗とした声にドキン　と心臓が弾む。

混乱に混乱を重ねて大暴れなあたしの頭の中がその声に反応して、ピタリと活動を止めた。

幸村さんの向こう、薄暗い廊下の先で淡い金髪が柔らかく揺れる。

「あ……アル……」

唐突に現れたアルという存在に、思わずたじろいでしまう。

やっぱりまだ色々と本調子じゃないみたい。

「まさか……殿下？」

あたしの横では、お姉さま方が息を飲んだ。

驚きと戸惑いと、少しの不安と期待。

でもそれ以上にアルの色気に当てられて、うっとりで見惚れるような恍惚とした表情を浮かべて、ほうつと無意識に感嘆を漏らしている。

そんな複雑怪奇入り混じった瞳を見合わせ、お互いにこの状況をどうしようかと詮索しあっている。

そんな中一人不機嫌な表情を改めない幸村さんは誰にも聞こえないほど小さくちつと舌打ちをした。

ゆつくりとこちらにやってくるアルを迎え入れるように、体の向きを変えた幸村さんが卒なく腰を折った。

『殿下。どうされたんです？現在は急遽入った休憩時間だと思いま

すが？』

慇懃な口ぶり。でもその突き放した声の端々に非難が込められたように聞こえる。

『御苦労さま。仕事熱心なミスタ・ユキムラ。今休憩を終えたところだよ。今から続きを受けようと思ってね……で、そちらは？』

完璧王子はそう言うと言いつても誰も見惚れる爽やかな笑顔をあたしの側にいるお姉さま方に向けた。

何かを問うたんだと思う。

でもお姉さま方はポカンと見惚れてしまい、アルの質問に答えない。

自分の意図と結果が違ってもけしてその優美な表情を崩さない理想の王子様は澄んだ蒼い瞳を柔らかく和ませて、答えを探るようにあたしの方に視線を向けた。

完璧な顔の中で、小悪魔な色を浮かべた瞳が無言でどうという状況なのかと問いかけてくる。

「えっと……通りすがりの人と仲良くなりました」

端的に言うこんな感じだよ。うん。

実に分かりやすい。この一文の間に色々なヒューマンドラマがある訳だけど、今は置いておいて……。

アルには意味は伝わったはずなんだけど、建前上何故だか日本語が分からないことになっているこの面倒臭い王子様にどうやって名実ともに教えてあげればいいんだろ？

アイ・ミート・フレンズ？いや、おかしい。絶対こんなに簡単じゃないはずだ。見知らぬ人ってなんて言うんだっけ？誰か英訳してよ！って思ったら、幸村さんがあたしの質問を受け継いでくれた。

どうやら独り言が口から出てたみたい。は、恥ずかしい。

『どうもしてませんよ見知らぬ人と友達になった、と言ったんです。まあ、友達になったと言うよりもまたこいつが訳の分からないことに巻き込まれていただけです。絡まれる体質なんですよ。昨日はどっかの国の王子に絡まれて、今日は大学で何を学んでいるのか理解に苦しむギャルに絡まれて……。まあ心配しなくても本人は楽しくやっていたみたいです。トイレで幽霊に呪われたり、地底人と修羅場になったり……』

淡々と卒なく説明する幸村さんの言葉にアルは梅干しを食べて酸っぱいのを我慢しているかのような、怪訝な表情を浮かべた。

おーい！完璧王子の仮面が取れかかっているよ。ちゃんと付けて付けて！

それにしても幸村さんはなんと説明したんだろう。

あたしを見つめるアルの視線が爽やかさから一転、じつとりと絡みつくものになった。

いやいやいや、今そんな顔で見つめられても困るんですけど！
あたしが居た堪れないでしょうが！

「あの、あたしは大丈夫だからもう講義に行きなよ。なんて言うの……。ゴー・トウー・なんとやらだよ！」

頑張った。あたしは頑張ったはずなのに、幸村さんは渋い顔でため息を吐き、お姉さま方もちょっと哀れむ目をあたしに向けてくる。も、恥を忍んでけなしの英会話を頑張っているのに、それはなんだ！

『本人も大丈夫だと言っていますし、どうぞ講義に行ってください。勝手に迎賓館に入り込んだ一般生徒は私が外に出しますから』

冷めた重低音にアルは小さくため息を吐いた。

『そうですか……それではお願いします……』

そう言ってアルはバルコニーに背を向けた。

その瞬間、お姉さま方の一人がアルの背を追うように一歩前に出た。

「ま、待って！殿下！！」

多分思わず声に出ちゃったんだと思う。

違反を犯してまで会いたかった人が目の前にいるんだもん。

きっとそれは当然の行為。

明確な理由なんてなくて、ただ声をかけてその瞳に映りたい。

たったそれだけの淡い期待。

それは誰にも非難されるものではなくて……。

そう、誰も悪くないの。

しいて言うなら環境が悪かった。

ガクン。

「え？」

確かに背中に手すりの感触を感じたはずなのに……。

支えてくれるはずの手すりがあたしの体重をそのままに受け流した。

傾く体。

揺れる視界。

何がどうなっているのか分からない。

たださっきまで薄暗い廊下を見つめていた視線の先で、眩い夏の空が落ちてきた。

滲み出た悪意（前書き）

作者は本作以外に2つほど長編小説にチャレンジしています。三作とも方向性がバラバラで、共通点はあまりないのですが、この章を投稿しようとしてハタとある共通点に気づきました。

読んでらっしゃらない方、わざわざ読む必要はありません。大したコトではないので。ただ自分でなんて非道な作者だろうと落ち込んだだけです。

前2作は既遂、本作は未遂に終わっておりますが、これからも隙をみて突き落と……いえ、これからもっと好きになってもらえるように頑張ります！！

滲み出た悪意

バルコニーは人が二人入れれば充分の狭さで、そこに4人も押し込まれている訳で、そのうちの一人が強引に外に出ようとしたら、残された人間は彼女に押されておしくらまんじゅう状態になる訳で、そうすると一番手すりに近いあたしは必然的に手すりに押し付けられるというもので……。

そして、そのぶつかった手すりは築80年以上の重要文化財で……。

この考察は結果論みたいなものだ。

考えついた時には体の半分が虚空に投げ出されていた。

体が傾いた瞬間、絶るように手を伸ばした。

声さえ出てこない。

頼りない背中に幾億もの風がぶつかり、お腹の底から妙な感覚が押しあがってくる。

ただ茫然と伸ばした手の先を見つめる。

その指の先にいるのは、眩い金髪の理想の王子様。

このまま落ちたらあたしは死んじゃうの？

なら最後に見つめ合えたのがアルでよかった。

天使のような彼に見送られて行くんだから、ある意味幸せ……なんて簡単に自分の人生を諦める訳にはいかない。

何かに掴まりかかろうと空を泳ぐ。

頑張つて手を動かしたら、鳥みたいに飛べちゃったりしないかな？
飛べなくてもちよつとだけでも落下の速度を遅められるかも！

非科学的な希望に縋りつくように伸ばした手で空を掴んだ、その時。

「千佳！」

普通の甘さからは想像もつかないほど余裕のない声が頭を貫いた。
アルの射抜くような強い視線があたしを捕えている。

落ちていくつていうのはなんて感覚が遅く感じるんだろう。

こんな時なのに長い間、アルと見つめ合っている気になるなんて

……。

ゆっくりゆっくり、情熱の焔を灯す瞳があたしの方に近寄って……。

……。

「ぎゃー！！！！」

衣を裂くような悲鳴がやたら遠くに聞こえた。

空を掴んだ手が思いもしない力で引つ張られ、あたしは現実の世界に引き戻される。

手の先にいたのは、無表情の幸村さん。

でもいつもの冷めた表情とちよつと違って見えたのはあたしの気のせいかな。

せり上がっていた浮遊感が一気に重力に変わり、あたしの腕に押し掛かる。

片腕を掴まれた状態であたしはバルコニーからぶら下がっていた。

どつどつと心臓の音が嫌な時を刻む。

体の中心は燃えるように熱いのに、足先は風にさらわれて凍りつくように温度をなくす。

背中を滑った冷や汗に思わず身を竦めた。

「あ……」

自分が今どういう状況かが分からなくて、それでも何かに縋るように視線を上げた。

その視線の先にいるのはアル。

いつの間にかお姉さま方を押しやり、バルコニーに入ってきたらしい。

彫刻のように端正な顔を引きつらせ、幸村さんが掴んだのとは反対の手を掴み上げる。

二人に支えられ、そのまま一気にバルコニーの方へと引き上げられた。

反動で思わず、バルコニーの床に座り込んでしまった。

地に足がつくってというのはなんて安心できるのだろう。

まだ体全体にエマーゼンシーを伝えようと躍起になって早鐘を打つ心臓に、さっきまで自分が置かれた状況がリアルに蘇ってくる。恐る恐る振り返った先には、一部分だけぼっかりと空間が開いた手すり。

落ちかけていた時はどうでもいいことばかり考えていたのに、今はあのまま落ちていればどうなっていたかばかりが気になって他のことにまで気が回らない。

「千佳！大丈夫か！なんでこんな……」

心臓の鼓動が邪魔してアルの声が何故だか遠くに聞こえる。

アルはあたしの両肩に手をかけて、正気づかせようと揺さぶって

くる。

本気で心配してくれてるんだな。

もうあたしは大丈夫だよ。

冷静に状況を判断できるし、大丈夫なはずなのに……。

喉について出てくるのは、呻きとも嗚咽とも取れる感情の渦。

「千佳……」

甘い声がひどく近くに聞こえた。

そう思った時にはアルに抱き締められていた。

まるであたしを全てから守ろうとするかのようなそんな必死さを込められた腕の力に感じる。

淡い金髪があたしの視線の先で輝く。

「千佳……お願いだ……」

囁くような祈りの言葉はきっと彼の意図するところではないと思う。

どんな時でも完璧な王子様は状況把握に長けていて、簡単に手の内を明かさない。

そんな彼が思わず流暢な日本語を呟いてしまうほどに、きっと余裕がないんだと思った。

「あ……アル……」

「千佳……」

自分の世界に籠っていたあたしはアルの温もりに視線を上げた。

その先にいるのは無表情の幸村さんに、心配げなお姉さま方。

ついでにセバさんやペスや、ヤマネ君も驚いた表情でバルコニー

前に集まっている。

みんなの注目を一身に浴び、はたと自分の置かれた状態に気が付いた。

このまま取り乱したら、きつともつと事態は大きなことになっちゃうよね。

まあ、大変なことだよ。一人でバルコニーにいて落ちてたら誰にも助けられずにあたしは地面とキスする羽目になっていた訳だから。まさか十七年の人生の幕締めがそれなんて。

ファーストキスはせめて好きな人と致したいもん。でもあたしは今何事もなくバルコニーにいる。

泣きそうだけど、あたしは唇の端を噛みしめてせり上がる感情の渦を押しとどめた。

潤みそうになる瞳に力をいれて、立ち上がる。

「あの！あたし、大丈夫です。まさかここで手すりを外れるなんて思わなくて……。お騒がせしました。どうぞ皆さん、持ち場に帰って下さいな。ア、アル……。リチャード殿下もありがとうございませ。王子様に助けてもらえるなんて、物語みたいだな。幸村さんもありがとう。警視庁の前を通る時は絶対に手を合わせてから通るようにします！」

なんだ、この説明口調。空々しくて感情がこもってないのまる分かりじゃない。

でも心配かけたくないんだもん。

カラ元気だけど、でも大丈夫って伝えないと。

これは誰も悪くない。まさかの事故なんだもん。

運悪く、錆びて壊れ掛けた手すりにぶつかったのがあたしだっただけ。

「……悪くない心がけだ。別に怪我もないだろう。手すりのことは俺から大学側に伝えよう……」殿下、この事故の報告は私が行いますから、どうぞ講義の方へ……」

あたしの言葉を受けて、幸村さんが素早く全員を見渡した。さすが出来る男は違うな。

あたしの側に立つアルは幸村さんの言葉に何か思案げに小首を傾げて見せた。

流石にもうその顔には完璧王子の仮面がついている。

誰もがさつきまでのアルの余裕のなさを忘れてしまうようなほどに堂々とした態度だ。

「ええ。そうします。ミスタ・ユキムラ。チカは次の講義の間は応接室で休むことになっています。どうかよろしくお願いします。それと大学側には一度建物の点検を行うように提言して下さい。チカ以外にも事故が起こればそれは悲しいことですから」

優美な笑みを浮かべ、卒なくあたしたちに手を上げるとアルはシリエント達を引きつれて、バルコニーから離れていった。

その背を追うように飄々としていくヤマネ君がふとこつちを振り向く。

あの緑がかつた茶色の不思議な瞳が真っ直ぐにこつちを見ている。いつもの眠たげなたれ目が嘘のようで、まだドキドキと本調子じやない心臓が不安に掴まれたようにぎゅっと悲鳴を上げた。

何か言いたげな視線はすぐにあたしから外れ、彼らは廊下の向こうへと消えた。

緑の風に紫煙はくゆる（前書き）

ハードボイルドの名探偵フィリップ・マローウの名言『強くなければ生きていけない、優しくなければ生きていく資格がない』
そう言い切れて、その発言のままに生きていける人はすごいなって
思います。

それで何が言いたいのかというと……そんな人を描けたらなって常々
々思ってるってコトです。

緑の風に紫煙はくゆる

あたしは一人、大学の構内にある大木の木陰にあるベンチに腰掛けていた。

日向とはまったく温度が違って、流れる汗もその涼やかさに心地よく感じてしまう。

でも、今、あたしの背を流れるのは、暑さによる体温調節の汗じゃない。

もしかしたらあのまま落ちていたかもしれないと思うと、知らず知らずの内に、冷や汗が流れる。

こんなにも暑いのに体の芯は反比例するかのようにつれ込んでいく。

その後、お姉さま方にめいいっぱい謝ってもらって、幸村さんに大人しく応接室いるように言われて、バルコニーを去っていく四人の背を見送って、今に至る。

どうしてか応接室には足が向かなくて、どこかで一人になりたいくて。

思わずバルコニーから見た先にあった涼やかな葉の影に心が惹かれてしまったのだ。

皆に心配をかけたくなって、無理して笑った顔はまだ強張ったまま。

誰にもこんな姿を見られなくなかった。

のに……。

顔に木々とは違う影が落ちた。

「強がるな、馬鹿娘」

唐突に聞こえた声に頭を上げるとブラックホールのように底知れない漆黒の瞳が至近距離にあった。

相変わらず気配のない人だ。

あたしを見下ろすように、むすりとした表情が更に眉を寄せた。

「俺は応接室にいろと言わなかったか？」

はい……おっしやいました。

うわゝ怒ってるの？ねえ、怒ってるよね。さっきよりも顔の表情は険しくないけどさ、でも絶対怒ってるよね。そんなに眉間に皺を寄せて喜んでる人なんて見たことないもん。

答えに窮して、口の中でもごもごと言葉にならない音を呟いていると、幸村さんはそれ以上何も言わずにあたしの横に腰を下ろした。無意識なのか、ポケットから煙草を取り出すと、長い指で長細い煙草を取り出してくわえる。

顔をしかめ、手で壁をつくりながら、ライターで火をつけようと、ふと幸村さんの動きが止まった。

「おっと、すまん。つい……」

寸でのところで止まった手が名残おしげにライターから火を消す。

「別にいいですよ？」

「そういう訳にいかん。一応未成年だしな。……まったく最近はどこも禁煙禁煙で喫煙者に厳しくてな……」

そう言いながら、口寂しいのか煙草は口にくわえたままだ。

「まったく。どこに行ったのかと思ったら、こんなところに……」

「ちよ、ちよつと風に当たれる場所に行きたくて……」

なんて言っても幸村さんにはすぐに嘘だつてバレちゃうかな？
お願いだからこれ以上突っ込まないでよね。今でもギリギリ自分を保ってるんだから。

本当は怖かったと子どもみたいに泣き出したくてたまらない。
でもそうすれば周りの人が困るだけだつていうことを経験的に知っているあたしは子どもだけど、もうそんな子どもではいけないだ。

なんでも真実を見通す瞳に一瞬、心が揺れた。

「確かにお前は強い。あそこでお前がうるたえて泣き出しでもしたら、あの場はもっと騒然としてたからな」

幸村さんはそつと視線をあたしから空に向けて、無表情まま静かに語り出す。

初めて聞いた時、この重低音が体の奥に響いて怖いと感じた。
なのに今はひどく落ち着かされるなんて。

だからねえ、幸村さん、それ以上は何も言わないで。

あなたの声に反応して、やっと落ち着き出した胸の内から色々な感情が溢れ出てきちゃうよ。

「そ、そんなこと……ない……」

「おい、口、開ける」

「口？」

なんでもこうも支離滅裂に話が飛ぶんだ。

幸村さんも大分強引グマイウェイな人だな。

あたしは彼の意図が分からなくて、間抜けな顔で幸村さんを見つめ返した。

しかし幸村さんは答えをくれない。

その代わり、ポカンと開いたあたしの口の中に何かを投げ込んだ。

「なっ！」

何？つと言いかけて、それが何なのかすぐに分かった。

舌に触れた瞬間に溶けだした甘い味に思わず頬が緩む。

「チョコレートだ！」

よく見ると幸村さんはさっきまで煙草を握っていた手に白い筒のアポロチョコを持っている。

その見慣れたパッケージに何故だかとても癒される。

こんなにも恐ろしいほど険悪な顔しているのに、アポロチョコって。

あまりのギャップに吹き出しそうになった。

「幸村さんでも甘いもの持ち歩くんですね！」

「まさか。没収品だ」

そう言っつて、筒から一粒チョコを取り出した幸村さんは、煙草を口から離してチョコを小さく齧った。

「甘ったるいな」

冷やかな目元に皺が寄る。

嫌そうに顔を歪め、幸村さんがじつとアポロの筒を見つめる。

「あいつ、いつもこんなもんをこっそり食べてるのか？」

あいつっていうのは、アポロチョコを没収された人のことかな。
きっと……ううん、絶対にマメシバ君だね。アポロ持ってたの
って。

きつとこっそり食べてるところを見られちゃったんだ。
可哀想だけど、でも、笑いが込みあげてくる。

だってマメシバ君がどんな顔をして怒られてるか、簡単に想像で
きちゃうんだもん。

それにいつ見ても冷静で無感情な幸村さんが、顔を歪めているの
を見るとちよつとだけ親しみを感じてしまう。

この人も普通の人なんだなって。
これってちよつと失礼かな？
だから幸村さんには内緒ね。

「あははっ」

思わず声に出してしまった。

でも幸村さんは無表情のままあたしを一瞥しただけで、また視線
をアポロに戻した。

「あはは……は……」

不意に感情の線が緩んだ所為か。笑い以外のものが込み上げてきて、
あたしの胸をつく。

自分でもよく分からないのに、涙線が緩んで、指の先が微かに震
える。

「あれ？おかしいな……」

今さらながら体の奥から湧きあがってきた恐怖に、思わず身ぶるいて、その震えが止まらない。

早く収めないと……。泣きそうな目も、震える指先も……。

あたしは自分を守るように両手でぎゅっと肩を抱き締めた。

早く去ってよ。もう、終わったことなのよ。

本当はまだ動揺してて、うまく感情がコントロールできないほどに余裕がないの。

でもそんな姿、誰にも見られたくないのに。

竦む体を抱き締めて、感情の渦を鎮めるように堪える。

泣きそうなのを我慢したら、顎が妙に痛んだ。

スマイル・アゲン（前書き）

え、ここで一つ訂正です。前章はけして、くゆってません。くゆりそうだったの間違いです。最近はドコも禁煙になってて、幸村さんもストレスが溜まってたんでしよう。

作者はタバコは好きじゃありませんが、大人の男性が哀愁漂わせてタバコに火をつけて、煙を吐き出す瞬間の仕草がなんか色っぽくて好きです。

格好よくて、タバコが似合う人だけ吸ってもいいと法律を変えても
られないかと常々思っています。

スマイル・アゲン

「我慢するな」

ポンツと大きな手があたしの頭に乗せられた。

冷やかな存在感とは違って温かなその手の温度に、更に涙が込み上げる。

「お前はそうやって何でも自分で抱え込もうとするんだな。その姿勢は立派だと思っが、賢明な方法とは言えない」

潤んで霞んだ瞳で、恐る恐る幸村さんの方を仰ぎ見た。

肩手をあたしの頭に乗せ、もう片方は自分の膝に置いて顎を支えている。

今日も今日とて何がそんなにも嫌なのだろうかと疑問が湧いてくる無表情はそのまま。

絶対零度の瞳はあたしには興味なんかないとばかりに、じつと遠くを見つめている。

でも何でかな。

その無表情が困惑気に見えるのは。その瞳が優しく思えるのは…
…。

「幸いここには誰もいない。誰もいないなら無理に隠す必要もないんじゃないか？」

「で、でも……幸村さんがいるし……」

「ああん？俺か？俺はあれだよ。ただの煙草ふかして仕事をふけるおっさんだ。切り捨てる」

おっさんって！自分で言っちゃダメでしょう。
むすつとしたまま表情を変えない幸村さんが何だか可愛く思えてきた。

人を慰めるなんてきつと慣れてないはずなのに。
不器用な優しさで、それを優しさと気付かせないように声をかけてくれるんだね。

頭に乗せられた大きな手にひどく安心してしまう。
こつこつという感覚をあたしは知っている。
そう、まるで……。

「なんか……」

「あん？」

「お父さんみたい」

がくつと幸村さんの体が歪んだ。
顎を支えていた腕がずれてしまったらしい。
何かに耐えるようにしばしそのままの状態だ。
あれ？何か間違ったこと言っただかな？

幸村さんの、幸村さんらしくない行動に思わず涙が引っ込んだ。
顎に入った力が抜ける。
まじまじと見つめっていると冷酷で端正な顔を渋く歪めて、幸村さんが体を起こした。

「せめてお兄さんと言え。お兄さんと。こんなデカイ子どもを持つほど俺は年をとっていない」

複雑な表情でそっぽを向いて、そのまま黙りこんでしまった。
うわ〜なに、この可愛い生き物は。

幸村さんでもそんなこと気にするんだ。

不謹慎だけど、でもちよつと面白いな〜

なんて絶対、口が裂けたって幸村さんには言えないんだけどね。

だから顔を背けて必死に笑うのを我慢してたのに、唐突に幸村さんが声をかけてきた。

「…………お前の両親はいくつだ？」

「へえ？えつと、お母さんが38歳。お父さんは生きてたら…………36歳かな？」

なんとなしに答えた言葉に幸村さんの表情が固まった。
きつと聞かなければよかったと思ってるはず。

まあこういうのは慣れてるの。皆、お父さんがいないと知ると、
タブーに触れないように家族の話をしてない。

きつとそれはあたしに悲しい思い出を思い起こさせない皆の優しさ。

でもね、あたしも皆に話したいんだよ。

あたしの家族がどれだけ仲良くて素敵かってことを。

「えつと、うちのお父さん、2年前に事故でね…………。電車のホームに落ちた小さな子を助けようとして、そのまま家に帰る電車に乗るはずが天国行きの列車の乗っちゃの。おっちょこちよいなよね、うちのお父さん。お人好しで、ぼんやりしてて、幸村さんとは似ても似つかないというか…………。だから、お父さんみたいってというのは一般論でいうお父さんで…………。」

「そうか……」

ぼつりと零れたその一言にはいろんな意味が込められているように思えた。

慰めたり、お悔やみの言葉を言わない辺りが幸村さんらしい。

「えっと……お父さんとは今は別居状態だけど、でもね、あたしは自分が不幸だとは思わないよ。やかましい弟妹が四人もお母さんもいるし、それにあたし、人間運だけはいいのよね。あたしの周りにはあたしには勿体ないぐらい可笑しくて素敵な人がいるの。だからね、幸村さんが言ったことは間違いないよ」

眉に皺が寄る。

これは睨んでいるんじゃないかと、一般の人が首を傾げるようなジェスチャーと同じなんだとあたしはこの時気が付いた。

「今のこの状態を離したくないって思ってたなんでも抱え込んでしまう。全部大事。だからどれも捨てられない。ぎゅっと抱きしめて、自分の内に抱え込んでしまう。あたし、すっごく強欲なんだろうな。だからクセになってしまつて、何でも内に引きとめちゃうんだろうな。感情とか、そういうものも」

などという自己分析を発表してみた。

ちよつと恥ずかしいな。

でもさ、ちよつとだけでも言い訳させてくれてもいいでしょう。泣きそうなところを見られて、必死に耐えてったのに簡単に自分の癖を見抜かれて、全てを幸村さんの前に晒されてしまった。

だからこれは、なけなしのプライドなんだな。

思わず下を向いて、照れ隠しに前髪を撫でつけているとまた頭をポンポンと叩かれた。

「親父でいい。お前の父親とそんなにも歳が変わらないことが今発覚した。驚愕の事実だ」

また遠くを見つめたまま、幸村さんは遣る瀬無いとばかりにため息をついた。

「高校生の子どもか……」

いやいや、食いついてほしいのはそこじゃなくて！

せつかくの語りを台無しにしないでよ！

ってか幸村さんはいくつなの？

「おい、だから親父だと思ってしかと聞け。一度しか言わん。泣きたい時は泣け。無理して笑うな。妙な自己分析で正当化すんな。そんでもって、何かあれば俺に言え」

頭に手を乗せられたまま、ぐいっと顔を寄せられた。

何も映さないはずの漆黒の瞳に驚く小さなあたしがいる。

いいか？つと重低音で迫れたら、もう頷くしかできない。

あたしの反応に幸村さんは納得げに頷くと腰を上げた。

「よし、ならばここにいるのはほどほどにして持ち場に戻れ。あの王子殿下はお前が側にいないと気が気じゃないようだからな。俺は警備本部に戻るが、何かあれば俺の携帯電話に連絡しろ」

まるで部下に命令するような口調。

でもそれはきつと照れ隠しなんじゃないかな。

なんでも器用にこなせそうなのに、人に優しくする時だけはこんなにも不器用だなんて。

幸村さんはポケットから四角い黒の板と名刺を取り出すと、ポカ
ンと幸村さんを見つめるあたしの手にもそれを押し付けた。

「えっと……」

「電子辞書だ。まったく今日びの高校生は英語もろくに話せんのか。
なんだ。アイ・ミート・フレンズって」

渋い表情でじつと見下ろされる。

あはは〜すいません。これからはどんなに苦手でも懸命に学びま
す。

幸村さんにそんな顔をされると必死にやらないと殺られるんじや
ないかという気持ちにさせられる。

「あ、ありがとうございます。わざわざ持ってきてくれたんですか
？」

「没収品だ」

そう言っって幸村さんはあたしに背を向けた。

日に照らされたその広い背をじつと見送りながら、あたしは自分
の手にある電子辞書にちらりと視線を落とした。

電子辞書の隅に張られたテプラには小さなアルファベットで「Y・
YUKIMURA」とある。

「もう、嘘が下手なんだから」

何でかな。

さっきまで滔々と押し寄せる暗い感情の波に支配されていたはず
なのに、今胸の内について込み上げてくるのは、温かて面ばゆい感

情。

ねえ、だから言ったでしょ？

あたし、なんのと取り柄もないけど、人間運だけはとってでもいいの。

こつやって気にしてくれる人がいるから、あたしはまだ頑張れる。

コソシひとつでのし上がれ!! (前書き)

よく分からない題名ですね。もう作者にもよく分かりません……。しかも最近、何が書きたいのかよく分からなくなってきました。作者の書く物語ではよくあるんです。中だるみっていうんでしょうか？書きたいシーンまでうだうだするといつか……。だからここからしばらくは、そっと目をつぶって読み流してください……い!!

コソシひとつでのし上がれ!!

さて、そろそろ戻ろうかな。

いつまでもセンチメンタル千佳ちゃんじゃいられない。

なんていうか、いつまでもくよくよと引きずっているのはあたしらしくないよね。

そう思っつて腰をあげた時、迎賓館の出入口前に人影が見えた。

もしかや幸村さん？ヤバい！まだここにいてのかつて怒られちゃうかも！

飛びあがるように立ち上がったあたしは、こちらに歩いてくる人影に臨戦態勢。

今度こそ幸村さんが納得する言い訳を考えておかないと！

そう思っつて眩く照り返る校舎に目を凝らした。

つてあれ？パチパチと目をしばたく。

あたしの視線の先にいるのは幸村さんよりも少し小柄で、撫で肩の男。

あれは 居眠りばかりのヤマネ君じゃないか。

ゆっくり、でも確実にこっちに足を進めているということはあるが目的なんだよね。

ドクン。

心臓が跳ねたのはきつと、さつき見た真つ直ぐの眼差しの所為。

いつも眠たげな彼が見せた別の表情に心が安定感を失う。

なんでセバさんやペスじゃなくて彼なんだろう？

何気にこの人との絡みがなくて、正直どう対応していいか分からないんですけど。

ペスやアレクサンドラさんみたいに露骨に嫌いって顔してくれて
の方がまだやりやすい。

興味ないが一番中途半端。

まあ、あんなぼんやりした顔してて、実は心の中ではあたしにぞ
っこの可能性も捨てきれないけど（それはないか……自分で言っ
ててちよつと悲しくなった）、でも何か態度に示してくれないと！
ただでさえ会話が成立しないのに、何を考えているか分からない
んじゃない、すつごくやりづらいじゃない。

とろんとしたたれ目の中の、緑がかった茶色の瞳は捉えどころが
なくて、変に緊張する。

あたしはどう彼を出迎えたらいいのか分からなくて臨戦態勢のま
ま、彼の第一声を待った。

長い足でサクサクあたしのところまでくると、ヤマネ君は木影に
入る前に足を止めた。

あたしと彼の前に薄闇の一線が引かれる。

眩く輝く世界に気だるげに立つとヤマネ君は眠たげな目を更に細
め、あたしを頭のとっぺんからつま先までじっくりと見つめた。

そして一言。

「趣味はシャドウ・ボクシング？」

……。

アハン？ シュミハシャドウボクシング？

パードウン？

こ、これはまたもや聞き間違え？

最近、何故だか英語を即日本語に翻訳しちゃう機能が身に付いた
らしい。

アルの時もそうだったし。なんか天啓受けちゃった？ やったね！
これでヒヤリングも怖くない。って、そんな訳あるかい！

「なっ……な……なあゝ!!」

一人ぼけ突っ込みに限界を感じて、現実を直視しようとした。んだけど、あえなく失敗。

だって、こんなのあり？

こんなイレギュラーな意外性必要ないんですけど！

臨戦態勢、一般的に言うファイティングポーズのまま、握った拳をヤマネ君に向けてこれでもかと目をむく。

口なんて、それこそムンクもビクリなほど開けっぴろげだ。

これがマンガならあたしの側にはイナズマが走ってるんじゃないだろうか。

もちろん顔は劇画チックをお願いします。

「若いのに吃音がひどいな。それじゃヒーローインタビューで困るよ?」

混乱しすぎて、頭の中で現実と妄想を行き来しているあたしを余所に、淡々とした表情のヤマネ君が同情するように眉を寄せた。

彼の発言の意味が分からない。言語は理解できるのに、何故ここまで理解に苦しむのだろう。

あたしに出来るのは、ただ感情のままに叫ぶのみ。

「何のヒーローインタビューよ!」

「え?何ってシャドウ・ボクシングだよ。トウキョウ大会が近いから少ない時間を見つけては練習に励んでいる。どう?あながち間違えじゃないでしょう?」

自信満々だけど、間違えだらけです！

「分かる分かる。試合が近付くと何かしてないと不安になるんだよね」

ある意味幸村さんの上に行く無表情のままヤマネ君はわが意を得たりと頷いている。

いやいやいや……。

もう何を突っ込んだらいいのか分からないよ。

シヤドウ・ボクシングの東京大会？

そんなものが本場に近日開催予定なの？

ってかそもそもシヤドウ・ボクシングに試合なんてあるの？

「こつ見えても俺も昔はちよつとスポーツに打ち込んでた時があったからね。負けた時、あの時練習をさぼったからとか自分に言い訳したくなくてさ、今考えたらかなり無茶に体を酷使したよ」

ちよつと、何を遠い目して空とか見つめちゃってるわけ？

空の彼方に青春の忘れ物をしてきましたみたいな顔しないでよ。

そしてあたしを置いてけぼりで自分の世界に入らないで！

呆然とヤマネ君を見つめているとあたしの視線に気づいたのか、あたしに力強く頷いてくる。

「若いつていいね」

なんだ、その無表情のくせに妙に満足げな顔は！

そして、その親指を直せ！

何、グッド・ジョブ！みたいに勢いよく指を突き出しているのよ。

オーバーか！……欧州の人か。

言葉が通じあうから、そして彼があまりにナチュラルに話しかけてくるから一番大事なことを忘れてた。

「日本語話せるんじゃない！」

ファイティング・ポーズのまま、あたしは大声で叫んだ。

シンデレラの条件（前書き）

本作は題名にあるように夏が舞台です。なので夏のうちに終わらせようと思ってましたが……全然無理そうです。

なので目標を変えて、アツい間に書き上げようと思います。なので、今日もウザいほど暑いなって感じた日があれば、気晴らし覗きにきて下さい。まだ続いでるハズなので！

シンデレラの条件

「話せるよ？話せないなんて言った？」

確かに話せないとは聞いていない。

でも話せるなら話せるで、もっと早くにカミングアウトしてくれてもいいんじゃないかな？

アルといい、ヤマネ君といい、なんで日本語を話せることを隠すんだ？

まあ、ヤマネ君は隠してたんじゃないかとただずつと寝てたから話す機会がなかったただけだけど……。

でも話せるなら普通通訳を買って出るものでしょう？

どうやらネボすけヤマネ君は人畜無害な顔をして、一筋縄じゃないかない複雑怪奇なお人柄らしい。

ホントに……アルといい、ダリルさんといい、ヤマネ君といい、シーリエントは訳分かんない人ばかり。

「まあいいや。フェレスさんが呼んで来いっていつから来たんだ。次の場所に移動するんだってさ。」

淡々と棒読みな科白は日本語が分からないからじゃなくて、彼の性格によるものだと思う。

まるで他人事のような口ぶりだけど、あなたも一緒に移動するんですよね？

こつやつて直に話してもヤマネ君は捉えどころがなくて、困ってしまう。

天然おとぼけキャラ？

ゴーイング・マイ・ウェイに明後日の方向へと気ままに進んでい

くなんて！

外人の天然さんとか初邂逅でどう接せばいいのか全然思いつかないよ！

大混乱のあたしを余所に、マイペースなヤマネ君は若干眠たそうに目をこすっている。

彼がすっきり爽やかな目覚めの瞬間を迎える時はこの世に存在するのかな？

そんなことよりも、このまま彼のペースに巻き込まれたら、あたしはきつと一生応接室に戻れない気がしてきた。

だって今も、さっきまであたしが座っていたベンチを眠たい目ですつとりと見つめている。

ヤバい。あのベンチは確かにお昼寝には最適な涼しげな風が吹いてきたりしちゃうから、一度座れば彼は二度と目が覚めないかもしれない。

その場合はあたしが彼を背負っていかないといけないのかな？

それともお姫様のキスで目を覚ましてあげるとか……うん、これは冗談。キスしたのにまだ寝てたら、落ち込むだけじゃ済まないよ。これは彼がああのベンチに座る前に行動に出なければ。

「む、迎えに来てくれてありがとうございました。それではヤマネ……ダグラスさん、行きましょか。ええ、もう、サクサクとね。いや、お外は熱くてたまりませんね」

あたしは涼しい木陰に後ろ髪を引かれながらも暑い日向に出た。

途端に足元からむっと息苦しい熱気が押しあがってくる。

光に包まれた夏の空は憎いほどにカラッと晴れ渡り、雲一つない。

そのままヤマネ君に背を向け、迎賓館へと足を向けた。

淡々とあたしの後ろを従ってくるヤマネ君。

ちよつと、これ、なんか間違つてません？

何ゆえエスコートしに来た人をエスコートしてるんでしょう？

若干腑に落ちないものを感じつつ、あたしは迎賓館へと一歩踏み入れようとした。

その時……。

「ねえ、あの子がシンデレラ？」

「マジ？あり得ないでしょ？超ヘーボン！」

悪意の籠った言葉がどこからともなくあたしに突き刺さる。

それは校舎の影から。はたまた向かいの校舎の中から。皆があたしを色眼鏡で見非難する。

さっきのお姉さま方と一緒に、完璧王子の側にいるあたしが絶対に許せない人の私情にまみれた心ない言葉に思わず足を止めた。

別に知ってる人じゃないからいいけどさ、でも、寄ってたかって悪く言われると流石にへこむというか……。

心がささくれだって、涙が出ちゃう。だって女の子だもの。

なんてふざけてみても、ちくりと刺さった細かな悪意の棘はなくなる。ならない。

ちよつと悪口を言われるだけでもこんなにしんどいのに、日々有形無形を問わずいじめられていたシンデレラって本当はかなりタフなんじゃないだろうか。

もしくは おいおいそこは空気読んでおこつて突っ込みたくなるほどの前向き鈍感さんだったのかも。それが大分 的な方だったとか……。いや、鈍感さんだったんだよね。きつとそう。

どつちにしても、常に継母や継姉たちの悪意に晒されながら、道を外すことなく健気さを忘れずにいるなんてなかなかできちゃいでしょう。

あたしなら絶対グレて家出しちゃう。

じゃあ、こんな時シンデレラじゃない千佳ちゃんはどうすればいいのでしょうか？

鈍感にもMにもなれなくて、ついでに逃げる場所も思いつかないなら、それはもう開き直って状況を楽しむしかないでしょう！

人が羨む立場にいるなんてそうそうないし、嫉妬される女なんてなかなか体験できない！

王子様の側にいるんだぞ〜！どうだ！うらやましいか！

耳障りな悪意に対抗するかのように、胸を反らしてみた。

ハツタリでも強がって見せたいじゃない。

早く迎賓館の中に入って、悪意をシャットアウトしよう。

どうせ今だけの、行き場のない感情のアクみみたいなものだ。

なんて自分に言い聞かせて、大きく息をついた。

のに…。

「ねえ、シンデレラの条件って知ってる？」

まるでじりじりと照り返る日向に引きとめるかのよう。

ふいに掴まれた腕にびくりと身を竦ませた。

急にあたしの手首を掴んだヤマネ君の手はまるで凍りのように冷たい。

「え？」

驚き、振り向いた向こう。

サンサンと光の淡いベールに包まれた場所に佇んだまま、緑がかった不思議な茶色の瞳がじっとあたしを見つめていた。

ドクンッと心臓が不協和音を奏でる。

いつも眠たげなたれ目が凜と冷やかな色を湛えて、射るように向

けられている。

この不安に胸を掻き毟られる感じ、知っている。

どう表現していいのか分からないけど、まるで不快などす黒い塊を飲みこんだような感じ。

薄暗い廊下で、意味深に向けられた視線が頭の中でフラッシュバツクした。

「な、何？」

「君はシンデレラの条件を知ってるかな？」

シンデレラの条件？初めて聞く言葉に戸惑った。

それ以上に言葉に詰まったのは、何故このタイミングで、それを彼に聞かれるのかということ。

あたしがあまりにも不穏な表情を浮かべているからかな？

ヤマネ君はあたしの言葉を待たずに先を続けた。

「貞淑？清楚？純真？どれも誰もが憧れるシンデレラには必要な要素だよ。でもそれは絶対条件ではない」

サンサンと降り注ぐ太陽が急に冷えたように肌を突き刺した。

薄闇にいるあたしを見つめる視線は相も変わらずに何の色も湛えていない。

ただあたしの出方を窺うように煌めいた。

「シンデレラの絶対条件、それは……」

「それは？」

「ぐくりと唾を飲む。」

「持たざる者だ」といふこと

シンデレラの条件（後書き）

『シンデレラの条件』

このフリーズをドコかに入れたくて、虎視眈々と機会を狙ってました。

女の子ならみんな（？）いつかステキな王子さまが…って一度は夢見ちゃいますよね？作者も王子さま絶賛募集中の身です。

こういうのをシンデレラ・シンドロームというそうです。

中には、シンデレラに憧れすぎて、自分は恵まれてるから王子さまが来ないんだと親を責めた子もいたんだって！

その話を聞いて、人の感じ方は様々だなくと感慨深い思ったものです。

さて、うちの千佳ちゃんはこの言葉にどのような答えを返すのでしょうか？

などと堅苦しいコト書きましたが、本作は明るく健全なラブイコメデイです。

さらっと読んで、ちよっと笑って、時には千佳と一緒にドキッとしていただいたら、これ以上に嬉しいコトはありません。

シナリオのないドラマ（前書き）

今日もお暇でしたら、ちらっと流し読みしてやってください！

シナリオのないドラマ

「持たざる者？」

日本語のはずなのに、言葉の意味が分からなかった。

『持たざる者』というフレーズとあたしの間にはどれだけのつながりがあるのだろうか。

ただ見つめ返すしかできない。

それでもヤマネ君は滔々と流れる川のように、一切その流れを変えない。

「そう、よかったね。君、見るからに幸薄そうだもんね。見事一番大事な関門をクリアーだ。後の条件は置いておいても君以上の適役は考えられない」

さ、幸薄そうだと。言わせておけば流暢な日本語で人を馬鹿にしやがって！

カチンときてヤマネ君を睨みつけてやったけど、彼はそんな視線はどこ吹く風。

今までの眠気はどこにやったんだと突っ込みたくなる快活さで先を続ける。

「まるで物語のような展開だね。王子と貧乏人、相反するものを掛け合わせれば、この結果は自ずと引き出せる。その意味では今の展開は必然と言ってもいいかもね」

淡々と紡がれるこの言葉の終着地点はどこなのだろう。

彼の意図することがさっぱりで、どんな顔をすればいいかも分からない。

なんていうのかな？これは、そのあたし、非難されてるんじゃないか。それともただ単に事実を述べられているだけ？

ちよいちよい腹立たしいことを言ってくる時点で前者だと思うんだけど、ヤマネ君の顔が読み取れなさすぎて、あたしは自分の出方に戸惑った。

反発するべきなのか、同調するべきなのか。皆目見当もつかないけれど、ただ胸の内で言葉にできない感情がくすぶっていることだけは分かる。

何かが引つ掛かって釈然としない。

「でも勘違いしないほうがいいよ。掛け算の偶然が物語のような展開を運んできたからといって、現実が全て物語になる訳じゃない。君の側には素敵なチャンスを与えてくれる魔法使いのおばあさんなんてのは存在しない。そして、最後に待ち受けるのは決してハッピーエンドじゃない」

突き放すように鋭い視線。

今やっと彼の意図が分かった気がする。現状に夢を見るなど釘を差したいのだ。

それが優しさからくるものなのか、それとも王子の護衛官という立場からくる義務感なのか。

押し殺したように鈍い輝きを見せるその瞳は、何を伝えようとしているのだろうか。

ハッピーエンドじゃない……ずいぶんはつきり言いきってくれちゃうのね。

知ってるよ。そんなこと、とつくの昔にあたしは了承済みだもん。この先にあるのは、泡沫の夢に消えた人魚姫と同じ結末。

どこかで自分に折り合いを付けて見つけ出す自己満足のハッピー

エンド。

でもさ、そんなこと他人にとやかく言われる覚えはないんですけど。

そう、これは全てあたしの問題でしょう？

ならあたしらしく物語を進めて何が悪いの？

何も答えないあたしに、さらにヤマネ君がたたみかける。

「だから……アルバイトなんてやめれば……」

「失礼ね！持たざる者とはなによ！こう見えても幸せいっぱい120パーセントよ。もうこれでもかってほど抱えきれないほどに抱えてるあたしに向かつて、持たざる者だと！その目、節穴なんじゃない？見た目で判断したら痛い目合うつて学校で習わなかった？しかも条件つて何よ？いつからこのバイトは条件制になったのよ！何？ミス・シンデレラみたいな企画でもある訳？」

勢いよく顔を上げ、目の前の不思議な瞳を睨みつけた。

そして出入口の三和土にダンと踏みこんで見せる。

「なんの忠告なんだか全然分かんないけど、あなたの価値観であたしを判断しないで！あたしはあたし！シンデレラと一緒にしないで
「！」

睨みつけるとヤマネ君が僅かに目を見開いた。

まさかあたしがこんな風に言い返すとは思わなかったみたい。

なによ。あたしのこと、ノーと言えない日本人だと思った訳？そうよね。外国の人に対してだいたい日本人はノーも言えないわよ。自信がなかったら一歩引いちゃうのはお国柄つて奴だもんね。

だから、ネチネチ責めれば簡単にこのアルバイトから身を引きと

でも思った？

でもご生憎様。

ヤマネ君、あなたの前にいるのは可愛いお姫様じゃなくて強かなプロの貧乏人。

ハッピーエンドじゃないことを悲観して、身を引くほど繊細にはできてない。

「何よ。言っておきますけど、お宅の王子があたしを引きこんだのよ。それを今さらやめれば？なんて！」

「……そうだね。しかし殿下もこの展開は想像されていなかったよ。うだ。さっき、君を解雇することを視野にいれて今後のことを考えようとおっしゃっていた。だから、殿下を悩ます前に君から一言やめたいと言えば……」

「ちょっと待って！アルがあたしを解雇したいですって！なんでよ！あたし、何かミスした？」

息急ぎきつてヤマネ君のスーツの胸元をつかんで食らいついた。だつて聞き捨てならないじゃない。

気まぐれに雇うつて言いだして人の予定を勝手に変えさせたくせに、次の日には解雇だと！

そんなの横暴よ！

そんな簡単に途切れてしまう縁だったの？

五線譜にないメロディー（前書き）

今回は趣向を変えて、シリアス？な感じにお送りしたいと思います。

さらっと楽しんで下さい。あくまでさらっとデスよ？

五線譜にないメロディー

押し倒さんばかりの勢いに、流石のヤマネ君も目をむいて白黒させている。

茶色のくせに、器用な人だ。

きつとそれほどまでにあたしが目の色を変えて迫ってたんだと思うけど。

「落ち着いて聞きなよ。殿下が君をバイトに雇った時点では、殿下への注目が君を危険に追い込む結果になるなんて想像されていなかったのさ。……でも事件は起こった。さっきのバルコニーの件、あれは本当に事故だったのか？古い建物だから手すり腐って壊れても当たり前？そんなことありえないだろう。ならば君への嫌がらせであつたとも考えられる。今回は偶然周りに人がいたから何事もなかったが、ヘタすれば怪我だけでは済まなかった。ならこの先、君がどんな造られた不慮の事故に遭うか分からないだろう？」

造られた不慮の事故？

この先もあんなことが起きるかもしれない？

それは本気で言ってるの？

突きつけられた驚愕の言葉に、ただただヤマネ君を見つめ返すしかない。

彼は一応シーリエント王国の護衛官だ。

腐っても寝てても、一流の護衛官。その実力を認められたから今ここにいる。

その彼がわざわざ、あたしに対して警鐘を鳴らすということは、何かを確信しているということ。

「そ、それは……アル…殿下にも危害が及ぶから身を引けてこと

「？」

口から出た言葉は自分でも驚くほどに震えていた。でもよく思い返せば、あの時手すりを持ったのがあたしではなくてアルだったらどうなっていたのだろう。

あの場に幸村さんがいなくて、あたしとアルだけだったら……。そう思うと足先から総毛立つような悪寒が駆け抜けた。問題はあたしだけじゃないんだ。

「別に。殿下の身体生命は護衛官が注意してるから、君が気にすることはないよ。俺が言いたいのは、君が勝手に恨みを買って、勝手に嫌がらせて傷付くとき、殿下のイメージに水を差すでしょ？そういうのはいただけないって話」

掴んだ胸元をやんわりと離され、冷たい視線があたしを激情にか

らなっ！

「殿下だってその辺のことを考えてると思うよ。君という存在がプラスにならないなら、君が側にいる必要がなくなる」

突き放されたような言葉を浴びせられ、あまりの温度変化に思考がショートしそう。

それって、まるでアルがあたしを利用したくてバイトに誘ったように聞こえる。

彼に注目を集める小道具として、日本人の、しかもとびきり平凡な女の子はとも有効だったと。

さっきヤマネ君が告げたシンデレラの条件。

それはこのヴァカンス中でアルの存在を引き立てる者の条件だっ

たのかもしれない。

「冷静になって考えてみてよ？さして乗り気でもない旅行に、現地の文化を教えるコンパニオンが必要か？ロクに言葉も話せないのに……」

淡々としたヤマネ君の声は、びくりとするほどに冷たい。

でも一度火のついたあたしの熱はどんなに水をかけられたって簡単にはおさまらない。

この燃えさかる鉄のような感情、どうしたらいいの？

だつてさ、こんな腑に落ちないじゃない。

まるで利用してるといわんばかりの言葉。

あたしだつて多少の作為は感じてるもん。コロコロ変わるアルの態度の陰には何かあるって。

でもね、だいたいアルの側にいたら大注目を浴びることは簡単に想像できるじゃない。しかもそれを助長するかのようにベタベタ触ってきたのは紛れもないアル自身。

それが今さら手のひら返して、あたしにやめるだと？

それってなんか虫がいい話だと思いませんか？

アルが何を考えてるかなんて皆目見当もつかないし、今この胸でくすぶっている感情と向き合ったら、この先に待ち受けているのは悲しい現実だつてことも分かつてる。

でももう引き返せないとこまで来ちゃってるの。

乗りかかった船はモーターボートで、あつという間に岸を離れちゃったんだから。

身勝手に巻き込んでおいたのに、気ままに手放さないでよ。

べつに利用されてもいい。だって始めから雇用者とバイトっていう、お互いの利害の一致で始まった関係だもん。
どんなに甘く囁かれても、あたしはまだそのドライな関係性を忘れるほど夢見がちじゃないの。
でもね……。

「アルのこと、行ってくる！」

ドンッとヤマネ君の胸を突き放すとあたしは駆けだした。

「え？おい！」

引き止める声はもうドツプラー効果で遠くにしか聞こえない。

走り出したら、もう足は止まらない。

それ以上に胸の奥でムカムカが治まらない。

体の芯から湧きあがる熱いパトスに熱せられて、心臓が蒸発しそうなほどに激しく燃えさかる。

今あたしを動かしているのは紛れもない、その激情。

宣戦布告！（前書き）

まだまだ前章の流れに乗ってシリアスです。
元に戻るまで、もちっとかかりそうですが、あきないでください！

宣戦布告！

「アル！」

廊下の先に見えたのは淡い金髪。

遠くからでもすぐに分かる長身が、あたしの声には振り向いた。合わせて側にいるセバさんやアレクサンドラさんが振り向く。

一心不乱にかけてくるあたしにぎよっと目をむいてるけど、そんなものじゃあたしの足は止まらない。

ペスなんて護衛官のくせにあたしの鬼気迫る顔に気圧されて、一歩引いている。

「アル！」

勢いよくアルにぶつかりそうなほど側までダッシュすると、鼻先5センチの位置で急ブレーキをかけた。

そして感情のまま、アルのネクタイをぎゅっと引いてあたしの方に向ける。

されるがままに長身を折ったアルの魅惑的な蒼の瞳が困惑に揺れた。

自分のテリトリーに引き込むことに成功したあたしはきつと睨み上げ、大声で宣言した。

「あたし、絶対にやめないからね！」

『チ、チ力？』

端正な顔が戸惑いの表情を浮かべる。

でも厳しい目を緩める訳にはいかない。

『まあ！殿下に何をするの！この無礼者！』

あたしに掴みかかろうとするアレクサンドラさん。

ワタワタとろろたえるペス。

爽やかな夏色の風が吹きぬける薄暗い廊下が一気に修羅場に変わった。

「ちょっと、千佳さん？」

緊張走る日シー関係を取り成すように、セバさんが慌ててあたしをアルから引き離しにかかった。

「どうされたのですか？落ち着いて！」

さすがに一国の王子のネクタイをぎゅってするのは、ちょっと、いや大分不謹慎で大失敬な行為だね。

でもさ、常識を重んじる日本人の鑑の千佳ちゃんでも思わず感情のままに動いてしまうこともあるのよ。

そう、人とは感情には抗えない生き物なのです。なんて格好いいこと言ってみたりして……。

だって大爆発したこの感情はちょっとやそつとじゃ治まらない。頭よりも体が先に動いて止まらなくなって、もう引くに引けない。今さら冷静になんてなれないもん。ええい、このままブチギレ状態で突っ張るしかない！

「あたし、絶対にやめないわよ！自分の不手際でやめさせられるならともかく、勝手に心配や同情や打算なんかされっちゃってやめさせられたら、タマったもんじゃないわ。いいこと！あたしは最後まで全力でやり切って、TDLに行くんだから！」

「へ？TDL？」

「巻き込んだのはあなたよ！なら最後まで責任もって巻き込み続けてよ！」

あたしが握りしめた所為で皺しわになったネクタイが揺れる引き締まった胸元にびしりと指を突きつけた。

「あたしはね、プロの貧乏人なのよ！そんじゃそこらのことじゃへこたれない！どんなことがあっても負けたりしない！あなたがどんな風にあたしを見てるか知らないけど、でも最後まであなたが望むアルバイト役をやってやるうじゃない！」

周りの人間はみんな呆気に取られている。

渦中のアルは息を飲むように目を見開いたが、それも一瞬のこと。すぐにいつもの完璧スマイルを浮かべるとセバさんの方へと何事かを話しかけている。

「チ力はすごい剣幕だけど、何を訴えてるのかな？」

「どうやら殿下が千佳さんをやめさせるつもりだと思ってるしやるようで、絶対にやめないとおっしゃっています。最後まで殿下の側に置いてほしいと」

「なるほど……」

アルはようやくやっと納得がいったという顔を浮かべ、意味ありげに瞳を輝かせた。

その不敵な笑みにバーサク状態が溶けた。

気が付けば、痛いほどの視線。

その視線から身を守る防具を何一つ持っていないあたしのヒットポイントが風前の灯だ。

でも、ぐつと奥歯を噛みしめてアルの方に鋭い視線を送り続ける。だってこれだけは分かかってほしい。

あたしはいつでも本気だってことを。

「あなたがどんなつもりでも、あたしはやめないわよ。始まりは乗り気じゃなかったけど、でも中途半端な気持ちでバイトに望んだことなんて一度もない！常に全力であなたに向かい合ってきたわ！」

ねえ、誰もが見惚れる完璧王子様。利用するなら上手に利用してよ。

中途半端に優しくしたり、王子の仮面を脱いだりしないで、徹底的に甘い嘘で固めてよ。

あたしは、そこまで強い子じゃない。

口では大きなことが言えても、本当はヤマネ君に告げられた真実に傷ついている。

でも……ここで引き下がるほど慎ましやかなシンデレラじゃない。

「あたしのこと、見くびらないで！」

思いの丈を込めた最後の言葉は流れる空気を震わせた。

ぜいぜいと息切れ状態。

でも譲れないものを抱えた瞳だけはアルを見つめたまま。

周りにいる人たちは何故あたしがこんなにも感情的なのか理解に苦しむとばかりに息を飲んで、立ち尽くしている。

その中で、アルだけが壮大なシンフォニーを身にまとったかのような優美さを崩すことなく、完璧な笑顔を浮かべている。

そう、傍から見ればまるで肉食獣に天使が餌付けをしているかの

ような奇妙な光景だと思っ。

片や目を血走らせるほど感情的で、片や神の調和を崩すことのない冷静さで……。

『すごい勢いで駆けてくるから何事かと思ったよ。そんなことを告げるためにわざわざ走ってきてくれたんだ。もちろん、君を離す気はさらさらないよ。……君が望むままに、ずっと僕の側にいてくれ』

長身を折るとアルは甘く蕩けそうな声であたしの耳元に囁いた。

ちよ、ちよっと！そんな甘い展開じゃないでしょう！

あたし、これでも結構怒ってるのよ！

日本語だけど、ちゃんと理解してるでしょ？

あたしはあなたの打算を知った上で、絶対にやめないと云ってるのよ？

なのに、どこをどうしたら、胸の奥がじりじりと熱くなるような色っぽい声が出せる訳？

さっきまで体を上気させていた熱とは違う熱さに戸惑ってしまった、さっきまでの勢いが嘘のように、尻つぼみになっていく。

「これからも側にいてくださいとおっしゃっています」

「ええ！やめさせたいんじゃないの！」

穏やかなセバさんの言葉に、今度はあたしが驚く番。

『なんてはしたないのかしら！叫んではかりで！少しは落ち着いて話を聞く冷静さを養う気はないのかしら』

これ見よがしなため息と共に吐き出されたアレクサンドラさんの

言葉はまるで風の音のようにあたしの側を通りすぎる。

なんて言ったのかは分からない。でもあたしの直感は何かを言い返した。

「あなたにだけは言われたくないもん」

『なんですって？文句があるならいつでも相手になりますわよ？』

「上等！誰か白い手袋持ってきて！決闘よ！」

アレクサンドラさんの鋭い視線に負けないようにあたしはこれでもかと眉間に力を入れた。

普段のあたしなら思わず身を引いてしまいそうな場面。

でも今のあたしの常識レベルはかなりの大暴落。

うまくコントロールできなくて、何にでも過剰に反応しちゃう。

ついに勃発した女同士のガチンコバトルにその場は騒然となる。

置いてけぼりになった男の人たちは、ぼんやりと女子達のやりとりを見つめている。

なんて言うか、弾け飛んだ人が側にいると、周りは意外と冷静になつたりするんだよね。

「「なんで言語が違うのに、会話がかみ合ってるんだ？」」

「「いいえ、殿下。何一つかみ合っていないんです。ただそう見えるだけで……。それよりも白手袋のいる決闘とは、何をされるつもりなのでしょうっか？」」

「「白手袋？決闘？まったく話が見えないな。うっん、しいて言う

なら乗馬かな？」「

「乗馬ですか？千佳さんは意外な趣味をお持ちですね。コーウィ
ツシユ外交官は幼少より貴族の嗜みとして習っていらっしやったと
思いますか……」

「あの……止めなくていいんですか？」

呆気に取られたまま、まるで傍観者のようにこちらを見つめてい
るアルとセバさんに対して、ペスが遠慮がちに口を挟んだ。

この間も睨みあいが続いている。

若干方向性が見えなくなってきたけど、きつとアレクサンドラさ
んもよく分からないなりに引くに引けないんだと思う。

だからさ、早くリングにタオルを投げ込んでください！

歌を知らない小鳥（前書き）

まず、何も考えないで読んでみてください。

歌を知らない小鳥

やっと止めが入って、日本VSシリーズのよく分からない対決はうやむやな結末を迎えた。

それ以上にうやむやにされてしまったのが、ヤマネ君の「やめたら」発言だ。

その後、車で大学を後にして次の予定に移ったのだけど、ヤマネ君があたしに話しかけることはなかった。

彼ははつきりとアルがあたしを辞めさせることを考えていると言っていたのに、蓋を開ければ、何言ってるのって顔で甘く囁かれただけ。

しかもアレクサンドラさんとのガチンコバトル付きときたもんだ。何？これってもしかしなくても、あたし担がれたわけ？

ここに来て急に日本語で話しかけてきて、あたしをからかいたくなかった？

いくら考えても、淡々とした無表情のヤマネ君から読み取れるのは眠気だけ。

でもヤマネ君が言ったこともあながち間違えじゃないと思うんだ。

アルがあたしをアルバイトに誘ったのは、ただの暇つぶし以上の隠された意図があるんだと思う。

それがどういうたぐいのものなのかは全然見当もつかないけどさ。もう訳分かんないことばかり。

今日も今日とて不思議なシリーズント達は、灼熱のヒートアイランド以上にめまいを感じさせる。

釈然としないものを感じつつ、午後からの予定はつつがなく終わり、あたし達はホテルへと戻ってきた。

今日の日程を終えたあたしは一人、ホテルの部屋にいた。

「なんか疲れたな」

自然と零れたため息と共に体の力が抜けた。

今日も色々ありすぎて、あたしの心のキャパはもう限界みたい。

一人ベットに寝ころびながら、見るともなしにTVに目を向けた。ぼんやりと見つめるTVの向こうでは、あたしとテンションの落差を感じさせるほどにハイな芸人が今週のヒットチャートをおもしろおかしく紹介している。

そういえば最近、バイトづくしでどんな曲が流行ってるのか分かんないな。

バイト先で流れているのは一昔前の洋楽とかジャズとかだし、スーパーで流れるのは一度耳についたらこびり付いて離れない陽気な購買促進進行曲。

「それでは、次はアイカさんに歌ってもらいましょう。新曲『残酷なまでに優しい嘘』^{キス}です。嘘と書いてキスと読むんだそうです。ちよつと、無理しすぎとちゃいますか？最近の子ども名前みたいですね。絶対に読めない当て字を使うところが……。うちの甥っ子も実は……って話してるうちに伴奏流れてしもた。それでは、アイカさん、どうぞ〜！」

ぐだぐだのMCが終わり、画面は苦笑いの女性シンガーに変わる。さっきの妙なテンションから一転。女性シンガーアイカの後ろにいるバンドマンが奏でたのは、切ないメロディ。

ピアノの優しい旋律とドラムが刻むリズムに思わず画面に集中した。

プリーズ……

キス・ミー・アゲン・アンド・アゲン

これがサイゴだと言っのなら

目が覚めるまでアナタの胸で溺れさせて

残酷なウソで眠らせて……

情感を込めて歌われるのは別れを切り出された女性の切ない恋心。霧囲気のあるバーのカウンターで交わされる大人の別れ際の一幕が物語の舞台。

別れを告げる男。

それを何一つ顔色を変えずに受け入れる女。

「そう？じゃあさよならね」

なんて言いながら、カクテルグラスに口を付ける。

でも全て飲み干せないのは、この一杯が終われば二人は永遠に別れることになるから……。

ホントは追いつがりたい。だけど、彼女のプライドがそれを許さない。

仮面の下で泣きながら、彼女は余裕の笑みを浮かべる。

でも、どんなに強がってみせても心に嘘はつけない。

興味なく見てたはずなのに、いつの間にか視線は画面下のペロップに釘付けだった。

もう控えたら？なんて優しい言葉をかけながら

意味深にネクタイを締める

ばあか

なんでもっと上手に酔わしてくれないの？

いつもの手際の良さがウソみたい

何故だろう。

分かる訳ない大人の恋歌に心がぎゅつと締め付けられた気がした。物悲しい恋の歌があたしの心の琴線に触れて、昼間のヤマネ君の言葉が思い浮かぶ。

シンデレラの条件は持たざる者。

あれはもしかしたら、彼なりの警鐘だったのかもしれない。

きつい言葉であたしを傷つけて、この役からあたしを下ろす為の彼の仕組んだ罠。

不意に手に入った未知の役柄にあたしが酔わないように。

酔えば酔うほど、覚めた時の現実が辛いものになる。

だから忠告してくれたのかな？

これは現実だよって。どんなに甘い展開でも先にある結末は一つしかないって。

でもよく考えてみてよ、ヤマネ君。

あたしとシンデレラじゃ絶対に相容れない部分があるでしょう？

顔とか性格は置いておいても、彼女との間には越えられない一線がある。

だからキラメク世界に戸惑い、トキメいても心からのめり込めない。

その辺はちゃんと心得ているよ。

だって、シンデレラは生まれながらのお嬢様。だからお城にもすんなりと溶け込めた。

でもさ、あたしは生まれながらの貧乏人。どれだけ背伸びしてもお城の中を覗くことさえ叶わない。

カクテルグラス、縁取る雫がキラリ

寂しく光って流れていつて……

12時を告げる鐘が鳴る

プリーズ……

ホールド・ミー・モア・アンド・モア

これでサイゴだというのなら

目が覚めるまでアナタのヒトミに映っていたい
優しいキスで囁いて……

「きすみーあげんあんどあげんか」

ポツリと呟く。

曲に合わせて気持ちもしんみりしてしまつ。

ダメダメ。こんなのは千佳ちゃんらしくないぞ。

パンパンと両頬を叩くとあたしは気分を変えるように、サイドボードに置かれた電子辞書を手に取った。

「ちゃんと勉強しとかないと幸村さんに怒られちゃうもんね」

電源を入れると思いつく単語を入れてみる。

「ゴリラ」 『GORILLA』

「シーリエント」 『SEALIENT』

「腐女子」 『DEPRESSED GIRL』

「あははっ！腐女子も頑張つて訳してくれちゃうの！すごいな！電子辞書！」

カラ元気な笑い声をあげて、ベッドの上でバタバタと暴れてみた。

「え〜じゃあ、「もさい」とかも訳してくれちゃうのかな？」

きつと今まで小難しいことしか訳したことの無い幸村さんの電子辞書をこんなことに使って大丈夫かな。

まあ履歴が残る訳じゃないし、これも立派な英語のお勉強よね？
なんて言いながらホントは履歴が残ってて、それを幸村さんに見咎められたいななんて思ってしまう。

意外に面倒見がいい、無口で凶悪な面構えの狩人にもっと構ってほしいと思うのはおかしいかな？

お父さんとも弟とも、はたまた同級生とも違う、大人の男の人。
怖くて冷酷で、でも頼りがいがあったて……。

明日はもっと色々なことを話せるかな？

あんなにも怖かったのに、今は彼の存在が恋しいなんて。

あたし、相当疲れてるんだ。

歌を知らない小鳥（後書き）

変なん混じってきたっ！と思った方、脳内で適当な最近の流行りの「ポップに切り替えてください。」きつと千佳の頭にもそれが流れていることと思います。

歌ってスゴいですよね？同じ言葉なのに、メロディーがつくともっと鮮明になる。

そっという力を借りたいなっと思って思った章でした！

心の置きどころ(前書き)

恋は下心、愛は真(ん中)心……漢字ってつまいこと造られてますよね。

心の置きどころ

ゴロンと寝返りをうった時にはもうさっきの曲は終わっていて、代わりに駆け出しのアイドルグループが派手な衣装で踊りながらお世辞にも上手とは言えない、愛嬌のある歌声を披露していた。

かがやいてサマーナイト

駆け抜ける魅惑のスター

ねえ、ぐずぐずしてるヒマなんてないわ！

ギツリギリ限界を飛び越えて

熱いカラダがおっもむくままに

もっともっと この夏に恋させて

一瞬のユ・ダ・ンもさせてあげない！

12時の鐘は始まりのアイス

さあ、あたしの時間が始まる

ひと夏だけのシンデレラ

このトキメキ、もう誰にも止められない

歌詞はともかく、ノリのいい曲だけに頭について離れない。

やっぱりプロの人はすごいな

どんな曲が人気出るか先が読めるんだからさ。

「かがやいてサマーナイト！ かけぬける」

適当な鼻歌を歌ってみる。

今度の友達とのカラオケはこれで行こう。

練習しとかなきゃな〜なんて考えながら思いつくままに電子辞書に文字を打つ込んでいく。

「夏」 『SUMMER』

「鐘」 『BELL』

「ときめき」 『THROBBING』

「いっ……」

そう言えば英語で「愛」は『LOVE』だけど、恋はなんていうのかな？

愛と恋の違いは英語ではどうやって表すんだろう？

心の置かれた場所の違いは、英語も同じなのかな？

じゃあシリーズントでは？

恋と愛の違いがあるのかな？

なら、この微妙な心の揺れはなんていうの？

この広い世界の中でこの気持ちを的確に表現できる単語は存在するのかな？

「こい？」

ドクンッと心臓が跳ねた。

電子辞書の画面に打ち出された「こい」という文字にあの情熱的な蒼の瞳が重なって、思わず辞書を落としてしまった。

うわ〜なんでこんなに過剰に反応しちゃっかな。

これじゃ認めてるみたいじゃない。

まだ……まだきつとこの気持ちはそこまで育ってないはずなのに、どっどっどつと体に何かを刻みつけるように鼓動を打つ心臓を落ち着けるように大きく息を吐くと、電子辞書を拾い上げた。

ゆっくりと変換のボタンに手を伸ばす。

「いっ」 『CARP』

おいしい！残念！

こいはこいでもお魚さんの方できましたか。

うん、でも今のあたしじゃこんなところだろう。

悲しいくらいに酸欠で、口をパクパクしてばかり。

日本語でも意味が分からないのに、英語で理解できる訳ないんだもん。

そう思うと体に入った力が抜け出た。

英訳するのにどれだけ力んでんだ、あたしは。

恥ずかしいな〜もう。

期待通りにいかない時のむずがゆさが変な笑いと一緒に込み上がってきて、気持ち悪い。

「はは…何を緊張してんだか」

電源を落として、電子辞書に蓋をする。

「この続きはまた今度……」

そう、心置き場の微妙なさじ加減が分かってからでも遅くない。

自分に言い聞かせるように呟いた時だった。

リンゴナーと部屋のベルが鳴り、意味なく慌てたあたしはベッドから落っこちた。

暗くなるまで待って（前書き）

オードリーの作品からチョイス！でも内容は何一つかぶってません
！！

なんとか書きたいところまでたどり着いたような気がします。

暗くなるまで待つて

「グッド・イブニング 寂しかった？信之介君が会いに来ちゃったぞ！」

ドアを開けようと鍵を開けた瞬間に、ドアはあたしの意図するよりも素早く全開にされてしまった。

ドアの向こうにポーズを決めて立っているのは、チャライ・ベルボーイ。

彼は朝でも夜でもテンションが変わらないらしい。

そういえば彼の名前を聞いてなかったけど、シンノスケさんっていうんだ。

まあ、覚える気なんてさらさらないんだけどね。

「別に呼んでないんでお引き取り下さい」

丁寧に頭を下げるとあたしはドアを閉めようとした。

が、ガンつとドアをけり上げた足にそれを阻まれてしまった。

「ちいちゃん、ノリ悪い」

人懐っこい顔が子どものようにブー垂れる。

誰がちいちゃんだ、うちの妹のように呼ぶんじゃない！

彼のタイトの端々にイラっときて、あたしは素早く会話を終わらせようと心に誓った。

ドアノブを素早く掴んで、元あった場所に戻そうとするが、彼も簡単には諦めない。

足をドアから離さずに、まるであたしの反応を楽しんでるかのよう口端を上げる。

「馴れ馴れしくちいちゃんとか呼ばないでよ！」

「まあまあ。オレのこともしんちゃんって呼んでいいから」

「結構です！何よ！またからかいに来たの？」

「まさか！お仕事ですよ？」

その一言で、ドアを挟んでの攻防戦は意外に呆気なく終わりを迎えた。

これでもかっと力を込めてドアをひくあたしをにやりと見つめながら、奴は狙ったように足を離れた。

後は言わずもがな……。

あたしはドアで強か頭をぶつけて、勢いよく後ろに転んだ。

「うきやあー！」

しかも閉めようとあれだけ努力したドアはあたしの石頭にぶつかった反動で、外へと開いていつてしまった。

衝撃でビヨンビヨンと揺れるドアの側に卒なく佇むピエロは、自分に関係ありませんと涼しい顔。

「いったあ〜い」

衝撃で頭がグラングランする。

そんなあたしの前に、奴はまるで紳士のように恭しく手を差し出した。

何よ？自分で転ばせておいて、起き上がるのを助けてみましょうかみたいな手を差し出さないでよ。

もう！腹立つから叩いてやるのかな？と思ったたら、その手に握られているのは白い紙。

「いつもはベル・ボーイのオレだけど、今はメール・ボーイ。はい、姫にメッセージですよ」

その調子のよさ、ホントに清々しいほどに腹立つ。

「メッセージ？誰から？」

座りこんだまま、じんじんと痛むおでこを撫でる。

思わず涙の滲んだ瞳に映ったのは、白い厚手のカード。

彼に不信感を抱きつつも、彼の手から手紙を受け取る。

上品な花の縁どりが描かれたカードの真ん中には達筆なアルファベットが躍っていた。

な、なんだ。この解読不能のメッセージは。暗号かしら？

かろうじて、一番上に書かれているのは「DEAR CHIKA」

だと分かる。

一番下にある一際大きく書かれた文字はR・A。

「……えっと、YOU……」

実践英会話が散々な結果に終わったあたしには、この英文解読は難易度が高すぎる。

ヒヤリングの次はリーディングで躓くことになるなんて。

日本に住んでる間は英語なんて必要ない！って言い訳を自分にして、英語から目をそむけていたツケがこんなところで回ってこようとは。

「そんなに驚愕することが書いてあるの？」

メール・ボーイがそのカラッと晴れやかな顔に蕩けそうなメルテ
イスマイルを浮かべて、あたしの顔を覗き込んだ。

さっきまでの意地悪なんてまるでなかったかのような顔をしゃが
つて。

腹が立つけど、でも今はそれどころじゃない。

だって英語であたしにメッセージを書いてくる人なんてそうそう
いないでしょう？

しかもRとAが入る人なんて一人だけ。

でも悲しいかな……差出人に見当はついても内容はさっぱりだ。

あたしは座り込んだまま、がっくりと肩を落とした。

「よ、読めない……」

「あはは……よかったらオレが訳してあげるよ」

「え……」

戸惑うあたしがイエスという前に、メール・ボーイは素早くあた
しの手から手紙を取り上げた。

「えつと何々」。親愛なるチカへ。これから皆でパーティーをする
から、君は人数分のお菓子と飲み物を買って、最上階まで来てね。
開始は10時。絶対遅れちゃダメだよ？遅れたら、そのお菓子と飲
み物代は君の給料から引くから（笑）、だってさ」

さらつと訳してくれたメール・ボーイはどんなにチャラくても流
石高級ホテルの従業員さんだ。

しかし今のあたしには関心している間はない。

はいつと差し出してくれた手紙を受け取ると、呆然とメール・ボ

ーイを見上げた。

「す、すいません。今何時？」

「午後9時45分かな？」

「因みにホテルの売店は何時までですか？」

「何時って、もう閉まったよ。でも徒歩5分の距離にコンビニがあるよ。」

徒歩5分、往復で10分。買い物吟味時間と最上階までダッシュする時間を入れればどれくらいになるだろう。

でも、そんなに悠長に計算なんてしてられない。がばっと立ち上がる。

「ちいちゃん？」

メール・ボーイが驚いたように声を上げたが、彼はすでに背の向こうだ。

「訳してくれてありがとう！それじゃちょっと急ぐので！」

叫ぶようにお礼を言うと、とりあえず目のついた階段を一気に駆け下りる。

パーティーって何よ。

なんであたしが買い出しに行かなきゃいけないのよ！

アルからの手紙だからってすっごくドキドキして期待したあたし

が馬鹿みたいじゃない！」

「それよりも！給料から引くって、王子はどれだけケチなのよ〜」

あたしは喚きながら、ホテルから飛び出した。

ちよつと！あたしは王子のコンパニオンって役目じゃなかったの？

これじゃ、ただのパシリじゃない！くそ〜。言い値のバイトじゃなかったら、絶対にボイコットしているのに！

給料から差し引くとか、あたしが弱い言葉を分かって言ってるのよ。

絶対あたしを困らせて楽しんでるんだ。

じゃなきゃ、こんなギリギリにこんなこと言いだしたりしないもん。

ぶちぶち文句を言いながら、全速力で走ると心臓がビツクリして胸の内で暴れ始めた。

そう、息が切れそうなほど心臓が弾むのも、頬が上気するのも全部、走ってる所為。

アルの気ままなワガママに怒ってるからなの！

だから断じて嬉しい訳じゃないもん！

秘密のティーパーティー（前書き）

本作は基本的に、イベント発生は夜！となっております。
王道ラブコメになればいいなあ〜と思います。

秘密のティーパーティー

ぜえぜえと息を切らし、大量の袋を提げたあたしが最上階に着いたのは、まさに10時丁度だった。

エレベーターの前に立っていた黒づくめのトランプの兵士が驚いたように顔を上げた。

『君。どうしたんだ？そんなに手いっぱい荷物を持って』

「え？パーティー会場はここじゃないんですか？」

困惑の彼に、あたしが困ってしまう。

あのメッセージ、どこか訳し間違いがあつたのかな？

それともあのピエロが勝手気ままなことを言っただけ？

それならどうしよう。

思い当たった事実には呆然としてしまう。

ヤツが悪戯である可能性は十二分にある。ってかあり得すぎると
いうか……。

あたしは思わず、手に提げていたコンビニ袋を落としてしまった。

「も〜馬鹿男！よくもからかってくれたわね！誰がこの大量のお菓子
の代金を払ってると思ってるの！」

高級感溢れるフロアーに不釣り合いな叫びが響いた。

でも我が家の家計はそんなこと気にしてられない。

あたしの隣ではトランプの兵士がびくりと身を竦ませている。

いけないものを見てしまったような、哀れむ視線が痛い。

逆ギレ状態のあたしはキッとトランプの兵士を睨みつけた。

「も〜言いたいことがあるならはつきり言つてよ！自分でも分かつてるわよ！大分残念だつて！でもね、言つときますけど、悪いのは人をさんざんコケにする……」

『ああ、やつと来た。それにしても時間丁度だね。流石チカ！』

歌うような声と共に魅惑の世界の扉が開いた。

「え？アル？どういうこと？」

ポカンと情けない顔しかできないあたしとは打って変わって、眩い部屋を背に爽やかに笑う王子は本当にキマっている。

『さあ、パーティを始めよう』

アルは颯爽とあたしの側にやってくると、落としたコンビニ袋を持ちあげた。

「いや、自分で拾うよ」

慌ててアルの手からコンビニ袋を取り上げようとするが、渡してくれない。

にこつと笑顔で拒絶するとアルはあたしの腰に荷物を持っていない方の手を回す。

『重たい思いをさせてごめんね。でも君が買ってこないと意味ないでしょう？日本人が選ぶものに意味があるからね』

「ええ？なによ？謝ってるの？あのね、そうやって笑顔と英語で誤魔化そうとしても無駄だからね！！」

混乱して頭が爆発しそう。

でもその前にこの行き場のない怒りを誰かにぶつけなければ。

もう今日は色々ありすぎて感情の抑えが利かなくなってきた。

「聞いてる？なんでギリギリに言ってくるのよ！別に買いに行く」と自体は嫌じゃないわよ！でもね、あんなギリギリに言われたら…」

「で、殿下。これはどういうことでしょう？」

「今から彼女とパーティーをしようと思ってね。もちろん二人きりの！」

困惑に困惑を重ねたトランプの兵士にウインクでもかましそうな魅惑的な笑顔を向けると、あたしの手を掴み、さっさと部屋の中に入っていく。

「ちょっと、どういうこと？」

『あはは。この部屋には今はボクとチカしかいないよ。他の皆はそれぞれの部屋で休んでいるし、このフロアにいるのはエレベーター前の彼だけ。だから、緊張しなくていい』

「ちょっと待って！」

でもアルに待ったがかけられないのはあたしが一番よく知っている。

あっという間に豪華なリビングルームの中心に連れてこられた呆然とするしかない。

えっと、その、これは本当にパーティが始まる訳？

あのピエロの冗談じゃなくてホントのホントに？

ポカンと口を開けたままアルを見つめると、眩い笑顔が返ってきた。

一歩踏み出し、アルがあたしの頬に触れる。

そして深い煌めきを浮かべた瞳でじつとあたしに向けられた。

『さあ、何をして遊ぼうか？』

秘密のティーパーティー（後書き）

今日は一気に3話も更新しちゃいました。というわけで、しばらく更新をお休みします。

どういうわけ？って感じですね。

実は明日から韓国にバカンスに行ってきます！！

なので、ストックを全て吐き出して行ってきますので、帰国してから書きためて更新したいと思います。

だからちよつとブランクがあきます。

次更新する時に忘れられてないように頑張りますので、これからもよろしく願います。

日VSシーガチンコバトル勃発！？（前書き）

お久しぶりです。毎日ちみちみと思っていたのに……ついでに暑い間に終わらそうとも……気がつけば9月が終わろうとして肌寒くなってきました。こんなぐだぐだな作者ですが、気が向いた時に覗いてやって下さい！

日VSシーガチンコバトル勃発!?

「くそ〜絶対に負けないからね!」

ドでかいテレビ画面の前に陣取り、白く長細いコントローラーを握りしめる。

画面の中のキノコが持つランプが消えた瞬間、白熱したバトルが始まった。

画面を疾走する小さな車と一緒にあって自分の体も激しく左右に揺れる。

そんな躍起になって車を走らすあたしの横で冷静なアルがポツリと呟いた。

『チカの運転する車は絶対に乗りたくないな〜』

「今、絶対に悪口言ったでしょ!」

『何のことかな?』

涼しい顔で白いコントローラーを握る横顔を睨みつけてやる。けれど、事件は画面の中で起こっていた。

「くそ〜とぼけてっ。……て、ああ!バナナの皮って卑怯よ!」

目の前であたしの操作する偉大なクツパ様が哀れにもクルクルと目を回している。

「ああ〜!あたしのクツパ〜!」

真夜中のスイートルームにあたしの声がこだました。

何がどうなってるのかった？

話せば長くなるんだけど、簡単に言うとは何故だか今、アルと一緒にマリオカートで熱戦を繰り広げている最中だったりします。

うーん……訳分かんない状況だね。

なんでマリオカート？パーティーじゃなかったの？

そう突っ込みたくなる気持ちはすっごく分かる！

あたしもアルがイキイキした目でWiiを出してきた時はそう突っ込んだもん。

でもここではアルがルールなの。

パーティーなんてちよつと心惹かれる言葉で誘い出しておいて。

その前に王子様の主催するパーティーなのに、コンビニのお菓子って辺りでおかしいと気付くべきだったんだけどね……テンパってそのことに気付いた時にはマリオカートが始まっていた。

まあ、マリオカートが始まるまでも色々あったんだよ。

トランプの兵隊から連絡を受けたアレクサンドラさんが乱入してきてり、ダリルさんがちゃちゃを入れて大騒ぎになったり……。

でも結局最後は、アルの完璧スマイルで「これも異文化交流の一環」なんて言われると皆は何も言えなくなっちゃうみたい。

アレクサンドラさんはキイーってヒステリックな声を上げて、部屋を飛び出しちゃうし、慌ててコリンちゃんとペスが追いかけていて、そこでまたペスがアレクサンドラさんの怒りを買ってヒステリーが再発しちゃうし……。

夜でも一切手抜きなしなシリーエント達のテンションの高さに、奥ゆかしい日本人のあたしは呆然とするほかない。

台風一過、残されたあたしは残り風にもうへ口へ口。

ただ茫然とアレクサンドラさん達が去っていたドアを見つめるしかできない。

の……アルときたら周りには一切目もくれず、爽やかな笑顔と共にコントローラーを手渡してくるんだもん。

『さあ、邪魔もいなくなつたし、始めはこれでしょ！』

「いやいや！ねえ、アレクサンドラさんすつごく怒っていたよ！いいの？あれ無視しちゃうの？」

アルの袖の裾を掴んで、訴えかけてみる。

あたしだって何にだって噛みついたりほしくないのよ。

理不尽なことには思わず対抗しちゃうけど、今のこの状況を考えたら、アレクサンドラさんの方が正論よね。

王子様が一般女子と二人きりでパーティーとか普通に考えたらダメでしょう！

い、一応年若い男女がさ、夜に二人つきりなんて、他の人が聞いたらなんて思うか！

王子様のスキヤンダルにどれだけ注目が集まっていると思ってるの？

あたしだって他人事だったら、あまあい展開を想像しちゃうわよ？

ってまあ、あたしとアルのコラボじゃそうならないのは重々分かっているんだけどね……。

アルは時々小悪魔みたいにあたしを惑わせるけど、あれはただの冗談だもん。

なんて彼の身の上を考えて悶々としてると逆にその手をぎゅっとアルに掴まれてしまった。

『チ力……』

ずっと寄せられる整いすぎの顔に思わず後ろに引いてしまう。

「な、なによ！い、いきなり！」

『もしかして、マリオカートで僕に勝つ自信がないの？』

ん？

何故だかカチンときちゃったぞ！

何言ってるか分かんないけど、でも絶対に今あたしのことバカにしてる。

手を握ったまま、ニマニマとこちらを見ている蒼の瞳をきつと睨み上げる。

「ちょっと、あたしがマリオカートで負けるとでも思ってるの？」

『口じゃなんとも言えるよ？』

「む〜！なんかむかつく！！」

アルは意地悪に目を輝かせながら、あたしの手にもコントローラーを握らせてきた。

勝負は口じゃなくて、行動で示せてこと？

これはやるっきゃないでしょう！

もう正論なんて考えてる場合じゃない。

ここで勝負を受けなきゃ、日本人の誇りに傷がつくってもんでしよっ？

NINTENDOは日本が本拠地だぞ！

そして真夜中のマリオカートは幕を開けた。

日VSシーガチンコバトル勃発！？（後書き）

マリオカート……昔はそれなりに遊んだんデスけど。大人になるとなかなかやる機会がないデスよね。でも皆で集まって盛り上がるにはもってこいなハズ！そんな気持ちで生温かく読んで下されば幸いです。

千代に…万葉に…（前書き）

おはようございます！

昨日に引き続きアップしましたので、お時間の余裕がある時にでも読んで下さいな。

千代に…万葉に…

かの国にもWi-iはあるのね。

あまり関わりがなかったとはいえ、日本に生まれた子どもの誰もが一度は一緒に冒険に出たり、遊んだりする髭のおじさんとはあたしの方が馴染みはずなのに。

アルはさらっとWi-iの使い方をマスターするときゅんぎゅんスピードを上げて、あたしを抜きにかかった。

この王子様はなかなかどうしてゲームマスターのようだ。

あたしのクツパが『YOU LOSE』に押しつぶされている。

ああ、可哀想に。クツパと一緒にあたしも沈んだ。

『それよりもなんで千佳はそのカメなの？お姫様にしたら？』

あたしのささくれ立った心などお構いなしに、アルが不思議そうに画面を指さしている。

何故クツパを選んだのかと聞いているのだろうか。

まったく……なんで、英語で話しかけてくるのよ？

言ってることが訳分からなくて、普段よりも非常に疲れるというか……。

まだアルは日本語が理解できるから、まだコミュニケーションが一応成り立ってるんだらうな。

二人とも言ってることが分からなかったら絶望的だもんね。

でもさ、意地悪だと思わない？なんで二人きりなのに日本語で話してくれない訳？

あたし、実践英会話はもうお腹いっぱいなのに……。

アルが日本語で話すには、何か一定の条件でもあるのかな？

アルの意図が読めなくて、本当は理由を聞きたいのに、まだ何も

言えずにいる。

二人で騒いでる瞬間は、言語の違いなんて気にならないくらい楽しいのに。

ふとした瞬間、昼間のヤマネ君の言葉が蘇る。

あたしを利用するためにアルバイトにしたって言葉は真実なのかな？

利用できないなら、お払い箱って本当にそう思っているの？

なら、なんであたしを今この場に呼んだりしたの？

聞きたいのに聞けない。

こんなもどかしい気持ちは初めて……。

もう何度目になるかも分からないコースを選びをしながら、あたしはその秀麗な横顔を見つめた。

今は誰もが憧れる理想の王子様でも、人を惑わすような小悪魔でもない。

屈託ない笑いを零す年相応の男の子。

『チカ、次はピーチ姫にしなよ。そのごつい亀はなんだか似合いますぎて怖いよ。画面を睨みつけてる君、亀と同じ顔してるよ』

画面を指さしながら、アルは我慢できないとばかりに吹き出した。

「ちょ、ちょっと何がそんなにおかしいのよ！」

『だって君、似合いすぎなんだもん』

この口調は絶対に馬鹿にしてる。

聞きとれなくてもニュアンスで分かっちゃうんだから、あたしってすごいと思う。

学校のテストもニュアンスで点が取れる仕組みにしてくれたらしいのに……。

「あ、あたしはこれでいいの!」

いっつと歯を剥いてアルを睨みつけてやった。

あたしが好きなんだから何を選んでもいいじゃん。自分だってキノピオのくせにさ。

一応王子なんだから、マリオかルイージにしときなさいよ。それよりも同じ王族としてピーチ姫?

あたしがアルの忠告を無視して、クツパを選ぶとアルは大きなジエスチャーで肩を竦めた。

何でだろう?そのジエスチャー、すっごくイラってくるよ。

「なんでクツパかって?カメは万年って言うでしょ?」

ふてくされながら、次のステージを選んでいるあたしにアルは首を傾げている。

そりゃ外人さんには分かんないよね。カメが万年とか。

でも一応丁寧に説明してあげるあたしって真面目だな。

「日本では鶴は千年、亀は万年って言うって長生きと幸せの象徴なの。漢字で『ちか』の『ち』は千年の『せん』って書くの。万は千の上の単位ね。なんとなく鶴の千年と亀の万年って仲良さみたいに見える。あたしはマリオカートをするときは絶対にクツパ。ちなみに我が家ではマリオは一佳、ルイージは十佳、ピーチ姫は零佳で、百佳がキノピオって決まってるの」

まあ最近はあまりやってないけどね。

でもそんな訳でマリオカートにおいては、アルとは年季が違うの

だ。

負けてなるものか。あたしはハンドル型したコントローラーをも
う一度握りしめた。

「ワンモア？」

からかうように囁くアルになんて目もくれず、あたしは宣言した。

「イエス！オフコース！」

深夜0時過ぎ、もう何回目になるのかも分からないスタートの音
にあたしは車を発進させた。

禁断の果実（前書き）

今日もちみちみ更新です。もう何十話も書いてるのに、現在ちいとアルは知り合ってまだ2日目でもまだ他人の距離感というへタレな物語展開となっております。

これからはもっとラブ〜い感じになればいいな〜（願望）と思っておりますので、あきずにお付き合い下さい!!!

禁断の果実

真夜中の2人きりのパーティーというとなんとも甘い響きだけど、やっていることは夜中の修学旅行。

流石にまくら投げやふとんの中でのコイバナなんてできないけどね。

トランプにボードゲーム、DVD鑑賞。

遊ぶものは尽きず、時間はあっという間に過ぎていく。

英語と日本語のやり取りでも、こんなに盛り上がるんだからすごい。

昼間からあたしの心を占めるアルに対する不信感はまるで元から影も形もなかったかのよう。

だってアルは本当に楽しそうに笑うんだもん。

本当に楽しくて仕方ないって顔をあたしに向けてくれる。

いつもと違う、裏のないまっさらな笑顔に他の意図があるなんて思えないよ。

でも、時々心に灰汁のような不確かな心の濁りが浮かび上がる。

あの笑顔の裏にどんな思いを隠しているの？

本当に、あたし自身を必要としてくれているの？

そう声に出して聞けたらいいのに。

でも、喉まで出かかった声は口を出た途端に別の言葉になってしまっ……。

あたしは一人やきもきするしかない。

「ねえ、アル？なんであの時、あなたはあたしをアルバイトに選んだの？」

なんて言えたら、裏のない笑顔で答えてくれるかな？あなたの本

音を……。

ペットボトルに口をつけながら、盗み見るようにアルを見つめた。アルは床に広げたお菓子の海の中から、アポロチョコを一つ摘んで口に持っていこうとしている。

ホテルの豪華な食事は食べなくせに、お菓子は食べるのね。そんなんじゃ大きくなれないぞ〜って十分大きいか。なんて思いながら見惚れていたら、アルと目があった。

『ほしいの?』

「べ、別に物欲しそうに見てた訳じゃないわよ！王子様でも市販のチョコ食べるんだって思っただけで！」

誤魔化すように、あたしは自分の目の前にあったお菓子を口に押し込んだ。

甘いチョコレートがじんわりと口の中でとろけていく。

「あ〜おいしいな〜」

つて棒読みすぎかな？

『ふふ………』

口の端を意味ありげに上げて吸い込まれそうなほど澄んだ蒼の瞳を細めたのは、理想の王子様じゃなくていつかの小悪魔。

蠱惑的な微笑みを湛えた顔がゆっくりと近寄って来る。

お菓子の海を四つん這いの体勢のまま渡ってくる野獣にロックオ

ンされたあたしはまるで逃げ場を失った草食動物。

ギラギラと燃え上がる情熱の瞳から目を離せない。

アルが体を屈めた所為でボタンが3つも開けられたシャツの胸元が余計に開いて、すっと筋の通った鎖骨や引きしまった胸筋が見える。

緩められたネクタイがだらしなく、空を揺れた。

うわゝ絶対に反則だよ。

普段はきつちりしているのに、なんで不意にそういう、らしくない姿を見せつけるのかな？

そのギャップに心臓が体から飛び出しちゃいそうだよゝ！

「な、なによ？」

なんて、思わずつつけんどんな態度を取ってしまった。

でも仕方ないじゃない。

からかわれているってのは十二分も承知してるの！でもさ、あたしはアルと違ってこういう経験値、0なんだもん。

こつやって突き放すことでしか自分を守れない。

あたしをじらすようにゆつくりと四つん這いの姿勢であたしの方へとやってくるアルに思わず、身を引いてしまう。

でも、アルはそんなことおかまいなし。

がっちり守りを固めているあたしの心にさらつと侵入してくる。

逃げ腰のあたしに覆いかぶさるようにアルが体を寄せてきた。

逃げ遅れた太ももをネクタイがくすぐる様に触れる。

『女の子って、本当に甘いものが好きだね』

ゆつくりと伸ばされた手があたしの口元に触れる。

「だから、なに？」

声が震えて、そう言い返すのが精いっぱい。
卑怯だわ。さっきまで普通だったのに。

マリオカートをした時は、そんな艶っぽい表情まったくしなかったのに……。

急にこんな風に迫られたら、冗談も返せないよ。

そつとあたしの口の端に付いたチョコレートを拭くと、アルは自分の口に持っていく。

ぺろりと舌で指を舐め、まるで誘うような官能的な瞳をあたしに向けてくる。

『甘い』

その瞬間、あたしの体の芯がびりびりと痺れた。

頬が上気して、瞳が潤んでくる。

もう自分では歯止めが利かない。つんけんハリネズミのように身を守ることも敵わない。

『もつと、食べていいよ?』

側にあった、赤くコーティングされたチョコレートを摘みあげるとアルはあたしの口元に持ってきた。

甘く濃厚な香りが心をくすぐる。

どうしよう。あたしは目の前に差し出された誘惑の赤い果実を見つめ、ごくりと唾を飲んだ。

心臓の音がこれ以上ない警鐘を鳴らす。

危険だよって。きつとこれを口に含んだら、きつともう元には戻れなくなるよって。

これは致死量の劇薬。

そう、口に含んだらもう逃げられない。

胸に宿る小さな灯を焰に変えてしまふ。

「あ……アル……」

抵抗するように体を引いたけど、でもそれ以上の距離をアルはさらりとつめてしまふ。

そして、これ以上はもう逃げられない。

『はい、あくん？』

伸ばされた長い指に掴まれた赤い果実に戸惑うようにアルの方へ視線を向けた。

でも彼はその極上の笑みをそのままにあたしを見つめるばかり。

ねえ、その果実を食べたらあたしはどのようなの？

あなたは知っていてあたしにその実をかじる様に仕向けて来るの？

『チカ、どうぞ？早くしないと溶けちゃうよ？』

耳朶を甘くくすぐる囁き声が、まるであたしに墮ちる所まで墮ちればいと誘いかける。

唇に触れた果実の甘酸っぱく、わずかに冷たい感触にあたしの本能が口を開いた。

ゆつくりと唇でその甘くて、蕩けそうな果実を受け取る。

思わず口に含んでしまった指先をアルはそつと抜くと、摘まんだ指をさも当たり前のように舐める。

『甘いね。欠片だけでも甘いんだから、全て食べたチカはもつと甘いんだろっね』

ドクンドクンと弾む心臓と共に、甘美な毒が蕩けて体中に広がっ

ていく。

ああ、悪い毒に酔ってしまいそう。

痛いほどに甘甘しい極上の毒薬に心が蝕まれる。

もう後戻りはできない。致死量の毒に苛まれて、あたしは深い深い眠りにつくの。

そして、彼の甘くて冷たい夢を永遠に見続ける。

彼が起こしてくれる日を夢見て。

そんな日は永遠に来ないと知りながら……。

もしも時間が止まるなら……（前書き）

ちよつと甘々な展開になってきました！……なつてきてますよね？
微妙な距離感を残しつつラブい感じるのは大変むずかしゅうござ
います。

もしも時間が止まるなら……

『どう？おいしい？』

まるであたしの心を全てお見通しっていう、満足げな顔が腹立たしい。

なんであたしを追い詰めるの？

自分じゃどうしようもない感情があたしの手を離れて、どんどん知らないところに行ってしまう。

熱のこもった眼差しがあたしをじっと見つめる。

口元から吐息のような笑みをこぼすとゆっくりとあたしの口元に手を伸ばす。

『ねえ、僕にもくれないかな？』

触れるか触れないかの微妙な距離で、ずっと筋の通った長い指があたしの唇を撫でる。

ぞくつと体の奥が痺れる。

何かを試すような瞳に映る自分がまるで自分じゃないみたい。

やだ……こんな感覚初めてで、どうしていいか分からないよ。

『チカ……』

吐息が耳元を濡らした。

これも毒の所為なの？

あの禁断の果実を食べてしまったから、こんなにもアルの行動に反応しちゃうのかな？

そうだよ！絶対にそう。

どうしていいか分からなくて早く解放されたいのに、心のどこか

でもっと触れてほしいと思ってしまっなんて。

きつとあたし、毒の魅せる幻想に酔ってしまってるんだ。

このまま酔い続ければ、素敵な夢が見れるのかな？でも……。

「もう、何言ってるか分かんないだつてば！」

たまらず立ち上がって、無我夢中で逃走を図ってしまった。

も〜ダメ！も〜ムリ！もう限界です！！

『チカ？』

後ろからかけられる甘い響きに後ろ髪が引かれるけど、振りかえ
っている余裕なんてない！

振り向いたらきつとアルはとっておきの時にしか見せない小悪魔
スマイルであたしのことをもつと翻弄しようとするだもん。

でもこれ以上は本当にヤバいの。

あのまま見つめ合ってたら、本音がポロリと顔を出しちゃうかも
……。

行き場を失ったあたしは思わずバルコニーに足を向けた。

昼間あんなことがあったのに、同じような場所に進んで出るあた
しって馬鹿なのかな？

でも、他に行く場所が思いつかなくて、それに真っ赤になった自
分の顔をなんとか誤魔化したくて、逃げ込むようにバルコニーに出
た。

明るい部屋の中にいるよりもまだ心の色を読まれずに済む。そん
な気がした。

室内のクーラーの涼しさから一転。
纏わりつくような夜気はまだ熱を宿している。
でも頬を撫でる風は熱い体には丁度いい冷たさだった。

「なんで、外？」

すぐ後ろからかけられた声に思わずビクリと肩を竦ませた。

「べ、別に……それよりも何で日本語？」

アルの視線を避けるようにバルコニーの手すりに手をやる。
目を向けた先は光り輝くネオンの海。

ぼんやりと滲む下界の光に照らされた白いバルコニーはまるでお
とぎ話に出てくるお城のよう。

その中を颯爽と歩く理想の王子様の為にあるようなシチュエーシ
ョンだ。

地上の星に照らされた輝く淡い金髪をかきあげ、ゆったりと歩い
てくるアルはまるでさっきのことなどなかったかのように冷静な表
情だ。

そういうこともなんか腹立つな。

さっきまでのことは全て冗談だって言われてるみたいで……。

一人振り回されて、なのに彼の言葉の僅か一握りでも真実ならば
いいのに……と願わずにはいられない自分が浅はかだと思わされて
しまう。

「別に……気分かな？それにこっちの方が都合がいいし」

そう言ってアルはあたしの横で手すりに身を預ける。

優しい風がアルの柔らかな金髪を揺らしていく。
ネオンの光に照らされた髪がまるで光の糸のように眩しい。

「別にとって…いつもそれじゃない。訳分かんない」

ブンっとそっぽを向いてみた。

でもアルはそんなあたしをおかしそうに見つめて、目を細めるだけ。

「千佳もさつき言っただろ？それに英語じゃコミュニケーション取れないからね。千佳、勘はいいけどね〜それだけじゃ会話にならないし……」「それにここなら盗聴器もないだろうし、いくらでも自由に話せる」「」

「ホントに意味が分かんない！だから、何で……」

納得いかなくて叫ぼうとした瞬間、アルに手を掴まれて引き寄せられた。

バランスを崩して、アルの体に抱きつくように倒れ込む。

頬に触れたのは情熱を宿したアルの胸。

甘くて、色気立つ香りがあたしの心に更に火を付ける。

慌てて体勢を立て直して、距離を取ろうとした。けど、アルはあたしの腰に手を回して離してくれない。

「ちょ、ちょっと!」

「しっ！夜の静寂を破るのは無粋だろ？」

耳元に囁かれる声は熱を帯びて、あたしの心に甘く響く。

「う〜!!」

そんな風に迫られたらあたしは何も言い返せないって知っててや
ってるんだわ。

じゃなきゃ、絶対にこんなタイミングでこんなことしないはず!

「な、なんで〜?」

泣きそうな目で側にある蒼い瞳を睨んでみた。

けれど余裕がなさすぎて、顔が思ったようにならない。

そんなあたしをアルは困ったような、笑うのを我慢しているよう
な、そんな複雑な微笑で見つめ返してくる。

「何故と聞かれても答えられないんだ。……今は。僕には秘密が
多すぎて……」

オデット姫にはなれなくて……（前書き）

こんばんは。

だんだん秋めいてきましたね！夏はあんなにも思わせぶりにやってくるのに、秋はさらっと秋色に空を変えますね。

秋もステキですが、夏が恋しいと思われたらいつでもこちらへ！
とりあえず当分常夏気分な作者がお待ちしております！！

オデット姫にはなれなくて……

何を言ってるの？これは英語なのかな？また実践英会話に戻ったの？

余裕のない顔のままアルを見つめていると、不意に腰を抱く力が強くなった。

もっと体を寄せるようにアルの頭があたしの首元に降りてくる。

「ア、アル？」

ぎよつとなつて体を引こうとしても、がっちりと腰に巻きつく優しい拘束からは逃れられない。

熱い吐息が首筋を舐める。

「その秘密を守るために、出会ったばかりの君を利用している。本当は君が思うような人間じゃない。打算的で、非情な合理主義者だ。自分でも嫌になるくらいだね……。でも何故だろう？君を駒の一つに数えながら、それでも他の駒と同じように切り捨てることが出来ない」

これはもしかしてシーリエント語かな？

何故だろう？アルがこの異国の言葉を使うと、いつも切ない気分になせられる。

英語とそんなに変わらないはずのこの国の言葉。何度聞いても繊細で柔らかな発音は繭で包まれるように心地よい。

もっと聞きたいと思うと同時に何でだろう？こんなにも泣きそうになるのは。

それはきつとアルの声色の所為なんだろうな。

きつと彼は自国の言葉を使う時だけ、素の自分に戻る。

建前や冗談ばかりの日本語や英語とは違う、飾りのない言葉。

だからなんて返せばいいのかわからなくなってしまう。

ねえなんて言っているの？あたしには聞かせられない、あなたの本音は何を望んでいるの？

「いつかは手放さないといけないと知りながら、それでももつと君が欲しくなる。馬鹿だな……知れば知るほど辛いと知っているのに」

絞り出すように吐き出された言葉がまるで泣いているように夜空に消えていった。

夜を彩る地上の星々が悲しく瞬く。

「あ、あの……」

すぐ側にある柔らかな髪を撫でてみた。

ゆっくりとアルが顔を上げる。

いつも自信に溢れている蒼の瞳がまるで絶えるようにあたしを見つめてきて、出かかった言葉を飲み込んでしまった。

「えっと、その、元気出して……よ。旅行の疲れでも出た？」

これでもかと明るい声をあげてみたんだけど、ちょっと場違いだった？

「あ、えっと……アルは自由気ままに見えるけど、でも色々あるんだね。王子様ってやっぱり大変そうだもんね」

アルは何も言わない。

ただじつとあたしを見つめてくる蒼い情熱。なんて魅惑的な色合い。

このまま吸い込まれてしまいそうになる。

でも黙ったままでいる空気に耐えられなくて、あたしは一人話続けた。

「だって一般ピープルのあたしでさえ悩みばかりなんだもん。きつとアルはもつといっぱい悩みを感じてるんだろうな。だ、だからあたしでよかつたら話、聞くよ？や、別に本音をさらけ出せなんて言っていないからね。言いたくないことは言わなくていい。なんでもいいのよ。グチでも最近あった〇〇な話でも」

ちよ、ちよつとアルさん。

そろそろ何か話してくれないとあたしのネタも限界なんですけど！

「ほら！心にもキャパがあるんだから、溢れそうな時は誰かに話を聞いてもらって分け合わないと！あたしはいつも嫌なことあったら、これでもかかってほど弟たちに話聞いてもらうもん。だからよくウザいって言われる」

それよりも早く腰に回した手を離してくれないかな？

この至近距離でじつと見つめられるのはホントに無理だよ。

今だって、心臓が悲鳴を上げてるのを聞こえないふりしてるのに。

「ひどいよネ、お姉さまに向かってウザいって！え、つと……そ、そつういえばアルは兄弟、いるの？」

思いついた言葉を口にしたただけなのに、アルはひどく驚いたように目を見開いた。

「アル？」

するりとあたしの腰から離れる力強い手の温もりに、ホツとしつ

つも少し名残り惜しさを感じてしまっなんて、あたしも現金だな。

抱き締められたままじゃ身が持たないくせに、離れてしまっのが寂しいなんて。

「兄が一人……いる」

一瞬強く吹いた夜風に、呟くような声が消えていく。

「え？」

風にあおられたスカートを慌てて押さえてる間に、アルはあたしから離れて手すりに身を預けた。

何かを我慢するように寄せられた眉の下の瞳が痛いほどに悲しみに揺れている。

どうしたの？

さっきまであんなに年相応の男の子の顔で大笑いしてマリオカートしてたじゃない。

その顔が今はまるで近寄ることを厭うように背けられて、あたしは何も言えなくなった。

こんな顔をあたしは前にも見たことがある。

東京タワーで見せた遠くを見つめる瞳。

その瞳が見つめる先にあるのは何なんだろう？

ねえ、アル。あなたはその完璧な顔の下にいくつの顔を隠してるの？

手を伸ばして励ますように肩を叩こうと思ったのに、伸ばしかけた手がアルの肩に触れようか躊躇して、不自然な場所で固まってしまっ。

「あの……」

思わずみきり発車した言葉の続きが思いつかず、あたしはただ視線をさまよわせる。

その声に振りかえったアルは、悲しい蒼の瞳を優しく和ませる。伸ばした手をぎゅっと握ると、ネオンの海に背を向けた。

「ごめんね。ちょっと考え事してた」

手すりにもたれ掛ったあたしとアルの間にある微妙な距離間。

その間にあるのは繋がれたままの手。

結ばれた部分だけが痛いほど熱い。

仲良しの秘密レシピ（前書き）

今日もなんとなく時間を持って余し気味な方、暇つぶしにどうぞ）

^-^-^-一日

お茶はお出しできませんが、代わりに白馬っぽい王子で接待とさせていただきます。

仲良しの秘密レシピ

「僕には兄が一人、いるんだ」

「そ、そうなんだ。いくつ上？優しい？」

「5つ上だ。生まれながらに人の上に立つ気質をお持ちで、思慮深く穏やかな人だよ。いつも僕のことを気にしてくれて、僕がどんなイタズラをしてもいつも笑って宥める。誰からも愛される人だ。もちろん僕も敬愛してるよ」

そう言ったアルの瞳は本当に穏やかで、心からお兄さんを尊敬してるんだろうなって思った。

見かけによらずお兄ちゃんなんだな。

そんな生き生きと自分のお兄ちゃんを自慢する子、この歳でなかないもん。

それにしてもちょっと意外だな。アルほど完璧な人が盲目的にお兄さんを尊敬してるなんて。

きつと本当に素敵な人なんだろうな。

なんか小さな子がお兄ちゃんを自慢してるみたいで、ちょっと可愛い。

「すごい人なんだね。自慢のお兄さんなんだ」

「うん。兄以上に国王になれる人はいないと思っている」

うわ〜なんて素直な言葉と輝く笑顔。

アルのお兄さんに見せてあげたいくらいだよ。

ウチなんて文句ばっかで、間違っても尊敬なんてされたことはな

い。

まあ、零佳はあたしに対して変な憧れを持つてるみたいなんだけどね。

まるで戦隊もののヒーローでも見てるかのような眼差しを時々感じるし。

しかも絶対に重ねているのはピンク役のヒロインじゃなくて、リーダーのレッドだと思う。

そして二言目には「ちいちゃんがごちようないのへいわをまもってるんだもんね」つとくる。

一体誰の差し金なのか？だいたい守ってる範囲がご町内って狭すぎじゃない？

「仲いいんだね。いいな〜ウチなんて喧嘩ばかりだもん」

あたしは下四人の顔を思い浮かべながら、切実にそう思った。

うちもアルの兄弟に負けず仲はいいと思う。

でもさ、ただ心から好きって感じじゃなくて、可愛さあまって憎さ100万倍って感じ。

だから何も繕うことなく、心からお兄さんを尊敬しているアルが羨ましいと思うってしまう。

「きつと仲の良さなら千佳の兄弟の方が数百倍上だと思っよ？」

「いやいや、そんな謙遜しちゃって……」

ん？思わずあいの手を入れちゃったけど、数百倍っていいすぎじゃない？

思わずぎょつとした顔をアルに向けると、不思議そうに首を傾げられた。

「日本人じゃないんだから、シーリエント人は謙遜なんてしないよ」

「さ、さようですか……」

「だからこれは本当。僕から言わせれば千佳の兄弟の方がずっと羨ましい」

「なんで……」

それ以上は何も言えない。

アルの瞳が何も聞いてくれるなとばかりに悲しげに細まる。

それはきつと、一般人には分からない王子様特有の家庭環境にあるのかな？

常に人の目にさらされる立場だから、心から言いたいことも言えないのかもしれない。

それはきつと遠くから見れば理想の関係。でもいつまでも心から分かりあえない関係なんじゃないかな？

遠くから見る理想の関係よりも、反発したり言いあいしながら育てる泥臭い関係の方が、あたしはずつと好きだな。

それは王家だとか、庶民だとか関係なくて……。

アルが我が家を羨ましいと思うなら、もっとお兄さんと近付いていいと思うんだ。

だから……。

「……喧嘩してみたらどうかかな？」

「へ？」

思わず口をついて出た言葉にアルが怪訝な顔をする。

「うちの家庭が羨ましいなんて、せっかく恵まれた環境にいるアルが思っちゃダメだよ。なんでもいいの。お兄さんの方がケーキが大きいとか、僕の方が先にお風呂に入るつもりだったのにとか……ちっちゃいことでもいいから口喧嘩すればいいじゃない。そんな些細なことなのに、どんどん喧嘩の規模が大きくなって行って、最後には何で喧嘩してたのかも分からなくなって、結局お互い笑いあったりするもんだよ。喧嘩の中で発見することもあるしね！」

思いついたら口が止まらない。

王子様になんて無謀な提案をしてるんだって感じだけど、あたしは本気だった。

確かに喧嘩の理由はしょぼい。しょぼいけど、我が家の喧嘩の大半はこんなもんなんだもん。

目を輝かせて訴えかけるあたしにアルはまるで不審なものを見つめるかのように瞳を大きくした。

「口喧嘩されないのは仲の良い証拠ですと言われることはあっても、こんなアドバイスされたことは初めてだ」

「ね！レッツチャレンジ！」

名案とばかりに目を輝かせてアルに訴えかけるあたしにアルはポカンと口を開けている。

そうか、そんなに目から鱗なアドバイスだったのか。

「千佳……」

「ん！皆まで言わなくても分かってる。始めから大きな喧嘩なんて

しなくてもいいから、お互いの意見を言える環境を作っていけばいいのよ」

兄弟喧嘩上級者としての余裕の笑みでアルを制して、あたしはふっとニヒルな笑みを浮かべてみた。

けど……。

「いつもそんなどうでもいいことで喧嘩するの？それはちょっと、我慢すべきじゃない？」

あきれ顔で返ってきた言葉があたしを突き刺す。

「もう恥を忍んでアドバイスしたのに、そんなこと言わないでよ。自分でもしょぼいって分かってるわよ。でも許せないんだもん！せっかくあたしがお風呂上りに食べようと思ってたプリンを食べられたり、バイトから帰ってゆっくりとお風呂に入ろうと思ってるのに家でのんびりしてた一佳が入ろうとしてたら、怒っても当然でしょー！」

むきになって言い返すと、アルは我慢できないと噴きだした。ちよっと笑うなんてもんじゃない。お腹をかかえて大爆笑だ。そんな笑い方、王子様がしてもいいの？

「あはは！千佳、君は本当に最高！」

ドキドキ 確変タイム（前書き）

確変ってなんだ？……純粹なお嬢様方はそう思われるコトと思います。それでいいんです。関わるコトなんてないんだから。でも性格の悪い作者がちよいと補足を。

確変とは確率変動の略でパチンコ用語なのです。

こう書くと、おいおい、あんたパチンコすんの？なんて思われそうですが、パチンコ店に入ったコトはあっても遊戯はしたことありません！なんの自慢だっただけです。

なのでこれは仕事場のおっちゃんらの話を盗み聞いた結果。確変とは当たる確率が上がる機能らしく、確変モードに入るとおっちゃんらのテンションも上がり、イケイケドンドンな訳なのです。

さてはて、大当たりな展開になるのでしょうか？

……それにしても、なんて長い前書きだ。

ドキドキ 確変タイム

「ちょ、馬鹿にしてるでしょう!」

「いやいや、心から君のことを尊敬してるよ」

「その言い方、ぜったいバカにしてる!」

感情に任せて目の前にあるネクタイを掴んで、ぶんぶんと振りまわしてやった。

「だけど、アルのニヤニヤ笑いはそんなものでは引っ込まない。ネオンを受けて輝く瞳が先を促すように煌めく。」

「君みたいに本音でぶつかってくる人は初めてなんだ。だから、君がどんな風に僕を驚かせてくれるのか楽しみで仕方ない。ねえ、僕を引き寄せて、この後はどうする? 昨日みたいに覚悟しなさいって台詞で決めてくれるの?」

ネクタイを引っ張られて身を屈めた状態のまま、アルがあたしの耳元で囁いてくる。

「ちよっと耳元は反則だつてば!」

「甘くくすぐる吐息があたしの体温を急激に上昇させる。」

「せっかく上気した頬をごまかせるまでになったのに、そんなに近寄られたらこの暗闇でも真っ赤なのがばれちゃうじゃない。」

「思わずネクタイを離して、後ずさりしてしまった。」

「でも意地悪な王子様がそんな弱気を許してくれない。」

「どうした?」

「ど、どうもしないもん」

ぶいっとそっぽを向いて逃げるようにその場にしゃがみこんだ。何処にいたって迫ってくるなら、せめてあの情熱的な視線からは逃れたい。

そう思つての咄嗟の行動だったんだけど……。

「それはいただけないな。千佳はそうやってすぐにはぐらかして僕を焦らす。時には甘えて見せてよ。そう。今ここには二人しかないんだ。何があつても二人だけの秘密だろ？」

しゃがんで体育座りで現実逃避中のあたしの背中から不穏な甘い声が出た。

え？焦らす？甘えてみせる？

何それ？そんなハイグレードな技術がこのあたしに備わつてると思ふの？

それよりもこの意地っ張りで不器用なあたしが、出会ったばかりの人に甘えるなんて出来ると思ふ？

普段から甘えられてばかりの生まれながらのお姉ちゃん気質なのよ！

いやいや！そんなことよりも何で甘えるなんてエロい展開になっちゃう訳？

普通に考えたらあり得ないでしょう！

体はつてからかうのも大概にしてよ！

心の中で叫び声を上げるけど、でも聞こえるのは弾けてしまいうなほどにバクバクする心臓だけ。

「ちくか？」

まるで幼い子をあやすみたいと言いが気に入らない。

でもそんなこと言い返せるほどの余裕が今のあたしにはなかった。

「どうか今だけはこのネオンの魅せる幻想に酔わせてほしいんだ。思い出だけでも君と共有していたい」

後ろから手を回されて肩を抱かれた。

柔らかな金髪があたしの頬を優しく撫でて、もっと頬が赤くなる。

「ちょ……アル…そんなこと言われても困るよー！！何よ！これ！お兄ちゃんじゃねあえないからってあたしで代用？やめてよ！そういうことはペスとしなさい！いい歳してどれだけ甘えっ子！」

優しい束縛を振り切りように、あたしはガバリとアルの方へと振り向いた。

「もう！こころ態度を変えないでよ！対応に困るじゃない！ホントに手がかかるわね！」

ビシッとアルの眉間を目がけて指を突きつけてやった。

膝についてあたしに覆いかぶさった野獣が、まるで魔法にでもかかったかのようにその動きを止めている。

しばしフリーズしたままのアルと腰が抜けて動けないあたしは見つめ合った。

けど、でもふいに身を起こしたアルが空を仰ぎ見て、笑い声を上げた。

ひとしきり笑い、あたしの方へと顔を戻したアルは蒼の瞳を爛々と輝かせていた。

さつきよりも数段に色つぱい表情を浮かべたアルが蠱惑的な瞳をあたしの方へと向けると、痺れるほど甘い声を出した。

「まさかこんなにも相手にされないなんてな。君の中での僕は弟レベルなのかな？こんなにも露骨に迫っているのにじゃれ合うなんて……。そんな態度でかわされると、もっと君を追いつめたくなくなるじゃないか。……それにペスって誰？男の名前なら聞きたくない」

いや、ペスっていうのはお宅の護衛官です！

なんて今さら言えないあたしは、豹変したアルの足元で呆然とするしかない。

ゆっくり髪をかきあげる仕草も、ふつと吐息を洩らす唇も全てがあたしを蝕むように官能的で、捕らわれた蝶のようにあたしは動くこともままならない。

ぼうつとただアルに見惚れるばかり。

精悍で艶やかな顔が、極上の笑みを浮かべた。

「僕が甘え方を教えてあげるよ」

みにくいアヒルのお姫さま（前書き）

どんなにみにくいアヒルの子だって、美しい白鳥になれる……らしいのですが、うちのアヒルちゃんはいつまでたってもアヒルのままのようです。

こんな子ですが、ちょろっとでも気にかけてくだされば嬉しいですよ。

みにくいアヒルのお姫さま

「アル……ちよっと……」

「千佳はもう少し甘え上手になってもいいと思うよ。いつだって誰かのことを気にして、自分が我慢することでその誰かを守るうとする。出会った時も僕のことを気にして、バイトを決めた時も兄弟のことを気にしてた。大学のバルコニーから落ちそうになった時も自分よりも場の雰囲気を考えて無理して笑って……。ねえ、自分の心に素直になってみなよ」

「そ、そんなのムリだよ……」

素直になつたら、あたしは何を口走るか分からないよ？

「アルとは適度な距離感でいたいのに……」。

そう。さっきバルコニーで手をつないだ時のような、つながっているのに一定距離開いているような間柄で。

「ダメ？仕方ないな……僕が教えてあげるよ」

な、なにを？っていうか、全力で御断りですよ！何も教えなくていいから早く離れて！

「男はね、女の子に甘えられたいと思うものなんだよ？それが気になる子なら特にね」

ぎゃー。

流し目でそんな心臓が止まりそうなこと言わないでよ。

「気になる」なんてその気にさせるような言葉で焦らさないでよ。さっき飲みこんだ痺れる毒の果実の所為で、もうどうしようもな

いほどにあたしの心はアルの色に染まっているのに……そんな言われたら、もう逃れられない。

あわあわと口をパクパクさせるあたしを落ち着かせるように、アルは一度優しく髪を撫でた。

知的な蒼の瞳が冷静さを失い熱っぽく輝いてあたしを逃さない。理想の白馬の王子様が獲物を捕えた野獣へと変わる。

「ねえ、さっきみたいに僕のネクタイを掴んでみなよ？君は得意だろ？僕を振りまわすのは」

そつとあたしに自分のネクタイを握らせると、アルはその手の上からぎゅつとあたしの手を握った。

「そう いい子だ。じゃあ昨日のように、ぐいつとネクタイを引いて僕を引き寄せてよ。そして、とっておきの声で命令するんだ。

……ねえ僕の耳元で囁いてよ？」

そのまま彼はゆっくりとあたしの耳元に顔を近付けて、囁くように魔法をかける。

「あたしにキスをしなさいって」

体中がアルの声に反応して、体の奥がビリビリと痺れる。

熱におかされて、アルを見つめる瞳が濡れている。

ゆっくりと体を起こしたアルはあたしの表情に満足げに口の端を上げると、握りしめた手を持ちかえた。

「ふふ……君に命令されたら僕はこう答えるしかできないな」

白く光って浮かびあがるバルコニーに柔らかな風が流れる。

眼下にはお姫様の宝箱から散らばったようなイミテーションジュエリーが輝く。

でもどれだけネオンの輝きが届いても、街の喧噪がまるで嘘のよう。

ここは星の瞬きさえも息をひそめ、しんと静まり返っている。ここにいるのはあたしとアルだけ。

聞こえるのは、あたしの心臓の音とアルの……熱い吐息。

じつとあたしを見つめたまま、アルはその手の甲に恭しく口を寄せた。

「仰せのままに。僕だけのお姫様」

ああもう、とろけそう。

何も考えられない頭にアルの言葉だけが、ぐるぐると駆け巡る。

僕だけのお姫様って……。そんな甘い言葉であたしを惑わせないで。あたしをその気にさせないでよ。

もうどうしたらいいのか分からないほどに体が火照って、この先の展開が想像できない。

こんな刺激的なシチュエーション、どんなお姫様も体験したことないよね？

「アル……」

「ねえ、キスのする場所に意味があるって知ってる？」

息も絶え絶えなあたしを満足げに見つめながら、野獣は熱っぽい蒼い瞳を意味ありげに輝かせる。

一切の手加減を許さない野獣がその薄いて形のよい唇をそつと上げてみせた。

「教えてあげるよ……まず手の甲へのキスは親愛のキス」

もう一度軽く手の甲に触れるとくるりと掌を返す。そして何の躊躇もなく、その上にも口を寄せる。

「掌へのキスは懇願のキス」

そのまま顔を上げると手首にもそつとキスを落とす。

「手首へのキスは欲望のキス」

熱い唇が触れる度にあたしは夢に酔ってしまふ。

このまま体が熱くなって溶けたらアルと一つになれるかな？
そんな幻想を本気で考えていた。

ゆつくりと顔に触れるその口付けが蕩けそうなほどに心地よい。

「額へのキスは祝福のキス。頬へのキスは友好のキス……」

ふいに言葉を切ったアルはゆつくりと体をあたしから離れた。

やっと解放されたのに、でも今あたしの心にあるのは名残惜しさだけ。

もっともつととキスをねだりたくて、でも、喉まで出かかった言葉を最後の理性が押しとどめる。

でも顔まで繕う余裕はあたしにはない。

続きをねだるようなあたしの顔に、アルは少し寂しげで、でも優しさに溢れた笑顔を浮かべた。

蠱惑的な瞳が細まり、薄い唇を赤い舌がぺロリと一周した。

「もっと知りたい？」

これ以上はもうダメだって頭では分かっている。

でも素直な心は裏腹にもっとアルを求めろ。

教えて……きっとあたしの瞳は無意識のうちに声にできない欲望を懇願する。

額、頬……そして次は……。

答えを確信して高鳴る鼓動が苦しくて、もうどうかしてしまえう。

ゆっくりと近づくアルの麗しい顔。

これ以上近付いたら本当に一番大切なところか触れあっちゃうよ。ダメ……もっと……でもやっぱり……。

見てられなくてぎゅっと目を瞑った瞬間、アルの顔とトンっと触れ合った。

心臓が弾け飛ぶかと思うぐらいビクリと体が震える。

恐る恐る薄目を開けた向こう。

あたしの鼻先に触れるのはアルの筋の通った驚鼻。

「っとまあ、こんな風に迫られたただけでおじけずく千佳にはまだ早いな？」

寸でのところにある形のよい唇が、意地悪くニマリと歪んだ。

からかわれてたの？

もう！なんでこんなことばかりする訳？

でもこれでよかったのよ。そうよ！アルは冗談でもあたしは冗談ではすまないんだもん。

気まぐれなキスに翻弄されて永遠にアルという夢を見続けなきゃいけない。

だから、これでよかつのよ。
そう言い聞かせる心の端っこがチリチリ痛い。

「してほしかった？」

「な、何言ってるのよ!」

「残念。これ以上は君の大切な人に怒られてしまうから。……唇へのキスは愛情のキスだ」

そんなじらすように唇だけを残さないで。

どうせなら全て奪ってほしいのに……。

全力で攻めてきたかと思えば、あっさりと引いていく。

こんなキケンな遊び、体が持たないよ。

「ばかつ……」

何でだろう。

泣きだしそうになって、あたしは顔を背けて顔を隠した。

でも優しい蒼の瞳からは逃れられない。

「でも最後にこれだけ覚えておいて。瞼へのキスは憧憬のキス……でもシーリエントでは再会を願う時に瞼にキスを送るんだ。またこの瞳に映れますようにって祈りを込めて」

背けた顔を両側から包まれて、ゆっくりとアルの方へと向けられる。

「これは途方もない願い。本来なら君の心を乱すことも許されない身だ。だけど、それでも君の心に僅かでも僕を刻みつけたい。な

んて僕は我がままなんだろうな。本当はこんなことしてる場合じゃないのに、気が付けば君に夢中だ。本当は今すぐにも全て奪ってしまいたい」「

まるで祈りの言葉のよう。

柔らかく耳朶に触れるその異国の言葉はまるで懺悔の歌のように、日本の夜空に消える。

「出会えただけでも奇跡。でもそれでも願わずにはられない。また君の瞳に映ることを」「

そつと瞳を閉じたアルの優美な顔がゆっくりと近付いて、あたしの右の脛に口が触れた。

さつきまでの瞬きのようなキスじゃない。

まるで願をかけているかのように、長いキス。

やめてよ。これ以上あたしの心に魔法をかけるのは。

ねえ、これ以上あたしを本気にさせないで。

でも心からそう思うのに体は別。本能の赴くままにもつとキスを求めようとする。

ゆっくりと唇があたしの顔から離れる。

そつと目を開けると、情熱の籠った瞳があたしを見下ろしていた。

その瞳に吸い込まれて、無意識に口が開いた。

「アル……もつと……」

そこまで言って、はたと自分を取り戻した。

ちよつと、あたしは何を言おうとしたの？

もつと、何？

ダメだよ！自分から求めちゃ、もう認めてるようなものじゃない。あたしはアルみたいに器用じゃないんだから、蠱惑的な瞳で迫り

ながら次の瞬間に何もなかったような顔はできないよ。

「あつ……なんでもない！」

熱い眼差しを避けるようにあたしは体を捻ると、そのまま立ち上がった。

逃げるようにバルコニーから今度はリビングに戻る。

どこに逃げようがアルは迫ってくるかもしれない。

でもきつとりビングではアルは英語しか話せないでしょう？

なら卑怯だけど、何を言っているか分からない振りしていられる方がまだマシだ。

みにくいアヒルのお姫さま（後書き）

キスの場所にはそれぞれ意味があるそうです。

でも各国、各地域によって異なるらしいのであまり参考にはなりません。

でも話のネタにちょっと使ってみてください。

でもシーリエントのジnkクスはあくまでも創作になりますのであしからず。

ねむり姫（前書き）

ディズニーアニメは何が好きですか？わたしは小さいころ、眠れる森の美女がお気に入りでした。そりゃもう、これでもかと思すぎた結果、魔女マレフィセントの手下の物まねができるほどに成長したのですが、誰も分かってくれません。

……セレクトがマイナーな感が否めない残念な作者ですが、今日もよろしく願います。

ねむり姫

リビングに飛び込んだあたしは激しい動悸と未だ広がりゆく甘い痺れを少しでも押さえようと周りを見渡した。

でも買ってきた飲み物で残っているのは甘いジュースばかり。

これ以上甘い思いはもうたくさんだ。

頭の中をすつきりさせないと、今の自分の状況さえ把握できない。なのにこんな時に限ってせっかく自分用に買ったお茶はアルがいたくお気に召して全部飲んでしまつて、もう空になっている。

仕方なく何かないかと辺りを見渡せば、少し離れたテーブルの上に水の入った水差しを発見した。

なんの躊躇もなく、その水差しの水を側のコップに注ぐ。

冷えた室内にあつただけあつて、注がれたコップを持つただけで水の冷たさが分かる。

よかつた。これなら、あたしの熱を冷ますことができる。

この水と一緒に全て飲み込んでしまおう。

『チカ？どうした？』

バルコニーから聞こえたアルの声は案の定英語で、少しだけあたしを心配しているような響きがした。

それがちよつとだけ嬉しくて、だから躊躇なく全てを飲み干せる気がした。

「ちよつと、喉が渴いて……」

背中越しにアルに一言断ると、あたしはグイッとコップの水をあおった。

すると口に全体に広がった水の冷たさが心地いいな。

これでちょっとは……。

『ダメ!』

やっと落ち着きを取り戻そうとしているのに、激しく肩を掴まれた。

そのまま後ろに振り向かされる。

「え……」

あまりに突然過ぎて、思わず握っていたコップを手放してしまった。

ゆっくりと水の雫を空に散らしながら、透明のコップが毛長の絨毯の上に吸い込まれるように落ちていく。

ポカンとあたりは転がるコップを見つめる。

床で弾けた雫があたしの足を濡らし、いつの間にかすぐ側にいたアルのズボンも濡らした。

跳ねるようにコップが転がっていく。

驚きに口に含んだ水を噴出さなかっただけあたしは偉かったと思う。

びっくりしすぎて思わずぐくりと飲み込んでしまった。

うわゝこんな高級品な絨毯にこぼしちゃった!

やっぱりクリーニング代とか取られるのかな? や、でもまだ水だしマシ?

いやいや、でもアルがいきなり肩を引っ張るのが悪いんだから、やっぱりクリーニング代はアルに払ってもらうのが妥当でしょう! コップが止まるのと同時にはたと意識を取り戻したあたしは、きつとアルを睨みつけた。

さっきまでの何とも言えない甘い雰囲気は、今は横に置いておいて。真剣にクリーニング代の話をしなれば!

「ちよ、ちよつと、なによ、急に……」

強く肩を掴まれたまま、非難混じりにアルを見上げる。

でもそこにあつたのは先ほどとは打って変わって、真剣な蒼の瞳。燃えるような瞳が刺すようにあたしに向けられている。

思わず言葉が途切れた。

ぎゅつと心臓を掴まれたような鋭い視線に思わず身を竦む。

さっきまでの甘い王子様はどこにいったの？

まるで戦いを前にした孤高の戦士のような知らない顔がそこにある。

「クソ！」

あたしから視線を外すと、アルは憎々しげに短く吐き捨てた。

そのまま掴んだ肩を抱き寄せる。

「な、なに？」

抗えない力にされるがまま抱き締められ、あたしはもうパニック状態だ。

心臓の音が今にも爆発しそうなほどに体中に響いている。

なんで、なんで？まだ絶賛甘い空気発散キャンペーン中な訳？

もうそろそろ解放してよー！

もうアルにこの心臓の音を聞かれたらどうしようかと心配しているどころの話ではない。

だって当のアルの体はあたしの胸の側にあるんだもん。

彼の吐息が首元にかかり、おくれ髪をわずかに揺らす。

その毛先まで震えそうなほどに、弾ける心臓の震動が体中に呼応する。

でもアルはあたしの気持ちなどお構いなしに、その麗しい顔をそつとあたしの耳元に近付けてくる。

「静かに。これ以上何もしないから、じっとして。僕の話をちゃんと聞いて」

これにはコクコクと頷くしかない。

だつてさっきまでの甘さ垂れ流しの声じゃないだもん。

絶対に反対意見なんて聞き入れない、力強くて有無を言わせない声に逆らうことなんて出来ない。

なんでリビングなのに、流暢な日本語？

なんて突っ込んでる間はない。ただアルの意図が分からなくて不安に揺れる瞳を彼に向けるだけ。

アルは、あたしが頷いたのを確認すると抱き締めたまま、素早くTVの側に寄つて、TVのチャンネルを回した。

そして音声をこれでもかと大きくする。

「あの水はずっと放置されていたから体に良くないと思う。取りあえずジュースでも飲んで吐き出して」

テキパキとした動きであたしをTV前に座らせると、アルは同じようにあたしの側に腰を落としてあたしの耳元で囁く。

その声はどこか余裕がないように聞こえるのに、あたしの体はまた逆上せあがつてさっき以上に心臓がどくどくと弾け出す。

「ええ〜吐き出すって？」

「静かに。僕の言う通りにしてくれ。早くー!」

そう言いながら、側にあったペットボトルとビニール袋を押し付

けられたが、もう体中の血が蒸発しそうなほど体中が熱くて、何も考えられない。

指先が痺れて段々頭が混濁してきて、視界まで霞む始末だ。なんてこと！これはもしかして、アルに許容範囲以上に迫られたから中毒症状を起こしているの？

もしかしたらさっきの毒が今頃ききたした？

きつとそうだ！だって甘い果実に身も心もふにやけてしまって、もう腰砕け。

揺れる視界でアルの綺麗な顔が懸命にあたしに話しかけているのが見えたが、もうそれすら定かじゃない。

重い緞帳が下りるように、あたしの瞼が落ちていく。

あれ？おかしいな。夜更かしは得意な方なのに。

もう何も考えられないほどに、深い睡魔に引き込まれる。

「千佳……」

ああ、もうアルの朗とした美声すらあたしの耳には届かない。

「千佳……くそ……なんで……」

なんでそんな悲しげに眉を寄せているの？

大丈夫だよ。謝らなくても、あたしがお兄さんと仲良くなれる方法を教えてあげる……だから、ねえ大丈夫……。

間奏／それぞれの夜・夢の岸部／（前書き）

今回はちょいっと千佳視点を離れます。

千佳が目を閉じたところで物語の幕も一旦閉じてしまいます。なので今回は幕間のわずかな時間、夜が明けるまでの、千佳には預かり知らぬ裏話です。

間奏くそれぞれの夜・夢の岸部く

「もうくなんでことになりますの!」「」

ホテルの高層階にあるバーで、雰囲気をぶち壊しにするようなヒステリックな声が響いた。

黒を基調とした設えと抑えめな照明が、シックな大人の夜をエレガントに演出している。

なのに、バーカウンターに腰かけたどこぞの国の金髪美女が聞きなれない言語で叫ぶものだから、夜の一時を思い思いに過ごしているハイソな日本人のおじ様おば様達はギョツと彼女に視線を向けた。だが当の本人はまるで気にしていない。

一応、彼女の側を囲むように腰掛けている二人の男性はその視線に気がついて、居た堪れないように身を小さくするが忠告することも叶わないようだ。

「ねえ、聞いてますの!なんで殿下はあの子のことをあんなにも気をかけますの!まったく周りの目を気にしなすぎですわ!いくら国を離れているからってシーリエントまでこのことが伝わらない訳がないでしょうに!こんなシーリエント王家の醜聞、許される訳がありませんわ!」「」

「醜聞って言いすぎですよ。相手は殿下と比べ物にならないくらい、ちつぽけな子なんだから。きつと普段接することのない毛色違う遊び相手が欲しいんですよ……それよりもコーウィツシュ外務官……もう少し声を小さく……」「」

そう相槌を打ったのはアントニオ・クライブ。年若い王子殿下の護衛官だ。

その容姿から想像できるように貴族の家柄だ。

あえて護衛官などの仕事選ばずとも彼の身分ならもつと他の地位ある仕事があつたらうが、そこはリチャード・アルバート殿下至上主義の彼。

自分よりもずっと年若いのに、王家の一人である貫禄を持つ殿下にノックアウトされて以来、殿下のことが彼の一番になっていた。でも、そんな彼の決死の忠告もキツと濡れた瞳を向けられるとすぐに尻つぼみになった。

「出過ぎたことを言いました。存分に叫んでストレス発散なさつて下さい。レディー・アレクサンドラ……」

そつと目を麗しき外務官から離れたが時すでに遅し。彼女の怒りの矛先はアントニオに向かっていた。

「「だいたい、貴方がしつかり殿下の面倒見ないからこんなことになるのですよ！何度も何度も逃走を許して！そんなことで護衛官が務まるとでも！」

「「だつて、殿下が護衛を振り切つて逃げることなんて今まで一度も……」

「「いい訳はよろしい！」

「「ひい！女王様！」

段々呼びかけが変わっていることにアントニオは気付いているのだろうか。

アレクサンドラを挟んで反対側にいた寡黙な青年は追いつめられる可哀想な護衛官と傍若無人な女王陛下を見つめながら、口を開くきっかけを待っていた。

コリン・パーカー秘書官。彼ほど見た目と中身のギャップが激しい人はシーリエントにも日本にもいないだろう。

蔵つく彫の深い顔をしかめると、意を決して女王陛下の集中砲火の中に飛び込んだ。

「キャプテン・コーウィッシュ。もうそれぐらいにしたらどうでしょうか？」

「お黙りなさい！ミスタ・パーカー！」

しかし簡単に一蹴されてしまった。

密かに傷つき彼は口を結んだが、外から見れば蔵つさが10上がったただだった。

「まったく何故こうも全てが計画通りにいかないのでしょうか！本当に腹立たい！こんなどうでもいいことにかまけている間なんてないのに！」

憎々しげに目の前のカクテルグラスをアレクサンドラは睨みつめた。

若く優秀な彼女にとって、今回の旅行ほどイレギュラーな事態ばかりに見回られる経験はない。

今まで挫折なくエリートコースを歩んできた貴族の令嬢の初めての試練である。

しかし彼女に失敗は許されない。

どんなことでもこなせて当然。それがコーウィッシュ家の一員としての彼女の矜持だった。

幼い頃から彼女のことを知っているコリンは彼女のプライドの高さを誰よりも分かっている。

普段はコリンと呼ぶ彼女が仕事を離れたプライベートの時間まで

ミスタ・パーカーと他人行儀な呼び方に拘るのは、それだけこの仕事に気合を入れている表れだ。

だからそれ以上は何も言わず、そっと自分の前に置かれたウヰスキーのグラスにそっと口をつけた。

アレクサンドラはいつも心に溜まったわだかまりを叫ぶことで発散させる。

そして明日にはいつものように高い理想を掲げ、自信満々に胸を反らしてそれに向かって邁進していく。

だから今は彼女の思うままにさせよう。

そう自分に言い聞かせ、グラスの中の氷をカランと揺らした。

一人静かに、この一時を楽しむ彼の側ではヒステリックなアレクサンドラの声と涙交じりのアントニオの声が交互に聞こえる。

ああ……平和だな……。

バーにいる日本人達はまるで正反対な感想を抱いていると想像もしていないコリンはそう思わずにはいられなかった。

時間とBGMだけが、3人の異邦人達など気にせず ゆったりと流れていく。

願わくばこの時がいつまでも続けばいいのに。

そついで呟きながら、隣で揺れる麗しい金髪を見つめる。

心で思っても彼はけしてそれを口にしない。

そんな泡沫の呟きを飲み込むように、ゴクリと琥珀色の液体を喉に流す。

プリーズ……キス・ミー・アゲン・アンド・アゲン

これがサイゴだと言っのなら

目が覚めるまでアナタの胸で溺れさせて

残酷なウソで眠らせて……

隣の騒音から意識を静かに流れるBGMへと向けるとコリンは、彫の深い顔を更に険しくして、聞き入った。

日本語はあまり詳しくないが、心を切なくさせるメロディだと思っ
た。

音楽は国境を越えて誰の胸にも訴えかけるのだとひとりごちる。

ああ…飲み干したらアナタはいないのね

寄せては返す波のよう

熱い砂浜で一つになって

深い海に溺れて……

プリーズ

ラブ・ミー・フォーエバー

せめて目が覚めるまで

残酷なウソで夢を見せて……

プリーズ

溺れるような嘘キスで眠らせて……

歌詞の意味は分からない。

だが何故か殿下とあの日本人の少女のことを思い出した。

今頃二人で何をしているのだろうか。

きっと二人でお互いの文化について語り合っているのだろう。

などとコリンは、千佳が英語をまるで話せないことをすっかり忘れて
て勝手な想像をしていた。

後数日ですべてくる別れの日を彼らはどのように思っているのか。

期限のある関係。

その時が来れば二人は永遠の別れをしなければいけない。どれだけあの少女が殿下に思いを寄せていてもだ。

だからこそ、ただ今この時だけでも楽しい夢の中にいてほしい。それがどれだけ泡沫の夢であつても。

二人の距離が縮まれば縮まるほど、それは残酷な現実へと繋がる。ただただ情熱だけで突つ走る年若い二人には、きつとそんな未来は想像もできないだろう。

これは二人よりもずっと世の中の暗い部分を見てきた自分だから分かること。

そして、この立場にいるからこそ容易に想像がつくとも言える。でも…もし願うなら、その夢が現実になればいい。

不意に自分の立場を思い出し、コリンは自嘲気味に笑みをこぼした。

何を甘えたことを。自分の立場を忘れて夢物語に想いを馳せるなど。

そんなことを隣にいるプライドの高い女王陛下に聞かれてもしたら、今宵は説教を聞きながら夜を明かさなければいけない。

そんな彼の心を知ってか知らずか、いつの間にかヒステリックな声を収めた女王陛下が、気だるげにカウンターに肘をついて、カクテルグラスを見つめていた。

「切ない声ね。日本語は嫌いだけど、今の歌は嫌いじゃないわ」

それは傲慢な女王様の一番の褒め言葉だ。

「…別にあの子が嫌いじゃないのよ。ただ……」

言いくそうに言葉を切るとアレクサンドラは長いまつ毛を伏せた。

ゆつくりとグラスを取ると透明な気泡が浮かぶ淡いオレンジ色の液体に口を付ける。

「分かっていきますよ。貴女の立場がそうさせるのだと。サーシャ」

「サーシャって呼ばないで！」

きつと睨みつけてくるアレクサンドラに、コリンは掘り深い眉の下の目を見開いた。

どんな状況でも女王陛下は手厳しい。

「失礼しました。キャプテン・コーウィッシュ」

「よろしい……それよりもあのバカ猫はどこに行ったのかしら？
こういう場で私のことをからかうのは彼の趣味でしょうに」

「ダリルですか？そっぴいえば殿下の部屋を後にしてから姿を見て
いませんね。後、ユーインも……」

アレクサンドラの言葉にコリンは首を傾げて、生真面目に答えた。

「探してきましようか？」

「いいえ！結構よ！あれよ！あの男がいなくて本当によかったっ
て言いたかったのよ！あのバカ猫がいたら、せつかくのカクテルが
まずくなってしまうわ！！」

真剣なコリンの眼差しを避けるようにグラスに向かったアレクサ
ンドラはぐいっつ濃厚で刺激的な液体を全て飲み干した。

間奏くそれぞれの夜・夢の片隅く（前書き）

今日も1日お疲れ様でした。

まだちよいつと余力があるかなって方、無理のない範囲で読んでやって下さい。

間奏くそれぞれの夜・夢の片隅く

「お前、あの少女に何か余計な入れ知恵したんじゃないか？」

暗闇の中で抑揚のない声が聞こえた。

そこは、普段一般人は立ち入らない非常階段の踊り場。

むっとする湿気を含んだ風が、そこに佇む二人の男の髪を揺らした。

「何かって、なにを？」

手すりに身を預けて腕を組んだ男は、その細い目を更に細めて相手の出方を窺った。

しかしなかなかなどうして、相手は曲者のようだ。

寝ぼけ眼で、肩を竦めて見せる。

「とぼけるなよ。あのお嬢ちゃん、朝と夕方で殿下に対する態度が昨日と違っていた」

目を細めて相手の表情を窺う男　　ダリル・グレンは常にないほど真剣な表情だった。

「さあ？なんで俺だと思っんです？今日も彼女は大活躍でしたよ？殿下と逃避行して、アントニオと殿下を取り合ったりね。おまけにあのアレクサンドラ嬢と互角に戦ってたし。俺が口を挟む間なんてない……」

対するユーイン・ダグラスはたれ目をいつものように眠たげにトロンとさせて、飄々とダリルの言葉をかわず。

が……。

「そんな言い訳が俺に通用するとも思っているのか？ ユーイン」
「

冗談の欠片もない、まるで地を這う蛇のような声にユーインは口をつぐんだ。

見た目はいつも通りの笑った顔。

しかし、その作り物の笑顔がこんなにも恐ろしいと感じたことはなかった。

見えない瞳で彼は何を見透かしているというのだろう。

あまり感情の起伏がないユーインだが、その読めない表情にうすら寒いものを感じた。

「貴方のその観察眼には敬服するよ。なんで王室の護衛官なんてしてるんです？ 刑事にでもなった方がもっとその力を発揮できるのにな」
「

「ふつ。刑事ね、悪くない話だ」
「

ダリルの目が少し和らいだ。しかしその目はユーインを捕えたまままだ。

「貴方なら今すぐマルガリート市警で一番のコップだ」
「

「おい、話をはぐらかすなよ。そんな訳のわからん話題で誤魔化せれないことぐらい分かってるだろ？」
「

じっと自分に向けられる不穏な視線にユーインは仕方ないとばかりに大きくため息をついた。

この男を出し抜くなど誰にもできはしない。

普段は飄々として道化を演じては、その本性を誰にも気付かせないのに。ふいに見せる闇があまりにも深すぎて、彼の人となりがまったく掴めない。

まったく、嫌な人間とお知り合いになったものだ。

ユーインは心の中でため息をついた。

「確かに彼女にアルバイトをやめるように忠告はしたよ？でも逆に彼女のプライドに火をつけたのか、結果は貴方のご存じの通り」「

「ふん。影で何をしてるか分かったもんじゃないな。まあ、気持ちは分かるけどね。……だが同情は禁物だ。そんな基本も分からない子どもじゃないだろ？」「

「貴方から見れば、俺なんて赤ちゃんですよ？」「

ユーインは大げさに肩を竦め、そしてダリルに背を向けた。

「貴方の質問に答えただ。もう解放してもらってもいいでしょう？俺、もう眠たくて眠たくて。このまま非常階段で休んでも貴方は俺をベッドまでは運んでくれないでしょう？」「

ゆっくりと鉄の簡素な階段に足を下ろす。彼の皮靴がカンカンと間の抜けた音を立てた。

その遠ざかる背に、鋭い声突き刺さった。

風に紛れそうな囁き声。しかし有無を言わさないその声は確実に喉元に突き刺されたナイフのようだった。

「彼女が番狂わせの駒になるか否か。この計画の全ては彼女にかかっていると書いてもいい。二度と勝手なことをするな」「

「了解」

ピタリと足を止め背を向けたまま、ユーインは抑揚なく答えた。

その顔はダリルに見せていた飄々としたものではなく、きりりと引き締まった別人のものだった。

緑がかった茶色の瞳が闇の中で冷たく輝く。

「分かればいい。我々に残された時間は少ない。あるのはただ、あの方の命に報いることのみ」

間奏〱それぞれの夜・夢の向こう側〱（前書き）

こんにちは！今日は素晴らしきハナキンですね

最近、ハナキンの魅力をシミジミ感じております。明日、早起きしなくていいんだと思うとテンションマックス振り切りそうで、思わず小躍りしてしまいます。

もし作者と一緒にテンションアゲアゲにハナキンを過ごす予定の方、何も予定がないなら気分を夏にもどしてみませんか？

間奏くそれぞれの夜・夢の向こう側く

薄暗いその部屋では、パソコンの画面から洩れる光のみが頼りだった。

誰もいないがらんとしたその大部屋の自分のディスクに足を置いて、警視庁一冷徹な男、幸村美貴は険悪な顔を更に険悪にしていた。彼の氷のように凍てついた顔がパソコンの光で青白く浮かび上がる。

深く寄せられた眉間の皺の所為で妙な影ができ、マメシバが見れば泣いて怖がるほどの迫力があつた。

しかし今ここには彼しかない。

警視庁警備部警備課要人警護特殊班は皆、シリーズント王国第二王子の警備のために設置された警備本部で休んでいるか、ホテル周辺で警備にあたっているかのどっちかだ。特殊第7班班長の幸村は特に陣頭指揮を警備本部長から任されている。

それは長の仕事じゃね？と心の中で思っている、あえて口には出さず黙って仕事をする幸村は本部長を任されている警備課長のお気に入りだ。

ただ何を反論しても聞く耳を持たない彼の性格を分かって、諦め半分でその命令に幸村が従っていることを分かっている時点で、なかなかのためき親父である。

しかし、どんな無茶ぶりにも冷静に対処する仕事のできる男幸村は、今一人暗礁に乗り上げていた。

ディスクの上でゆっくりと組んだ足を組みかえると、腰掛けた椅子がぎいっと悲鳴を上げた。

しかしその音も気にせず、幸村はただその鋭い眼差しをパソコンの画面に向けていた。

酷薄な印象を与える薄い唇をそつと長い指先で撫で、更に顔を陰

しく顰めた。

「さて、どうしたものか……」

普段からは想像もできない、困惑の声が零れたその時だった。
がちやりと部屋の扉が開いた。

「あつれ〜？ 班長、何してるんすか？ あ〜もしかして皆に内緒でエ
ロ画像を……」

間抜けなほど明るい声が、がすんつと激しい衝撃音でかき消させ
れる。

もちろん幸村が自分の席から力一杯に六法全書を投げつけたのだ。
どれだけ距離が離れていても威力を失うことなく、それはマメシ
バの顔を直撃した。

「消える」

「な、な、なにするんすか！ 鼻の骨が折れるかと思った」

涙目で鼻をさすりながら、マメシバは幸村を睨みつけた。

しかしもともと愛らしい顔立ちのマメシバはどれだけ眉を顰めて
も、怖さなど雪村の足元に及ばない。

「そのまま顔面が陥没すればよかったのに……」

ふんつと鼻を鳴らし、幸村は非情な言葉を投げかけたが、そこは
マメシバ。

そんな簡単に引き下がらない。

「またまた一人で寂しかったくせに。夜食の差し入れがあったんで呼びに来たんスよって……あれ？何か調べ物ですか？」

大きな目をくりくりとさせると、六法全書を手に幸村の方へと向かう。

さっきまで痛みにはギャーギャーと叫んでいたのに、次の瞬間、痛みなどきれいさっぱりと忘れ去ったかのように平然としている。

打たれ強さと呼ぶにはあまりにも立ち直りが早すぎて、もう痛みが神経がないんじゃないかと思えない。

それとも鳥頭で次の瞬間には全て忘れ去っているのか。

幸村はまるでスキップするような軽い足取りで自分の方へと近付いてくる、出来の悪い部下にうすら寒いものを感じていた。

「何か気になることでも？」

いつも通りのふわふわした口調に、幸村は大きくため息を零した。どうしてこの男は、こんなにも警察官らしくないのだろう。それよりも何でこんなにも邪険にされても、何一つ臆することなく自分の方に向かってくるのか。

ただのポジティブではない。これはもう驚異と呼んでも差し支えないはずだ。

一瞬逡巡したように鋭い切れ長の目を泳がせたが、幸村はディスクから足を下ろすとディスクに乗っていた分厚い報告書をマメシバに押し付けた。

「ん？なんスか？……鑑定物から検出……微弱……HCL……腐敗……」

報告書の文字を拾い読みしながら、マメシバは目をぱちくりとさせている。

何のことを言っているのかさっぱり想像がつかないといった顔だ。まるで勘の働かない可哀想な部下にも分かりやすいように、幸村は一枚の写真をマメシバの目の前に突きつけた。

「え？手すりの写真？オレ、そんなコアな趣味ないんで、手すり見ただけでどこの誰が作ったとか分からな……痛って！なんで蹴るんすか！しかもスネを！絶対狙って蹴ったでしょう！」

幸村は椅子に座ったまま、長い足でマメシバの両足の脛を勢いよく蹴りつけた。

悶絶して床に転がってのたうち回るマメシバをそのままに、幸村はぎしりつと椅子に深く腰かけた。

「それは本日殿下が訪問された大学の迎賓館にある全ての手すりから検出された科学物質の報告書だ。もちろん中澤千佳が落下した手すりも含まれている」

「そ、それって……」

さすがのマメシバでもピンっときたのだろう。

のたうち回っていた体がぴたりと止まると、涙をめいっばい溜めた瞳を幸村に向けた。

大きく見開かれた瞳を見つめ返し、抑揚のない声が彼の疑問に答えを返す。

「ああ。HCL……塩化水素。液体になれば塩酸と呼ばれるものになる。数ある酸の中でも硝酸などと並んで強烈な酸の一種だ。水素よりもイオン化傾向の強い金属と反応して水素を発生する。つまり鉄などの金属なら簡単に溶解できる」

「そ、それが手すりにかけられていたってことですか？」

「ああ。しかも微妙な加減で散布してる。力をかけなければ折れないようにね。折れた部分の断面を見てもただの腐食で折れたようにしか見えない。長年の雨風にさらされた築百年の建物なら考えられることだからな」

「誰がそんなことを……。あの女子高生をいじめたって何も出てこないでしょうに」

突きつけられた事実にもメシバは憤慨し、大きな目を陰しくさせた。

相変わらず怖さは欠片もないが、彼の心根の優しさはよく分かる。そんな部下に切れそうな流し目を向け、幸村はパソコン画面へと体を向けた。

「お前は本気で中澤千佳を狙ったものだと思うのか？ 言うておくが、検出されたのは迎賓館の全ての手すりだ。しかも溶けて勝手に折れないように計算して散布してるんだ。そんなことを誰がする？ 王子様のファンクラブの者か？ よく考えてみる？ すぐに塩酸が手に入る立場にいるものが、一日前に唐突に現れた少女を陥れるために、我々が事前に警戒しているところにわざわざ危険を冒してまで侵入して、彼女が手すりに触れるかも分からないのに、そのようなことをするだろうか？」

じつと眩い画面を見つめながら、地を這う重低音がメシバを戦慄の事実へと導く。

「大学側との事前の打ち合わせではな、王子様に控え室のバルコニーから大学の様子を紹介する予定だったんだ」

「班長……それって……女子高生はとばっちりで、真の標的は……」
「もう一つ。不確かな情報だが、一部ネットに流れている情報にこんなものがあった」

幸村はくいつと顎で目の前のパソコン画面を差した。
引かれるようにマメシバは画面に顔を近づける。

「これは……」

画面を見た瞬間、マメシバは顔を強張らせて一步後ろに身を引いた。

その反応に幸村は鷹揚と頷いて答える。

「ああ……出どころの分からない不確かなものだ。しかし火のないところに煙はたたないというからな」

「全部英語で何て書いてるか分かりませ……ふんぎゃ〜!!」

まったく悪びれない明るい声が言い切らない前に、マメシバの体が歪な形に歪んだ。

あつという間にマメシバの足を取った幸村はそのまま逆エビ固めを決めると、マメシバを床にダウンさせた。

「は……班長……ギブギブ！骨、背骨が折れる！」

マメシバの決死のタップにも耳を貸さず、幸村はまるで何もなかったかのように淡々と話を続けた。

「今年の春。王子様の誕生日を前にシーリエント現国王が非公式にその意向を側近に伝えたそうだ。……次期国王には第二王子をと」

「な……なるほろ……でもだからって命までね、狙われれ……は、班長……マジもうムリ」

悲痛な声を上げるマメシバを一瞥し、だが幸村はその手を緩めることはしない。

マメシバの体は人体の不思議を通り越して、宇宙の神秘と呼ぶ域に至っていた。

「シーリエントは日本と違う。国王の意向というのが政治を大きく左右する。未だに国王の承認なしに憲法の改正が行えない。表向きは民主国家だが、裏の顔はまるで近世のような絶対王制だ。つまり自分に都合の悪い者が王に立てば、自分の立場が危うくなると考えるものがあるということだ」

幸村がゆつくりとマメシバの足を離した。

その瞬間、息も絶え絶えなマメシバは驚くほどの高速で体を団子虫のように丸めて自己防衛に入った。

しかし幸村の視線はもうマメシバには向いていない。

「なかなかどうして、あの王子様の警護は一筋縄ではいかないらしいな」

次への攻撃を想定して守りに入っていたマメシバだが、常と違う上司の雰囲気から頭を上げた。

「班長、女子高生……中澤千佳ちゃんを王子の側に置いてていいんですか？きつともっと危険な目に遭うかもしれませんよ？」

「ああ……」

冷酷な彼らしい感情の籠らない声はいつも通りに地を這う重低音だ。

しかしいつもと違って聞こえるのは、やはりいつも以上に眉間にしわができているからだろうか。

常に誰よりもこの危険な男の側にいるから分かることがある。

それは今彼が腹の奥でとぐるを巻くような深い怒りを感じている証拠。

そして、何かを決断した顔だ。

「そんなことなど絶対にならない。日本の警察に俺がいる限り、王子にも中澤千佳にも絶対に手は出させない」

間奏／それぞれの夜・夢のまた夢／（前書き）

間奏シリーズはここでおしまいです。

ずっと千佳の一人称で書いてたので、三人称の文章がとても書きにくかったです。

ちよっち読みにくいかもですが、今日もよろしくお願いします！！

間奏くそれぞれの夜・夢のまた夢く

アルは力なく自分にもたれ掛る千佳の体をきつく抱き締めた。

その顔には狂おしいほどの愛しさと彼女を危険な目に合わせた悔恨の念に歪んでいた。

千佳は深い夢の世界に連れ込まれたのか、すうすうと寝息をたてている。

小さなその体をそつと絨毯の上に寝かせると、アルはさきほど千佳が注いだ水差しの側に寄った。

そして爪先を僅かに湿らすように、その水差しの縁を撫でると、その指をそつと口まで持つていく。

じつくり味わうように慎重に舌先でその爪を舐めた。

次の瞬間、アルはその液体を吐きだすと床に転がっていたペットボトルのコーラを口に含む。

もう十分気が抜けた、ただの甘くベタつく液体に一瞬眉をひそめた。

その液体を飲み込むことなく、素早く次の間のバーカウンターに行くと、設置された小さなシンクに吐き出す。

「甘ったるい……」

ぐいっと口元を拭くと、アルはまるで身を切り刻まれたかのように悲愴な表情を打ち消すように激しく頭を振った。

彼はその立場上、あらゆる薬に詳しく、ある程度なら耐性もある。この、舌に乗せた時に痺れるような感覚で、水の中に何が混入されていたか想像に難くなかった。

強力な睡眠剤、それも即効性があり、また一粒で象さえも簡単に

眠りにつかせることのできる危険なものだろう。

劇薬ではないから千佳の体には何に影響もないだろう。

アルの相手はそんな下手は打たない。けして事件だと気付かせないようにアルを狙ってくる。

そう、奴らはただアルを眠りにつかせるだけでいい。アルが薬で眠りについたか否かを確認するために盗聴器を仕掛けているのだから。

市販されていない強力な睡眠薬は無理やりそのものの体を眠らせることができる。

しかし意識は起きたまま。その混濁した意識に語りかけるだけでその者を意のままに扱うことができる。

夢遊病のようなものだ。眠っている人の思考は単純で、言われる言葉に素直に反応する。

一口水を口に含むだけで、生きた操り人形のできあがりだ。

後は自殺でも事故でも望みのまま。

頭では簡単に分かっている。なのに……。

「くそっ！」「

感情に任せて、磨き抜かれたシンクに拳を打ち当てる。

振動で震えるシルバーよりもそこに映し出された彼の方が震えていた。

すぐにＴＶの側に戻ってくると、床の上ですやすやと眠っている千佳をじっと見下ろす。

きつと彼女は自分が眠っていることすら分からずにいるのだろう。そう思うと居た堪れなくなり、アルはさらに深いため息をついた。つけっぱなしのＴＶは大音量で、深夜放送の音楽番組を流している。流れる明るいテンションとは裏腹にアルは悲痛な影を背負って

いた。

そつと床に膝をつき、アルは千佳の頬に恐る恐る触れてみた。白く柔らかな頬は温かく、うっすらと上気して彼の心に応える。眉の上で揃った前髪が乱れて、黒髪の間から白い額が覗いていた。さらさらと絹のような手触りの髪を綺麗に直してやりながら、アルは自分の心に刻みつけるように千佳を見つめていた。

出会った瞬間から彼の脳裏に焼き付いて離れない光　異国の地で意図せずに出会ったその少女は、アルの知らない輝きに満ちていた。

その手を引かれた瞬間、運命は彼を狂わした。

こんなにも思い通りにならない激情があるなんて。

彼は初めて感じる熱く甘美な痺れに戸惑いながらも、もう手放せなくなっていた。

愛嬌たっぷり丸顔の中で、いつもキラキラと輝いている星空のような瞳。

今は固くまぶたを落とし、彼の視線にも気付かない。

アルはそつとまぶたを閉じると、眠り姫の左のまぶたにキスを落とすとした。

この瞳を独り占めできたら……。

湧き上がる劣情。

凹凸のあまりない胸がゆっくりと上下して、小さくて愛らしい口から軽い寝息が洩れる。

短い丈のスカートがまるで彼を誘っているかのように乱れて、その下からほっそりした足が伸びている。

幼い子どものように、でも時々危うい女性の魅力を見せつけるのだから彼女はすごい。

そんな彼女の一つ一つにこんなにも胸を締め付けられ、こんなにも彼が心を揺らしている。

彼女が彼の心を知ればどんな顔をするだろう。いや、分かせてはいけない。それはけして口にはできない感情なのだから。

アルはしばし苦痛に耐えるように眉をよせ、その場を動けなかった。

彼の頭の中を相矛盾した感情が迷走する。

自分の立場を優先する理性と彼女を求める本能。

本当は千佳を自分から遠ざけることが一番なのは分かっている。

それを臭わすことを口にしなかった訳ではない。

昼間、ユーンから何かを言われたらしい千佳のむき出しの怒りを思い出し、さらに深い苦悩にくれた。

「あたし、絶対にやめないわよ！自分の不手際でやめさせられるならともかく、勝手に心配や同情や打算なんかされっちゃってやめさせられたら、タマったもんじゃないわ。いいこと！あたしは最後まで全力でやり切って、TDLに行くんだから！」

逸らすことなく自分に向けらる漆黒の瞳。

圧倒されて何も言えなくて、ただお決まりの笑顔と口先でごまかした。

TDLってなんだ？つという疑問が頭をもたげたが結局聞けずじまいになっている。

アルは自分が本当に大切にしたいもの以外はドライな性格だ。そして自分が得たいと望んものを得ることに躊躇はない。打算的で合

理的。より一番自分が優位な立場に立ったまま上手に欲しいものを手に入れる計算を瞬時にはじき出せる、冷酷な聡しさが自分らしさだと分かっている。

それ故、多少の犠牲はつきものだと言簡単に割り切ることができる。理想の王子様などと呼ばれているが、その本性は世間知らずな物語の王子とは非なるものだ。

野生の獣のような鋭い感性と悪魔のように貪欲な男。

なのに千佳は時折現れるそんな素顔にも臆することなく、いつも全力で向かってくる。

そんな千佳に自分の本性を知られるのが怖い。だがそのくせに手放したくないと、まるで聞き分けのきかない子どものように彼女を求める。

でもその結果、彼女を自分の周りを取り巻く暗雲に巻き込んでしまった。

出会った瞬間から何度目だろう。彼女を命の危機に晒してしまっただのは……。

彼女はまだその真実に気付いていないが、それも時間の問題かもしれない。

いや、そんなことよりも危険な目に遭ってもなお、変わらずに自分に向けられる眩い笑顔に心が締め付けられる。

溢れだしそうな感情の波を押しとどめるよう、アルははだけた白いシャツの胸元をぎゅっと握りしめた。

遭わなくていい危険に自分が彼女を遭わせているのに。

必ず守ると心に決めていても何度も救うことができなかつたのに。それはアルにとって、身を引き裂かれる以上に辛い現実だった。

自分が気を付けていれば彼女だけは守れるはずだと、最後まで真実に気付かせずに別れを告げようと、そう思っていた。

なのに……。

現実はこのなにも薄情で、彼を翻弄する。
どれだけ頭が切れるといっても、自分はまだ力のない子どもなの
だと自分の弱さに気付いてしまった。

シャツをぐつと握りしめた拳が白くなるほど、それはアルの胸を
焼き尽くす。

耐えきれないとばかりに、がんと毛長の絨毯の引かれた床にそ
の拳を打ちつけた。

自分の力のなさに打ち震える。

そんなアルの耳には、TVから大音量で流れる明るいアイドルの
歌など一切届かない。

ひと夏の恋を何に例える？

打ち上げ花火、それともキラメク海のビックウエーブ？

そんな使い古されたコトバで満足すると思つたら、大間違い

ありきたりな物語じゃあきたらない

マリンブルーの風に抱かれて

ジリジリ太陽に照らされて

もっと知らないトコロへ連れて行って

熱い雫に飲み込まれたら

あたしは君の人魚になる

輝いてサマーナイト

駆け抜ける魅惑のスター

ねえ立ち止まってるヒマなんてないわ！

ギリギリ限界飛び降りて
熱いココロが導くままに
もっともっと この夏に恋させて
一瞬のユ・ダ・ンもさせてあげない！
12の星は二人のアイズ
さあ、あたしたちの時間が始まる
ひと夏だけのシンデレラ
このトキメキ、もう君にも止められない

ふうつと小さく息を吐くと、アルは情熱の輝く眩い瞳で上を仰いだ。

ぐいっと口を引き結んで顔を上げた。

誰にも見せたことのない精悍な顔の中で誰もが圧倒される、覇気に満ちた瞳が輝く。

アルはゆっくりと千佳の小さな体を真綿に包むかのように抱きかかえ、慎重に立ち上がった。

腕の中で千佳が小さくうなる。

その表情はふにやりと柔らかく、決意に満ちた強固な彼の信念を甘くくすぐる。

「少し、辛抱してね」

口付けるかのように優しく耳元で囁くと、アルはそのまま音もなくリビングとは反対にあるベッドルームへと千佳を連れていった。

ベッドルームは半円を描いた形をしており、弧を描いた窓の向こうには銀河のように眩い夜の東京が見えた。

薄くカーテンの引かれた室内は窓から零れるネオンの光でぼんやりと薄闇に浮かんで見えた。

部屋の真ん中に置かれた円のベッドには天蓋が付いている。

その大きなベッドの上に千佳をそつと寝かせると、アルは揺らぐ瞳で夢の世界を旅する千佳の髪を撫でた。

何かを後悔するかのようアルの口から深いため息が漏れる。

「う…ん。だいじょ…ぶ」

寝返りをうつて、小さく零れた千佳の寝言に答えるように、アルは小さな笑みを零した。

そして、その言葉に答えるようにゆっくりと顔を近付ける。

その愛らしい唇にそつとアルの唇が重なる。

「ありがとう……」

ワンナイトラブ!? (前書き)

ご無沙汰です。また続きを書きましたので、気が向いたら目を通
してやってください。

ちいちゃんとアルに残された時間も後2泊3日になりました。
そんな訳でちいのバイト3日目もいつも通りグダグダ進みます。

ワンナイトラブ！？

水面で何かが跳ねた。

ゆらゆらと柔らかな光のカーテンが幾重にも重なって、跳ねた雫がプリズムする。

なんて穏やかなんだろう。

ふわふわで、ぬくぬく。

まるで誰かの腕に包まれているような安心感。

その腕の中であたしはゆらゆらと揺れている。

ここはとつても温かくて、柔らかくて、心地いい。気持ちよくて、もう何も考えたくない。

……のに、胸の奥で輝く深い蒼に胸が苦しくなる。

なんで？その炎を感じるだけでこんなにも心が乱されるの？

一瞬、瞼に焼きついたのは眩い笑顔。

その影に心が捕らわれたその瞬間。

パキーン……。

自分を包む庇護の繭が一瞬で散霧して不安定な世界に落ちていく。あつと小さく呟いた時には穏やかな光がずっと遠くになっていた。怖い。怖い。あの、温かな所に戻りたい……。

あたしの心を捕えて離さないのは淡い光の繭ではなく、あの情熱の炎。

引きづられてしまう。あの鮮烈な蒼色に……。

どうして？どうしてこんなに着かないのに……先が見えなくて怖いのに……こんなにもあの炎を感じていたいと思うのかな。

もっともつと近付きたい。

火傷しても構わないの。もつと側で、もつと熱さを感じて、力の限り抱き締めたい。

もっともつと、あなたが欲しい。

でも影は心と裏腹に遠ざかる。

待って。もっともつとあなたを感じたいの。

光の繭と共に遠のいていくその背に叫ぶ。

今なら全てをさらけ出せる気がする。

だからあたしの全てを受け止めて。

ねえ、お願い。だってあたし、あなたのことが……。

「あ、あなたのことが！」

思わず手を伸ばした。

何かを伝えたくて手を伸ばしたはずなのに。

その白い空間を抜け出した瞬間、全てが眩い陽光の中に霧散した。

あなたのことが……その言葉の続きも出てこない。

あたし、何を言いかけていたんだろう。

でも答えを見つげ出す前に窓の向こうの鮮やかな世界が視界に飛び込んで、あたしの世界が広がった。

目を開けた瞬間からあたし時計がせわしなく動き出す。

二三度瞬きして、現状確認。

ここはどこ？あたしは誰？……とかふざけてる場合じゃなくて、マジでここはどこだ？

今、あたしがいるのは見たこともない大きなベッドの上。

しかももっふもふのふつかふかで、雲の上に乗っているみたい。

手を伸ばしたまま寝ぼけた頭をフルに動かしてみても、なかなか

現実とピントが合わない。……いや、目の前の現実を認めたくないというか……。

よ、よし。ゆっくり確認していいぞ。

ベッド……ってことはあたし、寝てたのかな？そうか。あたし、寝てたんだ。

それで夢を見てた。うん。ここまでではOK。……でもそれが何の夢だったのかはまるで思い出せない。

ゆらゆらと揺れる影が微かに頭の奥を掠めた、それぐらい。

夢の内容も、伸ばした手の求めるものも、全て夢の向こうに置いてきてしまったみたい。

仕方がない。夢ってそんなものだもんね。

なんだかいい夢だったような気がするのに残念だな。

きつと森の小鳥さんと戯れてるような夢だったのね。

もう一度寝たら同じ夢が見れるかしら？うふっ……なんてちよっぴり乙女チックな思考で本日の朝を演出してみました………現実逃避も限界です。

あたしは手を伸ばしたまま、口を開けて硬直していた。

何もない空間に手を伸ばしたつもりだったのに、あたしの手はキラキラと輝く生温かいものを掴んでいる。

寝ぼけ眼が段々はつきりしていく。

クリアーな視界全面に映し出されるのは淡い金髪に、面長の顔ですっと通った鼻筋。そして吸い込まれそうな蒼い瞳。

その優しい瞳が柔和に緩み、じっとあたしを見つめている。

うわーっ！ずっとこんな顔で見つめられてたの？

審判！起きぬけにこれは絶対にレッドカードでしょう？早くこの危険物を退場させてよ！

「グッモーニン！チカ！」

寝ぼけ眼でも絶対に分かる、その端正で甘い顔。

指の隙間から見えるのは100万ドルの笑顔。

窓から差し込む朝日と相まって目も開けていられない光を放つ。

なんで？なんで朝っぱらからこんなにも爽やかなの？

すつきりした朝の香りに包まれたアルがあたしの目の前約25センチの距離にある。

光を受けて、少し透けてる白いシャツの向こうの引き締まった体に心臓が飛びあがった。

バクバクと最高潮に刻まれる鼓動に、体中の血液が洪水のように全身を駆け巡る。

起き抜けに、なんて心臓に悪いんだ。

これはもう殺人兵器と呼んでもいいんじゃないかな？

隊長！朝っぱらから大変けしからん光景が目の前に広がっています。このままでは我が部隊はぜ、全滅の恐れが！う、うむ……致し方ない。ここはもう一旦引け！全員退避だ！退避！視界にこの歩く危険物を入れるな！

本能が直感で告げたエマーゼンシーコールに、咄嗟に背を丸めて自己防衛の体勢に入った。

あまりの眩さとあんまりな現実に顔を背けて、緊急自分会議を開催してみる。

と、とりあえず落ち着こう。あたし。

視界にアルを入れちゃダメ！頭がおかしくなっちゃうよ！

ってか、なんでここにアルがいる訳？

も、朝からホントに訳分かんない。どうして？

混乱に混乱を重ねるあたしの頭は踊るばかりで、何一つ進もうとしない。

まず分かることから思い出そう。そう、まず昨日はアルとマリオカートして、バルコニーで色々語って、それで……その、甘えてみ

たり、キ、キスの意味を教えてください。それで……。

ちよつと待って！あたし何時の間に寝たの？そういえば自分の部屋に帰った記憶がない。

と、という事はアルの部屋でお泊り……いやいや、それはダメなんじゃない？

自分で行き着いた答えだけど、全力で否決だ。

裁判長！異議あり！

付き合ってもない男女が一晩すごすなんてアリですか？ナシですよね！

こ、こんなの……ふ、ふしだらだわ！

しかも同じベッドで目を覚ますだなんてマンガみたいなベタな展開……。

ぎゃ〜！もうやめて！

現実をあたしにつきつけないで！

絶望があたしを千尋の谷に突き落とす。

もう朝からあたしのキャパが振り切れちゃうことばかりだ。

パニック状態のあたしはだんご虫状態のまま、足をバタつかせて大きなベッドの上で大暴れ。

傍から見ればダイブ残念な子だと思う。

なのに、相手は早朝でもみにくいアヒルちゃん相手に一切手加減なしだ。

くすつと薄くて色っぽい唇に、艶やかな笑みを浮かべると、起き抜けでまだ混乱気味のあたしの耳元で甘く囁いた。

「僕が教えてあげる」そういつて瞼に口付けた唇が今日もあたしを追い込む。

「隠さないでよ。せっかく可愛い寝ぼけ顔を見ていたのに。寝顔もすごく可愛い」

「なっ……なっ……」

「噛みつきたいくらい可愛くて、どうしようかと思った」

そつと耳から離れた完璧すぎる顔が意味ありげにほころんだ。

か、噛みつきたい？

もう包み隠さず野獣じゃない！誰よ！こんな危険な肉食獣を日本に上陸させたのは！

ワシントン条約にひっかかっちゃうわよ！けしからん獣の取引で！

一瞬で体中の血が蒸発してしまって、もう顔面は蒼白だ。

強張った顔のまま、わななく口で何かを伝えようとするけど何も声にならない。

それをいいことに、さらに不埒な唇はあたしの耳元で爆弾を投下する。

「千佳って柔らかくておいしそうだね？」

しかもぺろつと舌で自分の口を舐めみせるなんて。

絶対に天然じゃない。どうすればあたしを追い込めるか分かった上であたしの弱いところを的確についてくる、この計算高さは絶対に無意識に出来るものじゃない。

朝からなんでそんなにも全力な訳？

昨日から絶対おかしいよ！どっかネジでも緩んでるんじゃない？

がばつと体を引き起こして、あたしは力の限りに叫んだ。

「誰か〜プラスドライバー！この人の常識、緩みすぎ！」

この際、マイナスでもいいです！誰かこの人直してあげて！

夢から醒めても……夢！？（前書き）

今日のお月様はまるでチエシヤ猫のニタニタ笑いのようですね！
もし寝るまでの間に時間を持って余していらっしゃるなら、ちよつと
見上げて見て下さい。
そしてもっと、手持ち無沙汰なあなた、チラ見でいいので覗いてや
って下さい。

夢から醒めても……夢！？

叫ぶだけ叫んで、あたしは素早くアルから離れた。

テンパってて、髪の毛もボサボサで、起き抜けに間抜けな顔で……きつと人様に見せれない顔をしてるよ、あたし。

こんな姿友達にも見せれないのに、よりによってアルに見られるなんて。

泣きそうなほどショックだけど、現状はそんなことを気にしてられない。

締まらない顔でパクパクと口を動かした。

どんなに頑張っても悲しいかな、なにも言葉にならない。

そんなあたしに向かって、アルが首を傾げてみせる。

その洗練された仕草の格好いいことっていったら！

あまりの対比に泣きそうになる。

朝の爽やかな光りを背に受けて、はにかむような笑み姿はもう完璧すぎて、きつとどんな宗教画よりも崇光だ。

『どうしたの？朝から元気だね』

そう言いながら、目を細め無造作に髪をかきあげた。

うわ〜それは反則だよ！

これも分かってやってるんだよね？無意識にここまで人の心を掴む魅力を発揮できないよね？

光を受けて、細かな金髪が眩く揺れる。

深い蒼の瞳が朝の光に踊った。

細められた蒼の瞳はどこか寂しげで、そして底の知れない深みを持つている。

その一瞬一瞬を切り取ってアルバムに貼り付けておきたいほど強烈な輝きを持っていて、体の底からぞくりとした。

そんな目であたしを見ないでよ。

もう泣きそうなほどあなたに夢中で、おかしくなっっちゃうよ。

アルはゆっくりとあたしに近寄る。

距離を取るように後ずさったけど、どんなに大きなベッドにも果てはある。

あたしはベッドの縁まで追い込まれて、潤んだ瞳でアルを睨んだ。ふつと意味ありげな苦笑を洩らすと、あたしの耳元に顔を寄せる。そして聞きとれないほど小さな吐息であたしの心をくすぐる。

「なんで逃げるの？もっと君を近くで見たいのに」

あたしが泣きそうなことを知ってるくせに。

何も分からないとばかりに眩い笑みを浮かべるアルがこ憎たらしい。

熱い吐息が乱れたあたしの髪を揺らす。

「逃げないで。今この瞬間だけは君を独り占めしたい」

舐めるほど近くにある唇が不埒な科白をあたしの耳朵に響かせる。もっとアルを感じたいと思うのに、これ以上近付かれると心臓が壊れてしまう気がする。

なんで？なんでどうも確信的に英語と日本語を使い分けるの？

もうこれ以上は……。

ずいっと寄せられる体があたしの火照った体にさらに火を付ける。

「甘え方は教えただろ？」

頬に触れる熱い吐息が心をとろけさせる。

あたしの心を射抜く蒼の瞳がさらに近寄った。

何よ！この甘い声！この距離間。もしや、これは昨日の続き？
額、頬、瞼……とくれば、その次は一つしかない。
ダメ！それはダメなの！もうホントに限界だよ！
心の中でギブアップした瞬間。

ガクンッ。

「ふぎゃー！」

昨日の続きをされるのかと早合点してぎゅっと目を瞑った瞬間、
おへそが取れそうな気持ち悪い浮遊感が襲った。

えっ？なにになに〜！

叫ぶ間もない。一瞬のうちに、世界が反転していた。

どすんつと腰から落ちて、瞼の奥がチカチカして盛大な衝撃がびりびりと全身を駆け巡っていく。

気が付いた時には、シーツを道連れに盛大にベッドの下に落ちていた。

流石にこんな展開は想像していなくて、うまく頭が働かない。

あまりの驚きに、体が硬直してしまった。

『チカ？』

心配げな色合いを見せるその声に惹かれ、出来の悪いからくり人形のようにぎぎぎつと声のする方へ顔を向ける。

見上げるとそこにあるのは、夏の空以上にまばゆい蒼の瞳。

驚いたように見開かれたその視線を遮るようにぺそつとシーツがあたしの頭にのっかった。

『チカ？大丈夫かい？』

フリーズしたあたしをその甘い声が現実に取り戻す。
壊れ物を扱うような手つきでめくられたシーツの向こうであたし
を見つめるのは蒼い情熱。

今にもベッドの下に駆け降りそうな体勢で、心配げにあたしを見
つめている。

その瞳と眼が合った瞬間、あたしの時間が動き出した。
ぶわつと顔が赤くなる。ドキンドキンとはやる胸の鼓動があたし
の思考を乱す。

「なんで？何がしたいのよ！」

ダメ！もう、あたしのキャパを振り切ってる。

これ以上はR18でしょう？

こんなドキドキ感、もう耐えられない。

瞬時に覚醒したあたしはガバリと立ち上がるとドアに向かってダ
ツシュした。

とりあえず！撤退！撤退！体勢の立て直しが必要よ！

気持ちは三方ヶ原の戦いの徳川ヤステイだ。

うまく逃げだせた暁には、戒めとしてあたしも誰かに絵を描かせ
よう。

そうね、零佳あたりがいいかもしれない。

敵に背中を見せて逃走なんて、大和撫子の名折れだもん。

でも形振り構ってられない！これ以上ここにいたらもうホントの
ホントにおかしくなっちゃうもん！！

くっそ〜これは完全に負け試合だわ。

いっつもからかわれて、ぐだぐだな態度しか見せれない。

このしてやられた感が無性にムカつく〜。

何度もシーツに足を取られて転げそうになりながら、あたしは死
に物狂いでベッドルームを後にした。

きつとアルはあたしの背中であたしを小馬鹿にして笑ってるんだ。そう思うとなんだか腹立たしくて、ベッドルームを出たところで、後ろを振り返って渾身の捨て科白を吐いた。

「負け戦こそ戦の華なのよ！」

花の慶次かつ！なんてノリ突っ込みすら頭に浮かばない。

……なんて間抜けな負け科白なんだろう。

さらに自分を窮地に追い込んでどうするんだ。

自分の残念感が100上がっただけで、まだベッドの上にいるアルは当然ノーダメージ。

絶妙な表情で不思議そうに首を傾げている。

『マケイクサ……？』

「もう！蒸し返さないでよ！アルってKY！」

ベッドルームにあたしの叫びがこだまして、壁がびりびりって震える。

力の限り叫んだあたしはそのまままだ逃走を図った。

重厚なスイートルームのドアに手をかけ、次の瞬間には全力で締め。

今にも壊れそうな衝撃が後ろから聞こえたけど、もう振り返る余裕もない。

もう逃げただけで限界を振り切ってしまいそう。

そのままエレベーターに飛び乗ったあたしは、ゆっくりと閉まるドアにやきもきしながら、あたしを追ってきたアルが視界に入らないように何度もパネルのボタンを連打した。

気持ちばかりがから回って、周りの全てがスローモーションしているように感じる。

もう、いいーてなって地団駄を踏みたい気分だ。
アルがスイートルームのドアを開けて一步踏み出したところで、
エレベーターのドアがやっとならぬと閉まった。

狭まる視界の向こう、立ち止まってあたしを見送るアルの瞳が陰
るように揺れる。

はっと息を飲み、その光彩に胸が奇妙な悲鳴を上げそうになった。
なんで？なんでそんな顔をするかな？
ずるいよ……。

あたしを小馬鹿にして笑いたいんでしょう？
ならもつと堂々と笑ってよ。

不意に完璧の仮面を外すから気になって仕方なくなるんじゃない。
出会った時からずっとあたしを振りまわすワガママな王子様、ど
うして態度を一定にしてくれないの？

あたしはあなたにとってはどんな存在なの？
ただの脇役なら、そういう態度でもつと役になり切って接してよ。

大和撫子が憧れる理想の王子様。

お願いだからもつと空々しくて形式的な甘い言葉をちょうだい。
誰にも当てはまるありきたりの言葉がいいの。

時折見せる、王子様らしくない素顔に胸がぎゅっとなつて、すこ
く居心地が悪い。

もうどうしていいか分からなくて、思わずあたしはエレベーター
の中で座りこんだ。

もう訳が分からないよ。どうしたらいい？

こんなにも胸が苦しくて、上手いかわないことが面ばゆくて、ア
ルの顔を見ると泣きそうなほど切なくなる。

ラプンツェルは逃げ出せない(前書き)

ラプンツェルらしさは一切ありません。一応童話がモチーフだった
なっと思っただ結果です。

アルから逃げ出したちいちゃん。きっと後ろ髪引かれる思いだった
でしょう

ラプンツェルは逃げ出せない

チンッと軽い音をたてて、エレベーターがあたしの部屋の階で止まった。

火照った顔にはまだ余裕の欠片もなくて、こんな顔を他の人に見られたくなくてあたしはエレベーターのドアが開いた瞬間に走り出した。

赤い絨毯が引かれたホテルの廊下を全速で駆け抜ける。

すれ違う人は皆、ぎよつと目をむいてあたしに道を譲る。

その側をまるで森の木々の間をすり抜けるようにあたしは駆けた。もう何も構ってられない。

とりあえず早く一人になりたいよ〜！

心をリセットしないと今日一日をやり抜く自信がない。

ただでさえアルの側にいるだけで、刻々とあたしのヒットポイントが減っていくのに。

神様。お願いだから如来級の心の平穏を下さい。

普段からあたしへの対応が冷たいんだから、今ぐらい言うこと聞いてよ！

あんまりな対応だと次、神社に行く時のお賽銭ケチるわよ？この神様が知らないけどさ！5円のところを2円くらいしかあげないわよ？

言つとくけど、5円は安すぎるなんて苦情は受け付けられないわよ？我が家にはこれ以上出す余裕はないんだから。

5円×6人で30円も出してるのよ。しかもお守りとかも何気に高いし……。

なんて必死で思考をアルから切り離そうとするのに、すぐに脳裏にアルの顔が浮かび上がってくる。

囁かれた耳タブにまだアルの吐息の余韻がある。

どんなに離れても、心はまだあの炎に捕らわれたまま。その全てから逃げ出すように更にスピードをあげた。

お願い。もう解放して。

これ以上は……。

「ちいちゃん？どしたの？」

全速力で自分の部屋に逃げ込もうとしたところで、不意に腕を掴まれた。

弾かれたように振り返ったあたしの瞳が捕えたのは、あの飄々としたピエロ。

余裕ないあたしの瞳の中で今日も柔らかく微笑む。

「今日も朝ごはん、一緒に食べようと思って。誘いに来たんだけど？」

目尻に皺が寄って一気に親しみを感じるメルティ　スマイルは今日も今日とて心惹かれる愛想の良さだ。

自称シンノスケ君のピエロはあたしの腕を掴んだまま、ニコニコと親しみやすい笑みで近寄ってくる。

「来るよね？」

そう言われた瞬間、体は馬鹿正直にぐうつと返事した。

そのあまりに盛大な自己主張にシンノスケ君が我が意を得たりとばかりにニコニコ笑いを浮かべた。

なんだろう？口に出されて言われるよりもこっちの方が腹立つのは。

「朝から元気だね？今までどっか、でかけてた？」

何も知らないシンノスケ君が核心に触れるか触れないかのところで、あたしの心を遊ぶ。

「べ、べつに……」

掴まれたままの腕を振り払うように、そっけなく顔を背けた。でも甘くて意地悪なピエロは簡単にあたしを解放してくれない。意味深に首をかしげ顎に手をやると、シンノスケ君はじっとあたしを見つめる。

「ふん……」

「も、もう離してよ」

「もしかして、今までずっと王子様のところにいた？」

その爆弾に体が四方に飛び散ったような衝撃が全身を襲った。フリーズした体の中で心臓だけが激しく動き回る。

強張った顔のまま、あたしはただシンノスケ君を見つめるしかない。

「もしかして当たり？ふん、そうなんだ。じゃあ朝帰り中ってこと？」

さっきまで甘くてふんわりしたハニースマイルが次の瞬間に真面目な顔に変わる。

まっすぐにあたしの方を見つめてくる、その切れ長の瞳は今まで見たどの時よりも真剣に見えた。

普段はチャライいくせに、こんな時だけ真摯な強さを宿してるなん

て。

なんかずるいよ。すごく居心地悪い感じがする。

「それで？なんでちいちゃんはそんなに泣きそうな顔してるのかな？王子のところで何かあった？」

鋭く確信に触れる言葉は意外なほど穏やかだった。

なのに体がビクリと震える。

柔らかいのにけして曲がらない、彼の真っ直ぐな視線に思わず顔を背けた。

なのに……。

「ちゃんとお兄さんの眼を見て答えなさい」

ずいつと壁際に寄せられ、答えを迫られる。

寄せられた人懐っこい顔が有無を言わせない笑みを浮かべてあたしの答えを待っている。

なんで？なんでそんな風に体当たりであたしに答えを言わせようとするの？

アルの所為であたしの心は制御不能なのに、更に甘い顔で迫られたらもう修復不可能になってしまうよ。

何か、はあった。シンノスケ君の推察は間違っていない。

きっと彼は全てを見透かして、更にあたしを追い込むように聞くんだ。

もうあたしのキャパは限界。

ここで何の所縁もない彼に吐き出せば楽になれるのかな……。

でもそれは誰にも秘密で、アルにだって言えなくて、きつと口に出した瞬間、意味を帯びてしまうこと。

まるでパンドラの箱。鍵を開けた瞬間に全てがあたしの心から飛

び出していつて何が起きるか分からない。
だから……。

「な、なんでもない！ホントに！あ、あたし、今日は朝ごはんいら
ないから！」

掴まれたままの腕を振り切って、そのまま走りだした。
目指すは自分の仮初の城。

背中から襲ってくる現実を振り切って、ドアに手をかける。

後ろからシンノスケ君の呼ぶ声がしたけど、もう振り返る余裕な
んてない。

ボタンっと扉を閉めた瞬間、目の前にあるたった1泊しかしてい
ない部屋にホツとしてしまった。

そのまま扉に身を預けるようにずるずると滑り落ちていく。

「ホント、朝から勘弁してよ。もう、どんな顔をしていいかも分か
らないよ」

この続きはまた後で……（前書き）

タイトル考えるのって難しいですよね！

わたし、題名に心惹かれて、ついつい本を手にとることがよくあるのです。思わずぐつとくるタイトルを探して、今日も不発です……。

この続きはまた後で……

バイト3日目は昨日以上にブルーな気分が始まった。

集合時間にロビーに降りたら、昨日と何も変わらない理想の王子様が完璧スマイルで迎えてくれた。

まるで朝のやり取りなんてなかったかのよう。

ホント、なんて面の皮の厚い王子様なんだろう。

あんな過激に迫ってきたと思ったたらあっさりと手の平を返して、生まれてこの方他人をからかったことなんてありませんって清廉潔白な顔で澄ましている。

「オハヨ！チカ！」

にこつと首を傾げてカタコト日本語で外人気取りだ。

や、確かに外人さんなんだけどね。でもさ、日本語が分かるくせに、分からないフリしてるその態度が気に入らない。

大声で叫んでやりたい気分だけど、残念。ここはなんて衆人環視なんだろう。

思わず口を開きかけたけど、突き刺さる好奇の視線に慌てて口をつぐむ。

代わりにむすつと眉を寄せて、口を膨らましてみせた。

そしてパクパクと口を動かして、無声の暗号を送る。

(ばあか！)

それでも前方目測30メートルにいるまばゆいものは、屈託なく顔をほころばせる。

ひらひらって手を振ってみせる始末だ。

その仕草にロビーにいるマダムの中から年がいきもない黄色い悲鳴

が飛び出す。

ホント！何一つつまういなくて、なのにアルは完璧すぎる格好よさで更に腹立たしい。

もう近寄るのが嫌すぎるよ。

だってアルが完璧であればあるほど、周りからの注目指数が格段にアップするんだもん。

そして、アルに注がれる視線に比例してあたしへの好奇心の眼差しもアップする。

そんな視線さえ意に反さずに自分らしさと優美さを忘れないアルは本当に生まれながらの王子様だ。

あたしとの差を見せつけられたようで、平常心を取り戻したはずなのにドキンって不整脈を起こした。

でもふかふかの絨毯の道の向こうにいる王子様は、そんなあたしの心も全て見透かしてなお受け入れる穏やかな微笑で手招きする。

だからさ、そういうのはずるくない？そんなことされたらもう、あたしの視界にはアル以外映らなくなるじゃない。

一気にアルにピントがあつて、周りの景色がぼやける。

まるで昨日の夜みたい。2人きりの世界が広がっている。

その世界に引き込まれるように、あたしは無意識にふらふらとアルへと歩き出した。

なのに……。

「ほら、あの子が……」

「へえ？ホントに普通の子じゃないか？王子、趣味ワル」

ゆつたりと流れるクラシックに乗って、聞きたくない噂話があたしの耳までからかいて来る。

ハタと自分の置かれた立場を思い出し、なんだか居た堪れなくな

ってくる。

広々とした吹き抜けのロビーのあちこちで、宿泊の人があたしを指さす。

くそ〜！なんでこんなにも四面楚歌な訳？

前には大敵のアル。周りはあたしを追い込んで楽しむ善良とは言い難い一般ピープルの皆さま。

あたしをご町内一の地獄耳だと知っての狼藉か！

もう知らない！周りの目とか気にしてたら、もうすぐにキャパがいっぱいになっちゃうもん。

今日から空気の読める小市民を返上して、KYなイマドキ女子高生モードだ。

相手が王子様だろうが、ゴシップ好きなおばちゃんだろうが知ったこっちゃない。

だから最近の子は〜って言われても全然平気だもん。

その時は毛先をいじりながら、マジウザインダケドって言えばOKだもんね。

逃げてばかりじゃられない。

ここは大和撫子の底力を見せつけてやらねば！

よしっとな心に言い聞かせるとあたしは全力でアルの元に走って行った。

「おはよー！」

意表をついてやろうとずいっと顔を寄せて、にやりと笑ってやった。

どうだ！逃げてばかりじゃないぞ。

これから新生千佳ちゃんの底力を特にご覧にいれようじゃないか。挑戦的なあたしに対してアルは少し目を見開いて、それから少し

八重歯を覗かせて口を開いて笑って答える。

その絶妙な爽やかさがたまらない。

でもこれぐらいで悲鳴を上げる訳にいかないあたしは、さりげなく視線をはずして受け流す。

「ちよつとは日本語を話す気になったのね」

がつつり上から視線で褒めてやった。

でもまだ顔は合わせられない。あの蒼い瞳を見たら今朝のことを思い出してしまいそうで……。

そつと視線を外したまま、あたしはアルから逃げるように近くにいたヤマネ君の方へと行こうとした。

彼なら日本語を理解できるし、適当な会話でなんとか時間をつぶせそう。

そう思ったのに、ぐいっと肩を掴まれてアルの方へと顔を向けさせられる。

まさかの引き戻されるとは思わず、ぎよつと目をむいてアルを見つめた。

その視線の先で、完璧な王子様が麗しい笑みをこぼす。

『今日も元気だね。君と一緒にいると本当に楽しいよ。ぜひシリーエントにまで来てほしいぐらいに』

さすがね。あたしが何を言っても上手に笑顔でいなしちゃうんだな。

でも今アルが浮かべているのは対一般人用のお決まりのプリンススマイルだ。

大丈夫。これならなんとか回避できそう……。

そつ心の奥でほつと息をついた。

なのに、次の瞬間。ずいっと顔を寄せると、誰にも聞こえないようにあたしの耳元に甘く囁く。

「……なんで今朝はあんなに逃げるようにいなくなってしまったの？ ガラスの靴も残してくれないんだから、君はホントに意地悪だね」

なっ！意地悪なのはどっちよ！

注ぎ込まれた媚薬に過剰反応して、体が一気に熱くなった。

理想の王子様の作り物の甘い声じゃなくて、本性を包み隠さない野獣のフェロモン。

昨日、夜のバルコニーであたしを追い詰めたあのキラキラした情熱がすぐそこにある。

甘くて甘くて蕩けそうな、そのセクシーホイスに体の奥から何かが駆けあがって、お腹の奥がじんつと疼く。

ドクンドクンと激しく脈を打つ体が、のぼせそうなほどに熱い。どうしよう。昨日もこうなったの。あの赤い果実を食べた瞬間からあたしの心はもうタガが外れてしまって、素直にアルに反応しちやう。

何かを企んでいる意味深な蒼が、強張って何も言えないあたしを捕えるとキラリと怪しく光った。

でもそっと顔を離れたアルはまるで何事もなかったかのようなアルカイツクスマイルだ。

誰もが見惚れる仕草で手を差し出した。

『さあ、今日もよろしくね。僕のアルバイト君』

カレは何を考えているのか？（前書き）

今日もステキなハナキンがやってきましたね　こんなダルダル続く
小説読むより秋の夜長にするコトはたくさんありますよ！！　いつぱ
い楽しまなきゃっ……　と言いつつ、読んでいただいたらとっても嬉
しい作者なのでした。

カレは何を考えているのか？

「殿下、お車の準備ができました」

どこか寝不足気味なペスが目をしばしばさせながら、アルの側に寄ってくる。

心なしか、癖のない坊っちゃん刈りに寝癖がついている。でもどんな絶不調でもさすが王子様至上主義のお犬様。

アルの側にいるあたしにきつと鋭い睨みを向けてくるのを忘れな

い。

ペス対マンガース状態。

あたしも思わず変顔で対抗してしまった。そんなあたし達をアルは何も言わずに面白そうに見つめている。ペスはふいつとあたしから視線を外し、アルを促す。

「さあ、殿下。こんな子どもに構ってないで」

ん？ちよつとカチンときたぞ。絶対にあたしのことを悪く言ったんだ。

軽蔑するようなその視線にあたしはむっと眉を寄せた。

「言いたいことあるならちゃんと言えがいいのに！男らしくない！」

あたしをちらりらと見てくるペスに聞こえるか聞こえないかの声で勝負を仕掛けてみた。

けれどペスは何も言わず背を向けるだけ。

「さあ殿下、早く。まったく日本は朝から騒々しくていけません

ね」「

むっ無視か。いや聞きとれなかったただけかな。それにしても対応冷たくない？こっちを一つも見ないなんてさ。

「ああ……ありがとう。アントニオ。それから……」「

その清々しい無視っぷりにアルも苦笑して答える。

「「なんでしょうか？」「

「「あまりに大人げない対応だね。君らしくない」「

「「そ、それは……」「

何事かを言い含めるアルにペスが心底嫌な顔をしながら、言葉に詰まった。

けれどアルはペスの言葉を待たずに続ける。

「「いい訳はいいよ。彼女には最上の敬意を払うように」「

優しい口調だった。

でも有無を言わせない響きにペスの顔が強張る。

そのまま頭を下げるとペスは緊張した面持ちで、アルに敬意を表す。

「「御意」「

ペスの返答に一国の王子らしく鷹揚と頷くと、颯爽と歩きだす。そうなるともう世界の中心はアルのもの。

ホテルにいる全ての視線がアルに注がれても、その視線を物とせせずスポットライトが当たったステージを歩く。

注目されればされるほど彼の魅力は溢れるのかな？

朝日を受け眩く輝くアルを見つめながら、そう思わずにはいられなかった。

ホテルのエントランスを出たところで、待ち受けていたのは今日も今日とて険しい顔の狩人。

でもその顔が少しだけ優しく見えたのはきつと彼の本性を知ったから。

警備のためにいる日本のSPの中に知った顔を見つけ、あたしは嬉しくなった。

幸村さんがそこにいるってだけで、心強く感じてしまう。

「ゆつきむらさん！おはようございま〜す！」

表情の読めない冷めた面差しに、満遍の笑みを浮かべて手を振ってみた。

そのあたしの行動が意外だったのか、冷徹な徹仮面が一瞬ずれて戸惑ったような素顔がのぞく。

そういう顔見るとレアだなんて思ってしまう。ちょっともうけもの？

周りのSP達も崩れた表情の幸村さんに異様な視線を送っている。やっぱりああいう表情はレアなんだ。同僚すらなかなか見れないのかも。

そう思うと声を出して笑ってしまった。

しかしSP達ならいざ知らず、他の人々は誰も幸村さんの顔の変化など気にしてなくて。あたしだけがおいおいあの子急に笑い出したぞ、やばくね？って感じの視線を向けられた。

あはは……完全に不審者扱いだな。でも今は全然気にならないや。幸村さんに会えただけで、余裕のない心が平静を取り戻す。

『おはよう。今日も一日よろしく。ミスタ・ユキムラ』

警備の一段に埋もれるように、気だるげに佇む幸村さんの側に差し掛かった時、アルは不意に足を止めた。

爽やか120パーセントの笑顔を爽やかさとは真逆のところにいる幸村さんに向ける。

まさか声をかけられるとは思っていなかったらしい幸村さんがアルの言葉に眉をひそめて慇懃に答えた。

『おはようございます。本日もご機嫌麗しいご様子で何よりです。願わくば今日こそは予定通りに行程が進みますよう』

何を言っているか分からないけれど、アルの言葉に流暢な英語で答えた幸村さんは渋い表情のまま目を伏せている。

そんな幸村さんにアルはふっと笑みをこぼして答える。

『まあ最善をつくすよ。……それよりもミスタ・ユキムラ。シャツに汚れが付いているよ。貴方ともあろう人がそんなところに気を配り忘れるなんてね』

自分のジャケットのポケットから白いハンカチを取り出すと、それを幸村さんの手に押し付ける。

そして、自分のシャツの襟を指し示したみせた。

『うう。このハンカチで拭くといい。ああ、ハンカチは返さなくていい。貴方にあげるよ。後は貴方の好きなようにしてくれ』

完璧な王子様スマイルを惜しげもなく、無表情の幸村さんに向けるとその側をすりと抜けていく。

ただあたしの気のせいかな？

幸村さんから視線を逸らそう瞬間のアルの顔。

清廉さんなんて欠片もない、触れれば切れそうなほど冷酷に見えた。でもそれは一瞬のこと。

すぐに慈愛に満ちた表情を浮かべると、孤高の狩人に背を向けて悠々と遠ざかる。

その背を幸村さんが睨むように追っていく。

でもアルは振り向いたりしない。

まるでさつきまでのやり取りなどなかったかのように、微笑を浮かべたまま待ち構えていた黒塗りのリムジンに乗り込むために、その長身を典雅に折り曲げた。

ロミオ様の名前のヒミツ（前書き）

おお……ロミオ、あなたは何故ロミオなの？というのには有名な台詞ですね！！ロミオが何故ロミオなのかわたしには分かりませんが、とりあえずアルが何故アルなのかは分かります。ズバリ、ただの成り行きです。

ロミオ様の名前のヒミン

今日の日程はまず……。

『千佳〜！これどうかな？あはっ面白い形だね』

アルが笑顔であたしにトンデモなくでかい壺を押し付けてくる。落としてはいけないと、慌てて抱きとめるとずっしりした重みが腕にかかった。

こ、こんなに重みのあるものを片手で掴んでたの？アルったら。それをさも百均プラスチック製花瓶を持っているかのように押し付けてくるなんて……。

なんて性格悪いの！あたしが思わず落としたらどうするつもりだった訳？

も〜！嫌がらせが綱渡り級にスリリング過ぎ！
アルの奇行のせいであたしの心臓は動揺しまくりだ。

息を止めたまま、押しつけられた壺に視線を落とす。

白くて、滑らかな手触りのこれは、もしかしなくても白磁とかいうやつだろうか。

美術の教科書とかでしかお目にかかったことはないが、なんて気品に満ちた色合いなんだろう。

この上薬の艶といい、独特の色合いといい、本当にいい仕事しますね。

物の価値なんて分からないけれど、壺から出るオーラがもう百均のそれとはけた違いだ。

ごくりと唾を飲み、絶対に値札の0を数えないと心の中で決めた。

「ちょ、ちょっと！元の場所に戻してきなさいよ！こんな割れ物押

し付けてきて！嫌がらせ以外の何ものでない！」

我慢の限界を振り切ったあたしの叫びが高級百貨店の島屋の催事売り場にこたえました。

そう。今あたし達はショッピングに来ていたりしています。

アルたつての希望で今日は昼までゆっくりショッピングなんだとか。

○島屋に入った瞬間、アルは目をキラキラとさせて辺りを見渡しました。

意外とお買い物もの好きなのかな？

王子様の意外な一面に目を丸くしていたあたしに答えをくれたのは、○島屋で現地集合したセバさんだ。

「日本人の日常を覗いて見たいとおっしゃってましたので。本当は商店街や卸売場などにお連れしたかったのですが、警備上の理由で今回は却下となってしまっ……」

先に行くアルの背を遠い目をして見つめているセバさんはきつと本当にアルのことを考えているのだろう。

本当はもつというんなところに連れて行ってあげたかったのかな？

そうだよね。なかなか日本に来ることはないんだから、せめてこのヴァカンスの間だけでも多くのことを知って帰ってほしいよね。

「今回のア……殿下の旅行はセ……アルジャーノさんが考えたんですか？」

ふと気になってセバさんの顔を覗き込んで見ると、今日も穏やかな小さな瞳が優しく和んだ。

「ふふ…アルって呼んで下さっていいですよ」

「え？」

「殿下にそう言われているのでしょうか？リチャード・アルバート殿下のニックネームを知っている人はそういません。ご家族や限られたご友人が使われるぐらいです。だから自慢できることですよ」

にこつと笑ったセバさんは全てお見通しとばかりに頷いてみせた。一応アルバイトという身分の手前、周りに人がいる時は殿下と呼んでたのに、どうやら全然ばれてたみたいだ。

隠していたことを見透かされ、ちよつとだけ気恥しい。思わず下を向いて前髪を撫でながら、もごもごと口の中で次の言葉を探す。

「そつだ。殿下の本名をご存じですか？」

穏やかな瞳が何を思いついたように細められた。

その問いにあたしはふるふると顔を振って答えた。

リチャード・アルバートさんってことしか知らないや。これが本名じゃないの？

あたしはリチャードがファーストネームで、アルバートがファミリーネームだと思ってただけど違うのかな？

日本なら渡辺さんをナベさんって呼んで、鈴木さんをすーさんとか言うように、シーリエントではアルバートさんをアルさんと呼ぶのかなって。

王族に対して意外にフランクなあだ名だなんて思ってたんだけど、

「ご家族が使う愛称が苗字っておかしいよね？」

「リチャード・アルバート・レオン・クロイツ・エンディー・シーリーグランティルトというのですよ」

「なが！」

思わず突っ込んでしまったあたしにセバさんは苦笑して答える。

「日本の方はそう思われるでしょうね。シーリエントでは高貴な身分であればあるほど長い名前になる習慣があります。最近では貴族であっても普通の名前を付けることもありすが……」

「へへ貴族かあ。なんか遠い話だね。えっとそれで、どこまでが名前なんですか？」

「最後のシーリーグランティルトというのがファミリーネームになります。それ以外は一応ファーストネームになるのですが、王族の慣習として過去の王の名や父親などの名前を入れるので普通の貴族よりは特に長くなるのでしょね」

「じゃあアルの名前も色んな人から拝借してるって訳？」

シーリエントトリビアにあたしはポカンと口を開けて、何度もへくつと感嘆を洩らした。

そんなちよつとぬけた子にセバさんは若干苦笑しながら、それでも真面目に答えてくれる。

「拝借っていうのはちよつと違うかもしれませんが……偉大な王達にあやかりたいという考えの方が近いかもしれませんね。リチャ

ードという名は殿下の祖父君、前王陛下から頂いたものです。ですから誰もその名で殿下のことを呼べないのです」

ああ、だから二つ目のアルバートで、アルさんな訳ね。

やっと合点がいったあたしは、ポンツと手を打つ。

「うわゝすごいな。そういう話を聞くと外国の人なんだなって思う」

ゆつくりと一団の後ろを付いていきながら、あたしはセバさんの話に感心していた。

セバさんもアルも日本語が通じるからどこか外国人ってイメージがなかったけど、でもそのホームラウンドを聞くとあたしとは違う国の人なんだと思わされる。

「違う国に来て初めて自分の国を客観的に見ることができません。今回、殿下には色々とシーリエントにはないところを見てほしいと思うのです」

ふと言葉を切ったセバさんが足を止めた。

あたしもつられて足を止めて、セバさんの言葉の続きを待った。

「ですから千佳さん、殿下のことをよろしく願います。殿下は貴女のことを心から慕っている様子。千佳さんがいれば最後まで楽しんでいただけることと私もほっとしております」

「そ、そんな……」

セバさんはいつもあたしの身の丈に合わない讃辞をくれる。

ちよっと体に合わない服を無理に着てるような居心地の悪さに、こそばゆくなってしまう。

あんまり褒めないですよ。こういう扱いに慣れてなくてどうしているのか分からなくなる。

「昨夜も大騒ぎをされていたのでしょう？ゲームの音がずっと聞こえたと護衛の者から聞いてますよ？フッフ。朝までずっと騒がしかったと」

ちよつとだけあたしをからかうように和んだその瞳に、あたしは全力で答えた。

「大騒ぎなんて！アルがマリオカートで意地悪ばかりするから！そ、それに……」

本当は朝まで騒いでなんかない。

だってあたしは何時の間に寝てしまって、そして起きた時に側にあったのは……。

今朝、起き抜けに目にした眩い笑顔に、体が化学反応を起こしてリトマス紙状態だ。

何？あたし今、酸性な訳？このままじゃ体がとけちゃうよ。

それ以上は言葉にできなくて、どうやって誤魔化そうかとやきもきするあたしは顔を真っ赤にさせて言葉に詰まった。

「クスクスツ。殿下がマリオカートというゲームをなさったのですか。そんな姿、国では想像できませんね」

「そ、そんなものなんですか？アルは旅行だから羽目を外してるの？」

普段のアルを知らないあたしはセバさんの言葉に困惑するしかない。

でもあたしを見つめるセバさんの目は変わらずに優しい。

「さあ？私には分かりませんが、でも本当によかったと思っていますよ。千佳さんがいて下されば、全てがいいように進む気がします」

それはちょっと買い被りすぎでは……？

セバさんの言葉にあたしは顔を赤くしたまま、はにかんで頭を掻いた。

デパート狂想曲（前書き）

訳の分からない方向に迷走中の本作。ホントに気軽に読んで下さいね！

デパート狂想曲

まずは日本らしいものを見たい。

そんなアルの意向を汲んでか、案内されたのは催事売り場で開催中の日本の伝統工芸品展。

日本が誇る割れ物達が、私高価なのよ〜とお高くとまってお上品に並べられている。

その間を縦横無尽に駆け巡るアルの背にあたしは目まいがした。

『ねえ、こっちのチャーミングな狸の置物は何？魔除け？』

さっきのあたしの叫びなど聞く耳もたず。

陳列棚にお澄まして並んでいるあの有名な信楽焼のファンキータヌキをひょいっと持ち上げて、掲げてみたり振ってみたりと、割れ物と果敢にスキンシップを図っている。

ちよつと絶対におかしいでしょう。なんで割れ物を観察するのに振ってみる訳？

振って何かが出てくるの？

「だからなんでそう簡単に手に取る訳？おもちゃじゃないのよ！割れたら誰が責任とるのよ〜！」

慌てて壺を陳列棚に戻して、あたしはアルの横暴を止めようと駆け寄る。

でも相手はキラキラとした笑みを浮かべて、タヌキを抱き締めている。

くっそ〜。さすがアル。ちよつと間抜けですっポンポンのタヌキを抱き締めても絵になるというか、タヌキの顔が締まってダンディに見えるというか……。

「タヌキを離しなさいよ。これは置物なの。置いて見るものなの！」
アルの手からタヌキを奪還し、あたしはほうつと息をついた。
ああ、早くこの売り場を離れたい……。
なんて切実に思っているあたしをさらに追い込むアルの言葉。

『チカ、それが欲しいの？なら仕方ないな。……すいません。こちらの女性にこのタヌキを。ええ、包まなくて結構です。手で抱えて帰るそうなので……』

側でアルに見惚れている女性の店員さんに爽やかな笑みをこれでもかと振りまく。

ん？なんだろう？何か不穏なおことをおっしゃいました？

こういう時の第六感はいたい当たってしまうんだよね。

硬質なタヌキと同じような顔をしたあたしに店員さんが営業スマイルを向けてくる。

「それではお印だけさせてもらいますね。よかったですね。お優しい王子様で」

あたしの抱いているタヌキに赤いリボンを巻きながら、店員さんが羨ましそうに微笑を零す。

え……お印だけって何？これはスーパーで買い物をした時に言われる言葉ではありませんか。

どういうこと？今この瞬間、あたしはタヌキをテイクアウトして
るわけ？

なんでそういう流れに……。

『よかったね。タヌキ、欲しかったんだろ？僕の腕から奪うぐらい

に

犯人はお前だっ！

なんて推理小説でお決まりの決め科白を吐くのが遅すぎた。

言葉の意味を理解した時には、あたしは真っ赤なりボンのタヌキを抱き締めたまま売り場を後にしていた。

あたしの側にいるのは完璧理想の王子様スマイルを浮かべるふとどきな小悪魔。

ニコニコとしたその顔の奥で、蒼い瞳だけは意地悪に輝いている。くっそ〜。まさかアルの仕掛けにいつの間にかかかってしまっていたのね。

絶対に割れ物なんて興味なかったんだ。

あの壺から始まる一連のことはあたしを困らせる布陣だったなんて。

こうなったらもう開きなってやる。

もらえるものならなんでももらうのがTHE貧乏の基本なのよ。

「ありがとう！これが欲しかったのよ！遠慮なくいただくわ！だ・か・ら！欲しくなってもあげないからね！」

間抜けで愛嬌たっぷりなタヌキちゃんを抱き締めたまま、あたしはこれでもかと歯を剥いてアルを威嚇してやった。

でもアルはクスクスと笑うばかりで、なんの攻撃にもならない。

くっそ〜絶対にアルをギャフンと言わせてやるんだから。

なんてアルバイトの癖に雇い主に対して下剋上の野望を抱いたあたしは、ギラギラと燃える視線でアルを睨みつけてやった。

そのまま階を変えてあたし達一行は進む。

途中何度もアルの奇襲をかわしながら、逆に仕掛けては呆気なく

返り討ちにされて、あたしのやきもき感は最高潮だ。

ああ、バカバカしいな……。

あまりに子どもっぽいやり取りに、ふと我に返りあたしはがつくりと肩を落とした。

アルは今、少し離れたところで男性服を見ている。

あたしは少し手持無沙汰になり、アル達一団からちよつと距離をとってみた。

こんな高級百貨店なんてなかなか足を運ばないから、こういう風に振る舞えばいいか分からなくて困る。

店員さんが寄ってくるだけで焦ってしまつて、なんだか情けない。アルみたいに、誰が来ても自分らしく自然体のまま、優雅にいれる人ってそうはいないんじゃないかな？

ホントは色々気になるんだけどね。でも手を出せる値段の物なんてないことぐらい理解してる。

うちはしまらーブランドでも十分高価なんだもん。

そうそう、服は値段じゃなくてセンスでしょう。なんてノーセンスのクセに強がってみたりして。

まあ見るだけでも楽しいかな。そうそう。折角来たんだから楽しまないとね。

手を出せないのは仕方ないことだもん。

落ち込んでもすぐに浮上するのがあたしのいいところ。

そんなことを気にするよりも、もつと素敵な発見があつたじゃない。

さつき見かけた子供服売り場にあつたワンピース、零佳に丁度の大きさだつた。

お出かけ用にああいうデザインの服、作ってあげようかな？

その近くにあつた男の子服は一佳にピッタリね。

一佳はすぐにやんちゃしてズボンを破るから、膝にアップリケをつけて破れにくくしなくちゃ。

さつき見かけたマネキンの服はきつと十佳に似合うと思う。

落ち着いた色合いだから、意外に服の組み合わせに煩い十佳も文句は言わないはず。

こつやって色んな服を見て、自分で評価して見るのも楽しいもんね。

じゃあ次は百佳ね。あのつぽで、いつもダラダラした服しか着ない百佳にはどれがいいかな？

あたしは百佳に似合う服を探して、きよろきよろと視線を巡らせた。

ふと目に留まったのは、黒のキャップをかぶって粹なポーズを決めているマネキン。

白のランニングに、フード付きのパーカー。下は派手めなバックルがアクセントなベルトとだぼつとしたズボン。

ちよつと崩したように着こなすマネキンの顔にアルの姿が被った。

そういえばきつちりした姿以外見たことないかも。

昨日の夜だつてYシャツだつたし……まあ、崩し過ぎなくらい胸元は開いてたけど……。

すつと筋の通った首筋から綺麗な鎖骨のラインを思い出し、あたしは勝手に照れてしまった。

なんであんなにもエロく着こなせるんだらうつて……いやいや、何考えてるのよ！あたし！

あれはR18よ！こんな日中にお茶の間にお送りする映像じゃないんだから！

そ、それよりも今は百佳の服を……。

一人テンパつて挙動不審なあたし。

公衆の面前で思わずロボットダンスを披露してしまうほどに動揺している。

そんなあたしを小さな男の子が指さした。

「ママ、あの人なにしてるの？」

「しっ！見ちゃいけません」

まさかこんなベタな科白が自分に向って言われる日がこようとは

……。

思わずアーンポーズであたしは固まってしまった。

よりによって志村けん……なんでもっと可愛いポーズにしなかつたんだ、あたし……。

変な自己嫌悪に陥るあたしの背に更なる動揺が近寄っているなど、バカ殿には理解できていなかった。

『どうしたの？一人パントマイム？』

……。

耳から入りこむ甘い媚薬に体中に電流が流れた。

ぎぎぎつとロボットダンスのまま後ろを振り返れば、想像以上に甘い笑みがあたしに向けられていた。

『チカは一人で楽しそうだから声をかけるタイミングを失っちゃって』

ニコニコとしている彼は絶対にあたしの一部始終を見ていたんだと思う。

見ていてずっと陰で楽しんでたなんて！絶対に性格悪いわよ！

も、誰よ！こんな爽やかな腹黒のことを気さくで誠実とか言った奴！

今すぐここに出てきて訂正しなさいよ！全世界に向かって！

ってか、偉大な過去の王にあやかるために長い名前をつけてもらっているんですよ。

偉大な過去の王様〜！ダメな性格の人が一人まぎれてますよ！これじゃシーリエント王国の危機ですよ！

それでもって一番はアルのおじいちゃんよ！リチャードなんたらさん、あなたの名前を継いだお孫さんは、じっちゃんの名にかけて全力で腹黒なんですけど、これでいいんですか？いやよくないですよー！

……なんて言えたらどれだけいいか。

でも頭が真っ白なあたしは白目を向いて、パクパクと口を動かすしかできない哀れなピエロ。

パントマイムもできないピエロはただのピエロだ！じゃなくてピエロ失格だよ。自分さえも道化で誤魔化せないなんて……。

『千佳は放っておくとすぐどこかに行ってしまっただから。ちゃんと捕まえていないといけないね』

呆然としたままのあたしの手をさらっと掴むと、愛嬌たっぷり小首を傾げてみせる。

な、なんでそんなドストライクに可愛いポーズしちゃう訳！思わず鼻血が出そうになる。

「なっなっ……」

『これでどこにも行けないね』

も〜なんでこの人、こんなにあたしの余裕をなくすことばかりするかな？

この確信犯に翻弄される自分が悔しい。ただ、今は……。

「夕、夕又キ！片手で夕又キは無理だから！」

自分から手を振り払えないへたれなあたしはタヌキを武器に後ず
さるしかできなかつた。

胸いっぱいのプレゼント（前書き）

今日も1日お疲れ様です！まだ少し余裕のある方、ちょっと立ち寄っていかれませんか？

胸いっぱいプレゼント

『ああ、タヌキが重たいのか。ごめんね。気がつかなくて。じゃあ、これも部屋まで運んでもらおうか』

にこつと笑ってあたしの手からタヌキを奪ったアルは、後ろを向くとトランプの兵士の一人に声をかけた。

「君、これも彼女の部屋に運んでくれ。扱いは十分気を付けるように」

ん？何を指示してるんだ？

それよりもアルをガードするトランプの兵士達はなんで皆揃いもそろって手に大きな紙袋を抱いているのかな？

アルが何かを買っているようには見えなかったんだけど？

あたしは目をパチクリしていると、遠くから別のトランプの兵士が手に見覚えのあるワンピースを下げた駆けてきた。

「で、殿下。失礼します。このワンピースは何色でしたか？赤のチェックとピンクのチェックがあるのですが……」

グラサンの下の顔は非常に恐縮していて、なんだか滑稽だな……なんて他人事のように笑っている場合じゃない！

そのワンピース、見たことある！いや、見覚えがあるどころじゃないよ。さっきの子ども服売り場であたしが手に取ったやつだ。

あれに似たデザインのワンピースを零佳のために作ろうと思ってたから見間違えるはずがない。

目を丸くして、アルとトランプの兵士のやり取りを見つめる。

「な、なんで？なんでそのワンピースがここに？」

もしかしてアルもあのワンピースを気に入ってたってこと？子ども服だよ？女の子用だよ？……そ、それってロリコン……。驚愕の事実に行き当たったあたしは、はっとアルの方に顔を向けた。

こつちを見ていたアルと目が合う。

あたしの未知との遭遇フェイスが気に入らなかったのか、アルは整いすぎの顔を面白なさそうに歪めた。

そしてぐいつとあたしの頬をつねってきた。

『その顔、気に入らない』

「いった〜！何するのよ！王子はロリコンだって呟いちゃうわよ？いいの？」

全世界に呟いちゃうぞ！オバマ大統領も見てるんだぞ！

つねられて赤くなったのか、触れられて赤くなったのか分からない頬を押さえながら、アルを睨みつけてやった。

そんなあたしにアルはふつと意地悪小悪魔の笑みを浮かべて、片頬を引き上げてみせた。

ずいつと顔を寄せるとあたしの耳をひっぱり、ぞくぞくするような吐息を吹きかける。

「ツイッタ でもウイキリークスでも勝手にしてくれ。ただ……やるからには覚悟を決めろよ。僕は何倍にもして返す主義だから」

すつと顔を離れた危険人物はすぐに誠実な王子様の仮面をかぶり、何事もなかったように澄ましている。

でもさっきの科白を印象づけるように、目だけは好戦的に輝く。

薄くて形のよい唇が小さく動く。

ホ・ン・キ。

あたしの耳にだけ届いた艶美で極上の挑戦状。

でも、ビビリでヘタレなあたしは胸を張って受け取れない。

うぐつと言葉に詰まってやり返すこともできず、さらっとあたしに背を向けたアルの後ろ姿を睨むことがせいっぱい。

余裕綽々のアルは優美な仕草で顎をしゃくると、トランプの兵士に苦笑を向ける。

「君、千佳がどっちのワンピースを手にとっていたか見てなかったのか。観察力が足りないな」

「も、申し訳ありません」

「まあいい。色は赤だ。ああ、そうだ。そのワンピースに合うカバンと靴も探して来てくれ」

「は、はい！」

アルから何かを指示された兵士は慌てて駆け出していく。

な、なにになに〜これはどういう状態なのでしょう？誰かあたしに説明をプリーズ。

ポカンと目を見開くあたしがあまりにも可哀想だったのか、そつと近寄ってきたセバさんが教えてくれる。

「殿下がぜひ千佳さんにプレゼントを」と。こちらの我がままで御兄弟にも寂しい思いをさせてしまって申し訳ないので心ばかりの物を送りたいとおっしゃって。ただ千佳さんは面と向かって欲しいも

のを聞いても遠慮なさるだろうと殿下がおっしゃるので、こちらで勝手に千佳さんの手に取った物を購入させてもらいました」

え？あたしのためのプレゼント……。しかも手に取った物を購入って、あたし、結構適当に手にとったような……。

セバさんの有難くも戦慄の走る言葉にぎよつとなつて、すばやくトランプの兵士達に目を向けてみた。

大きな包みが一個、二個、三四の五の……。ダメだ。これ以上数える勇気がない。

「そ、そんなもの受け取れません！ってかアルバイトのあたしにどれだけ気をつかってるんですか！」

思わずセバさんに向かって大声をあげてしまった。

「まあまあ殿下のお気持ちですから気にせず受け取ってください」

なんてセバさんにはこつと笑うけど、でもダメでしょう！どんな金銭感覚してるんだ。手に取った物をダイレクトにプレゼントってあまりに住む世界が違いすぎて目まいがする。

「ダメです！アルバイトを甘やかさないください！そうでなくてもあたしは高い賃金をブン取ろうとしてるのに！それに！それはシリエントの税金で賄われてるんでしょう！なら断然受け取れない！税金の無駄遣いは断固反対です！」

噛みつかんばかりの勢いのあたしにセバさんは目を瞬いて、困ったように首を傾げた。

「そのようなこと気になさらなくても……」

「気にしますよ！シーリエント国民の反感を買いたくないですもん！」

なんとか思いとどまらせようと、思いつくままに口に出した。

でも間違っていないよね。高いお給料をもらうだけでも申し訳ないのに、それとは別に高級子ども服のプレゼントなんて、シーリエント人じゃなくてもムカついちゃうはずだもん。

「ああ、それなら大丈夫」

合点がいったとばかりに大きく頷くセバさん。

「これは本当に殿下からのプレゼントですよ。シーリエント王国の税金ではありません。殿下個人がお支払なさってますので」

「いやいや殿下個人って言うても元をたどれば税金……」

「いいえ。殿下はいくつか特許をお持ちですし、そうでなくてもシーリエント王国の伯爵の爵位をお持ちですから、領地からの収入もございます。そういえば最近株などにも手を出されてかなりの資金をお持ちとか。なので千佳さんが心配されることは一切ございません」

ちょ………なんですか、その全力の頷きは。

そんな説明で納得すると思うんですか！ってか心配だらけですよ！特許や株やあまつさえ領地まで持つてるティーンエイジなんてあり得る？

理解を超える世界観に足元が崩れる。

ああ、アルが遙か彼方のバベルの塔の頂上に見えるよ。
ただ茫然と住む世界の違う王子様の背を見つめた。
その視線に気が付いたのか、くるっと振り向いたアルは屈託なく
微笑む。

『それで、次は何が欲しい？』

ネ、ネクスト……。

次なんてないわよ！これ以上無駄な買い物なんてさせられるか！
も〜この壊れた金銭感覚をどうにかしてやりたい！

こんなにもひよいひよい買い物する人の側にいると、他人の財布
でも心臓悪いというか、もう見てられないというか。

誰かこの人に貧乏人をインテルしてあげて！

渦巻く感情を抑えきれない。

でもここではアルに向かって怒鳴れないし……なんて気持ちの悪
い状況なんだ。

それでも世界の貧乏代表は意を決して、アルに厳しい視線を向け
た。

「欲しいものはただ一つ！心の平穩をちょうだい！」

ファンタ仕掛けのオレンジ（前書き）

名作時計仕掛けのオレンジから拝借！

題名以外は何一つ似通ってないです。いつも通り……。

ファンタ仕掛けのオレンジ

なんとかアルの買い物攻撃を押し留めてみたけど、結局、今までに買ってくれたものはタヌキを含めてもらうことになった。

まあ一国の王子が返品というのもあまり格好よくないもんね。

まさかのプレゼント攻撃にこんなにもヒットポイントを減らすことになるとは……。

まだ昼にもなっていないのにあたしは疲労困憊だ。

は、早くホテルに帰って回復をはかりたい……。

アルは国へのお土産でも探しているのか、それとも日本人との交流を楽しんでいるのか、他の買い物客と楽しそうに話している。

そんな姿を遠くに見つめながら、もう何も手を取らないと決めたあたしはぐったりとベンチに腰掛けていた。

アルバイトだからこういう場では一番にアルの側にいて、色々説明してあげないといけないんだろうな。

でも今のあたしには無理。

ってことで買い物に付き合わされたお父さん達に紛れて、疲れた顔でベンチに腰掛けて遠くを見つめる。

ホントに、優しいのか意地悪なのかよく分かんないよ。

あたしの枠を完全にはみ出すアルは近くにいってもまるで宇宙の果てから交信してる気にさせられる。

でもプレゼントされた包みの分だけ、あたしのことを思ってくれていると思ってもいいのかな？

ただからかう為だけにいるんじゃないってうぬぼれてもいいの？
知らずの内に体の芯が熱くなる。

潤んだ瞳に映る眩い金髪が滲んだ。

「もう、訳分かんない……」

ぼつりと呟いた。

その時……。

ばしゃっ。

水が零れる音が聞こえた瞬間、時が止まった。

あまりの冷たさに体がビクリと飛び上がり、火照った体が一瞬にして凍りつく。

何かがあたしの頭に降り注いだのだ。

そう分かった時には、あたしは全身濡れネズミだ。

うわ！心臓が止まるかと思ったよ！

何、何、何が起こったの？

なんで百貨店にいるのに雨が降ってくるの？もしやクーラーの水漏れ？

いやいやそんな訳ない。クーラーの水漏れがこんな甘くてべとつく訳ないじゃない。

現状把握ができなくて、あたしはポカンとしたまま自分の体を見つめた。

白い制服のシャツは薄オレンジに染まって、スカートのプリーツに添って滴る水滴は足元に水たまりを作っていた。

ぺそつと力を失ったポニーテールが首元にひつつく。

ああ……これ、ファンタオレンジだ……。

意外に冷静な頭がそこだけを抜け目なく判断する。

でも原因が分かってもどうすることも出来ない。これがクーでもなっちゃんでも状況は変わらないのだから……。

そんな可哀想なあたしを更に嘲るような声が遠くから聞こえた。

「うわ〜大分可哀想」

「ジュースを頭からかぶるなんて、器用な子」

クスクスと漏れる忍び笑いはあまりにもあけすけなくて、体の奥からさあつと体温が失われていく。

悲しいのか腹立たしいのか、不安定な胸の奥がぐらぐらと揺れて、溢れだしそうな感情を抑えるように必死に唇を噛んだ。

声のした方にきつと目を向けると、あたしと同じ年くらいの女の子が二人、手に紙コップを持ってあたしの方を見て笑っていた。

彼女達の表情に、かつと頬が熱くなつた。

このまま感情に任せて駆け寄ってやろう……。

咄嗟にそう思ったあたしの足を止めたのは、遠くに見えた麗しい金色だった。

多くの人だかりの中心、どれだけ人に囲まれてもけして埋没しない非凡の人の存在に動きだした足を止めた。

いきなりオレンジ色の染まったあたしに、周りの善良な買い物客の皆さんも不思議そうな視線をあたしに向けてくる。

「あれ？あの子、あの……」

「シーリエントとかいう国の王子のアルバイトしてる子だろ？ここで何してんだ？」

「あの子がいるってことは王子も？」

視線につられて更に増える視線。

そうだ。ここで感情的になってはいけない。あたしへの評価はアルへの評価につながる。

アルに恥をかかせちゃダメだ。

ぐつと顎をひくと、あたしはこれでもかと大きな声を上げた。

「あちゃ〜こんなにごぼしちゃうなんて最悪！すいません。すぐに拭きますね」

素早くポケットからタオルハンカチを取り出すと、床に零れたジュースを拭きとる。

半分以上があたしの制服に染み込んだようで、小さなハンカチでもすぐに拭きとれた。

あたしの言葉に注がれていた視線が一つ、また一つと去っていく。

「うわ〜こんなにも濡れちゃうなんて……。と、とりあえずトイレに……」

足早にその場を後にして、全ての視線を避けるようにフロアの隅へと逃げる。

もう少し我慢だ。もう少し。この舞台から降りるまでは堂々と胸を張っていきなきゃ。

こんなにも視界がかすむのはジュースが目には沁みてる所為で、決して涙なんかじゃない。

だから千佳、もう少しいけるよね。どれだけジュースの雫をこぼしても、瞳からは最後までこぼしちゃうダメ……。

そう自分に魔法をかけたのに……。

『大丈夫か、君』

正面から大きな手に両肩を抱きとめられた。
思わず上げた顔を一瞬の我慢が伝う。

女王陛下の仕立て屋サン（前書き）

今日はキレイな満月ですね！わたしの見上げる空だけでしょうか？
まるっとした月を見ると誰かに言いたくなるんです！皆様はそんな
コトありませんか？

さて、ステキな夜をお過ごしの皆様、お月見のお供に本作はいかが
でしょう？って、ゴチャゴチャやかましそうですね。

女王陛下の仕立て屋サン

滲む視界にアップで映ったのは、金髪碧眼の厳つい顔。
近寄りがたい強面が、心配げに眉を寄せていた。

『すぐに替えの服を……』

『コリン！まったく貴方という人は、なんて間抜けなんでしょう！』
初めてちゃんと向き合ったハートのジャックの声を遮るように一際通る女神の美声が響いた。

その声に弾かれて、あたしもコリンちゃんもその美しい人へと視線を向ける。

キツとつり上がった形のよい瞳は怒りに潤んでいる。
カツカツと高いヒールを高らかに鳴らし、女王陛下があたしの方へと向かってきた。

周りの買い物客はその美貌に圧倒されて、道を譲るしかできない。
その場の羨望の眼差しを一身に受け、それをさも当たり前のようにハートのクイーンはあたしの方へと近づく。

こ、この表情は、もしかかなりのお怒りですか？
近くなるにつれ、女王陛下の威圧感に圧倒されて動けなくなる。
ですよね。ただでさえ訳の分からない存在なのにお宅の王子様にこれでもかとプレゼントをもらって、その結果が濡れネズミで視線を集めるなんて……。

そりゃ、ジューズを零したのはあたしじゃないけど、でもそれを事前に察知できなかったあたしにも非はある。

昨日も同じような意地悪をされたんだから今日もそうなるとは想像に難くないことだもん。

アレクサンドラさんがお怒りになるのも納得な訳で……。だから十分分かりましたから、もう許して下さい。あなたの涙交じりの視線が一番怖いんですけど！ ひつと息を飲んだあたしの前に胸を反らして立ちほだかる女王陛下。
下。

びしつとあたしの胸に指をつきつける。

『貴女みたいな浅はかな子は絶対に認めてあげないけど、でも今の対応だけは褒めてあげるわ。よく殿下の為に耐えましたわ』

うわ！絶対にお怒りモードだ。

早口の英語は理解不能だけど、でもその表情ですぐに分かる……。はずなんだけど……。

素早く自分の着ていたスーツのジャケットを脱いだアレクサンドラさんがあたしの肩にそれを掛けてくれた。

あり……。これはどういうことだ？

アレクサンドラさんの真逆の反応に、あたしは鳩豆状態だ。

目をこれでもかと思開いて、美しい人の横顔を見つめる。

でもあたしの視線など一切気にしない女王様はその濡れた瞳をコリンちゃんに向けていた。

「コリン、貴族の端くれなのに女性の扱いも心得ていないなんて恥以外の何物でもありませんよ」

「す、すみません。サーシャ……」

「サーシャと呼ばないでって言うてるでしょう！本当に貴方は覚えが悪くていけません……」そんなことよりも早く貴女をなんとかしなければね」

きつと睨む視線をコリンちゃんからあたしに向けたアレクサンドラさんはそのつり上げた目を少しだけ和ませた。そのふとした表情の美しいこと。

硬質なダイヤモンドの輝きの中に相反する柔らかい光の魅力を見つけたかのよう。

自分の立場を忘れて思わず見惚れそうになる。

そつと頬に手を当てられ、同性なのにドキンと心臓が弾んだ。

『私が貴女をプロデュースいたしますわ』

そう言うが早いか、アレクサンドラさんがあたしの手を掴んで近くの店のフィッティング・ルームに押し込んだ。

「え？え？あのアレクサンドラさん？」

しゃつとカーテンを引かれた所為で、向こう側の様子がさっぱりだ。

どういうことだ。

アレクサンドラさんは怒ってないの？もしかして心配してくれてる？

まさかのアレクサンドラさんの反応にあたしは困惑した。

女王陛下の高圧的な優しさが未だに信じられない。

でも事態はあたしを置いて進んでいく。

カーテンの向こうでは女王陛下の仕切る声が聞こえる。

『その店員。これから私が言う物を直ぐに手配なさい。何をもちたしているの！』

「は、はい！女王様」

「コリンは今すぐに1階の化粧品売り場に行つてきなさい！いい！エステイローダーのピュアカラーリップの75番よ。ファンデーシオンはシャネルでいいわ。ああ、もちろんクリニークの化粧水と乳液も忘れてはいけませんよ」

「りよ、了解……」

「なんですか！その歯切れの悪い返事は！」

俄かに騒がしくなったカーテンの向こうに聞き耳を立てていると、誰かが側に来たのが分かった。

「しみになるから早く服を脱いだ方がいいんじゃない？今に女王さんが代わりのものを用意してくれるから」

その淡々とした声ですぐに誰か分かった。

「代わりのものってどういうこと？ヤマ……ダグラスさん！」

カーテンの隙間から顔だけ覗かせると、そこにはフッティングルームの壁に背中を預けて今にも眠りにつきそうなヤマネ君がいた。

彼が眠れないほどの大声で、答えを急ぐように問う。

「そのままの意味。女王陛下も女性だからね、君をあのままにしておけなかつたんだろうな。本当は殿下もすぐに飛んでいきそうだったんだけどね、でもこの役を殿下がすると更に君が反感を買うから俺が止めたよ。まあまさかアレクサンドラ嬢が動くとはね……予想外……」「俺はグレンさんかと思ったよ」

相変わらず何を考えているか分からない声だ。
彼の言葉の意味を把握できなくてあたしは首を傾げた。

「それで……あなたはなんでここにいるの？」

「ん？ただの暇つぶし……」

暇つぶし……左様でございますか……でもまあ暇つぶしでもなんでも現状を教えてくださいるのは嬉しい。

セバさんはアルの通訳をしているからここにはこれない。

だからあえてこっちに来てくれたのかな？それはあなたなりの優しさだと受け止めてもいいよね？

「ミスタ・ダグラス！何をさぼっているのですか！そんな所で寝ている間があるなら彼女の服をクリーニングに出してきなさい」

びしつと飛んだ女王陛下の叱責に落ちかけていたヤマネ君の目がパチツと開いた。

「やれやれ……俺にも火の粉が……」

あたしだけに分かるように不満を零す。

面倒臭そうに頭をかくヤマネ君がなんだか今まで以上に近い存在に思えた。

「何か言いました？大体貴方は寝てばかりなのですから、こついつ時こそ役に立ちなさい！」

「御意。キャプテン・アレクサンドラ」

そんな2人のやり取りをカーテン越しに聞きながら、あたしはフツティングルームで一人笑い声を堪えていた。

やっぱりシーリエントの人たちは面白いな。やりとりを見てて飽きないというか……。

あははっ…笑いすぎてなんだか涙が出てきたよ。

頬を伝ったその雫はさっきの雫よりもあつたかくて、拭ってもすぐにあたしの心を潤す。

鏡よ、鏡よ、鏡さん。あたしね……（前書き）

長く続いても変わらず読んでくださり、ホントにありがとうございます！

鏡よ、鏡よ、鏡さん。あたしね……

流石は女王様だ。

人を動かすことに慣れているアレクサンドラさんのお陰で、あたしはあつという間に濡れネズミから脱出することができた。……できたんだけど……ちょっと、これは……。

自分の着ている服を見下ろし、あたしは困惑に眉を寄せた。

だってこんな高そうな服、怖くて着れないというか。袖を通して気が気じゃないというか……。

それ以前に……。

『まあまあが出来ね。そこそこ人に見せれる姿になったでしょう』

あたしの唇に最後のひと筆を塗り終えたアレクサンドラさんが満げに頷く。

そしてあたしに向かって、手鏡を差し出してくれた。

その鏡に映った知らない誰かの姿にあたしは目を瞬くしかない。

この完璧メイクを施された素敵なお嬢さんはどのどなただろう……。

これは嘔吐きの鏡なんじゃないだろうか。けして真実を映さない天の邪鬼な鏡……。

そんな妄想をなけば信じてしまいそうになるくらい、そこいた女の子が輝いて見えた。

いつもお決まりのポニーテールは半分だけをおだんごにし、残りは肩に落とされている。

その毛先が上品に内巻きカールをしていて、水色のワンピースの襟にかかる。

まつ毛はいつもよりよけいに量も長さもアップしていて、目を縁

取るアイラインと相まって通常時の倍目が大きくなっている。

類は上品な薔薇色に、唇は愛らしい桜色に、それぞれモデルチェンジだ。

いつもの下町らしさは微塵もない。

いつももつと短い制服のスカートを穿いているのに、フレアな膝上10センチのスカートに何故だか照れてしまう。

足を彩るお洒落な紺に白のレースが付いたミュールは足を踏み入れるのも申し訳ないほど繊細な造りで、穿いててすいませんと全力で謝りたくなった。

し、しかも高いヒールに体の安定が取れない、取れない。

「あ、あの…アレクサンドラさん、これ……」

泳ぐ視線をアレクサンドラさんに向けるが、彼女はそんなあたしの気持ちを一切組んでくれない。

『さあ、こんなところでゆっくりしてる間などありません。いつまでも殿下をお待たせする訳にはいきませんわ』

そう言うのが早いか、アレクサンドラさんがあたしの手を引っ張り、フッティングルームから連れ出す。

「あ、あの……」

『何を不細工な顔をしているのです？この私が選んだ服を着て、私自らメイクを施したというのに……。安い恰好でオドオドしているからバカな者に舐められるのです。その服装に合うように、しゃんと胸を張りなさい。今の貴女には誰も手は出せませんわ』

鋭い視線はそのまま、早口で何かをまくしたてるとアレクサンド

ラさんはふいつと顔を背けた。

その顔が少しだけ赤くなっているような気がするのはあたしだけだろうか？

少しだけ潤んだ瞳が愛らしい。

『さあ分かったら早く行きますわよ！』

いつも以上につんけんした声に思わず体がびくつとなったけど、もう怖くない。

掴まれた手を両手でぎゅっと握り返すと、驚いたようにアレクサンドラさんの足が止まった。

困惑に揺れた綺麗な瞳をじっと見つめて、自分の一番の笑みを浮かべる。

『な、なに？』

「サンキュー！サンキュー・ベリー・マッチ！えっと、その……アイム・ハッピー！すっごくくってなんて言うのかな？ああ、もどかしいな。ソーマッチ？モアーモアー？」

一生懸命にあたしの気持ちを伝えようとしてみた。

この胸について溢れだすあつたかな思いをダイレクトに表したいのに、あたしとアレクサンドラさんの間には言語という深い谷がある。

だからあたしはいつも弟たちに伝える以上に身振り手振り、表情でこの気持ちを届けなければいけない。

でも今のあたしになら簡単にその谷を飛び越えてアレクサンドラさんの側に駆け寄れる気がした。

あたしのこの胸の奥にある感情の泉を直に掬いだして見せれたらいいのに。

そんなことは無理だつて百も承知。

だから、ね！何が言いたいかというところ……もうこれが一番かな？
つまり、あたしの言いたいことは……。

「アイ・ラブ・ユーってことなの！」

息急ぎ切つて、大声で叫んでみた。

心から解き放たれた感情に、あたしは頬を紅潮させる。

胸の奥を爽やかな風が通り抜けて、周りの景色がいつも以上に煌めいて見える。

きつと今のあたしはすごくすつきりしたい顔してると思う。

そう。すごく嬉しくて、幸せで、それで一番に貴女のことが好きになったと伝えたかったの。

服を買ってもらつて嬉しいとか、素敵メイクをもらつて嬉しいとか、そういうのじゃないんだ。

あの場からあたしを助けてくれたことが嬉しかった。

ヤマネ君に後から聞いたんだけど、あの時アレクサンドラさんはあたしのとつた行動を褒めてくれてたらしい。

あの選択を間違いないよつて言つてくれて、情けないあたしにジャケットを貸してくれた。

それだけでも泣きだしそうに嬉しいのに、それ以上の優しさをあたしに与えてくれた。

その全てが、そしてその行動の元になったアレクサンドラさんの心がとても温かくて、ぎゅーっと抱き締めたくなる。

ずっとアレクサンドラさんには嫌われていると思つていたのに。

きつと今でも邪魔な子だと思つてるはず。それでもアレクサンドラさんはあたしを陥れようとした子達に対して、怒りを感じてくれて、あたしに手を差し伸べた。

曲がつたことの嫌いな彼女にとっては当たり前前の行動だったのか

もしれない。

それでもいい。邪魔な子でも、それでも自分の信念の赴くままに行動する彼女が清々しいのだ。

一番分かってもらえるであろうその言葉に、アレクサンドラさんは目をこれでもかと思開いてフリーズしている。

そして次の瞬間、ぼんつと音を上げて麗しい顔が真っ赤に染まった。

あ、あれ？あかし、何か選択を誤ったかな？

『あ、貴女は何を馬鹿なことを……』

うるたえて、急に手を振り上げたアレクサンドラさん。

わななく唇はあたしには聞き取れない言葉を呟くけど、いつもの自信に満ちた響きを感じられない。

いつもの完璧をどこかに置いてきたようなグダグダさだ。

年上の美女にこんなことを思うのは失礼かな？

でもそんな顔もとっても魅力的だな～なんて感心してしまう。

思わずポカンと見惚れてしまった。

その所為で、その背に不穏な影が近寄っていることなどまったく気がつかなかった。

「「照れちゃって。可愛いな～サーシャは」」

何時の間に側にいたんだろう。

アレクサンドラさんの麗しい顔のすぐ横で、細い目が光った。

マイフェアレディ（前書き）

今日も皆様お疲れ様でした〜！わたしはまだまだお仕事で、隙を見てコソッと更新です。

マイフェアレディ

「「なっ！何を言っで！」」

弾かれたように振り返ったアレクサンドラさんは、振り向き様に自分の背後にいる人物に裏拳を繰り出した。

が、相手は猫のような素早さで、紙一重にその攻撃をかわす。

「「ダリル！」」

珠のような声が鋭く飛んだ。

濡れた瞳が険しくつり上がる。

しかし睨みつけられた相手はまったく意に反さずにニタニタと笑うのみ。

「「おやおや。今はまだ仕事中ですよ？ミスタとお呼び下さい。ミス・コーウィツシュ？」」

頬を朱に染めて細かく震える麗しい女王陛下に、チェシャ猫が大げさに手を広げておどけてみせる。

「「あ、貴方が馬鹿なことを言うからでしょう！ふざけてばかりで！本当に貴方という人は！」」

「「俺は素直な感想を言っただけなのにな。さっきまでの優しいサーシャはどこにいったんだろう？」」

「「だから！サーシャって呼ばないでっ……」」

ダリルさんの言葉に反応して顔を赤らめて怒るアレクサンドラさん。

爆ぜる。そう表現せずにはられない。

電光石火の勢いでダリルさんのネクタイを掴みにかかるが、おどけた猫は掴めそうで掴めない絶妙なタイミングでその攻撃をかわしてみせる。

余裕のないアレクサンドラさんの手をするりと避けると、にまりと余裕の笑みで目を細めた。

この人はこんなにも細かい目で、どれだけのことを見通しているのだろう。

「あれ？顔がまるでリングゴみたいだ。どうしたの？そんなに真っ赤に熟れてると食べられちゃうよ？悪い狼さんに」

意味ありげに縁なし眼鏡の縁を押し上げてみせる。

その態度がいかに余裕綽綽で、アレクサンドラさんの怒りに更に火を注いだ。

「いい加減になさい！悪い輩など貴方以外いませんわ！やっぱり貴方なんてクビよ！絶対にクビにしてやる！ええ、言葉通りにちゃん切ってやる！」

ずっと伸ばされたアレクサンドラさんの手がダリルさんのネクタイに届きそうな所まで行きつくが、後一步届かない。

その距離間にアレクサンドラさんは彼女らしくなく、忌々しげに舌打ちをした。

今にも涙が零れそうな切れ長の瞳が憎々しげに歪むほど、対するチエシヤ猫は楽しそうに口の端を上げる。

素早く胸のすぐ側にある華奢な白い手掴むと、まるで壊れ物を扱うかのようにそっと口付けた。

「「なっ！」」

思いもしない行動にアレクサンドラさんの体がピタリと止まる。目の前で繰り広げられる手に汗握るやりとり、あたしも一緒になつて息を止めた。

恭しく頭を垂れ、愚かな猫は上目使いにバラのように匂い立つ人を見上げた。

「「望むところですよ。女王陛下。貴女の手にかかるなら本望さ」」

「「何を馬鹿なことを！」」

慌ててダリルさんの手から自分の手を抜くと、もう一方の手で手先を隠す。

上ずった声は動揺していて、いつもの高慢な女王様が嘘のよう。

アレクサンドラさんは熟れた頬を隠すように顔を背けた。

その姿はまるで物語に出てくる可憐なお姫様。

ほっそりとした肩にかかる流れる金髪とつつすらと薔薇色に染まった肌。

濡れた瞳を困惑に揺らしていても彼女の彼女らしい魅力は一切損なうことはない。

お姫様はダリルさんから逃げるように、足早にトランプの一団の方へと向かっていった。

あのハイヒールで、こんな速度で歩けるの？そう驚愕してしまうスピードで瞬時にあたし達の側を離れて、黒の一団に紛れてしまった。

そして感情的に怒鳴り散らしている。

「「なんて愚鈍な一団なのでしょう！それでシーリエントを代表す

る護衛官だと胸を張って言えるのですか！」「

彼女の感情の起伏なんてまったく分からない、可哀想なトランプの兵士達はまるでバラを赤く塗り忘れたように顔を蒼白にさせている。

そんな彼女の背をじっと見つめてるダリルさん。

払われた手はそのままに、苦笑を浮かべる。

その横顔はいつもの彼らしくなくて、ごちゃまぜの感情で殴り書きしたピカソの絵のように複雑だった。

「クスクス……本当にサーシャは可愛いな。そうだね。なんて馬鹿げたことなんだろう。これはただの……そう、ただの願望だよ。夢と現実はいつも違う。だから世界はこんなにも歪んでる」「

何を言っただらう。

あいかわらず細い目は線のようでその奥に隠された彼の本心が何一つ感じられない。

ただじつと遠くを見つめる彼の背中は少しだけ切なげに見えた。瞳の先にいるのは可憐にして傲慢な彼のマイフェアレディ。

その縫るような視線に気が付いているのか、アレクサンドラさんはちらりと横目で振り向いたが、慌てて視線を背けた。

そんな二人の距離感が傍観者のあたしにはもどかしい。

「……でも願わずにはいられないんだ。夢の続きを」「

遠くを見つめるその横顔を見上げて、あたしは首を傾げた。

やっぱりダリルさんはアレクサンドラさんが好きなのかな？ そうじゃなきゃあんなにも体を張ってからかったりしないもんね。

それでもってあたしの勘だとアレクサンドラさんもあながち嫌じゃないと見たね。

嫌よ嫌よも好きのうちってやつね。

ダリルさんとアレクサンドラさんのカップルか。

知的な美男美女のカップルだけど、周りは血を見そうだな。

毎日がお祭り騒ぎどころか、血祭。出血大サービスだ。

誰が二人の生贄になるのかな？……うん、ペスだろうな。

勝手に失礼なことを妄想しつつ、これだけは絶対の自信を持って断言できる。

うんうんと頷いていると、ぼんっと頭を撫でられた。

『可愛く変身したね。その格好ならどんな舞踏会に行ってもダンスの相手は望みのままだね』

やわらげな声に引かれて、慌てて思考の中から現実にはチャンネルを合わせた。

見上げたところにあるのは縁なし眼鏡の奥にある細い瞳。

いつも線のように細められたその瞳が少しだけ緩んでいる。

意外に切れ長な目の中心で、鮮やかな紫が輝いた。

それはまるで嵐の海のように穏やかで、なのに嵐の前のように不安を掻き立てる。

「えっと……」

彼の言葉が何を言っているのか分からなくて、イエスともノーとも言えず言葉に詰まった。

アレクサンドラさんはもちろん、ペスも英語の時のアルも、言葉の意味は分からなくても言葉の持つ雰囲気を感じ取ることはできた。それがあたしにとってプラスなのかマイナスなのか何となくだけど理解できて、だからあたしは勝手気ままに返せたんだけど……この人は違う。

言葉に何の色もなくて、受け取っても受け取った気にならないと

いうか……。

本当に不思議な人だ。

でも今彼が浮かべている表情は柔らかくて、いつもの飄々とした雰囲気があったく感じられない。

いつも傍観者のようにニタニタしてるけど、心の奥は優しくていい人なのかも。

困ったようにあたしが言葉に詰まったから、ダリルさんは少し考えてニコッと目を細めた。

『簡単な英語なら聞き取れるんだよね？じゃあね〜綺麗だね。美しい。可愛くて、輝いてて、思わず目を奪われてしまう。そう。殿下から攫ってしまいたいくらいだ』

うえ？ビューティフルとかキュートとかブライトとか……。

それって褒め言葉ですよ？

もしかあたしが分かるように褒めてくれるの？それはなんだか恥ずかしい様な居た堪れないような……。

間違ってもビューティフルじゃないことは分かってるもん。

だからそういう身の丈に合わない褒め言葉、苦手なんだってば。

そのむずむずする言葉になって返そうかとワタワタとしてしまう。えっと……とりあえずありがとう？それから褒め過ぎってなんていうんだ？

実践英会話ステップ2に動揺しまくりで、返事を返せない。

せっかく声をかけてくれたのに〜。な、なにか返せ！なんでもいいから……。

「え、えっと……サンキューで、その気遣いはノープロブレムな訳で、アイム・ノット・ビューティフルなんで……」

ダメだ。あたしの馬鹿〜！なんで中学で英語をドロップアウトし

たのよ

自分のダメさ加減に泣きそうになった時、不意に声をかけられた。

「おい、グレン。聞き捨てならない言葉が聞こえたか？」

顔を向けなくても分かる。

何度も甘く囁かれて、その朗とした声にまるでパブロフの犬のように反応してしまう。

どうしよう。心臓がキュンって悲鳴を上げた。

カレとカノジヨの奇妙な相対性理論（前書き）

相対性理論ってなんでしょうね？なんか学問って感じがしたので使ってみました！！

宇宙の仕組みも四次元もまったく分かりませんが、まあこの小説のラストくらいならわたしにも分かります。

予想では真ん中を過ぎて、ここから佳境ってとこまで来てるはずですよ。

まだもう少しお付き合いいただけたらと思います！！

カレとカノジヨの奇妙な相対性理論

「「おや殿下、何時の間に」「

ダリルさんはニヤリと目を細めると最上の敬意を払って自分の主人を出迎えた。

ゆったりとこちらへと歩むのはニタニタ猫の飼い主。

ハートのクイーンすら従えるワンダーランドの支配者だ。

全世界憧れの王子様は、今はいつもと違って渋い顔をしてる。

「「僕のこと気付いていて、その口はそんな軽口を吐くのか？」「

「「まさか！声をかけられるまで気がつきませんでした。……でも残念ですね。もう少し殿下が声をかけずにいてくだされば……」「

側まで来たアルにダリルさんは細い目で笑って答えると言葉を切った。

「「くだされば……？」「

「「もう少し彼女を独り占めできたのに」「

甘い響きを持って紡がれた言葉。

それに合わせてダリルさんがあたしの頬をそつと撫でた。

『残念。この続きはまた今度』

あたしの目線まで腰を折ると、頬に触れるほどの位置で囁かれた。うわっ。なんだこの駄々漏れのセクスイ加減。

アルにはない大人の色気に思わずドギマギしてしまう。
でもさんざんアルに虐められて耐性のできたあたしは心までは蝕
まれずにすんだ。

だってね、今の言葉、まったくもって舌先三寸って感じだったも
ん。

でも彼と出会って初めてかもしれない。

何の色もないはずのダリルさんの言葉が色を帯びてみえた。

軽薄で空々しい言葉は、アルをからかっているんだってすぐに分か
る。

「まったく。君にはしてやられるな」

アルは心底疲れ切ったように深くため息を吐くと頭を掻いた。

「フッフ。褒め言葉と思っておきますよ。殿下を出し抜くことな
ど中々できませんからね。……そんなことよりも早く参りましよう。
あそこで我らが女王陛下が癩癩を大爆発させてますよ。ああ、可哀
想に。アントニオが首を絞められて今にもちよん切られそうだ」

遠くで行われている惨劇にせせら笑いを浮かべるとダリルさんが
一歩歩き出した。

ダリルさんに促され、アルは不承不承とそちらへと足を向ける。

その後にあたしも続こうと、慣れないミュールで慎重に一歩を踏
み出した。

その時、アルが不意に振り向き揺らいだ視線をあたしの方へと投
げかける。

な、何だ？そんな複雑な表情は初めて見るよ。

完璧王子でも、からかっている訳でも、小悪魔でも野獣でもない。

何かをあたしに言いたげで、でも何も言わずに視線を背ける。

ん？なんだ？何か言いたかったんじゃないの？

そういう思わせぶりなことしないでよ！気になって仕方ないですよっ？

あたしの先を歩く広い背中を恨めしげに見つめて見たけど、いつも敏感にあたしの視線に反応する癖に今日に限ってはまるで反応なしだ。

今すぐ側まで走って行って聞きだしたい。

だけど今は、慣れないヒールで転ばないようについていくだけで精いっぱいだ。

段々距離が離れる長身に追いつきたくて、でもうまく歩けない。

せっかくアレクサンドラさんが綺麗にしてくれたのに……。

あたしって乙女失格かも！助けて三輪センサー！

一歩歩くたびに、せっかくアレクサンドラさんがかけてくれた魔法が剥がれ落ちていく気がする。

が、頑張れあたし。アレクサンドラさんみたいに胸を張らないと！

アルの背を目で追いつつ、でもエレガントになるように歩こうと腰の丹田とかいう部分に力を入れてみた。

でも視線はアルの背を追ったまま。

本能はアルを追って、理性はアレクサンドラさんを思い出させる。裏腹な気持ちを上手にさばききれなくて、あたしはグダグダ。

と、とりあえずあの一団に追いつくまではエレガントさは棚に置いておこう。

そんなことよりも転ばないように気をつけて……。

「ついでにガニ股にもね」

後ろからかけられた淡々とした声に足を止めた。

あたしが最後だと思っていたのに……。

「ヤマネ君！」

あたしは泣きそうなほど嬉しくて、思わず心の中のアダ名をそのまま叫んでしまった。

「ヤマネ？」

「いやいや、気にしないで。ダグラスさん、何時の間にそこにいたの？」

あたしの後ろからのんびりと、寝ぼけ眼をこすりながらやってくるので肩がこれほど頼もしく思えるなんて。

ヤマネ君はふあつと大きな欠伸をして、ダークスーツのネクタイを気だるげに緩めている。

「ずっとあの店にいたよ。ってかフィッティングルームの陰でうたた寝してた」

やっぱり……。

あたしの側まで来るとヤマネ君はあたしの頭の前からつま先までを一通り見下ろした。

「ん？似合ってるんじゃない。グレンさんの言葉もあながちお世辞じゃない」

淡々とした表情のまま、うんと頷く。

うわっ。さっきのダリルさんのビューティフルとかよりも嬉しいかも。

「グレンさんはちょっと風変わり？変？奇妙？微妙？うん、いい

日本語が浮かばないな？かなりヤバいつていうのかな？いやいや変人……そうだ！変態だ。これが一番しつくりくるな」

いやいや……全力で悪口言ってますよね。

全部意味もニュアンスも完全理解の上に使ってますよね。

しかも行き着いた答えが変態つて……相手が聞きとれないからつてあんまり無茶なこと言わない方が……。

その暴言に思わずぎょつと目を向いて、あたしの横を同じペースで歩いてくれるヤマネ君を見ただけ、彼は何も気にせず先を続ける。

「まあ変態で、人をからかうのが趣味なんだ。だから何を言っても一切無視していいよ」

すごい言い草だな。

ちよつとはオブラートにふわつと包もうよ。

一応、仮にもあなたの上司でしょ？

「まあ、からかうのが趣味つていうのは分かるかな？いつつもアレクサンドラさんをからつてるもんね。それを見るのが面白いんだけど……」

あははつと声を上げて答えてみたんだけど、ヤマネ君は無表情のまま首を横に振る。

「違う違う」

「え？何が？」

まさか否定されるとは思わず、目をパチクリさせる。

「ミス・コーウィツシュに対してだけは本気だよ」

「うわ！それってまさか。あたしのヤマ勘当たっちゃった？
思わず目を輝かせてしまう。」

「じゃ、じゃあやっぱり二人は付き合ってるの？」

息急ぎつて、ヤマネ君の答えを待った。

何故だか興奮してしまつて、顔が紅潮する。

「ん？まさか！そんなことありえないな」

「え〜でもでも、この先はどうなるか分かんないでしょう？」

つれない返事にあたしは不満の声を上げてしまった。

なんで当事者でもない、しかもヤマネごときが2人の関係をバツ
サリ両断してしまえるのだろう。

未来は2人だけのものなはずだし……。

も、もしかどっちかが既婚者？それとも親が決めた許嫁がいると
か……。

「うわ〜昼ドラな展開？それとも今流行りの韓流？などと不埒な想
像に思いを馳せる。」

「まあ未来は誰にも分からない。でも想像に難くない未来つてのも
あるからね〜」

「ど、どついつい」と？」

「結ばれない関係ってあるんだ。どれだけお互いに思い合っていて

もね。……まあこの場合はグレンさんが一人勝手にミス・コーウィッッシュにちよっかいかけてるだけだけどね」

小さくため息を吐くと、不思議な色合いの瞳をあたしへと向けた。

「まあ君もそのうち思い知ることになると思うよ」

小さく言い捨てられた言葉が心の隙間に染みだ。奥まで流れ込んで小さな痛みが沁みる。

それが何かは分からない。

その時のあたしは、ただダリルさんとアレクサンドラさんのことばかり考えていて、ヤマネ君の言葉を自分に置き換えて考えることなどできなかった。

一瞬胸に広がった痛みなどまるでなかったかのようになり、側を歩くヤマネ君にふっとニヒルな笑みを浮かべてみせた。

ヤマネ君「君の観察眼はちよつと足りないね？」

アレクサンドラさんも絶対にダリルさんのことが気になってるって！

なんて軽口を叩こうとした時には、もうアレクサンドラさんを中心としたトランプの兵士達の側まで来ていて、あたしはその言葉の続きを飲みこんだ。

もうここまで来るとねぼすけヤマネ君は日本語を話してくれない。まるであたしのことなど知りませんとばかりに一団に紛れこむ。ちよつと〜思わせぶりなことばかり言って、どっかに行かないでよ〜。

2人の関係が分からなくて、気になるじゃない！

レイニーティアーズ（前書き）

わたし、『雨上がりにもう一度キスをして』という昔のサザンの歌が大好きなんです。なんかイキですよ〜！ああいうドラマチックな恋がしとうございました。

だからなんだって言われると……それだけなんですけどね。

残念ながら本作とサザンの名曲は一切関係ございません。ただ作者の憧れです。

それでは本日もよろしく願います！

レイン・ティ・アース

売り場を後にしたあたし達は、次の行程に移行しようと百貨店を後にした。

んだけど…… 1階の入り口まで来たところでビックリ。

向こう側も見えないゲリラ豪雨に足止めを食ってしまった。

盛大に水飛沫をあげる地面がけぶって見える。

「うわ〜タイミング悪!」

思わず顔をしかめる。

別に雨は嫌いじゃないけど、今から外を歩くって時にダダブリだとちよつとテンションが下がる。

しかも今は着慣れない高級ワンピースに、足元は華奢なミュールときたもんだ。

これじゃいくら優雅を心掛けても一歩踏み出した瞬間に盛大にずっこけることは請け合い。

まるで滝のようだ。

轟音あげて降りつける雨を恨みがましく見つめても、そんなことでやんでくれるほどお空の神様はお人よしじゃない。

そんなあたしの横でアルも少し目を見開き、軽く口笛を吹いた。

さすがにこの降り方はびっくりするよね〜せつかくの旅行なのに雨が降るとちよつとシヨック……。

口笛にひかれるようにアルを見上げて、あたしはぎょつと目をむいた。

あたしの瞳に飛び込んだのは、目を好奇に輝かせている少年王子。昨日、大学の物置でジャングルに行きたいと語った、ワクワクが止まらないって顔をしている。

なんでこの人、こんなにも悪天候なのに、ご機嫌マックスな顔してるの？

何？シーリエントじゃ雨はいい天気な訳？恵みの雨ってやつか？異様なものを見る目を向けてみたが、まったく意に介さない。

『ワオ！日本にもスコールがあるなんてね』

スコール？いやいや、夕立ち。もしくはゲリラ豪雨だって。なんでもイングリッシュにしちゃダメだよ。ってゲリラも英語か。

祖国は雨の降らない国なのか、アルは楽しみに白む雨の世界を眺めている。

あたしにとってはありきたりな、ちょっとついていない一場面もアルにとっては稀有な非日常なのかな？

こちら、完璧王子様！いつもの素敵プリンススマイルをお忘れですよ？

なんて心の中で小さく突っ込みを入れて、にまにまと蒼い瞳を見つめていると、不意にその視線があたしの視線と絡んだ。

ドキン！

見慣れたはずの深い蒼に、心臓が弾けた。

さっきまで緩んでいた表情がいつの間にか引き締まり、真剣な眼差しが注がれる。

何？

またあの表情。何かを伝える瞳は熱っぽくて、でもどこか後ろめたいものを引きづっているような顔。

うまく言い表せないけど、その瞳の向こうには激しい情熱が燃えさかっている気がする。

強い意志に溢れた瞳に息が止まる。

全ての喧噪がまるで嘘のよう。

地面を叩く雨の音さえも全て、まるで違う世界の出来事のように遠く感じる。

薄暗い世界でアルの瞳だけが蠱惑的に輝いた。触れられた訳でもないのに、頬がかあつと赤くなる。

体に触れる雨の気配は夏であつてもひんやりとしているのに、体の奥は燃えるように熱い。

視界が滲むのは雨の所為だよね？

けて熱におかされて瞳が潤んでる訳じゃないはず……。なのに、願わずにいられないんだ。

このまま二人、雨に包まれて誰の視界にも映らずにいれたらつてもそれは口に出来ない、途方もない夢。

外せない視線の先で、アルの蒼い瞳が滲むように輝いた。

「殿下、すぐ側の道まで車を寄せます。誠に恐縮なのですが、そこまでご足労願います」

不意にかけられたトランプの兵士の声にアルは、何事もなかったように顔を上げた。

一歩離れたところでおしまる彼に鷹揚と頷いて見せるアルは、もう完璧王子の顔をしていた。

おしまる彼を手で制し、そつと空に視線を上げる。

「おしまるかしたらなくていい。別に雨は嫌いじゃない」

その言葉をきっかけに俄かに周りが騒がしくなった。

ダークスーツに身を包んだトランプの兵士達が激しい雨に負けず果敢に傘なしで百貨店の外へと飛び出していく。

流星はプロの護衛官。どんな悪天候にも表情一つ変えないなんて。

ちよつと尊敬してしまうな。

雨にも負けず、風にも負けず、アルを一目見ようと集まる素敵なお嬢さん方にも負けず。

アルを車まで安全かつ快適に案内するために、苦心している。

どこからともなく現れた傘を広げ、兵士の二人がアルとあたしの頭上にそれぞれ広げてくれた。

その卒のない動きといったら。ハリウッド級だよ。CGでもないのに音もなく素早く動く人初めて見たよ！

そつとさりげない優しさで傘を差してくれる、ちよつとオーランド・ブルーム似の彼にときめいてしまいそうだ。

アルと兵士のコンビだとホントに絵になるっていうか、雨でこんなに空が曇っているのに、雨の雫さえ輝いて見える。

ポカンと見上げたあたしに先に進むよう、オーランドが目を伏せた。

その傘の守護領域は全てあたしで、オーランドの体は傘の外になっっている。

なんと！相合傘でもなく、全てあたしに譲ってくれるの！

しかも濡れながらも傘を持ってくれるなんて、こんな接待どこのお嬢様も受けてないよ！

アルに対するなら分かるけど、あたしまでそんなことしてもらおう訳にはいかない。

「あ、あの、傘貸して下されば自分で差します。つてかもう傘なしでも全然大丈夫なんで！あたしよりもお兄さんのスーツが濡れる方が困るんじゃない？でもあたしもせつかくアレクサンドラさんが用意してくれた服を濡らしたくないし……ここはもう相合傘をお願いしていいでしょうか？いやいや、入れてもらおう立場なんで傘の柄はあたしが持ちますよ……ちよつと、いや……かなりお兄さんには中腰になつてもらわないといけないんですけど……」

何の表情もなく、傘を差し出すそのオーランドに何だか申し訳なくて、あたしはお兄さんの持つ傘に縋りついた。

急に距離をつめて、わあわあと騒ぐジャパニーズガールに流石のオーランドも驚いたのか、英語かシーリエント語か判別のつかない言葉であたしに何かを伝えようとしている。

傍から見れば、傘を差しだした優しい紳士とその紳士から傘を強奪しようとしている悪ガキだ。

「お兄さん、大丈夫！あたし、濡れないよう傘差すうまいから！心配ないよ！」

なんであたしカタコトなんだ？

相手が外人さんだから、カタコトで話せば伝わる気がするのはただの幻想だよな。

二人でお互いの言い分も分からずに、傘の押し付け合いと取り合いを繰り返していると、急にあたし達の間傘がなくなった。

あり？なんで？タイムリミットってこと？時間内に傘を奪えないとアウト！みたいなの！

いつからそんなゲーム方式になったの？

驚いて後ろを振り向いたら、傘を持ったアルがじつとあたし達を見つめている。

「え……アル？」

「「殿下……」」

「「そこまで自分で傘を差していくよ。君も濡れる訳にいかないだろ？僕は千佳と傘を差すから君らは二人で傘を使うように」」

何か指示を出したようだけど、傘を奪われたオーランドは納得の

いつていない顔を浮かべている。

もう一人の兵士なんて完全にのけ者で、全然場の流れについてこれてないって顔をしてアルとオーランドを交互に見つめて、きょとんとしている。

でも何が起こったか一番分かっていないのはあたしだ。

長身の二人に囲まれて、二人を見上げるしかできない。

ちよつと結局傘は貸してもらえない訳？

仕方ない……これは車までダッシュ決定ね。

「しかし殿下……」

「しかし、という言葉は存在しないよ。僕が決めたことだ」

穏やかなのに有無を言わさない声はオーランドに何を告げているのだろうか？

眉を寄せて、首を傾げた瞬間。

するんと腰に回されたアルの手にリードされて、あたしはアルの差す傘の中にいた。

「え、え、ええ〜」

『さあ、チカ。転ばないように気をつけてね。君は本当にそそっかしいから』

あたしの頭上すぐ側にあるふんわり優しい微笑みに体がカチンと強張った。

一瞬にして強制終了させられた頭が再起動をした時にはアルと相合傘で雨の街へと歩き出していた。

大きい傘だけどアルと二人で差すには少し狭くて、結果半分抱き締められるような状態になっている。

触れあつた部分が熱くて、自分じゃない体温にくらくらしてしま
う。

少し湿つたアルの香りがあたしの鼻を官能的に刺激する。

ちよつとでも自分の標準パーソナルエリアを確保しようと努めた
けど、優しい束縛は無を言わせずにあたしをさらに自分の方へと
引き寄せる。

「ちよ、ちよつとアル！」

「あまり離れたら濡れるよ。もつと僕に寄つて」

斜め上から寄せられた唇があたしの耳を舐めるように囁く。

だからずるいんだってば……。

なんで、このタイミングであたしにも理解できる言語で囁くの？
せめて英語なら、ニュアンスさえも聞きとれない振りをするのに

……。

こんなにもあたしの体を捕えてあなたはどうするつもりなの？

言いたいことはいっぱいある。でも何も声にならない。

熱におかされたように潤む瞳ではアルを見上げることもできない。
もつこれ以上近寄らないで。あたしの心の声がアルに届いてしま
うよ。

ねえ、こんな時どうしたらいいの？

平静な顔なんてできないよ。

少しでもアルから離れたくて、焦って大きく一步を踏み出した。

その瞬間、ずりっ　　つと体が滑った。

それはもう、フィギアスケート選手も驚きのイナバウワ　状態だ。
どうしよう！視線を戻したら金メダル取れみんな、10・0の札とかあげてた
ら……このままいったら金メダル取れちゃう？

なんてぶざけてる場合じゃなくて！あたしのバカ！

慣れないミュールだつてこと忘れてた！

つるんと滑って、細いヒールだけでバランスを保つこともできない。

こんなところで盛大にこけたら、どんなコトになるかなんて考えなくても分かる。

なんでこうも締まらないかな？

来るであろう衝撃に備えて、体にぎゅっと力を入れた。

お願い。このワンピースだけは無事でありますように！

でも訪れたのは激しい痛みじゃなくて、温かな包容。

驚いた瞳が捕えたのは、甘くて激しいグランプールの瞳。

傘を片手に、反対の手であたしの背を支えるアルは少し目を見開いて、こちらを見下ろしている。

さ、流石理想の王子様は伊達じゃないわ。咄嗟のあたしのドジもエレガントにないものにしてくれていた。

「あ……ごめん……」

慌てて体勢を整えようと、アルの優しい腕をすり抜けようとした。こけそうになった羞恥と一緒に胸に込み上げる濁流を必死で押えこむ。

なのに……。

ぐいっと腕を掴まれて、引きとめられた。

ぐらりと揺れた視界を覆うように傘が押し寄せてくる。

それは一瞬のこと。

世界が黒く染まった時、温かな吐息が頬を撫で、左の臉にあたしの心よりも熱い情熱が触れた。

え……何？

驚きに瞳を開けたけれど、視界はあつという間に灰色に滲む千の雨を映しているだけ。

ぱさつと情けない音をたてて地面に傘が落ちた時には、アルはあたしの腰を紳士的に支えて、その完璧な美貌には優美な微笑を浮かべてる。

ただそれだけ。

「泣いてるのかと思った」

形のよい、薄い唇が無音でそう言った。

そつと輪郭を撫でる優しい指があたしの頬に落ちた雨の滴を丁寧に掬う。

『大丈夫かい？チカ。やつぱり君はおつちやこちよいんだから。雨の日は時に気をつけなよ？僕がいなくなった時、君はどうなるのか今から心配だよ』

あたしを窺める響きの柔らかい英語を苦笑交じりに呟くと、アルはまるで小さな子に言い含めるように腰を曲げて、あたしの視線まで目線を下げる。

『いいかい？雨の日は絶対に走らないこと！』

うわゝ何、この対応。デジャブを感じるといふか、いつもあたしが零佳や一佳にやっているといふか。

きつと普段のあたしなら、子ども扱いしないでよつ、とか小声で応戦してたと思う。

でも唐突にあんなことされて、普通でいられる訳がない。

今も心臓は爆発寸前で、体中が熱くて、痺れて、体の芯から湧き

おこる甘い疼きを抑えるだけで精いっぱい。

今にも泣きそうな顔を見られたくなくて、でも背けることすら叶わない。

ゆっくりと傘を拾い上げるとそれをあたしの頭に差し出し、アルは誰もが見惚れる甘い笑顔を浮かべた。

『さあ、行こう。こんなところに留まっている時間はない』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1785u/>

ひと夏だけのシンデレラ

2011年11月17日20時24分発行